

【恋姫†無双】黒龍の剣

ふろうもの

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新選組副長・土方歳三が恋姫世界に行く話。

目次

鬼のまどろみ	1
覚醒	16
凶刃乱刃	32
宴	50
出立	65
白馬長史	82
軍中に我あり	100
我が名は土方	114
遼東の英傑	132
未来よりの残り香	154
罨	175
虎口に入る	191

軍権強奪	215
器	239
月下の誓い	264
さらば幽州	281
黒龍の片鱗	295
乱雲陰り立つ	316
青州討伐命令	330
鬼の仁義	347
東萊城攻略戦	366
黒龍と対なる者	379
趙雲、白龍について語る	393
北よりの吉報	412
“りゅつぶぎつく”	428

黒龍、人海を断つ	444
月夜に咲く花、蓮一輪	462
鬼の毒	480
長社城の戦い	499
洛陽へと至る道、黒龍は白龍を呑まんとす	515
腐都	531
傀儡皇帝	546
新天地へ	565
立つ鳥跡を濁さず	582
運命の再会	600
襄陽の戦い	621
巨星、墮つ	634

大河	651
嵐の前の静けさ	667
肅清の嵐	683
待ち望まれた男	702
暗雲	724
逆賊討つべし	746
虎牢関の戦い	765
栄華の残骸	785

鬼のまどろみ

男はふと、今気付いたかのように辺りを見渡した。一面に広がるは緑、緑、緑。新緑の薫る、いい塩梅の森であった。

けれども留まるということをも男はしないらしい。さつさと歩き始めていた。

軍靴が、草の根を折る。

男は仏蘭西式士官の洋装。

髪をオールバックにまとめた、目元の涼しい男である。

一見では優男。しかし周囲の気配を探る様に歩く姿は、歴戦の戦士を思わせる。

その耳に、水の音が聞こえてきた。

川の流れる音に、水が跳ねる音も聞こえてくる。

(誰か、居る)

そう確信した男は、腰に手を伸ばしたが空を切った。

あるべきものがあるべき場所になかった、そのことが男を落胆させた。

仕方ない、せめて音の正体を一目、と男は音を立てぬよう近づいていく。

警戒を厳に、辺りに敵の気配がないことを伺いながら、そつと覗き込んだ。

音を出す正体を見て、男は声を失った。

川で娘——あるいは女が水浴びをしている。

何故こんなところで。自然、声が出た。

「失礼」

「きやつ」

女は突然声をかけられたことに驚いたか、艶めいた声を出した。

手では隠し切れない豊満な乳房が、形を変えるほどに抱きしめられている。

紫色の長い髪から水が一滴、垂れていった。

並みの男なら見惚れる色気、それをわからぬという体な不愛想な顔で男は聞いた。

「これは御免。しかし何故このようなどころで水浴びなどをされておる」

男の問いに、女は疑問符を浮かべた。男は、構わず続けた。

「この辺りは最早戦地。貴女のような方が居られるべき場所ではない。急ぎ、近くまで送りましょう」

もちろん郷里の近くまで、である。男は故あつて遠くまで行くことはできない。

真剣な申し出である、だが、女は突然嘔き出した。

「戦争なんて……この辺りにはありませんよ?」

「そうかね?」

男は改めて辺りを見渡し、得心言つたように頷いた。

「そのようだ」

男は始めて破顔わらつたした。透き通るような綺麗な笑みである。

女は、この男がただの破廉恥な男とは思えなかった。

「一つ、よろしいですか？」

「その前に服を着なさい。私のことならばその後でいい」

男は、女に羽織コートを投げてよこした。

有無を言わさぬといわんばかりに、くるりと後ろを向いてしまっている。

女は今更自身の格好を再確認したか、顔を真っ赤に染めてしまった。

◇

女が身体から水を拭き、服に袖を通すまでの十分な時間。

男はずっとそっぽを向いていただけだった。

女が身支度を整え「いいですよ」と声をかけられるまで、ずっと向いていた。

「よろしいですか？」

男は、ようやく女と向き合った。目が合う。

女は気恥ずかしそうに、すぐに目を逸らした。

「これは、先ほどのことは御免」

「いえ、貴方にそのような気持ちになかったことはわかりますから」

「そうですか」

男はすぐに、むつつりとした顔になる。

「ところでここは——」

男は言い掛けて、口を噤んだ。

女はそんな男に不審な目を向ける。

「——いえ、ここは私にとつては夢の様なもの。話すだけ無粋でしょう」

「どういうことかしら？」

「貴女に気が触れられている、と思われたくない」

男は顔色も変えずにそう言った。

「それと意地です。夢で見知らぬ女を見た、とあつては仲間たちに示しがつきません」

男は、また笑った。女はそんな男が狂おしいほど気になっていた。

顔もある、見た目もある、が何よりこの不思議な雰囲気^{しおん}が心を掴んで離さない。

「その、私のことは——いえ、紫苑^{しおん}、とお呼びください」

女——紫苑はそう言った。

「これは失礼した。私は——内藤、内藤隼人、と申します」

男——隼人はそう返した。

「間が、ありましたね？」

「貴女も何か考えたでしょう？ お返しですよ」

二人は静かに笑い合った。どうやら、意気投合したらしい。

◇

しばし、木陰に座つて歓談する。大いに語らい大いに笑つた。

けれども、相手が誰でもこの誰なのかだけは、お互いに尋ねなかつた。

暗黙の了解であると、二人の間に形成された空気であつた。

「貴女は良い人だ」

「隼人様こそ」

「だからこそ、惜しむべきではないな」

隼人は立ち上がった。二重瞼のぎよろりとした目が、どこかを向いている。

「そろそろ、行かねばならない。そんな気がするのです」

紫苑も立ち上がった。胸の内に想いを乗せて。

「お待ちください、隼人様」

「なにかね？」

眠そうな目で、隼人は紫苑を見た。

「お願いがあります」

「聞こう」

「その……抱いて、くださいませんか？」

これには隼人、目を見開いて仰天する。

紫苑は自分の言ったことの重さを忘れ、隼人を驚かせたということに優越感を覚えていた。

「聞くと言ったからには、聞こう。二言はない。しかし——」

「私が、処女むすめだから、ですか？」

「うむ。初めて会って間もない男に、そう気を許すのか？」

「誰にでも許すわけありません。隼人様だからこそ、許すのです」

顔を赤らめて恥じらう紫苑。だが隼人は躊躇する。

ここで通じれば何かしらの累が紫苑に及ぶかもしれない。

けれども紫苑の瞳に、隼人は覚悟を見た。

「はしたない女と、お思いですか？」

それを見た以上、一介の男子として女子おなじを必要以上に辱めるべきではない。

「わかった」

短くそう返し、隼人は紫苑の服を脱がしにかかった。

二人の交接を見る者は、この森には誰も居ない。



やがて、紫苑の中で隼人は果てた。

二人はそうした終わりのしきたり通りに、服を整える。

「お優しい方なのですね」

「そうかね」

隼人は、そっけない。

けれども一度身体を重ねれば気持ちも通じるのか、この男なりに照れているのだと紫苑は察した。

「では、これにて」

隼人は去ろうとする。紫苑は呼び止めようとして、やめた。

きつとこの男は止められない、どこるか自身でも止まることが出来ないのだと感じた。

紫苑の逡巡を感じ取ったか、隼人は紫苑の方を向いた。

「羽織は、預けておきます」

「えっ」

「また、取りに来ます」

それだけ言うと、隼人は森の奥へと姿を消した。

紫苑は隼人が見えなくなるまでその後ろ姿を見続けて、羽織を抱きしめていた。



「……む」

まどろみから、隼人が覚める。

どうやら隼人は座ったまま寝ていたらしい。

懐から舶来の品である懐中時計を取り出した。

大きな掌の上で、正確に時を刻む時計を眺める。

時間は、そう経っていない。あれは夢だったのだと隼人は解釈した。

「副長！」

「どうした」

「弁天台場が包囲されたとの知らせが！」

「そうか」

若い隊士の知らせに隼人は時が来たのだと、一人悟った。

懐に時計をしまう。

室内に据え付けられた洋服箆笥クローゼットから新しい羽織を取り出し、羽織る。

「私は、打って出る」

「し、しかし、敵はあまりに大勢！ 我々の戦力では！」

「それが、どうした」

腰に差料である和泉守兼定と堀川国広を帯びる。

ついでにと、ニコールから貰った拳銃を懐に収める。

(坂本アイツも、同じようなのを持っていたな)

旧友の顔を思い出し、感傷だと隼人は切り捨てた。

快男児であり時代の申し子と思えた坂本龍馬でさえ、京都見廻り組に暗殺され時勢の波に消えていった。

ならば、一人時勢に取り残された私だけが生き残るわけがない、と隼人は思っている。使うことはないだろうが、家伝の石田散葉や双眼鏡やら雑多なものをズタ袋に収めておく。

あまり持ち回りの品は多くない。転戦に次ぐ転戦だったのもあるが、元来質素なのだ。

「最早我らに味方なし。籠っていてもいずれここは落ちる」

「でしたら副長だけでもお逃げください！」

「ならぬ。私を土道不覚悟で切腹させるつもりか、お前は」

磨き上げられた軍靴の具合を確かめる。草いきれの匂いがした。

隊士は隼人が微笑みを浮かべたのを見たが、いったい何に笑ったのかはわからなかった。

既に、隼人はいつものむっつり顔に戻っている。

「なに、薩長どもに思い出させてやるまでよ。斬り込みは新選組の十八番だよ」

新選組副長として京で散々に薩長の仲間を斬ってきたのだ。

無論、この戦争でもこの男だけは薩長に煮え湯を飲ませてきた。

そんな仇敵ともいえる男を捕らえておきながら、生かしておくはずがない。

隼人もそれらがちゃんとかわかっていた。

（それに、このまま座して負けたとあつては地獄で待つ近藤さんや総司に会わせる顔がない）

かといつて、彼の様子に若い者に地獄に付き合わせるのも、隼人にはしのびない。

「君はどうする、逃げても構わんぞ」

「副長！ 何をおっしゃいますか！」

「やたら若い命を散らす必要はないぞ。私はこれより陸軍奉行並・土方歳三より新選組

副長・土方歳三に戻る。榎本殿と大鳥殿にもそう伝えてくれ」

偽名・内藤隼人——本名・土方歳三。

新選組を率い血気盛んな勤皇志士らをして恐怖のどん底に叩き込み、京を震撼させた、かの鬼の副長である。

「私も、私も付き合います！」

「ならぬ。君は私が新選組副長に戻ったことを知らせる大任がある。必ず果たしてくれ、頼んだぞ」

歳三は若い隊士の肩を叩いて、部屋を後にする。

隊士は声押し殺して泣いていたが、彼には生きのびてもらわねばならない、と歳三は思っている。

(俺ア、もういい)

剣に生き、武士になり、最後まで土道に殉じ、この日本で誰よりも、剣一つで上り詰めてきた。

故に、剣に導かれ死ぬ。それが剣に生きた者の宿命さだめというものだろう。

歳三はそういうものだど勘ながら気づいていた。気づいていたから、止まらなかった。

(山南さんだって、そうさ)

病故に己の死期を悟った山南は、伊東派への牽制の為に脱走し、切腹した。

後事を歳三に頼み、生きるように言った。だから歳三は生きた。

(みいんな、なんでもかんでも俺に託しやがる)

近藤も、京の新選組を守るために斬首された。

新選組から離れて生きていけ、と別れたときにそう言われた。

沖田は労咳で死んだ。土方さんが生きるなら、私も生きますよと笑っていたあの若者も、もういない。

だから精一杯に生ききった。例えこの身が悪名にまみれようと、ひたすらに。

兵舎を出た。既に、馬が一騎用意されている。

打って出れば必死であることはわかっているはず、なのに少数の兵が頑として動かない。
い。

あれでは斬り殺すと脅しても、彼らは付いてくるだろう。

歳三は苦笑する。

「打って出れば、死ぬぞ」

「一同、わかっております」

「ならば、良い」

付いていくと言った兵ですら、ぞつとするほどの静かな声で歳三は言った。

「新選組副長・土方歳三、出陣する」

馬を駆けさせる。兵らも、遅れじとついてくる。

(生きるのも死ぬのも、悲しいもんだ)

◇

一本木関門にて、旧幕府軍はよく戦った。怒涛の如く押し寄せる官軍に、耐えた。

歳三は馬上にて指揮を執った。渾名の如く鬼の様に奮戦し、人を斬った。

だが戦の趨勢を決めるのは兵の数と、武器の質である。どちらも、旧幕府軍は新政府軍に負けていた。

だん、と一発の銃弾が歳三の腹部を貫いた。兼定を、取り落としそうになる。

「副長！」

「ああ、大丈夫だ」

歳三は相変わらぬ憎たらしい面構えであるが、誰が見ても瀕死は明らかであった。それでも歳三、馬の手綱を緩めずに笑った。

「諸君、私は先に行く。君たちは降服したまえ」

「ど、どこへ行かれるのですか！」

「新選組副長がすることなど決まっている、斬り込みだ」

「副長！」

歳三、呼ばれる声にも構わず馬を駆けさせていく。

(これで、いい)

腹部の激痛に耐えながら、歳三は思った。

(俺がいなくなりやあ、戦線はもたねえ。アイツらがやたら死ぬわけにもいくめえ)
目の前が霞む。兼定を落としそうになる。

櫓の紐で兼定の柄を手に縛り付けてから、また一人斬り殺した。

(死ぬなら、俺一人で十分さ)

弾丸が雨のように飛び交う、剣が林のように突き立てられる。

その中を、龍が天に蛇行するが如く歳三は駆けぬけていき。

そして、消えた。

——1869年5月11日 土方歳三・一本木関門にて戦死。

——同年5月15日 弁天台場降服。

——同年5月17日 榎本武揚ら、降服。

なお、土方歳三の遺体の行方は不明である。



「あー、お母さん！ 流れ星ー！」

親娘が、星の良く見える小高い丘を訪れていた。

母親は紫の長い髪をしていた。娘も、同じように紫の髪をしていた。

「そうね、璃々。天の御使い様が、流れ星になってやってくるのよ。だからね、天の御使い様に頼めばきつと、願い事を叶えてくれるわよ」

「ほんとー!? じゃあね、璃々、お父さんにあいたーい！」

「ふふ、そうね。きつと会えるわ」

「? お母さん、おなかがいたいなの？」

「いいえ、なんでもないわ、璃々。なんでも——」

母親は、羽織を抱きしめてじつと、流れ星を眺めていた。

覚醒

徐晃が男を見つけたのは偶然だった。

村へと向かう道中で突然の霧に視界を失いかけていた中、幽鬼の様にその男は現れた。

今にも馬から崩れ落ちそうな姿と手に縛り付けられた細剣と、何よりも腹から血を流しているのを見て賊と戦っていたのだと徐晃は理解した。

それなりに名がある者だとも見た。何分、身形が良い。それに貴重な軍馬にも乗っている。

下心がなかったとは言わないが、助けておけば後々何かしらの利が受けられるかもしれない、そう思い徐晃は男を助けた。

近く村の宿屋の一部屋を借り、懸命に傷の手当てをした。

腹部の貫通孔は槍にしては細すぎ、弓にしては太すぎる傷で、村にたまたま居合わせた医者も治療を終えると後は男の天運次第だと言つて去つていった。

ここまでできたならば最期まで、と徐晃は男が死ぬか息を吹き返すまで村で過ごすことにした。

そうこうしている内に村にやってきた趙雲、戲志才、程立らと徐晃は知り合い、変わった男のことを日々語らいながら過ごしている。

「なるほど、あの殿方が霧の中から現れるのを見た、と」

「そう。怪我していたから、助けた」

「確かに身形は良かった。しかしそれだけでここまでする必要があったのですか？」

「それはあの人が目を覚ますのを待てばいいだけなのですよー」

その男は今、汗を吹き出しながら凄まじい顔で眠っている。

◇

人間、死に直面すればこれまでの人生を走馬灯のように思い返すと云う。

歳三は正に今、殺してきた人間たちの怨嗟に塗れていた。

切腹を命じたもの、暗殺してきたもの、戦乱の中で殺したもの。様々であった。

しかし、歳三はむしろ怒りを感じていた。

(侍が、怨霊などになるか)

歳三、生まれは多摩の百姓だが、心根は300年怠惰に塗れた旗本武士よりも強い。

怨霊など斬り捨ててやるとかつと目を見開いて、枕元に置いてあるだろう愛刀・和泉

守兼定に手を伸ばした。

手が空を切った。差料がない。

気づくと慌てて身体を起こした。服は、士官服ではなく粗末なもの。腹の傷も手当てされている。

(一体誰がこんなことをした)

天下は薩長のものとなった今、新選組副長を助けたとあつては無用な誇りは免れまい。

もしや土方歳三と知らず助けたのか。ならば、その恩義には報いなければなるまい。

歳三はただそれだけを思い、寝台から立ち上がった。

寝ていた部屋が見慣れぬものだとしても、気にならなかつた。

蝦夷でもここまで壊れかけた建物はなからうと思いつながら、扉を開いた。

「おや、お目覚めですか？」

女が居た。濁酒どぶ酒の匂いがある。酒を飲んでいるようだ。

(慎みのない女だ)

それが、第一印象だった。胸の上部を露出するような煽情的な格好に、腿も晒した丈の短い着物である。

しかし肩周りと脚は、洋服のようにも見える。

見れば見るほど珍妙な女だった。ただ、美人ではある。

「……何故、私を助けた？」

「これは異なることを。助けられるより見捨てられるのをお望みか」

「私を知らぬと見える。いいから早く近くの番所に駆け込みなさい。土方歳三が居ると」

「土方、歳三？」

「そうだ。この首、薩長に差し出せばそれなりの値が付こう」

女はつと、考える仕草をして。

「知らぬ名前ですな」

そう、答えた。

(知らないだと?)

これには歳三、内心慌てた。彼の悪名は京のみならず各地の転戦のお陰で全国に鳴り響いている。

それを、知らないとは。

「何を可笑しなことを、からかっておられるのか」

「ははあ、傷が癒えてばかりで混乱されておるのかな。しばし待たれよ」

女は歳三に構わずどこかの部屋の扉を開けている。

歳三は眩暈を感じ椅子に座り込んだ。

傷によって血を失い過ぎたのもある、なにより土方の名前が知られてないのも一因

だった。

(確かに、未開の地には見える)

落ち着いて見渡せば蝦夷・函館にすらなかつたようなボロ屋に歳三は居るようだ。

まさか海にでも落ちて遠くへ流されたか、そうとさえ思えた。

「起きた」

「あの傷で目を覚ますとは……」

「やはり只者ではないのですよー」

先ほどの女が引き連れてきたらしい、連れの女がどやどやとやって来て途端に姦しくなる。

歳三は頭痛がしてきた。どいつもこいつも美形の癖に恥じらいはないのかと頭を抱えたのだ。

口数少なそうな最初の女、いや娘はとにかく小さい。背も胸も小さいが身体のほとんどを露出している様な格好だ。かろうじて胸と恥部とを隠している様な具合である。

次に見えたのは眼鏡の女だ。これまた腕と肩を大きく露出し、丈の短いスカートを履いている。

最後に現れたのは歳三の心をやや落ち着かせた。露出は他の三人に比べればほとんどなく、スカートも膝丈までである。どう見ても娘であることと頭に人形を乗せている

ことを除けば、だ。

「なんだ、君たちは」

「なんだとは心外ですなあ。貴殿を助けた我らに向かつて」

最初の女が、そう言った。

「それは失礼した」

頭を下げる歳三。傲岸なところもあるが命の恩人にまで不遜であることはない。

もちろん、いずれ刎ねられる頭ならば幾ら下げても安くないと思つているところもある。

「頭を上げて。星は言い過ぎ」

「これはすまないな香風。シャンフーこの方が面白くて、ついな」

「最初に言つておきますが、貴方を助けたのは私たちではなく香風です」

「そうですよー。星さんは調子に乗り過ぎです」

「そうかね」

歳三は改めて、香風と呼ばれた少女に向き直つた。

「この度は大変助かりました」

「そんなこと……」

「つきましては早々に官軍にお知らせなさい。新選組の土方歳三を匿つたとあれば貴女

にまで累が及ぶ」

目の前の少女は驚いたような顔をしている。

さすがに、この者は私のことを知っていたか、と内心歳三は安堵する。

「……賊、なの？」

「薩長の官軍どもから見れば、私など賊の親玉でしような。幕府など、形骸に過ぎぬ故」

「あの一、一ついいですか？」

「なんででしょう」

唯一、露出の少ない娘の言葉に歳三はいつもの通り不愛想に答える。

「官軍はわかりました。けれども貴方の言う薩長や幕府がわからないのですが」

「……………なに？」

「そうです。貴方は自分のことをさも知られているようにおっしゃっていましたが、私

たちは貴方の名前など聞いたことがありません」

眼鏡をクイとあげながら女が不審な目を向けてくる。

歳三はそんなこと知らぬと言わんばかりにむっとり顔で思案していた。

まさか薩長や幕府までもが知られていないとは、一体どんな僻地であるのか。

こればかりは聞いてみなければわかるまい。事実、そうした。

「失礼ながら、ここはどういった場所ですか？」

「青州樂安郡、冀州樂陵郡との境の村でありますな」
最初の女が答えた。

青州——歳三、即座に思い出す。昔、近藤に強く勧められた三国志で読んだことがあるのだ。

青州といえば曹操による苛烈な討伐による結果軍門に降った青州兵と、冀州ならば名門・袁紹の名が思い出される。

だとすれば。歳三の中でいろいろな知識が引つ掻き回される。

「では現皇帝は？」

「靈帝であらせられますな」

靈帝、後漢末期の、三国時代の引き金を引いた皇帝である。

ならばここは、後漢の古代——およそ1200年以上前ということになる。

それならば新選組も土方歳三も、薩長も幕府も知らなくて当然である。そもそも存在しないのだから。

(そんな馬鹿な)

表情には出ささないが俄かに混乱する歳三。

無理もない、今の今まで蝦夷で戦っていたのだ。瀕死の重傷を負って。

腹を押さえる。確かに傷はあった。これだけが歳三と蝦夷の戦を繋げる最後の砦と

思えたのだ。

「……何度もすまない、誰がこの手当てをしてくれたのだ」

「私」

露出の多い娘が答える。

歳三、やや考えてから、聞いた。

「何故、私を助けようと思った？」

「……官軍の将軍と思ったから。それと」

「それと？」

「悪い人じゃ、なさそうだったから」

「そうか、そうか……」

歳三は笑い始めていた。

皆が、そんな歳三を不審そうに見ている。

「何かおかしいことでもー？」

「おかしいさ。よりにもよって私が悪い人でないとはな」

人形を頭に乗せた娘にそう答えると、歳三は辛抱たまらんといい風に笑いだした。

(新選組副長として、内からも外からも蛇蝎の如く嫌われたこの俺がか)

泣く子も黙ると嘲られてきて、今更そんなことを言われるとは思わなかったのだあ

る。

「……侮辱ですか！」

「まあ待て稟。あの笑いはそういう笑いではない。心底面白かったのだろう」
「そう言いながら女は濁酒を飲んだ。」

◇

ひとしきり笑った後、歳三はむっとりとした顔で四人と向き合った。

「これは失礼しました」

「急に笑い出すのだから、気でも狂ったのかと思いましたがぞ？」

「私も自分がそうではないのかと半ば思っている。だが夢のようなものと思えばどうと
いうことはない」

歳三、笑った後には既に過去の自分と見切りをつけていた。

盛大に狸に化かされているのか、あるいは今際の際の幻想か、どちらでもいいがとにかく
かくそういうものと割り切っている。

そうと認識を決めた以上、歳三の腰は軽い。

頭の中は既にこの時代に生きるための術を探し始めている。

「申し訳ないが私の服と持ち物はどこかな？」

「いやいやいや、少しお待ちくださいさらぬか。命を助けられておきながら名も名乗らない

とは、いささか無礼に過ぎませぬか？」

「風たちは香風にちよつとお金を渡しただけ——」

濁酒の女が人形の娘の口を塞いだ。むぐぐ、と呻いているが歳三にはどうすることもできない。

「それに武人とお見受け致しました。そのような方が一宿一飯どころか命を助けられたことに、なんとも思わないのですか？」

武人——歳三にとっては即ち武士もののぶや侍と同義である。

誰よりも鮮烈に憧れて、目指し、なつた以上自ら名を汚すようなことはしたくないというのが歳三の本音であつた。

少々、この女に乗せられているのが癪ではあつたが、それが歳三の性分なのである。

「……土方歳三」

「ふむ、変わつておりますな？ 字あざなが——」

「字はない。姓が土方、名は歳三。さあ、私は名乗つたが、君たちはどうする？」

底冷えするような目で、睨んだ。質問すると鋭くなる、新選組時代の悪い癖である。

意図したつもりはないが、濁酒女と露出の多い少女からは一瞬ではあるが殺気が感じられ、彼女らは武人であると歳三は勘付いた。

逆に女と人形娘の方は少したじろいだ。多分、武とは遠い人間であろう。

「では私から。姓は趙、名は雲。字は子龍と申す」

「あの趙雲子龍だと？」

「どの趙雲子龍を指しているのかわかりませぬが、私は確かに趙雲です」

歳三も知らぬ名ではない。趙雲子龍、五虎大將軍として蜀に仕えた義の人である。

(まさか女だったとはな)

今更趙雲の正体が女でした、と言われても歳三にとつては些事である。

認識が間違っていないければ1200年も前の時代にいるのに、これ以上何を驚けというのか。

「では私だけ、では具合がよくありません。ほら香風」

「シヤンは徐晃」

露出の多い娘までも、猛将・徐晃と言うか。歳三は驚きを通り越して呆れていた。

そして猛将二人がここに居るのなら、残りの二人は軍師でなければ道理が通らぬ、と歳三は睨んでいた。

「私は戯志才」

「偽名か」

「……どうしてそう思われましたか？」

「ただの勘さ。それと、そういう聞き返し方はやめた方がいい。偽名と露見するぞ」

嘘臭い、と勘づいただけだ。だが勘も馬鹿にはできぬと歳三は思っている。事実、京では町人に化ける間者が多かつた。時には勘働きさせねばそういう輩を見逃すこともある。

それに斬り合いにはある種の勘がなければまず死ぬ。

そういうわけで、歳三は自身の勘については自信がある。故に言った。

「風は程立と申しますー」

「ほう、程昱」

「むー、本当はお兄さん、私たちについて何か知っていますね？」

疑念の目を人形の少女こと程立が向けてくる。趙雲、徐晃、戯志才とやらも同様だ。

しかしお兄さんという年齢としでもないのだが、と内心苦笑する歳三。

表の面だけは憎たらしい不愛想のままだが。

「私などただの素浪人に過ぎぬ」

「お兄さんがそういうなら、こちらにも考えがありますよー」

「なに？」

「お兄さんの持ち物、すべて売らせていただきますー」

どこからか取り出したか和泉守兼定と堀川国広が程立の手に握られていた。

同じく、仏蘭西式士官服一式が趙雲の、ズタ袋が戯志才の手の内にある。

「お兄さんの為に風たちは身銭を切りましたからねー、路銀が足りないのです」

「なるほど、兵糧攻めというわけか。策士だな」

「で、どうします？ お兄さんの返答次第では売っちゃいますがー」

「ふむ、これは困りましたな」

歳三は笑った、が目は笑っていない。

強硬策として程立を絞め殺すことも考えたが、趙雲と徐晃が居ては逃げるのも難しいだろう。

(まこと 眞実を話したところで信じるわけもあるまい)

どうしたことがと逡巡する。身一つでも生きていく自信はあるが、万一売って金にできぬ服や雑貨をむざむざ手放すのも惜しい。

もちろん、武士の魂ともいえる愛刀和泉守兼定と同じく堀川国広を手放したくない。

これは紛れもない歳三の本音である。

「お待ちください。ここはこの趙子龍にお任せを」

程立との睨み合いに割り込むように、趙雲が身を乗り出してきた。

ほとほと策なく歳三も困り果てていたところである。今は空気を變えたい。

歳三は了承し、程立も怪しげな笑みを浮かべながら了承した。

「まずは確認を。風は土方殿を見極めたい、土方殿は持ち物を取り返したい、そこに異論

は(ぎ)ざいませぬな」

「ない」

「ありません」

「ではこうしましょう、この趙子龍、土方殿と一手戦おうと思います」

やられた、と歳三は思った。まさか程立もこれを狙っていたのではないか。

事実、程立も成功したというようなあくどい笑みを浮かべていた。

「まさか武人である土方殿が嫌とは申しますまいな？」

悪戯めいた趙雲の視線に、歳三は内心憎々しく思っていた。

だが、思考を切り替える。

この女が本当にかの高名な趙雲子龍なのか確かめる機会がきた、と。

本物ならばそれで良し、名を騙るだけの女子おなじならこの場所がより不確かなものになる

だけのこと。

「よかろう」

歳三は立ち上がる。

「ではこの時だけ、我が愛刀を返してくれませぬか、程立殿」

「いいですよー」

意地の悪い笑みを浮かべる程立から和泉守兼定を受け取る。

長脇差である堀川国広は、人質ならぬ刀質らしい。
なるほど、策士らしく武人の嫌がるところを押さえている。

「参りましょうか、土方殿」

趙雲に促され宿の外へ出る。ふと、空を見上げた。

(空の色は、どこも変わらぬな)

そんなことを、歳三は考えていた。

凶刃乱刃

歳三がすらりと兼定を抜き放つ。

趙雲が槍を構える。独特の装飾の施された槍が、歳三に向く。

あの趙雲子龍と剣を交える。武人であるならばどれだけ心躍ることであろうか。

しかし歳三は内心にがりきっていた。

(槍相手に刀はいけねえ)

槍術三倍段、と一般には言われているが、つまりはそれだけ技量差がなければ刀を用いて槍に勝つのは難しいということである。

歳三はこの辺りよく心得ている。

槍は、強い。間合いも広く足払いも仕掛けやすい、非常に実戦的な武器だ。

そして槍や薙刀のような長物相手には、如何にして相手の懐に飛び込めるかが勝負である。

理屈の上では、と先に付く。

(まさか本物の趙雲なら、そんな真似を許すほどの使い手なわけがねえ)

歳三は十番隊組長・原田左之助を思い出していた。

折を見ては新選組の道場にて槍の手ほどきと対槍戦の稽古を受けていたが、原田ほどの猛者相手では歳三であろうとも、稽古では一本も打ち込めなかつた。

(この気迫、原田君以上の技量があると見ていいだろう)

歳三は決して相手を侮ることはしない。

趙雲の構えの隙のなさ、気迫の充実ぶりを冷静に分析する。原田は槍も剣もできたが、趙雲は槍一筋であつたようだ。その分、手強いと見ていい。

「構えないのですか？」

「今、構えるさ」

歳三、半身に構え刀身を傾斜させる。いわゆる平正眼の構えである。

どことなく癖のある歳三の構えは、趙雲を少しだけ困惑させた。

美しくない、それが趙雲の困惑の正体である。

武というものは極めれば極めるほど、動きが精緻になり巧緻になり大胆になるもので、ある境を越えた一流ともなれば武器を振るう動作は人を魅了させるものがある。

それが、歳三からは感じられない。所作一流であるものを感じさせるのにどこか美しくない。

同じことを、二人の対決を見守る徐晃ら三人も思っている。

趙雲らが困惑している間、歳三はひたすらに策を練っていた。

(どうする)

槍は森に入ればその間合いの長さを生かせなくなる。しかし逃げるにも手頃な森は、近くにない。

石をぶつけてやろうにも丁度いいのが、そこらにない。

砂をかけて目潰しをしようにも、下手に本気の突きをされて刺されても洒落にならない。

趙雲も力量を測る為に、まさか殺しに来ると言うこともないだろう。

事実、趙雲からは気迫の充実は感じられても殺気はない。

(これア結局千日手だな)

歳三は眠そうな眼でそう結論付けた。

お互い技量の程は不明だが双方一流に相違なく、先に手を出した方が手の内を見せて負ける。

そういう勝負だ。

「来ないのでですか？」

趙雲の呼びかけを、歳三は無視する。仕掛けさせる為の挑発、安い手だ。

「そちらアアアアア」

歳三、応じるとは思っていないが同じように声を掛ける。

もちろん、趙雲も動かない。

一步飛び込めば互いの間合い、二人、石像のように武器を構えて相對する。

あまりの緊張感に徐晃らも息を呑んで對峙を見守っている。

どちらが先に動き、先の先を取られるか。

「賊だ——」

「なに!？」

趙雲が何者かの叫び声に反応した。徐晃や戲志才でさえも、思わず声の方に振り向いていた。

鉄壁の槍構えに隙ができた、と歳三はかっと目を見開いた。

即座に一足飛びに趙雲の懷に飛び込んでいく。趙雲が気付き槍を引く間も与えない、槍の柄にすうと兼定の刀身を滑らせて刃を趙雲の首筋に突き付けた。

「私の勝ちですな」

「貴様——」

「それよりも、賊の相手が肝心でしょう」

卑怯、とは言わずに歳三はさつきと刀を鞘に納めると、声の方へとすたすた歩いて行ってしまう。

取り残されたのは四人の方である。

「むむ、逃げられたか」

「戦場でなら斬られてましたねー、星ちゃん」

「ここは戦場ではないぞ、風。しかしまさか賊にも反応しないとは思わなかった」

「あの人は星ちゃんを倒すことだけに念頭を置いていたようですしねー」

趙雲と程立が話し合うのを、徐晃が止めた。

「それより、賊だつて」

「そうですね、香風シヤンフーの言う通りです。今は賊に対処するべきです」

徐晃の言葉に戯志才が続いた。趙雲も頷いたが、程立だけは違った。

「どうやらその必要もなさそうですよー」

歳三が、さっさと帰つて来ていた。

「賊約30人は、この村には関心も示さず向こうへ逃げたらしい。というわけで私は賊を追う」

簡潔に賊の情報を教えると、歳三はまた背を向けて歩き出していく。

「待たれよ土方殿。先ほどの勝負は——」

「そんなことどうでもよろしい。それよりも女子おなごが賊に捕まっていたという」

「そんなこととは!」

「些細な勝負などより、人の命のが尊い」

趙雲の言葉を一顧だにせず、歳三は賊を追って街道へと繰り出していく。

「振られましたねー、星ちゃん」

「やれやれ、私には測りかねるな。あの人は」

趙雲は一度頭を振ると、気持ちを切り替えた。

「土方殿の言う通り、ここは賊に対処するが吉。香風、ついてきてくれるか？」

「わかった」

「風と稟はここで待たれよ」

わかった、と程立と戯志才は頷いた。

◇

「なんて足をしているのだ……」

趙雲は舌を巻いた。足に不安があるわけではない、どころかそこらの者にひけはとら

ないほどに速いと言う自負がある。

それよりも速く歳三は先を行っている。恐ろしいほどの健脚である。

先ほどまで傷で寝込んでいた人間とはとても思えないくらいだ。

その歳三が、突然横に逸れた。どんな技を使ったのかすぐに草むらに塗れて姿が見え

なくなる。

「土方殿は一体どこへ？」

「星、賊が」

趙雲は徐晃に言われすぐに視線を前に戻した。

相当の強行軍だったのか、賊は皆息を切らして休んでいる。中には座り込んで居たものも居た。

賊皆手には金銀財宝が詰まっているのだろう袋と、歳三が言っていた通り女子が一人縄で縛られている。

「やるか、香風」

「わかった」

趙雲は槍を、徐晃は巨大な斧を手にし賊の前へと躍り出る。

「なんだてめえらは！」

「俺たちにたてつこうってのか！」

女子、と侮ったか賊は思い思いの武器を手に趙雲らの前に立ち塞がる。

「最初に言っておこう、死にたくないなら全てを捨てて逃げなさい」

「ふざけるんじゃないやねえ！ お前ら、やっちまええ！」

趙雲の言葉に首領格であろう男が叫ぶと、趙雲と徐晃に賊が殺到する。

「やれやれ、やはりこうなるか」

「賊だもの、仕方ない」

趙雲の槍が振るわれた。一瞬で喉元を突かれた男たちが倒れていく。徐晃の斧が振るわれた。紙切れが風に舞うように、男たちが肉塊となって飛んでいく。

戦闘にもならない。一方的な虐殺である。

こんな光景を見せられては、所詮まとまりの弱い賊らである。自然逃げ腰になる。

「まだ、やる?」

「ひっ!」

徐晃の言葉にすっかり恐れをなした残りの賊ども。

中でも首領格の男は、尻餅をつきそうなほど怯えている。

が、すぐに凶悪な笑みを浮かべた。

「は、はん! こつちには人質がいるんだ! お前ら、孫乾を——」

と、振り向いたところで固まった。

人質として捕らえていた女が、居ない。だけではない。

眼光鋭い大男が氷を思わせるような目で、男を見据えていた。

男の周りには、声も出さずに殺されたであろう仲間たちが、無惨にも倒れていた。

「土方殿!」

「お、お前はいった——」

趙雲の驚きに答えるように、歳三は手近な賊の喉元へ斬りつけていた。手にあるのは愛刀・兼定ではなく、賊の使っていた粗末な剣である。

「野郎！」

趙雲や徐晃よりは与し易いと踏んだか、賊が歳三へと向かう。

歳三は大喝した。

「!？」

凄まじいの一言に尽きる裂帛の喝である。歳三から醸し出される異常なまでの殺気も相まって、龍の咆哮にも思える。

趙雲や徐晃でさえ、一瞬歳三の大喝にすくんだのだ。並大抵の者はこれだけで萎える。

事実、賊からは闘気が失せていた。

そんな隙を見逃すほど、歳三は甘くはない。

剣を振るい頭蓋を断ち割り、剣を抜くのが困難と見るや槍を足で拾い上げ、即座に突く。

突き殺した後は逃げようと背を向けた賊の首根っこを捕まえて、頭から地面に投げ落とす。

なるほど、これが土方歳三の戦い方か、と趙雲と徐晃は理解した。

劍・刀・槍、恐らく棒も徒手空拳も使えるだろうことを思わせる身のこなし、戦い方。歳三の構えを美しくないと評した構えにもようやく合点がいった。

雑多の流派を取り込んで、我流のある種の流派に至るまで昇華させた。何でもありの喧嘩剣法。

行儀の良い戦いではまったく光らないが、戦場ではめつぼう強い。それが歳三の真骨頂だったのだ。

「ひ、ひいいいいい！」

首領格の男が情けない声を上げた。

いつの間にか取り巻きは全滅し、残るは男一人である。

歳三は男を底冷えするような眼で見据えた。

「さて、お前が頭かね？」

「ち、違う！」

「つまり、他にも仲間が居る、ということか？」

「そ、そうだ！ 俺たち烏丸に逆らうってんなら——」

「うるさい」

ばきり、と骨が折れる音が響いた。

歳三が男の脛を、上斜めから踏み砕いたのである。

あまりの痛みに男は転げまわるが、歳三はまったく変わらぬ眼つきで男を見下ろしている。

「では、お前の頭はどこにいるのか、話してもらおうか」

「ぎゃああああ！ 脚が！ 脚が！」

「話さないならもう一本折るが、どうする？」

「話す！ 話す！ 話すからやめてくれ！」

「では、兵力・拠点・頭の名前全てを話せ」

男が歳三に言われた通りのことを、すべてを話す。

歳三はふんふんと頷くと、地面に転がっていた剣を拾った。

「嘘はないかね？」

「な、ない！」

「では」

歳三が剣を振りかざす。

男は悲鳴を上げ、遂には恐怖から失禁した。

「待たれよ土方殿」

「ふむ？」

趙雲の言葉に歳三、腕を止めた。

男は天の助けだと言わんばかりに、歳三の足元で助命を嘆願している。「脚を折られ答えることはすべて答えた、その上で殺すのはちよつと惨くありませぬか？」

「惨いか」

歳三は無造作に男の折れた脚を蹴った。

「聞くが、今回の様に強盗の上で婦女子を攫ったのも一度ではなからう」

最早喋る気力もないのか、男はこくこくと頷くばかりである。

「お前、その婦女子をどうした？」

男は答えない。いや、答えられない。

歳三の眼には並々と殺気が漲り、爛々と光っている。

沈黙が答えと言わんばかりに歳三は、言った。

「辱めたな、大勢で。楽しかったか？ 気持ちよかったか？ ほら、答えろ」

また、男の折れた脚を蹴った。

悲鳴の中に、男が婦女子を辱めたことを自白したことが紛れていた。

歳三は例の眠そうな眼で趙雲を見る。

「これでも、生かしておく価値はあるかね？」

「ありませぬな」

「だろろう」

男の首を、歳三は刎ねた。鮮やかな手並みである。

鮮血が大地を濡らしていく。

「さて、とりあえずこれらを持ち帰ろうか」

歳三からは、既に殺気は失せていた。

◇

趙雲や徐晃の見かけによらぬ怪力と歳三の膂力、それに攫われていた本人も手伝えれば賊が盗んでいた宝物はすべて村へと持ち帰れた。

程立と戯志才に迎えられて、男一人女五人で、宿の一角を陣取った。

近くには財宝の詰まった袋が積まれている。

「この度は災難でしたな」

「いえ、貴方がたのお陰で無事で済みました。本当にありがとうございます。私は孫乾、字を公祐と申します」

歳三の言葉に孫乾は深く頭を下げた。

彼女もまた美形である。これもまた肩と胸を大きく露出した衣装ではあるが、歳三はもうそういうものだど割り切っている。

全体的に短めの髪型だが、揉みあげだけがしゅつと長く顎のあたりで鈴飾りで縛って

いる。鈴が、チリンと鳴った。

あつ、と孫乾の自己紹介に声を上げたのは戯志才である。

「孫乾と言えば青州北海郡の豪族ではありませんか」

「その方の言う通りです。この度は皆で財物を徐州に運ぶ途中で賊に襲われ、応戦しましたがあのようなことに」

悲しそうな顔を孫乾はするが、歳三は別のことを考えていた。

(助けた相手が豪族か、そいつアいい)

別に歳三、孫乾が賊に犯されていようが殺されていようが実のところどうでも良かった。

賊が逃げるなら仕事の終わり、ならば金銀の類は持つて逃げているであろうことに目をつけて、徐晃らの恩に報いるために賊の死体からかっぱらうことに決めていたのだ。

それがどうしたとか、計らずとも地方の有力豪族に恩を売れたことになる。

なんの後ろ盾も持たない歳三にとっては、降つて湧いたような幸運である。

無論、そんな考えであつたことは微塵も出さない。

「ふむ、そういえばあの賊は烏丸と名乗っていたが、何か心当たりが？」

「それは私が説明するのですよー」

「知っているのか程立殿？」

「はい。烏丸というのは幽州より北の異民族で、このところ青、徐、幽、冀の四州に侵入しては荒らしまわっているのです。幽州の公孫贇殿も手を焼いているそうです」

「ふむ」

歳三、思索する。

（公孫贇、か）

旧知の劉備を無名の頃から取り立てた、英傑の一人である。

趙雲をちらりと見た。かつては趙雲も劉備の元に行く前には公孫贇の将だったはずである。

（いや、かつてではなくこれからか。いやそうならぬかもしれぬ）

三国志の知識を鵜呑みにするのは危険だと、歳三の勘が言っている。

既に三国志など糞くらえと言わんばかりに英雄たちが女なのだ。

あくまでも知識として、判断材料の一つにするべきと歳三は判断付けた。

「あの……ところでこの御恩に報いるには如何すればよろしいでしょうか？」

孫乾の言葉に趙雲と徐晃、顔を見合わす。

「私は別に構いませぬ。報奨目当てに助けた訳ではない故」

「シャンも、いい」

自然、残りは歳三ただ一人になる。

「幾らか金を貰えたら嬉しいですな」

「お金、ですか？」

「実はこの身、徐晃殿に命を救われましてな。更には趙雲殿らにも路銀をはたいてもらつて治療の暇を貰ひまして。しかしこの身、生憎と金など持ち合わせておりませぬ」

「つまり、払つてもらつた分のお金を工面して欲しい、と？」

「そういうこと」

歳三、にこりと笑いもせず頼むが、孫乾は逆に柔和な笑みを浮かべる。

「構いません。命のみならず財物まで取り返してもらえたのですから。しかし、本当にそれだけでよろしいのですか？」

「そうですか、と歳三。」

趙雲や徐晃の無言の抗議の視線を屁とも思わずに答える。

「ところで、孫乾殿。青州の豪族ともなれば諸侯の覚えも良いのでは？」

「はい。徐州の陶謙様とも親しくさせてもらっています」

「ほう、それでは公孫賛殿とも親交があつたりはしませぬか？」

「はあ……中山の張世平や蘇双らを通して一応の親交はありますが」

「それはいい。公孫賛殿への紹介状を一つ、書いてもらえませぬか」

歳三が頭を下げた。

これには孫乾のみならず趙雲、徐晃、戲志才も驚いた。

「どうやらこの青州に限らず、多くの地が賊によつて乱れている様子。不肖ながらこの身を使つて賊を鎮圧したいと思ひましても、この通り金も兵も持たぬ身。であれば公孫賛殿のところまでこの力を振るいたくあるのです」

「本当にそうなのですか？ それならば陶謙様のところでも良さそうですが？」

「賊は根から絶つものです。入り口である幽州から締め付けるべきかと」

内心、歳三は冷や汗をかいている。

全てが嘘ではないが、正直なところ今の歳三が欲しいのは金と兵士、それと名声である。

何をするにしてもそれらがなければ話にならないし、これから訪れるであろう争乱の時代に名乗りを上げること難しい。

その足掛かりとして、公孫賛の元で武名を上げようと思つたのだ。

（見抜かれたか？）

歳三は不愛想な面で孫乾を見た。孫乾は、考え込んでいる。

「とりあえず」

孫乾は言つた。

「お金の方を先にお渡ししておきます。紹介についてはまた後で、ということによろし

いですか？」

「孫乾殿がおつしやられるなら、構いませぬ。では徐晃殿、趙雲殿、戲志才殿、程立殿、私を助けるのに幾ら使つたか教えてもらえませぬか？」

歳三は忘れずに、続ける。

「それと担保としていた武器と服と持ち物を返していただきたい。もつとも、武人である趙雲殿がまさか孫乾殿が払えぬ額をふっかけるとは思えません、まさか返さないとはいけません？」

一種の意趣返しである。

こう言われては流石の趙雲も言い返すことはできない。

歳三は荷物を全て受け取ると、着替えるために席を立った。

ところで、と歳三が姿を消した後で孫乾が尋ねた。

「あの御方は、一体何者なのですか？」

「土方殿のことですか？ いや、それが私にもまったく見当が付きませぬ」

「土方、とあの御方は申すのですか」

「うむ。姓を土方、名を歳三という、字あざなを持たぬ変わった御仁ですよ」

趙雲の言葉に孫乾はしきりと頷いている。

口は小さく、歳三様、歳三様と呟つぶやいているようだ。

目めざと聡く、趙雲は見つけた。

「おや、孫乾殿は土方殿に惚おぼれましたか？」

「はい。どうやらそのようです」

臆面もせず言い切る孫乾に、むしろ趙雲が目を見開いた。

「賊から救っていただいたことは何より、その手際、戦いくさぶり、そしてあの顔立ちとくれば並大抵の人物ではないでしょう。私は、どうやらそこに惚おぼれたようです」

「お兄さんが無位無官無名無禄であつてもですか？」

「うふふ、例え今は蛇でも後に龍に転ずるかもしれない。歳三様にはそういう才気があります」

「でも、そのまま何もできずに終わるかも知れませんよー?」

「その時は私の見る目がなかっただけのことですから。この身滅びるまで歳三様についていくつもりです」

柔らかな笑みを孫乾は浮かべた。程立は眠そうな眼で孫乾を見る。

ため息を、ついた。

「風が一番にお兄さんに目を付けたんですがねー、これでは風が二番手になってしまいます」

「風!?! 何を言ってるんですか! 曹操殿のところに仕官するのではなかったのですか!?!」

「落ち着くのですよー稟ちゃん。風にも考えがあるのです」

「考え?」

「お兄さんが凡百の人であつたなら、風は暗殺してでも曹操殿のところへ仕官するつもりですー」

これには戯志才驚いた。趙雲も徐晃も驚いた。

唯一、孫乾は変わらぬ笑みを浮かべている。

「暗殺など、私がさせませんから」

「手段の一つとして言ったままでしてー」

孫乾と程立の間で無音の火花が散っているようである。

戲志才はやや呆然とし、趙雲と徐晃は顔を見合わせた。

「私たちはどうしますかな、なあ香風シャンフよ」

「シャンは、ちよつと興味あるかな」

「土方殿にか？」

「うん。はつきり、とは言いにくいけど。初めて見たときからただものじゃないって、思った」

「そうか……」

趙雲も首を捻った。

実のところ、趙雲としては槍一本で身を立っていく自身がある上に、歳三同様路銀が尽きれば公孫賛の元で客将にでもなるつもりでいた。

実際見識を広めるつもりでこうして各地を流浪していたが、旅は道連れ世は情けと共に歩いてきた一人を変節させ、初めて会う人物に興味を持たせて助けさせ、更には一豪族すら魅了する。

そんな男に出会った今。

趙雲が興味を持たない筈がない。

「決めました、私も歳三殿についていこうと思います」

「星までも、ですか？」

「稟よ、これも何かの縁。もしかしたら私も歳三殿の氣に当てられたのかもしれない
なあ」

なおも、戯志才は考え込んでいる。

初心を貫徹するか、友である程立と同じく仕えるべき主を変えるか。

これは生の涯^はてまでも決めることなのではないのかと、戯志才は思えてならなかつた。

程立はよほど人物でなければ暗殺するとまで言っているが、自分の見る目を信じる程立が思った人物でないからと言って簡単に投げ出すだろうか。

戯志才は苦悩する。考えれば考えるほど泥沼に浸かるよう。

そこへ、涼風が吹いたようだった。

思わず宿の入口へと注目する。龍が、人となって現れたかと、戯志才は思った。

「いや、井戸を借りて身体を洗っていたら遅くなりました」

現れたのは正に渦中の人、土方歳三である。

孫乾が思わず艶っぽい吐息を漏らすような凄まじい男振りだ。

趙雲も程立も驚きのあまり声も出ないようである。

しかし、徐晃だけは反応は薄い。本来の歳三の姿を一度見ているからだろうか。顔の汚れを落とし、髪を整え、正装を着込む。それだけでこれほど人は変わりうるか。徐晃が官軍の将と評したのもわかる。

完全に姿を取り戻した歳三の気に、飲み込まれてしまいそうだ。

戲志才は身が震える思いがした。これは確かに、蛇から龍へと変わるかもしれない。歳三は元の椅子へと座った。

所作のひとつひとつに雑念がなく隙がない。

「服の綻ほころびまでも繕繕つてもらうとは、本かたじけな当当に忝い」

深々と徐晃に頭を下げる歳三。徐晃は小さく、いいよと返した。

「馬も、連れて来てもらつていたとは」

「ううん、人を助けるなら、当然」

「度量が広いですな、徐晃殿は」

歳三は、笑った。初めてであろう、何の忌憚もなく歳三が笑ったのは。

戲志才はいよいよ心を動かし始めていた。

ここを逃してはこの男に仕官するのはもう叶わぬ、という思いが強くなっている。

「あの、土方殿」

「なにか？」

「私、戲志才と名乗っていました。本当は郭嘉と言います。字は奉孝」

「やはり、私の勘は当たっていたか」

嬉しそうに、歳三は笑った。傲岸にしか見えぬこの男からは考えられぬ笑みである。

不思議と戲志才——郭嘉は喜びを覚えた。

軍師というものは献策をし、策の成功によつて主君に喜ばれるのを是とするものである。

それと同じ感情を、今の歳三から郭嘉は感じた。

仕えるべきはこの人だ、と郭嘉が思ったのはこの時である。

◇

これからどうするか、と歳三は思案している。

孫乾から公孫賛への紹介が叶わぬのであれば、孫乾と繋がりにある徐州・陶謙に付くのも良い。

もしくはこれから頭角を現すであろう、曹操や孫堅の元へ行くのもいい。

(必ず仕官が叶うとは限らんが)

鬼と鳴らしたこの身であつても、今であつてはただの無名。

やはり孫乾の協力がなければどうにもならぬか、と場の顔を改めて見回した時。

歳三への視線が違うことに気が付いた。

(なんだ?)

趙雲の視線は、面白いものでも見つけたという顔である。

徐晃は、興味深そうにこちらを見ている。

郭嘉においては何かを決心したような感じだ。

こと孫乾に至っては、かつて江戸で京でと飽きるほどに浴びた熱視線である。

ただ、程立だけは眠そうな眼でこちらを見ているだけだ。

「どうかしたかね？」

「いえ、一同決めたのです」

「決めた？ 何を？」

「私たち五人、歳三様についていくことにしました」

眠たげな歳三の眼が、郭嘉の言葉によって見開かれた。

「……本気か？」

「もちろんです、二言はありません。その証拠に歳三様に真名を預けます。私は稟と言います」

「あー、ずるいのですよ稟ちゃん！ 風は風ですー」

「この流れは私も言う流れですな。私は星、と言います」

「シャンは香風」

「私は美花ミフアと申します。皆さまもどうかそうお呼びくださいませ」

「ああ、いや待て。そんなに一度に言われても困る」

その癖すっかりと記憶しているのだから、歳三の抜け目のないところである。

「そもそも真名とは一体？」

「……知らないのですか？」

「いや、まったく」

郭嘉が呆れている。趙雲が転げている。徐晃が滑っている。

孫乾と程立だけは変わらずに歳三を見ている。

眼鏡をくいくいと直しながら郭嘉は説明した。

「簡潔に説明しますと真名とはですね、心を許した証に呼ぶことを許す名前です」

「ほう」

「本人の許可無く真名で呼ぶことは、問答無用で斬られても文句は言えません」

「ふむ、では郭嘉——」

「同時に、真名を許されたにも関わらず真名で呼ばないのは失礼にあたります」

「そうか、ありがとう稟」

諱いみなのようなものか、と歳三は一人納得する。

江戸ではすっかり廃れた風習の一つではあるが、歳三も諱を持つている。

「私にも、似たようなものはある」

「ほう、真名を知らぬのに真名があるとはこれ如何に？」

「そう言わないでくれないか、星。私の国では真名ではなく諱と言った。言葉通り呼ぶことを忌む名だ。私も真名として諱を預けるが、普段は呼ばないでくれ」

「普段、とは使う時があるということですか」

「そうだ、私が死んだ時に使ってくれ」

趙雲が少ししたじろいだ。

「では、どう呼べばいいのですかな？」

「諱以外で、好きに呼べばいい」

一同、頷く。

それを見て歳三、口を開く。

「私の諱は義豊だ」

皆が、噛み締めるように歳三の諱を受けた。

真名が神聖なものであるように、諱も等しく神聖であると彼女らは理解したのだらう。

歳三は既に諱も意味を持つのだと適応している。

「では、お互いのことをよく知り合うために」

と、趙雲が甕かめを取り出した。

「一つ宴といこうではありませんか」

「星が、酒を飲みたいだけでしょ」

「ばれましたか」

徐晃の言葉に一同笑った。歳三だけは、いつものむっとり顔である。

◇

酒の席、といえば大概賑やかなものであるが、この宿の一角だけは違う。

一同、静かに酒を飲んでいる。

こんなはずではなかったのだがな、と思うのは趙雲である。

この座における主役である歳三が何も言わず酒を飲んでいるから、皆、喋らない。

歳三の飲む、というにはやや語弊がある。

歳三は酒を飲むというよりは、舐めるようにして飲む。

ほとんどが物憂そうに杯を眺めているのだから、酒量も少ない。

歳三を除く皆が少なからず杯を重ねているのに対し、歳三は未だ一杯目である。

「主人様は、お酒はお嫌いですか？」

孫乾が口を開いた。歳三が眠たげな眼を孫乾に向けた。

「そのご主人様って言うのは、なんだ？」

「私の質問にお答えしてくれたら、答えます」

「酒は、あまり好きではない」

歳三、生来あまり酒が飲めない。

しかし酒そのものよりも、酒に酔った男の方が嫌い、という方がこの男には強い。

酔態の無様を晒す人間への軽蔑が、そのまま酒への嫌いに転嫁されている節がある。

「答えたが、美花」

「わかりました。私が仕え支ええると決めた人ですから、ご主人様です」

「やめてくれ、そんな風に言われても座りが悪い」

「諱以外ではどんな呼び方をしても良いと、おっしゃられたではありませんか」

歳三は苦り切った顔である。

下手に反論すれば、趙雲が茶々を入れてくるのがわかりきっているからである。

現に、趙雲が孫乾とのやりとりを面白そうに聞いている。

「確かに、言った」

「そうですよね」

「しかし私はここに上下はなく皆同士、仲間だと思っている」

「そのお心は」

「そんな風に主君の様に仰ぎ見られるのは、好きではない」

「と、おっしゃられる割には、似合わない言葉遣いをされるのですね」

思わず、杯を取り落としそうになった。

(この女、どこまで見抜いていやがる)

時々、女という生き物に対して恐いと思う時があるが、今がそれだった。

「ごまかすように杯に口を付ける。」

「ほう、歳三殿は我らのことは仲間とお思いですか」

「星までも、なんだ」

「いえ別に。美花殿の言う通り堅いお人であるなと思ひまして。仲間であるというのな

らば、もう少し砕けても良いのでは？」

「そんなに重要なことなのかね？」

「重要ですとも！ 歳三殿が仲間と見ているのに距離を置くような言葉遣い、寂しいで

はありませんか」

おどけた様に趙雲が言う。

歳三はいよいよ苦い顔をして、杯を睨んだ。

この武州多摩の田舎剣客が言葉遣いを改めたのは、京に上ってからである。

やはり何事にも形というものがある。

人を率いるためにはいつまでも、素性丸出しの流儀では駄目だったからだ。

確かにこれでは孫乾の言う通り、新選組で言う隊士に対する副長の接し方に近い。

「シャンは、形だけでもお兄ちゃんが上でいい」

押し黙る歳三に助け船を出したのは、徐晃だった。

しかし歳三の興味はとつくに別にある。

「お兄ちゃん、か」

「駄目？」

「いや、そう言われることになるとは思わなくてな。存外、照れるものなのだな」

「どういふこと？」

「俺ア十人兄弟の末っ子でな。兄ちゃん、兄ちゃん、と言うのは俺の方だったのさ」

切り捨てた筈の郷愁が、徐晃の言葉で思い起こされ知らず地言葉が出る。

徐晃の雰囲気もあるだろう。

邪気のない言葉は、歳三の頑なな心をほぐすようである。

はっと、歳三はこちらを見る視線が生暖かいことに気が付いた。

程立だけは頬を膨らませていたが。

「むー、お兄さんとお呼びしたのは風が最初の筈ですよ」

「そんな呼び方をした覚えがないからな」

「では私も歳三殿のことはお兄ちゃん、とお呼びした方がいいですか？」

「星の呼び方には邪気がある。もうさっきのような失態はせぬよ」

歳三は相変わらず不愛想だ。

だが単に鉄面皮というわけでもない。

案外やわらかいところも多いのだ、普段それを見せようとしないだけで。

このまま程立と趙雲による歳三へのいじりが続きそうなので、稟が口を開いた。

「とにかく、私は香風と同じように歳三様を主君とします。このまま飛沫で終わるならともかく、より大きくなるためにはそういった序列もやがて必要でしょう。いざという時に仲間割れもしたくありませんし」

「風は賛成です。お兄さんが何と言おうと、この座の主君はお兄さんです」

「私も異論はありません。歳三殿こそが我が主。そう決めましたぞ」

「シヤンは、お兄ちゃんについていく」

「私は既にご主人様のものですから」

歳三はそっぽを向いた。

（やはり、いつになつても命を預かるつてえのは重い）

まがりにもなにも歳三が主となった以上、仲間を食わせ養うのは義務である。

新選組時代を思い出すようであった。

歳三の表情は、不愛想を通り越して、冷たい。

「なに、そう気負うことはありませぬよ。主」

「どういふことだ、星」

「ここに在る風と稟は希代の軍師。私と香風は自分で言うのもなんですが一騎当千の強者です。主一人がすべて抱え込むことではないのですよ」

美花殿以外は主と同じ無位無官の無名者ですしな、と趙雲は大笑いした。

徐晃らも同じように笑っている。

孫乾が微笑んだ。

「辛くなつたなら、頼ってくださいいな。私たちは仲間、なんでしよう?」

「そうかね」

歳三は杯を一気に呷あわった。

そして噎むせた。

(やっぱり、酒は苦手だ)

だが歳三の表情は柔らかかった。

出立

宴もほどほどに歳三は中座し、部屋に引きこもった。

(ありやあざるといふよりわくだな)

趙雲が、である。

それに付き合えるほどには飲める徐晃らも、歳三からすればざるの部類に入るだろう。

もつとも、歳三が酒に弱い故に相対的にそう見えるだけかもしれない。

枕元に兼定と国広を立てかけ、軍靴ブーツを脱ぎ、寝所に横になる。

目を瞑つむった。

これからどうするかといった策がありありと浮かび上がる。

同時に、昔の仲間の姿も歳三の前に現れる。

(俺だけが、生きている)

急に死に損ねたという想いが持ち上がって来る。

銃弾を受けた脇腹うでずが疼く。

旧知である井上源三郎も、腹に弾をくらって死んだ。

監察の山崎丞も、井上と同じく銃によって死んだ。

(どうでもいいこつた)

何故、どうしてといった疑問など、考えるだけ無駄だと歳三は結論付けた。

生きているから、生きている。

死に損ねたという想いとは相反するが、生きている以上は絶対に生き続けるという自信もある。

(俺ア、生きるよ)

何の為に、とかまでは考えない。

今を生きたるためには戦うしかない、歳三とはそういう男である。

無類の喧嘩好きだから、戦を心から切り離すことはできない、というのもある。

(それでも、お前たちは俺を見ているのか)

睨まぶたに浮かび上がる仲間の姿を振り切る様に、歳三は眠りについた。

◇

ふと、夜陰に目が覚めた。扉の向こうに誰かいる。

とにかく気配に敏感な男なのである。夜襲か、と思い兼定を手にし軍靴を手早く履いた。

いつでも抜刀できるように柄に手を置きながら、歳三は扉をちよつと開けた。

「美^ミ花^ハか」

「ご主人様……」

なんてことはない、孫乾が扉の前に立っていたのである。

孫乾の顔が、驚いているのとは別にやや上気している。

ああ、と歳三はすぐさま理解した。

（夜這いに来たのか）

江戸で京で大阪でと人前に晒すようなことはほとんどしなかったものの、歳三はどこに行っても女に不足しない男である。

恋愛の機微には疎いが、女の扱いや仕草を読むことには長けている。

もちろん、それに応じて相当な女好きでもある。

その癖、時折女を怖いと思っているのだから、かなり偏屈な男であるのは間違いない。

「こんな夜更けに、何か用かね？」

「女が夜更けにこうして尋ねると言うこと、ご主人様ならよくおわかりではないのですか？」

「ふむ」

歳三はわかった上ですつとぼけている。

孫乾、見た目で語るならばもちろん美人の部類に入る。

男として生まれたからには、こんな美女に夜這いをされるなど男冥利に尽きる。

ここで抱くのを断る方が無粋と言えよう。

しかし、ここが歳三の偏屈なところであり、孫乾を抱く気など今の歳三にはさらさらなかった。

(夜這われるのは、気に食わねえ)

気に食わないという理由だけで、この男は美女の誘いを断るのである。

「それにしても、無粋な虫が聞いているようだが」

「え？」

「出てこい。三つの内に出てこないならば、刺突く」

兼定を抜いた。辺りが冷え込むような刃が、薄闇の中ぎりりと光る。

(睦言を聞かれているのも、もつと気に食わねえ)

歳三、女に不足しない割には、女と通じているのがばれるのを嫌がる奇癖がある。

京においても、局長である近藤は私邸にて派手に女を囲っていたのは有名だ。

もちろん組長らも、沖田の様な特殊な若者以外は屯所以外に家を持ち女を囲っていた。

ただ、歳三だけが女の影を出さないように屯所の中に居座っていた。

「二つ」

妙な男である。

かつては郷里に、如何に自分が女から持て囃されているか自慢する手紙を証拠付きで送ったこともある。

それは、歳三の中では苦々しい思い出となっているが。

「二二」

函館においても、その奇癖は存分に發揮されていた。

女好きである歳三が、婦人を近づけずにしたのも偏に露見を恐れたからである。

無論、兵の士気に対する計算や、己の死期に対する悟りも含まれていたのは言うまでもない。

そして、鬼の副長の異名を恣ほしいままにした通り、やると言つたからにはやる男である。

「二三」

兼定が孫乾にも見えぬ速さで振るわれた。

多くの人間を断ち切ってきた兼定は、木の扉など物の数ともしていない。

歳三の隣の部屋の扉に深々と、兼定は突き刺さっている。

もし、歳三の言う通り扉を前に聞き耳を立てていたのなら、まず刺殺されている光景だ。

(手応えがねえ)

避けたか、と歳三は考えている。

多くの人間を斬り殺してきた男である。刀身から伝わる感触である程度わかるのだ。「いやはや、まさか本当に突き立てるとは思いませんでした」

「星か。聞き耳とは、あまりいい趣味とは言えんな」

「わかつていながら剣を突き立てるのも、なかなか褒められた趣味とは言えませんが、扉の向こうに居る星が、呆れているのがわかる。

が、そんなことは歳三の知ったことではない。

歳三は無造作に兼定を引っ抜くと、鞘に戻した。

「星も、もう寝ることだ。明日は早いぞ」

「主の言う通りですな。優しさが身に染みるようです」

「馬鹿言いやがる」

趙雲の皮肉も屁とも思わず、歳三は孫乾に顔を向けた。

「今日のところはお戻りなさい。これでは興に乗ることもできません」

「……そうですか」

「ただ」

孫乾が悲しそうに目を伏せたのを、歳三は見逃さない。

彼女は本気で、抱かれに来ていたのだ。

それをわからぬ歳三ではない。

「私が幽州から戻った時、徐州にも轟くほどの名を上げていたならば、その時は」

「その時は？」

「私から参りましょう」

それからどうする、とはもちろん言わない。

口に出すのは野暮と言うものだろう。

ただ、この時の歳三はいつもの不愛想とは違って、孫乾が見とれる程の笑みを浮かべている。

憎たらしいほどに、己の顔の使い時を弁えている男である。

(それまで、俺が生きていればの話だがな)

と、笑顔の裏で思っていることは口に出さない。

それと同時に死ぬつもりが一寸たりともないのが、歳三という男である。

◇

孫乾を部屋に返して、歳三はまた部屋に籠ろうとした。

が、寝れない。

理由はどうであれ、一度刀を抜いたせいだろう。

どうにも血が滾り過ぎている。

(こんな時ア、人を斬るか女を抱くに限る)

これほど物騒な価値観を持ち合わせている男も、そうはいないだろう。

歳三にとって喧嘩と女を抱くことは、二つとも血の臭いがするということで等しく同じである。

かといつて、すぐに受け入れてくれるであろう孫乾の元に行く気はしない。

あれだけのことを言っておいてすぐさまひるがえ翻すのは、歳三の男が受け付けない。

また、村のどこか適当なところへ夜這いをするつもりもない。

女に不足がない故に、女の好みにはうるさいのである。

少なくとも趙雲や孫乾ら五人より見目の劣る女を、歳三は抱こうとも思わない。

(風にでも当たるか)

外に出た。

夜風が染みるように冷たい。

手頃に座れそうなどころもなかったので、そのまま壁によりかかる。

月が出ていた。

歳三はぼんやりと月を眺める。

不思議なことにむくむくと、歳三の中に住まうもう一つの癖が鎌首をもたげる。

(句が、できた)

沖田がここに居たならば、また駄句だろうなあと嘖き出しているところだ。例に漏れず、出来上がったのは駄句である。

そう思わないのは本人ばかりだ。

(世を違^{たが}え 土も違^{たが}えど 月は月)

いつか書き残そうと心に秘めて、土方歳三こと豊玉は月を眺め続けていた。

◇

朝、が来れば目が覚めるのは道理である。

こと歳三に至っては、寝坊とは無縁だ。この男がいつ寝ているのかは、よくわからな
い。

宿の者が起き出して朝食を作り始めるころには、歳三は目を覚まして朝の鍛錬を行っ
ていた。

兼定を抜いて、独特の平正眼。そして気を練る。

天然理心流は一にも二にも気、が重要である。

この流派は小手先の技術よりも、実戦における気と技を尊ぶ。

もつとも道場試合となると、実戦重視が過ぎてまるで役に立たないという欠点とな
る。

「……………」

歳三の仮想敵は、専ら沖田総司だ。

長く同じ釜の飯を食って共に鍛錬してきたことと、この男の想像力もあって、歳三の眼前には刀を構える沖田の姿がありありと浮かんでいる。

声すら、聞こえてくるようである。

あの不思議な若者は、いつもの笑みで言うのである。

こんなところまで来たっていうのに、僕は土方さんの相手なんてしたくありませんよ、と。

(そういうなよ、総司)

脇腹の疼痛を感じながら、歳三は虚空に刀を振るつた。

(また、俺の負けだな)

本当に負けず嫌いなんだから、と困った笑みを浮かべる沖田が見える。

歳三は頭の中で、三段突きによって刺殺された自分を幻視している。

道場でなら、沖田が相手であっても三本に一本は取れる歳三だが、果たして実戦ならばどうか。

突きの一段目は受け流せる、二段目は躲せる、三段目がどうしても防げない。

防げないならば、そこで死ぬだけだ。

歳三はゆつくりと構えを戻す。

「こそこそ見ていないで、出てきたらどうかね？」

「おや、主はお気づきでしたか」

「視線を受けるのは慣れていないからな。それにしても星、聞き耳といい覗き見といい、趣味が悪いな」

にこりともしないで、ひたすら剣先を睨んでいる歳三。

今もその構えの先には、沖田が構えている。

「いえ、見惚れていた、というのもありますが……そうして気を発さない方が良いと思いますよ」

「どういうことだ？」

「あまりの氣に家畜のみならず宿の主人らも怯えています。武を磨くのはよろしいですが、もう少し場所を弁えるべきだと思いますが」

「ふむ」

趙雲の言うことも最もだと思い、歳三は兼定を鞘に納めた。

沖田の幻は既に霧散している。

切り替えの異常に早い男である。

剣を納めたかと思えば、てくてくとどこかへ歩き始めている。

「どこに行かれるのですか？」

「汗を流しに、井戸へ」

「ここで歳三、振り返って意地の悪い笑みを浮かべた。

「一緒に来るかね？ なんなら、背を流すのも手伝つて欲しいのだが」

「な、いや、そんな……それぐらい一人でできるでしょう！」

「ああ、もちろんだ。私も無理にとは言わないさ」

昨夜のことといい、歳三は趙雲が耳年増まであることをなんとなく勘付いていた。

そこへ今の問いかけである。

（生娘だな）

多くの裏打ちされた経験と厳然たる事実が、歳三に趙雲がそうであると結論付けさせている。

だからどうしたということでもあるが。

「朝食にまでは、戻るさ」

そう言つてさっさと姿を消した歳三に、ようやく一本取られたことに気付いた趙雲は地団駄を踏んでいた。

◇

宴の時と同じように、宿屋の一角を六人が占拠している光景は中々近寄りがない。

内三人が名うての武人に見えるのだから、尚更だろう。

宿の主人が配膳をするのもおっかなびつくりな風だったが、仕方ないことと言えよう。

歳三、配膳された朝食に手を付けて、少しだけ顔をしかめた。

(美味くはねえな)

元は歳三。薩長と戦争をおっぱじめて各地を転戦し、函館にまで押し込まれた敗軍の将である。

故に粗食に甘んじ、いつ死ぬかも知れぬ身故に食に対する頓着も薄れていたが、今は違う。

歳三にとって過去は過去なのだ。

元来、食にうるさい地が出てきている。

これでも、地方豪農のお大尽と呼ばれた悪童である。

食事に対してうるさくなるのも当然と言ったところか。

「お兄さんはここのお食事がお気に召しませんか？」

「いや、別に」

程立の言葉に歳三は不愛想に答える。

食にうるさい、とは言っても単に美食や飽食がしたいわけではないのだ。

ただ美味しいものを食べたいという、それだけである。

(なあと、いつかはもつと美味しいものにありつけるようになってやるさ)

その為には、戦つて武名を上げるしかない。

やはりこの男、何事においてもすべてが喧嘩に帰結している様などころがある。

「そういえば、美花。公孫贊殿への書状の件、どうなされるおつもりですか?」

「既に用意してありますよ」

にっこりと、孫乾は笑つた。

「ご主人様、星様、香風様^{シヤンプ}、風様、稟様。いずれも万夫不当の勇士、あるいは不世出の策略家と、この竹簡にしたためております」

「随分と、大袈裟だな」

「この書簡が虚偽になるか否かは、皆さまの手に掛かっておりますが、私は心配していませんよ」

本当に肝っ玉の据わつた女だと、歳三は思う。

「ありがたく頂戴いたします」

孫乾から竹簡を受け取ると、歳三はズタ袋に突つ込んで朝食をかき込んだ。

あまりの速さに一同、啞然とする。

「歳三様は……随分と食が速いのですね」

「そうかね?」

函館に居た頃に、自然と覚えた習慣である。

それこそ函館ではいつ敵が来るかわからない為、のんびりと飯を食う余裕などなかったのだ。

なるほど、ここも歳三らしい。

動きの鈍さはそのまま戦闘にも直結するのだから、飯であつてもかける時間は少ない方がよい。

(今度は、のんびり食えるようになりてえやな)

そう思いながら歳三は席を立つ。

「どこにいくの、お兄ちゃん？」

「馬の準備をしてくる」

徐晃の言葉に、相変わらずむっつりした顔で答える歳三。

「なに、一人で先に馬に乗っていくような真似はしないさ」

ここでにこりとも笑えば、少しは可愛げのある男なのだが。

当然ながら歳三は、相変わらずの不愛想である。

◇

五人が食事を終え、宿を出た時には既に旅装を整えた歳三が馬を引いていた。

馬の背中には、それなりの荷物が積まれている。

「ははあ、路銀がないと言っていた割には、これまた随分と……」

「ここまで揃えられたのも、美花のお陰だよ」

星の言葉に歳三はしれつと返す。

「いくらか余分に貰っていたからな」

いつの間に貰っていたのだ、という視線を軽く無視する。

段取りと言い準備と言い、抜け目のない男である。

「他に荷物があるなら積んでくれ。なにしろ長旅だからな」

「その馬はお兄さんが乗るのではー？」

「軍勢でもないのに、一人偉そうに馬に乗ってられるかよ」

歳三、なおも懽然としている。

「私も、歩くさ」

当然というように歳三は言い切った。

そして、孫乾に向く。

「いろいろとお世話になりました」

「いえいえ、私の仕える人はご主人様、貴方だけですから」

「この恩義は必ず返します」

この傲岸不遜な男にはありえないことだが、歳三は孫乾に深々と頭を下げた。

「いずれ、また」

なにかいずれで、また、なのかは二人の秘密である。

歳三は孫乾にだけ微笑を見せ、振り返った時にはいつものむっとり顔である。

「では、行くうか」

目指すは幽州遼西、公孫賛の居城である。

白馬長史

遼西にある公孫贄の居城に、歳三たちは辿り着いた。

道中、なにげともなく至つて平和だったのだが、歳三は内心不満だった。

(この俺が、普通に往來を歩けるとはねえ)

かつては悪名を轟かせ、常に暗殺の危険を日常に孕んでいた男である。

喧嘩が、骨髓まで染み込んでいる。

平和とか普通とか、そういうものにはどこか飽あいている。

一種のきちがいと言つてもいい。

(まあ、これからよ)

歳三の脳裏には、戦がある。

(何事も、戦つてからさ)

やはり歳三は根つからの喧嘩師である。

趙雲や徐晃らも、先頭をむつつりと歩いているこの男の思考を読むことは出来ない。

もちろん、郭嘉や程立でさえも無理だ。

「随分とまあ、普通という感想が似合う場所ですな」

趙雲の言葉に、歳三は振り返る。

「そうなのか、星？ 私はこういう城をあまり知らないのではな」

「おや、知らないとはどういうことですか？ 主？」

「そのままの意味さ」

歳三はそっけない。

趙雲の追求をのらりくらりとかわしながら、歳三は函館の頃を思い出している。

旧幕府軍が立て籠もっていた五稜郭、その先祖がこの城ではないのか。

古来、欧州ヨーロッパでも、街が高い城壁に囲まれた城塞都市が主流であった。

それが鉄砲や大砲といった新兵器の発明によつて、無意味となった。

火砲の発達は城壁を無効化し次の城郭を産みだした、つまり星形要塞であり、五稜郭である。

ということ、フランス仏蘭西士官であるブリュネから歳三は聞き及んでいる。

(この高い城壁や櫓やぐらは、槍や弓相手に意味があるから、ある)

当世では、刀槍による戦闘が主流であるということ、歳三に伺わせるには十分だった。

(銃や大砲がねえなら、俺たちの十八番おはこさ)

無愛想な面をして、趙雲の相手をしながら胸中闘志を燃やすのが、歳三という男だ。

最も、仮に鉄砲があろうと大砲があろうと、それはそれで戦うのが歳三である。一行は大通りに入った。

「これは……普通と言うにはちよつと違いますねー」

歳三が、程立の言葉でようやく通りに意識を向けた。忙しなく人々が行き交っているのが、よくわかる。

商店も、賑わっているようだ。

けれども歳三はこの地での「普通」を知らない。

「これは、普通とは違ふとどうしてそう思う？ 風？」

「お兄さんはどうしてだと思えますかー？」

これは測られている、と歳三は思った。

程立ほどの軍師となれば、趙雲とのやり取りで、歳三が当地の知識が疎いことがわかる。る。

あえて聞き返すことで、程立は歳三の知識の程度を探ろうとしているのだろう。

歳三はしばらく考える素振りをして、言った。

「町人よりもむしろ、商人に活気がある」

それでも歳三、昔は薬の商売行脚あんぎゃをしながら剣術修行をしていたことがある。

加えて新選組時代における、京の取り締まりもある。

人の流れや街の隆盛を見るのには、慣れている。

「そうですねー。ここを治める公孫賛殿は、商人を重用して富を得ているようなのですよー」

「なるほど。で、星がなぜ普通と評したのか、風はどう思う？」

「城割や城門の構え、街の造りに独創性はなく至って代わり映えしないものでしたからねー。そう評するのは妥当かとー」

「しかし、普通がそう悪いものかね？」

「いいえ、お手本という意味ではしっかりしていると思いますよー」

趙雲は歳三の言葉に、眉をひそ顰めた。

「主の言い方では、私が公孫賛殿を批判しているようになりますな」

「そんなつもりは、ないさ」

歳三は笑わない。

「ただ、公孫賛殿に会う前に緊張しているというのは、ある」

そんなことを言う癖に、涼しい顔をして落ち着いている。

趙雲は、この男の肝は鉄か何かで出来ているのではないかと思ったほどだ。

◇

公孫賛の居城の一室の前で、歳三たちは待っている。

孫乾の紹介状は、果たして効果的だった。

公孫賛へ面会を求めるとは、城中、決して少なくなかった。

中には朝から待っているような者をすつ飛ばして、一番先に迎えられたのである。

どれほど孫乾という人物が幽州で名を知られているか、これだけでよくわかる。

(やはり、実は^じいるが名も必要だよ)

歳三はぼんやりと考えている。

新選組が天下に雷名を轟かせたのも、池田屋乃変があつてこそである。

趙雲と徐晃には、一流の武技がある。郭嘉と程立には、一流の頭脳がある。

しかし、それだけでは駄目なのだ。

(なら、俺はなんだ)

歳三は自問して、心内で自嘲した。

(喧嘩師だよ、ただの。武州多摩の喧嘩師、土方歳三)

やることは変わらないのだ。

この男が欲しいのは、手足の様な組、あるいは軍だ。

打てば響く様な、人間の塊をとった軍が欲しい。

その軍には趙雲も徐晃も、郭嘉も程立も必要なのである。

(だから震えるな、歳三)

趙雲に対して緊張している、と言ったのはあながち嘘ではない。

武士とは虚栄の生き物である。切腹など、その最たる例だろう。

つまり武士の虚栄とは、即ち死。そういった思想が歳三の根幹にある。

既に死んでいるという気組で、喧嘩に挑む。

事実歳三はそうやって、各地で苛烈な戦いを生き延びてきた。

そして今、死んでいる気組で公孫賛との面会に挑む。

(公孫賛など、恐れるな)

公孫賛伯珪、近藤に言わせれば幽州の董卓。

董卓が、三国志屈指の悪逆卑劣の徒であることは、歳三でもよく知っている。

それはさておき公孫賛伯圭。

異民族の懐柔策に反発し、北方異民族への恩賞を略奪は当たり前。

懐柔策を取る穏健派を攻撃したり、異民族へも過激な攻撃を加えるなど、極端な武闘

派である。

どんな人物がこの部屋に潜んでいるのか。

歳三の脳裏には、芹沢鴨のどっぷりとした姿が浮かんでいる。

芹沢、剣の腕は立ち新選組結成の功労者であったが、平素粗野で悪行が目立った。

そういった数々の乱暴狼藉が仇となり、遂に歳三らによって暗殺された男である。

(ああいうのが、居るのかもしれねえ)

歳三はそういう悪辣な人物が居ると思つて、面会に望んだ。

警備兵に促されるまま、部屋へと入り、面食らつた。

おそらく公孫贇であろう人物に、覇気が感じられない。次に、才気もない。

特に目ぼしいところが見当たaraぬのである。ただ、顔は良い。

長い髪を飾りで纏め、白い鎧を着込んでいる辺り趙雲や徐晃よりは戦よりの見た目だ。

それでも肌の露出が多いが、今更歳三に思うところはない。

「君たちが、孫乾の文ふみの者らか」

声も、存外優しい。

どこか威厳があるように、振舞つているようにも見える。

「貴方が公孫贇殿、ですか」

「あ、ああ。そうだ。私が幽州を治める公孫贇伯珪だ」

歳三、答えない。

歳三が無表情のまま突つ立っているのを、公孫贇は不審に思つたか。

「どうかしたか？」

「いえ、人から伝え聞いた知識など、案外役に立たないものだと思ひまして」

歳三は正直に答える。

(何が幽州の董卓だよ)

人が良すぎる。

これが歳三の公孫賛に対する第一印象であり、人物評だった。

「……そうか。ところで、私の事はどんな風に聞いている?」

「異民族に容赦のない、苛烈な人である、と」

「へっ、そんな風に言われているのか!?!」

「あくまで、私が人伝ひとつてに聞いた上での話です」

私が苛烈か、苛烈なのか、と唸る様に呟く公孫賛に、歳三は怪訝な視線を向けた。

郭嘉が、歳三の雰囲気を感じ取ったか、耳元に口を寄せた。

「公孫賛殿は星がこの街を普通と評したように、所謂いわゆる凡将です。そういった虚飾の言葉、

おべっかの類に慣れていないのでしよう」

「そうかね」

歳三は、郭嘉の言葉がよくわからない。

剣一本で生きてきた男だから、公孫賛におべっかを使った覚えもない。

州を治めるということは、歳三の感覚で言わせれば、一国一城の主ではないか。

凡将と評するには、些か統治の規模が大きすぎる。

(こいつア、ただのお人好しの凡なんかじゃねえ)

眠たげな眼で、未だ何事かを呟いている公孫賛を見た。

(並の凡が、国を治められるかよ。こいつは凡は凡でも凡の大親分さ)

随分とわかりにくいのが、この男なりに褒めている。

歳三は、上に立つ者の器と、将であることの器は違うと知っている。

公孫賛には両方の器があると、歳三は思った。

「コホン、よろしいですか？ 公孫賛殿？」

「ん？ あ、ああ！ 大丈夫だ！」

郭嘉は咳払いを一つして、公孫賛の意識を向けさせた。

「文にもあったように、私たちは公孫賛殿のところ腕を振りたいと思っています」

「ああ。皆が万夫不当の勇士と深謀遠慮の策士だそうだな。とはいえ、私もそれなりに

他所よそに目を向けているつもりだが、孫乾殿がこんなに褒める傑物を見逃しているとは

なあ」

公孫賛が首を傾げている。

徐晃は持ち上げられ過ぎていると思ったか、公孫賛に聞こえぬよう歳三に問いかけ

た。

孫乾は確かに、褒めちぎるような旨を書いた、とは言っていたが。

「お兄ちゃん、文にはなんて書いてあつたの？」

「私は、知らないよ」

皆が、歳三の方に耳目を傾けた。

郭嘉だけが、公孫賛から目を離さずに、意識だけを歳三に向けている。

「え？」

「任せた以上、全部任せるのが、私の流儀だ」

だから、と付け加えたうえで。

「公孫賛との話は、全て稟に任せる」

言い切った。

これには郭嘉が、肩を震わせた。

主君、と定めた人物に謀はかりごとの全てを託されることは、軍師の本懐である。

同時に、郭嘉が思いついたであろう疑問を、程立が尋ねていた。

「でもー、風も稟ちゃんも、まだ事を任せられるに足る力を見せてないと思うんですけどー」

「それが、どうかしたか」

「最初の機会にしては、大き過ぎませんかー？」

「私は任せると言った」

歳三は怖い目で、程立を睨んだ。

殺気こそないが、震え上がるようなギョロリとした眼である。

程立は、柳に風といった風に見返している。

「だから、いいさ」

何が、とはままでは言わない。

郭嘉が交渉で勝ち取った全てを、歳三は受け止めるつもりでいる。

「それは、稟ちゃんが本名を明かしたから、ですかー？」

「さて、な」

歳三、答えない。

程立は歳三に問い掛けたのだ、郭嘉を信じたのか、郭嘉の名前を信じたのかを。

そここのところ、歳三にもわからない。

わからないから、答えなかった。

◇

公孫贇との交渉は、歳三が宣言した通り郭嘉に任せ、今は皆、用意された客室で寛くわいでいる。

部屋の中の調度品は、誰が見ても見事と思うばかりのものであった。

それだけ、公孫贇からの期待がある、と読み換えることもできる。

「練兵場か……」

歳三を含め、趙雲も徐晃も武人であり、程立は軍師である。単なる虚飾に浮かれるような、軟やわな性格をしてはいない。

自然、皆の視線は眼下の練兵場へと向くようになる。

部屋から訓練に明け暮れる兵士たちを見渡せるのも、この部屋の特徴だろう。

貴賓室とも言える場所がこうなのだから、一種の示威行為、と見ることができ。戦争も外交の一手段である、と歳三はニコールから聞いている。

「あ、騎馬隊……」

徐晃の声に、歳三は騎馬の姿を探した。

「ほう……」

歳三が思わず声を漏らすほどの、見事な騎馬隊が土煙を上げて走り回っていた。

一糸乱れぬ動きをした、統率が取れた動きである。

そしてその騎馬のどれもが、美しい毛並みをした白馬に乗っている。

「白馬長史、か」

「おお、白馬義従ですわねー。異民族に恐れられているというー」

遠回しに、何故そんなに異民族に詳しいのかと、風に尋ねられている気がする。

気が過敏になり過ぎている、と歳三も思わないでもない。

だが程立だけは、歳三の出自を疑問に感じている節がある、と勘所が言っている。
(いつか、話すべき時が来るのだろうか)

話さなければ、程立は自分の元から離れていくのではないか。

歳三はそんな気がしている。

「白馬とは、ちよいと派手過ぎますな」

「ああいうのは嫌いか、星？」

「いえ、私は別段、派手が嫌いということではありませぬが、わざわざ白馬で揃えるのは無駄に思えます」

趙雲の言葉に、程立が口を挟んだ。

「白馬で揃える、ということとはそれだけで敵に己の存在を示すことになります。ですの
で威圧効果は高いのです」

「ほう、つまり高名な軍勢が、旗を掲げると同じ効果があの白馬にはあると」

「はい。味方の士気を上げる事にも通じますし、同時に相手の士気を挫く事にもなりますね」

「なるほどなあ」

「もつとも、風は公孫賛殿がそこまで考えているとは思わないですけどね」

公孫賛の居城で、堂々と本人の悪口を言う程立の心胆はどこにあるのか、よくわから

ない。

ただ、程立の視線の先には、歳三が立っている。

もつとも、当の歳三は赤地に誠の文字を染め抜いた旗が、新選組を示すのと同じことか、と一人納得している。

思えば、あの旗の立つところ兵たちは奮い立ち、薩長は恐れ慄いた。

(見た目から入るのも、肝要か)

歳三とて西洋の流儀を取り入れるために、早くから鬚まげを切り洋装を着込んだ男である。

何事も形から、と自分で言っていたことを思い出して、口元が緩んだ。

程立は、そんな歳三を、例の眠たげな眼でじつと見ている。

◇

「おおまかな内容が、決まりました」

交渉を終えて、戻ってきた郭嘉を中心に皆が思い思いの相好で郭嘉の言葉を聞いている。

趙雲は窓枠に腰掛け、徐晃はぼうつと立ち、程立は郭嘉の横に座っている。

歳三も、郭嘉を眼の前に見えるように、郭嘉の正面に座っている。

この男から真正面から見据えられるなど、並の人間なら精魂萎え果てるところだが、

郭嘉は並ではない。

臆することなく堂々と、自身の成果を伝えていく。

「公孫贊殿は私たちに、2500の歩兵を預けてくれることを約束しました」

趙雲がほう、と声を上げた。

孫乾の文だけで、それだけの兵を貸してくれるとは、確かに破格だろう。

公孫贊の度量を尊敬すべきか、孫乾の名声を称えるべきか、郭嘉の手腕を褒めるべきか。

ですの、と郭嘉は続ける。

「私たちは形の上では、美花ミイフアの元に仕える属将となっています。つまり、今回は公孫贊殿に仮に仕える客将という形になりますね」

郭嘉は眼鏡をきらり、と光らせた。

「これも歳三様が事前に知らせてさえいてくれれば、私も苦勞することがなかったのですが」

郭嘉の苦言に、歳三はさあらぬ体で聞き流している。

恐らくは公孫贊との会話の中で、孫乾の認めた文の諸々を聞き出したのだろう。

それも、こちらが文の中身を知らぬということを、悟られぬようである。

確かな弁舌の腕を、郭嘉は持っている。

「ともかく、実際の戦闘に関しては、歳三様、星、香風の三人でやつてもらおうことになり
ます」

「それは、稟も風も、戦いには来ないってこと？」

徐晃の言葉に、郭嘉は深い溜め息を吐いた。

「どうやら公孫賛殿のところは、武官も文官も絶対数が不足しているらしく……」

「稟と風は内政の手伝いをしなければならぬ、ということか」

「星の言うとおりです。どうも公孫賛殿一人ばかりが働いているような有様らしく」

珍しく、話を遮るように歳三が声を上げた。

「待て、それは公孫賛殿が自分で話したのか？」

「そうですね。多少は迂遠に訪ねましたが、そこを突いた後は堰せきを切った様に」

歳三は腕を組んだ。

例の、眠たげな眼が、ぎらぎらと光っている。

(お人好しの大將軍も、追加だな)

公孫賛は決して、巷ちまたに言われるような普通の将ではない。

幽州という、巨大な領地を治めるだけの、才覚もある。

それほどの人なのに、悲しいかな周囲の人に恵まれていないだけなのだ、公孫賛は。

歳三は公孫賛を、そう評価した。

(これで嫉妬心と無縁なら、公孫贊は大した玉だよ)

乱世で生き残れるか、心配になるほどだ。

が、今ここで歳三のような飛沫の存在が、公孫贊のような大河の心配をしても無意味である。

歳三は、気持ちを切り替えた。

「よくやってくれた、稟」

「いえ、軍師として当然のことですから」

「そうだ、これからは私、星、香風の領域だ」

冷やりとした空気が、辺りに漂い出す。

歳三が、にやりと笑っている。

眼が、爛々と光っている。

郭嘉のみならず趙雲や徐晃ですら、妖あやかしの類を見るような眼で、歳三を見ている。

それくらい、この男の闘気は尋常ではなかった。

「だから、全部話してもらおう」

「全部、とは？」

「公孫贊との取り決めは聞いた。ならば貸与される兵の練度、持っている武器、支援してくれる物資の量」

つらつらと、歳三は羅列していく。

「敵の数、場所、奪取すべき戦略目標など、とまあ色々言ったが、とにかく全てだ。私たちが戦うのに必要な全てを、教えてもらおう」

「わかりましたが……いくつかは歳三様が、直接聞いた方が良いのでは？」

「いや、私は稟の口から聞きたい」

歳三は、笑った。

先ほどとはまた別の笑みである。

神や仏にも媚を売らない不遜な男が、撫でたくなるような笑みを浮かべている。

「駄目かね？」

これで駄目と言える軍師はいない。

誰よりも軍師としての郭嘉を認め、才を信じ、頼っているとわかる笑みだ。

歳三に仕えることにして良かったと、郭嘉は頬を赤くしながら思っている。

程立だけが、そんな歳三と郭嘉を冷ややかに見ているのを、徐晃は不思議に思っていた。

軍中に我あり

公孫贊の居城を出る。

手が薄くなっている、遼東方面の援護に向かつてほしい、とのことだ。

歳三は指揮官用の軍馬に乗りながら、物思いに耽ふけった。

来た時には僅か5人だったが、今や2500の兵を率いている。

500倍もの人数が、手勢にいる。

(だが、それがどうした)

2500の兵も、すべて借りものだ。

歳三が率いてはいるが、元は公孫贊のものだ。

己のものといえるものは、何一つない。

去来するのは虚しさばかりである。

(しかも、稟と風がない)

歳三の理想には、稟も風も必要不可欠である。

今の軍勢は、歳三に言わせれば骨のない鯨くじらの様なものだ。

大きいばかりで、柔い。

(今は耐えろ、歳三)

飛躍の時の為に、耐えるのだと自らに言い聞かせる。

あのいけすかない芹沢鴨の時も、狐の様な面をした伊藤甲子太郎の時も、耐えた。ならば、今もどうということはない。

更には言えば耐えるだけだったあの時とは違う、今度は、戦えるのだ。

(見せてやるさ)

歳三は闘志を静かに燃やしているつもりだったが、明らかに漏れ出ていた。

趙雲や徐晃らでさえ、話しかけるのに躊躇うほどである。

公孫賛から得体のしれない将に仕えることになった兵たちは、ただ恐怖した。

このような闘気を持つ将に、兵たちは見えたことまみがないからである。

ある意味、経験不足からくる不幸であるとも言えた。

◇

歳三の戦い方、いや、進軍方法は独特と言えた。

ひるがえ翻つて見れば、遼西を立つ前から、変わっていると云つていい。

配下の兵からは、ひたすらに地形に関しての情報を集めた。

有益な情報をもたらせば、少ないながらも報奨を与えた。

歳三からすれば当然の対価くらいにしか思っていないが、本人が思う以上にこれは人

気が出た。

人間とは、結構現金なものであり、兵の掌握に知らず一役買っていたのを歳三は知らない。

こうして情報を集める歳三に、徐晃は尋ねた。

「公孫賛殿に、地図を見せてもらった方が早くない？」

「それはそうなんだがね、駄目だったよ」

歳三はにこりともせず答えた。

公孫賛の居城にも、地図はあるのだが、軍事上の理由から見せてもらえなかったのである。

これは当然と言えよう。

いくら公孫賛の元で将をしているとはいえ、歳三らは正規の將軍ではない。

自然、歳三自身の手で情報を集める必要があった。

逐一竹簡に記録をしては、城の端に座り込み、木の枝でがりがりと地面に地図を描く。

これがまた、上手い。

一目見れば地形がありありと浮かんでくるような、見事な地図なのである。

「ほほう、主は絵描きが本業ですか」

歳三の背中から覗き込んだ趙雲が、茶化す様に言った。

にべもなく、歳三は答えた。

「うまいものだろう」

これは歳三の特技である。

歳三もこればかりは、誰にも真似できないであろうと思っている。

単なる情報の分析では、稟や風に劣るだろう、だが歳三にはそれを補う以上に想像力がある。

だから、誰にも負けることはない。

それくらい、自信があつた。

同時に、この特技を生かせなければ、死んでも死にきれないほどの思い入れがある。

とにかく、入念な下準備をした上で進軍を開始した。

進軍している時も、この男は流儀を変えることはなかつた。

「主、またですか？」

「まただよ」

趙雲が呆れるほどに、とにかく斥候を、四方八方に放つのである。

一度や二度で終わりにしない、執拗なまでに斥候を出す。

別に敵を発見させるだけが目的ではなかつた。

地形の確認を、徹底させた。

坂になつてゐるのか、森はあるのか、平らで開けている場所はあるかといった諸々。全てを事細かに報告させた、無論、成果を上げた兵には少なくとも褒美を出す。

そして小休止の度に、木の枝でがりがり^{（1）}と地面に地図を描くのである。

「我々は今、ここにゐる。こちらを進む予定だが、森が左側にある」

「敵の待ち伏せが、ある？」

「香風の言うような伏兵の可能性は低いだろが、念を入れるに越したことはない」

端正な顔で考え込みながら、歳三は地図を見ている。

この男の脳裏には、これからどのような道で進軍し、どこで敵と会敵するかあらゆる可能性が思案されているのだろう。

趙雲は歳三に知られぬように、密かに舌を巻いた。

戦の申し子ではないか、と趙雲は歳三を恐ろしいものを見るような眼まなざしで見ている。

個の武で歳三に負けるなど、趙雲は考えてはいない。

しかし、同じ数の兵を率いて戦つた時を考えると、趙雲は御免被りたいと本心から思う。

「どうかしたかね、星？」

「いえ、なんでもありません。このまま遼西に辿り着ければいいと思つております」

「それは私も同じだよ」

嘘である、と趙雲は直感で感じ取った。

歳三の底冷えするような眼は、ぎらぎら光りながら戦いを求めている。

これは恐ろしい人に仕えてしまったのではないか、と思わないでもない。

しかし、それ以上に何かとてつもないことを成すのではないか、と趙雲は期待している。

◇

歳三の変わっているところは、全てを兵に任せないところにある。

この男、一応は総大将である癖に自ら斥候に出るのだ。

趙雲と徐晃が止めようが、まるで意に介さない。

挙句の果てには、共に行動して日の浅い兵たちにすら止められる始末だ。

その歳三が、いつものむつり顔を少し険しくしながら、本陣に戻ってきた。

流星にからかえる雰囲気ではないと察したか、趙雲がいたく真面目に声を掛ける。

「どうかなされましたか？ 主？」

「敵だ」

短く、歳三は答えた。

敵が居たくらいで、この男が顔色を変えるはずがない。

歳三の性分をわかり始めている趙雲は、知らず冷や汗を流した。

「それで、どうでした？ 相手の数は？」

「ざっと6000、いや、7000といったところだな」

趙雲が息を呑んだ、徐晃も、面食らったような顔をしている。

ただ歳三だけが、むっつりと考え込んでいる。

しばしの沈黙の後、歳三がぼつりと呟いた。

「兵力差は約三倍、か」

誰に聞くでもない、確認するように言葉にただけである。

「賊とは一口に言っても、強いな」

量は時に質を凌駕することを、歳三は良く知っている。

この男の場合は、質も量も上の相手と戦っていたが。

故に、強いと評価しても、歳三に恐れ的心は一切ないと言っている。

「どうするの？」

「決まっているさ、斬り込みよ」

顔色一つ変えず、歳三は徐晃の問いに答えた。

斬り込み、つまりは戦いを仕掛けるということである。

趙雲が、声を上げた。

「それは、あまりにも無謀ではありませぬか？ 兵力差は約三倍、そんな相手に」

「私は別に真正面から戦いを挑むほど、馬鹿な真似をするつもりはないよ」

歳三が正面突破しかできぬ愚将であるならば、函館にまで辿り着くことはできなかったろう。

もしくは戊辰戦争が始まるもつと前、新選組になる前から、屍を道端に晒していたに違いない。

趙雲は歳三の眼を見た。

物腰は静かだが、やはりその眼には燃えるような闘志が漲り、爛々と光っている。

ふいにその眼が、趙雲と徐晃に向いた。

「私はね、とてもじゃないが、純粹な武では星や香風を越えられぬよ」

趙雲はあつという声を上げた、徐晃も声を上げそうになったがぐつとこらえた。

歳三は、自分のことをよく知っている。

そして味方であれ敵であれ、徹底的に調べ上げ、過小評価も過大評価もしない男だ。

「星の槍は、私には捌さばけない。香風の剛腕さうでんによる斧きりぎりすは、私の細剣では受け止められぬ」

以前の賊との戦いで、歳三は星と香風の戦いをよく見ていた。

その上での結論である。

土方歳三は、趙雲子龍や徐晃公明には勝てない。

だからこそ、と歳三は続けた。

「私は軍略で勝つ。人中に土方ありとはならぬとも、軍中に土方ありと、全土に知らしめてやりたいのよ」

歳三は笑った。

「こんなところで、負けてたまるかよ」

とても静かに笑っているのが、ひたすらに恐ろしい。

これが猛獣や猛禽類を連想させるような、獰猛な笑みならばわかる。

波の立たない水面の様な静けさを見せる歳三の笑みは、底知れなさを二人に感じさせた。

乾く口を無理やり開いて、趙雲は歳三の言を評した。

「主は案外と、子供っぽいことを称されるのですね」

けれども、趙雲の顔に侮辱の色はない。

極めて純粹に、そう思っただけなのだろう。

歳三はまた普段のむっとり顔で答えた。

「理想とは、本来子供っぽいものだろう」

「ええ、ええ、主の言う通りです」

趙雲が観念したように両手を上げた。

「では、お聞かせ願えますか、主の軍略を」



本陣でも、歳三は木の枝でがりがりど地面に地図を描いていた。

この時代では紙は貴重であるゆえに、歳三の様な貧乏所帯にはそんな高級品はない。竹筒も、嵩張り過ぎるから、歳三は嫌いだった。

すぐに描けてすぐに消せる土の方が、好都合だと歳三は考えている。

「今、我々が布陣しているのがここだ」

相変わらず、見れば情景が想像できるような見事な地図である。

軍略で全土に名を知らしめる、というのも大言壮語でないかもしれない。

とかく、趙雲と徐晃は地図を見下ろした。

賊の集団は、幸運にもこちらには向かってきてはいない。

「賊の動きから予測するに、敵はまだこちらに気付いてはいない。一応何人かに動向を見張るよう置いてきてはいるが、まさか気づいていない振りをすることができると、訓練されているわけでもあるまい」

「それはもう、賊というよりは正規軍でも一握りの正規軍でしようなあ」

趙雲の言葉に、歳三は頷く。

「敵の目的がなんなのかはわからぬが、これだけの大軍勢となれば自ずと目標は限られるはずだ」

「城攻め？」

「恐らくはそうだろう」

徐晃の意見に歳三が同意する。

商隊を襲うには、数が必要以上に多過ぎる。

他に集落を襲うにしても、戦力としては過剰だ。

そこから導き出されるのは、それなりの規模を持つ城に対する攻城戦だと目星を付けていい。

「ここに我々が目指す城があり」

趙雲が地図の一箇所を指差した。

そこには公孫賛から向かうよう指示された、遼東の城がある。

「敵が城攻めを目的としているとなると、そういうことと考えてよろしいですか？」

「ああ。敵はここを攻めようとしているに相違なからう」

敵の動きからも、軍の規模からもそうだろう。

公孫賛自らが、守りが薄いと言っていたくらいだ、敵が知っていてもおかしくない。

ふむ、と歳三は考える。

「少数が大勢を叩くには二種類ある」

「強く当たって逃げるか、首領格を討って逃げるか、ですな」

趙雲の言葉に、徐晃が顔を上げた。

「逃げるのは、得策じゃない」

「香風の言う通りだ。逃げるにはこちらの数が多過ぎる。敵の追撃で間違いなく余計な被害が出る」

「ならば夜戦ですか？」

趙雲の提案に対して、歳三は首を横に振った。

「夜戦も、この軍の練度では厳しいだろうな」

夜戦というものは、よく訓練された兵でなければ中々に難しいものだ。

視界が効かない上に、誰が味方かもわからない混戦になりやすい。

下手を打てば、敵を倒した数より同士討ちの数が多い、ということにもなりかねない。

となれば、歳三は肚はらを決めた。

「やつらのどてつばらを突く。それしかないな」

「軍勢の横を突く、ですか。案としては悪くないですが」

大軍に弱点があるとすれば、それは小回りが効かないということである。

それはそのまま、人間の持つ弱点にも繋がる。

人は、前からの異常には対処しやすいが、横や後ろからの異変には弱いのだ。

だからといって、馬鹿正直にすぐやる、となっても数の多さから包圍殲滅されるのが

オチである。

趙雲はそう言っているのである。もちろん、歳三もわかっている。

「とにかく、やつらの動きを徹底的に探る」

機が熟すのを待つ、今はそうする他ない。

「真に何を目標にして動いているのか、どういう経路を使うのか、それを推測し、攻撃をかける」

歳三の言葉に、趙雲と徐晃が頷いた。

◇

時は来たれり、と斥候の報告を聞いて歳三らは俄に闘志を燃やす。

遂に、賊の詳細な動きがわかった。

賊は間違いないく、遼東の城に向かっている。

こちらの軍勢に気づいている様子は、まるでない。

歳三の描いた精密な地図の上で、仮初の軍勢を動かす。

「ふむ、この動きだとこの隘路あいちろを間違はなく通るな」

地図を見下ろしながら、歳三は言った。

隘路とは、平たく言えば大軍が容易に通れない、狭い道のことだ。

どう動くにしても、ある一箇所の隘路を通過せざるを得ない位置に、賊は居る。

隘路を迂回すると仮定しても、いたずらに日数を消費するだけである。

兵法に疎い賊だといつても、時間の経過が城の防御の上昇に直結することはわかるはずだ。

動きを察知され、防備を固められては落とせるものも落とせない。

ここまでは、良い。

「しかし、我らも隘路の先に行くことはできませんぞ」

趙雲の言う通りである。

賊に気付かれることなく、隘路の先に行くには空でも飛ばなければ無理な話だ。

隘路を抜けて気が緩んだところを狙うという、趙雲の言葉は理に適っている。

が、歳三はその理の逆に行く。

「はい、はい」

歳三が万夫不当の勇士であるということは、この決断でわかる。

「隘路に入るところを、突く」

静かに歳三は笑って、徐おしむろに立ちがるなり、言った。

「さあ、敵の大将の顔ツラでも眺めに行こうか」

我が名は土方

「敵の大將の顔を見るとは、何事かと思いましたが」

双眼鏡から眼を離しながら趙雲が言う。

「主は千里眼持ちでしたか」

「別に、私が凄いわけじゃないさ」

と、苦々しげに歳三が言う。

「凄いいのは私じゃない、それだよ」

歳三は顎で双眼鏡をしゃくつた。

別段、歳三が作ったわけでもなく、単なる貰いものである。

それがまるで手柄であるかのように褒められるのは、歳三は好きではない。

「で、星が見たところどいつが大將だと思う？」

「そうですね」

双眼鏡を徐晃に渡し、趙雲は考える素振りをする。

「主はどう思われますか？」

「私か？」

歳三は考えもせずと言った。

「あの馬に乗ってて一番偉そうなやつだよ」

「いやいや、偉そうなやつと言っても具体的に」

「装飾が一番派手なヤツだね」

あんなのを見てるとムカムカしてくる、とまでは言わなかった。

見た目ばかり派手なヤツに碌なのはいいない、というのは歳三の持論である。

粹と瀟洒をわかっているのなら、あんな下品な様さまにはなりようがない。

歳三自身、武州多摩の田舎者とはいえ粹を知っている男だ。

まったく、食事であれ女であれ服装であれ、物の好き嫌いが激しい男である。

「シャンも、そう思う」

「香風もそう思うかね」

「なんとなく、だけど」

「構わんさ。私とて勘に頼ることも多い」

徐晃から双眼鏡を受け取り、歳三は腰を上げた。

「では、戻るとするか」

「いやいやいや、私の、私の見解を主は聞きたくないのですか!?!」

露骨に嫌そうな顔を、歳三はした。

遊ばれるのが嫌いな性質たちでもある。

引つ張るだけ引つ張っておいて何も出てこない、となると流石に癪に障る。

「……何か、私たち以上のことが出てくる自信があるのか？」

歳三の声は冷たい。

無用な言葉遊びが嫌い、というのもこの男にはあるか。

外れとはいえ江戸で生まれ育った男である、京のような迂遠な話は嫌いなのだ。

歳三の苛々を感じ取ったか、趙雲はいつもふざけ半分の顔をやめた。

「そうですね。確かに、主や香風が示したのはあの集団の大将でしょう」

「？　それが、どうかしたの？」

「香風よ、これだけの賊が来ている中、大将だけが幽州に入ってきていると思うか？」

「……大将以外に、居るってこと？」

「ずばり、ですな。装身具の類から大将の血縁者か副将らしきものがちらほら窺うかがえます」

歳三は趙雲の言葉を聞くとや否や、双眼鏡を覗き込んだ。

なるほど、大将であろうと当たりを付けていた者。

それによく似た、量や質では劣るだろうが似たようなものを付けているのが何人か居

る。

己の視野の狭さに、あるいは戦を前にしての興奮かもしれぬが。

ともかく、視野狭窄に陥っていることを自戒した。

「凄いな、星の観察力は」

「どうですか主。少しは私のことを、見直しましたか？」

「見直す、では言葉が足らんな」

「ほう、それならばどう言いますか？」

「星は私の元になくってはならない将だ、ということだよ」

優しい気な微笑みを、歳三は浮かべた。

慈愛に満ちた、ひたすらに戦を求める男が浮かべるような笑みではない。

趙雲は耳を赤くしながらも、歳三の言葉に答えた。

「それはそれは、光栄ですな」

「無論、香風も私に必要な将であることに変わりはないがね」

徐晃にも忘れずに声を掛けるあたり、やはりこの男は女を泣かせてきた実績がある。

さて、と歳三が声を上げた。

「これで策はなつたも同然だ」

「どうするの？」

「決まっているさ。どてつばらを突いて、大将首を取る。できれば副将の首も取る」

歳三は既に、いつものむつつり顔である。

「簡単だろう?」

「随分と簡単におっしゃってくれますが、それは些いさか難しいのでは?」

「その為の策よ。耳を貸してくれ」

三人寄り集まって、何事かを話し合う。

話が進むに従って趙雲と徐晃の顔は青くなつたが、歳三は涼しいままである。

「どうだ、我々ができる中でも良い策だろう?」

「しかしそれでは、主の身に!」

「大将が危険に身を晒せなければ、兵は付いてこないさ」

歳三はさつさと身を翻して、自陣へと戻ろうとしている。

その背中に、趙雲が更に言葉を投げかけた。

「ならば! ならばせめて兵だけでも!」

「必要ないよ」

振り返つた歳三は、変わらず不愛想であつた。

「確かにね、数は戦の趨勢すうせいを決めるさ。でもね、一番は死ぬる兵だよ」

歳三の眼は、ぎらぎらと光っている。

「弱兵なんていくらいても邪魔だ。私が欲しいのは、喧嘩で死ぬるだけの肝を持つ兵さ」

◇

「隘路を越えれば、我らの目指す城がある！ 皆の者！ 行くぞ！」
烏丸うがんの頭領が、兵を奮起させるように大声で言った。

遼東の城を落とす、それがこの集団の、単純な目的だ。

兵たちにとっては城を落すことが第一の目的かもしれない。

しかし、頭領であるこの男は違う。

遼東の城の陥落は、最初の一步にしか思っていない。

彼の目的は王を名乗ることである。

衰退を始めた漢帝国は、異民族を懐柔する策をとることもある。

その一つに、王に封じるといふことが存在する。

遊牧民族にしては、土地や封候ほうこうについて理解してるとは珍しい。

「さあ！ 行け！ 行け！」

隘路に兵たちを進軍させる。

未だ遼東の城には、こちらの動きは見破られていない。

このまま電撃的に攻城戦を仕掛けるのが、戦略らしい戦略だった。

政治に関してはともかく、軍事には疎いのがよくわかる。

「お頭あー！」

一人の兵が、駆けてきた。

男は馬から降りずにそのまま話を聞いた。

「なんだ、どうかしたのか？」

「向こうの方に、軍勢が居ますぜ！」

男が指す方を見た。

なるほど、少数の軍勢が少し遠くにいる。

数は200か300といったところだろうか。

時折後ろを見ながら逃げ回っている様にも見える。

どうやら倍する軍勢を相手にしているようだが、練度が低いのか弱兵に見える。

同じ烏丸の仲間か、あるいは漢帝国のお尋ね者だろうと男は察した。

「こちらに来るようなら、迎え入れてやれ。恐らく、後ろにいるのは公孫贇の兵だろう」

「へえ、しかしいいんですかい？」

「遼東の城のみならず、公孫贇の兵も撃滅したとあれば、我々の名は一気に上がる。良い

案だとは思わないか？　なあ？」

「確かに、あつしもそう思います！」

軍事的な思考が、素朴な男である。

同じくらいに、部下の男も頭の回らない者である。

彼らに郭嘉や程立ほどのものがいれば、また一端の名を残すことができたであろう。

それほどまでに、彼らの軍勢は疑うということをしなない、ある意味で純朴な集団だった。

少数の軍勢が、やってくる。合わせるように後方の軍勢も距離を詰めていることに、指摘ができるような者がこの烏丸の集団には居ない。

それもまた、悲劇であつた。

いよいよ、軍勢を率いる男の顔が見えてきた。

整つた顔立ちをした、いかにもといった優男が貧相な格好で軍馬に乗っている。

流石に、訝いぶかしんだか、男は周囲の配下に武器を構えさせた。

「何者か！」

男が声を張り上げた。

その軍勢は武器を構えられたのをみて、兵の進行を止めた。

例の、優男が前へと出てくる。

「少々、追われている」

声を張り上げてはいないが、不思議とよく通る声だった。

「誰に追われているんだ！」

「官軍に、だよ」

優男はどこか、自嘲を含んだ笑い方だった。

やっぱり、と言った空気が烏丸の中に蔓延し、中には弛緩しかんして武器を下す者もいる。

男も、優男が過ぎることに違和感を覚えたが、ともかく尋ねることにした。

「烏丸のものか！」

「違う」

「では、漢帝国に追われた尋ね者か！」

「違う」

流石に、おかしい。男は眉を擡ひそめた。

男の空気を感じ取ったか、周りの兵の何人かは、武器を再び構えた。

「では、どこのもんだ！」

「私か、私は……神州日本男児、多摩生まれの土方歳三」

粗末な服装を脱ぎ捨てて、現れたるは黒き武人である。

大将格の男はここにきてようやく、敵が目の前まで来ていることを悟ったのだった。

◇

優男こと歳三が姿を現したのを合図に、軍勢の中から旗が立てられた。

烏丸の者たちは誰もがあつという声を上げた。

掲げられた旗にあるのは、公孫賛の軍勢であることを示す「公」の一字。

「我が名は土方歳三！ 公孫賛が客将の一人だ！」

すぐさま軍馬に鞭を入れ、馬を走らせる。

歳三が狙うはただ一つ、呆気にとられ指揮の言葉も飛ばせないでいる大将首である。馬が地鳴りを立てて雑兵の頭を蹴飛ばした。

薄桃色の脳漿が辺りにまき散らされ、血飛沫が舞った。

(流石公孫贖のところの馬だ。よく訓練されている)

人に対して物怖じしない、良い軍馬だ。

歳三は駆けた、雑兵などは馬に蹴散らさせ、ただ一直線に大将を狙う。

恐れ慄く顔おののがよく見える。

ぎらりと兼定を抜いた、ついでに馬上から雑兵一人を斬り殺した。

血が兼定を濡らし、日光が照らして刀身を赤黒く光らせる。

ようやく身体が動き始めたか、鞭を振るおうと敵の大将は手を上げた。

遅い。

「討ち取ったア!」

裂帛の気合と共に、兼定は見事な斬撃の作品を作り上げた。

振り上げられた手を斬り飛ばし、よく鍛えられた男の首を皮一枚残さず刎はね飛ばした。

返しの剣で歳三は、男の乗っていた馬の尻に剣を刺す。

痛みで馬が暴れ、敵軍が混乱に陥るのを狙つてのことだ。

歳三の思惑は見事に上手くいった、急に傷つけられた馬は暴れに暴れ、敵を混乱させている。

「このまま走り抜けるぞ！ 続け！」

声を張り上げる歳三。

馬を駆けさせながら、左右に兼定を振つては斬り蹴散らしいく。

敵の軍勢を抜けた、だが安心して居る暇はない。

「全軍反転！」

兼定を指揮棒のように歳三は振るう。

敵軍を抜けた味方たちが、一斉に反転して敵へと喰らいつく。

「かかれ！ かかれ！ 私より後ろに居る者は斬るぞ！」

兵よりも誰よりも果敢に、歳三は敵の中へと身を躍らせる。

率いられる者たちも、奮起し、あるいは歳三の言葉に恐怖しながら敵へと躍りかかった。

歳三の策とはこうだ。

まずは隊を二つに分け、一隊は追われているように見せかける。

そうすることによって出来得る限り敵に近づき、機を見て鋒矢ほうしの如く敵陣を突破す

る。

突破の際に大将格の首を討ち取れば良し、失敗しても敵陣突破を敢行するというものだ。

ここまでは、上手くいった。

敵を混乱させ、自隊を敵中突破させることにも成功した、反転攻撃も、できた。

(ここからだぜ)

突き上げられてきた槍を払い、目を裂き頭蓋を裂いた歳三は凄絶な笑みを浮かべた。

大将首を取った、敵も混乱させた、が、所詮は200、300の軍勢である。

敵は、現在隘路を通っている者を除いても、3000は軽くいるだろう。

時期に包囲され殲滅されるのは必定である。

どうだ、敵がこちらに狙いを定め始めている。

(この程度なら、やれるさ)

歳三は憎体にくていな面構えを変えようとしなない。

何の為に、2000あまりの軍勢を趙雲と徐晃に任せているのか。

歳三らは大将格を屠る為の決死隊であり、同時に囿である。

敵が歳三の軍勢を叩き潰すために反転した時、脆弱な後ろに噛み付くのが趙雲ら本隊

である。

だが本隊到着前に全滅の可能性もある、もちろん趙雲にも徐晃にも、そう言われた。
(それが、どうした)

と歳三は返した。

この程度の戦いで死ぬのなら、その程度の男だという諦観が、心底根付いている。同じように、こんな戦いで死ぬわけないと言う、狂気じみた信仰が歳三にはある。

確かに歳三は傷一つ負わず、敵を蹴散らしていた。

では配下の兵はどうしているかというところ、これも不思議なことに傷を負っている者は少ない。

何名か死者はでているものの、それでも少なく見える。

正規軍として訓練されただけではない、彼らもまた、歳三によって選ばれたものたちなのだ。

(喧嘩は、既に死んでいるという気組みでやるもんだ)

長く喧嘩をしてきた歳三には、勝負事がそういうものだとかわかってる。

死ぬる兵士が欲しい、と趙雲に言っていたのはこのことである。

歳三は全軍の前でぶち上げたのだ、死ぬことを恐れぬものだけ付けてこい、と。

果たして、付いてきたのは300にも満たない少数だった。

彼らは、歳三の闘気が、はたまた狂気あに中あてられたかはわからない。

それでも自分たちで死ぬることを表明した、戦士であつた。

(こいつらは、戦えるやつらだよ)

歳三は内心嬉しく思っている。

こんなにも気骨がある者たちが居るならば、負けるはずがないとわかっている。

情報に裏打ちされた軍略でもなければ、兵への信頼でもない、ただの歳三の勘だ。

勘で、歳三はこの戦に勝つとわかつていた。

そしてそれは、現実になる。

「公孫賛が客将、趙雲子龍！ 参る！」

「同じく客将、徐晃、行く！」

歳三らを飲み込まんとする獣の背骨を断ち割るように、趙雲と徐晃の本体が突撃した。

人間は背後からの攻撃には滅法弱い。

軍勢にでもなれば、どうだろうか。

数の有利は、最早有利ということとはできないだろう。

船を支える竜骨が真つ二つに折れるように、烏丸の軍勢は崩壊した。

◇

賊は、真つ二つに分かれた。

広い大陸へと逃げる者たちと、隘路へと逃げ込む者たちだ。

「香風は敵を追わずに路のみちの前に堅陣をしけ！」

「わかった」

歳三はすぐさま、大陸へと逃げた者たちの追撃を諦めた。

広い大地は、全体が烏丸賊の本拠地でもあると聞いている。

大きく打ち破ったとはいえ、攻め込むには手勢も情報も少なすぎる。

危険、と判断した歳三は隘路の入口の防衛を徐晃に命じた。

追撃戦の邪魔を、させぬ為である。

「星よ、まだ行けるか？」

「心配ご無用。まだまだ槍働きが足りぬと龍牙も申しております」

趙雲が独特の装飾の施された槍を、軽く振るった。

二、三人の賊が、比喩ではなく宙を舞った。

あまりの怪力に舌を巻きながら、歳三は兼定を振るい命令を下す。

「そうか。ならば行くぞ！ 追撃戦だ！」

隘路へと、歳三と趙雲に率いられた兵たちが怒涛の進軍を開始する。

狭い道には今や賊が満ち満ちているが、それだけ身動きがとれないということでもある。

圧倒的な数の優位も、大きく展開できなければ何の意味も持たない。

加えて挟撃を受け崩壊し、隘路へと逃げ込んでいる兵と。元々隘路を進んでおり、反転して反撃しようとする兵とが入り乱れている。

まったく統一のとれていない軍勢と、勢いに乗った軍勢のどちらが強いか。

火の勢いを見るより明らかだ。

「行け！ 行け！」

歳三は、軍勢と共に凄まじい勢いで前進していく。

返り血を浴びに浴びて、真っ赤な顔で兼定を振るう姿は悪鬼そのものだ。

賊たちは修羅にでも会ったかと歳三の気迫に怯え、斬り捨てられていく。

そうした中でも、混乱する一軍を纏めようとする者が居るのを、歳三は視界の端に捉えていた。

身形からして趙雲の言っていた、大将格に連なる副将格に違いない。

歳三は馬首を向けるが、満ち満ちる兵の多さが今度は仇となつて容易に近づけない。

(まずいな、下手に混乱が治まったらこっちに被害が出る)

兼定を振るう手を休めず、歳三は考えている。

(アレを、使うか)

腰間ようかんにある拳銃ホルスターに収められた、拳銃のことだ。

手持ちの弾薬こそ少ないものの、効果は劇的なのは違いない。

歳三が創り上げた新選組が、銃で以て殺戮されたのを、身をもって知っているからだ。しかし、合理主義を地で行くようなこの男にも、躊躇というものがあつた。

(この時代に銃を使うのは、この流儀に反するんじゃないか)

刀槍弓矢の時代だからこそ、刀槍弓矢で戦いたい、という気持ちがある。

歳三は戊辰戦争が始まってすぐに、洋式戦闘に切り替えた男である。

反面、刀というものに生きてきた歳三が居るのも、真実だ。

(だが、躊躇すれば負けるぜ、歳三)

それで、己の心に区切りを付けた。

拳銃囊へと手を伸ばした、瞬間、歳三の動物にも似た勘が、何か飛来するのを捉えた。

咄嗟とっさに兼定を構える。

が、飛来してきたものは歳三へと襲いかかることはなかった。

短い悲鳴が、歳三の耳に届いた。

振り返った歳三が見たものは、首筋に深々と矢が刺さった副将格の男の姿だった。

見れば次々に指揮官や、それに類するものらしき者たちへの首に、矢が突き刺さっていく。

(誰だ)

歳三は仰ぎ見た、隘路の片側、軽い崖となつているところ。

逆光になつてよくわからないが、陽光の中に確かに赤銅の人影が燃えているのを見た。

弓を構えているのはわかる、身体つきから女性であろうこともわかる。

肝心の顔は、わからない。

(本当に、戦つてのは面白れえぜ)

歳三は笑っていた。

歓喜に打ち震えていたのである。

勘ではあるが、あの凄腕の弓使いはこちらを狙つてくることはない。

味方であるという己の勘を、歳三は信じることにした。

ならばもう躊躇うことなどなく、兼定を眼前の敵へと向けた。

遼東の英傑

古今東西、戦史において多数の戦死者を出すのは撤退戦である。

整然と統率^が取れているのなら、あるいは殿^{しんがり}が機能しているのなら。

追撃する側にも少なからずの被害を出し、敗走する軍勢の痛手は少なくて済むのだが。

どちらもが、まともに働いてなかった場合はどうなるか。

遼東の城へと続くこの隘路を見れば、よくわかることだろう。

「これはこれは、酷い有様ですな」

と、趙雲。

(星の言葉も、尤^{もつと}もだな)

軍勢からは少し離れた場所で、歳三はぼんやりとそれらを眺めている。

馬に踏まれた者は、内臓と血と吐瀉物をぶちまけ、白目を向いて死んでいる。

槍に突かれた者は、胸や腹に大きな穴を空けて、空を仰いでいる。

刀に斬られた者は、太い綱にも似た腸^{はらわた}を掻き集める様にして事切れている。

大地が血に塗れるとはよく言ったものだが、これはその通りだなと歳三ですら思う。

気の利いた知恵者の一人でもいれば、ここは地獄だと称したかもしれない。

「お兄ちゃん」

徐晃がやって来て歳三に声を掛けた。

歳三は眠たげな眼で、振り返る。

凄惨な光景など見慣れていると、言わんばかりの余裕である。

「投降者の、まともが終わった」

「ああ、ありがとう香風」

不意に、徐晃の顔を見つめる歳三。

この男の眼光に晒され続けるなど、常人には失神物だが徐晃は動じない。

返り血を雨のように浴びているのだから、見た目など普段より恐ろしいものなのだが。

徐晃は堂々と見返している。

「? どうしたの?」

「ああ、いや。どうしたものかと思つてな」

「どういうこと?」

「私には、皆にしてやれることがなにもない、ということに今更ながら気づいてね」

「シャンは、満足しているよ?」

「そういうことではない。功劳には報いるのが大将の務めだろう」

声音が、驚くほど優しいことに徐晃は気付いた。

歳三は論功行賞ができない、と言っているのである。

功を立てれば、正しく報いる。

武士とは古来そういうもだのと歳三は信じている以上、主たる者は、仕えてくれる者たちの功に報いなければならないという信念がある。

しかし、歳三には報いたくとも、報いる為のものを持つていないという事実がある。

歳三の声色が優しいのは、彼なりの労りなのだ、徐晃は思った。

「だから、どうしたものかと思つてね」

滅多に見せないであろう、困つたような笑みをする歳三に、徐晃は少し呆れた。

呆れると同時に、安心した。

ついていくと決めた時と同じような、よくわからない安心感を徐晃は再び覚えていく。

「んー、シャンは別に、いいかな」

徐晃の言葉に、歳三は驚いた様子を覗いた。

「いらないと、言うのかね？」

「そう」

「それは、どうしてだ？ 私が、未だ弱いからか？」

「ううん、シャンが、お兄ちゃんについていくって、決めたからかな」

「私には、それがよくわからないのだが」

「ついていくって決めた以上は、シャンは、お兄ちゃんの言うことを聞く」

徐晃は微笑みを浮かべた。

歳三についていくことにしたのは、富や名声や、好奇心のためではない。

もつと単純なことだと、この難物な男に気づいてもらう必要がある。

徐晃は言った。

「シャンはお兄ちゃんのこと、好きだから」

そうか、と歳三は短く答えると、徐晃から眼を逸らした。

徐晃はそれを不思議そうに見ている。

遠目から眺めていたからこそ、趙雲は歳三が何故目を逸らしたか、なんとなく察しがついた。

歳三は照れている、あるいは喜んでいるのだ。

即物的な繋がりではなく、人としての繋がり、そういったものがあることに、感動している。

手のかかる主だ、と思いながら趙雲は助け舟を出すことにした。

「まったく、主は不器用な方ですな」

「何が言いたい、星？」

不愛想なむつつり顔に、不機嫌な声を足して歳三は趙雲に振り向いた。

とてもじゃないが、こんな歳三に好感を抱くことなど普通はない、が。

これも歳三の下手くそな照れ隠しだと思うと、趙雲は愛しさと面白さが同時に沸いてくる。

戦場では修羅の様な人であり、公では鬼の様に己を律するが、その癖どこか子供っぽい。

笑いが込み上げてくるのを抑えながら、趙雲は言った。

「相手は女子おなじですぞ？ 頭の一つでも撫でて差し上げては？」

「む、シヤンは子供じゃない」

「いやいや、何も持たぬ主ができることといえば、それはただ褒めることです。それに香風よ、主からの賞賛を素直に受け取るのも、臣下の務めですぞ」

「？ そういうものなの、かな？」

趙雲は口が巧うまい、そういうものかと簡単に徐晃を納得させた。

納得しないのは、歳三である。

「私とて、甥をあやしたことはあるがね」

「シャンは子供じゃないって！」

「だから、抵抗があるのだよ」

趙雲は、歳三に子供をあやした経験があつたのか、と軽く驚愕している。

泣いている子供を、殺気で無理矢理泣きやます姿しか想像ができない。

呆けている間に、歳三と徐晃の間で話が進んでいることに、趙雲は気づかない。

「むー！」

「悪かった、ちゃんと大人の女性にょしよつうとして扱おう」

徐晃に歳三が近づいた。少し、徐晃がたじろいだ。

歳三は背が高い、誰が見ても小柄といえる徐晃からすれば、それだけで迫力がある。

のを、歳三は腰を曲げることで四散させ、視線を徐晃と合わせた。

徐晃の目の前にあるのはいつもものむっとり顔、ではなく、見惚れるような笑みである。

すつと伸びた歳三の右手に徐晃は気づくことなく、あっさりを受け入れた。

「ありがとう、香風」

髪を梳くすようにしながら、それでいて慈しみを十二分に持った撫で方だ。

こればかりは、徐晃でなければ表現の仕様がでないだろう。

とにかく、とろけるような女の姿を、徐晃は歳三の前で晒していた。

歳三の手が頭から離れ行く時など、名残惜しそうに歳三を見つめていたくらいであ

る。

「では、遼東の城に向かうとするか。引き続き指揮を頼む、香風」
「わかった」

俄然やる気が湧いたように見える徐晃を見送り、歳三は趙雲を見た。

一連の流れを見ていた趙雲が、怯えた様に足を一步、下げた。

「な、なんですか、主？」

「なにとは今更、決まっているだろう？」

歳三の手が伸びる、趙雲が身体を固くする。

確かに褒美を受けるのは臣下の務めと言ったがと、瞬間まで小難しいことを考えていた。

「星も、ありがとう」

手が、いつ離れていったのか趙雲にすらわからない。

わかるのは手が頭に触れるまでに考えていたことが、全て吹き飛んでいたことである。

その後のことは、よくわからない。

空いた空白に滑り込むかの様に、またこうして撫でられたいと強く思ったことと。

歳三の体温を求めるようにぐつと、身体が熱くなつたことくらいである。

「……私にもする必要はあったのですか？」

思わず弛緩^{しかん}仕切っていた自分を恥じながら、趙雲は非難を込めた目で歳三を見た。
当の本人は素知らぬ顔である。

「同じ功を立てた以上、同じように処するのが道理だろう」

「では風と稟にも」

「戻った時には、いずれな」

自分でもとんでもないことを吹き込んでしまったのではないかと、趙雲は思う。

思ったからこそ、皮肉の一つでも言ってやらないと気が済まなかった。

「まったく、主は一体どれだけの女性を泣かしてきたのでしょうかなあ」

「さあてね、覚えてないよ」

「つまり、主に泣かされた女性の涙で河ができるほど、と？」

「私なんぞのために、泣くヤツは居たのかねえ」

返事にいつもの覇気がない。

歳三は、胡乱^{うらん}げな眼で空を見上げていた。

趙雲もつられて、空を見上げた。

「少なくとも、恋なぞはしたことないだろう」

「……主？」

「していれば、あるいは」

歳三は見上げるのをやめて首を振った。

「詮ない話だ。私達も香風の元に向かおう」

歩き出す歳三の背を迫いつつ、趙雲はちらりと空を見た。

透き通るような蒼天が眩しいが、歳三の眼にあの空の蒼さは映っているのだろうか。

趙雲は訳もなく、悲しくなった。

◇

凱旋の時ほど、高揚する瞬間はないと歳三は城に入る前に趙雲と徐晃に言っていた。

確かに遼東の城の歓迎は強烈であつた。

穏やかに暮らす民が、活気溢れる商人が、城門を守る兵までもが。

歳三たちの姿を一目見ようと溢れかえっていた。

いつの間に伝わっていたのか、三倍もの軍勢を撃滅したとの話も聞こえてくる。

その中で、高揚すると言っていた歳三本人が考え込んでいるのを趙雲と徐晃は見逃さ

なかつた。

「で、主は彼らを一体どうするおつもりですか？」

「私にどうこうする権限はないよ。公孫贊殿に指示を仰ぐしかあるまい」

遼東の城主に捕虜と兵とを一旦預け、与えられた部屋で歳三たちは寛いでいる。

城主はずつと黙りこむ歳三に恐怖を覚えたか、賛辞もほどほどに奥へ引つ込んでいった。

もちろん、趙雲にも徐晃にも怒られた歳三だが、政治は苦手だの一言で相手をしなかつた。

何を言つても無駄、と悟つた趙雲はこうして、椅子に座りながら歳三にこれからを尋ねている。

「そうですか。なれば主ならば、どうなされますか？」

「ふむ」

歳三は顎に手をやった。

政治の話の時とは違って、やる気のあるといった顔である。

これには趙雲も徐晃も呆れた。

軍勢を強く、大きくしようというなら、政治力は不可欠である。

恐らく歳三の中では、程立と郭嘉にその辺りを丸投げしようとしているのだろうか。

「投降者から志願兵を募りたい。後は解放」

「おや、主も白馬義従をつくるおつもりで？」

「確かに私の手足になるようなのは欲しいが、まずは十分な兵だよ」

歳三の脳裏には、新選組の旗が翻っている。

やはり手足となる軍組織が欲しいというのは、公孫贇の持つ白馬義従の感覚と似ている。

打てば響き、敵に圧倒的な恐怖を与える撃剣部隊、それを歳三は欲しい。

「そして解放というのは、主にしては随分温情に思えますな」

趙雲が皮肉っぽく言う。

徐晃も言葉にはしないものの、同意見だった。

先の戦いでさえ、武器を持ち続けるのなら殺し続けろと命じていたのは歳三である。

急に融和政策に走るとは、とても考えられない。

事実、当たっていた。

「無論、解放の前に首領格の近親縁者、あるいは重要な位に居る人間を探し出す」

「その心は？」

「賊の規模、武器の充実加減、糧秣の具合とまあ、とにかく全てを吐かせる」

「ほほう、しかし口を割らないとなれば？」

「それでも、聞かせてもらっただけさ」

歳三は冷たく笑った。

「なに、話をさせるのは私の得意分野だ」

趙雲と徐晃の背中に、冷たい汗が流れた。

何をしようとするのか理解したくないが、歳三の冷笑が嫌でも情景を想像させる。戦場で血と悲鳴には慣れてるが、それでも見たくないものはある。

「その様を、解放する全員に見せ、反骨する気概を折る」

徐晃は唾を飲み込んだ。

敵に容赦をするな、なんてことは幾らでも、どこでも聞いたことがある。

だが、この男以上に徹底した者が他に居るだろうか。

少なくとも、徐晃は見たことがない。

趙雲も同じだろうと、徐晃はそつと顔色を伺った。

案の定、いつも浮かべている皮肉気な笑みの端が、引きつっていた。

「それで賊の襲撃がなくなるなら、それでいい」

「なくならなければ？」

「国境に磔くわじやくいにして、鳥にでも食わせるさ」

「……死体までも辱めるおつもりですか？」

「そんなことはない、生きてるよ」

歳三はなおも笑っている。

「生かしたままにするのは、得意だね」

何が得意、とまでは趙雲は聞かないでおくことにした。

「もちろん、兵は埋伏させておく。磔にしていたものを助けようとしたところを一網打尽にする」

趙雲は閉口した。

この男は武人ではあるが、武人らしい倫理とか道徳といったものがどこか振じ切れている。

敵の肉体を囮にして誘殺するという、類を見ない残虐非道な作戦を行うというのだ。

口だけの男であるなら、まだ良かった。

歳三とは必要とあれば絶対にやる男だと、趙雲も徐晃も身に染みて知っている。

更に趙雲らは預かり知らぬところだが、油小路で伊東甲子太郎の遺骸を囮に使い、御陵衛士を壊滅させるといふ作戦を実際にやってのけているのが歳三である。

生半可な感情など、勝利するためなら、冷徹さでもって捨ててしまえる。

確信をもって行動するだけ、普通の狂人より何倍も性質たちが悪い。

「その繰り返しだよ」

歳三は笑うのをやめて、いつものむっつり顔に戻った。

「当然、助けに行こうとする者はいなくなるだろうが、そうなれば将と将の関係も、将と兵の関係も崩壊する。当たり前だ、口では味方とは言っているが、敵に捕まれば最後、助かる希望はないのだからな」

と、歳三の言うことは最もである。

救援を送る、送らないというのは将と将の信頼関係に大きく影響を与える。

助けが来るといふ、その一念で戦える者も、助けが来ないとわかれば存外脆い。

希望とは、人を活かす妙薬であることに間違ひはない。

歳三の様に敗戦確実の中でも戦えるという方が、余程気を違^{たが}えている。

「では、主は私が磔にされたら、どうされますか？」

「そうはさせないさ」

趙雲が思わず言ってしまった疑問に、歳三は即答した。

「私が指揮するのだからな」

歳三は笑つてみせた。

趙雲と徐晃は不思議と歳三が指揮するならば、そうならないだろうな、と感じていた。

もしかすると二人も、歳三の持つ狂^あ氣に中^あてられているのかもしれない。

◇

結局、歳三の言うような残酷な作戦は行われることはなかった。

公孫賛が、捕虜に対して寛大に接するようにと命令を送ってきたのである。

この判断に対し、歳三を始めとして趙雲も徐晃も異論はなかった。

何故反発しないのか、二人が歳三に問い詰めたくらいである。

歳三は笑つて、

「これで公孫贄は流石だと人々は褒め称え、人徳が増す。いい手だよ」と言つて取り合ひなかつた。

趙雲など言つたことをそんな簡単に変えるのか、と食い下がつたが、私ハね、良いと思つた流儀はすぐ取り入れるのが、流儀なのさ」

と、兼定を城の練兵場で振るいなから言つていた。

そんなことが、あつた。

そして今、歳三たちは城下のとある店で飯を食べている。

「兵站と兵士の補充ができたのなら、私が調練を開始する」

肉をつつきながら、歳三が言つた。

客将の身分である故に、どうしても公孫贄からの命令を受けてからでなければ動けないのだ。

歳三は内心不満ではあつたが、郭嘉には既に手を打つように書簡を送っている。

先の大戦果で、更なる自由裁量が認められれば万々歳なのだが。

ともかく、今回の公孫贄の書簡によつて軍事権を持つことが出来たので良しとしてい

る。「いや、それより主。何故こんなところでそんな話をするのですか？」

「決まっているだろう、城の飯は不味いからだ」

趙雲の言葉に、にべもなく歳三は言った。

食にうるさい男、とは前にも言ったが、こんなところにまでも出てきている。

「私が城下を歩きまわって見つけた店だ。なかなか、良いだろう？」

「確かに味は良いですが、話すのならば城の方がいいのでは？」

趙雲の言うことも、もつともである。

奥まった席に座っているとはいえ、今は一番人で賑わう昼飯時。

軍事方針を定める大事な話を、どこの誰が聞いているかもわからないところで話すとは。

歳三らしくない不用心さである。

「星の言いたいこともわかるよ。ただ、城にいとどうにも居心地が悪い」

「それは、シャンもわかる」

徐晃が大きな肉の塊を頬張りながら、小さく言った。

歳三は頷く。

城に居ると、どうにも悪い勘ばかりが働くのだ。

「大方、客将が三人寄り集まって話し合っているのが、嫌なのさ」

「城を取られるかもしれない、ということですか？」

「私達の人氣も氣に入らないのだろうよ、それに応えない公孫贄にもな」

趙雲の言葉に、歳三はあつけらかなと言った。

城の人間たちが抱いているのは、要は恐怖と嫉妬である。

どこから来たのかわからない無名の輩が、突然主君の軍勢を率い、大戦果を上げた。その集団は決して傲ることなく兵を預けた上で、氣さくに民と接している。

自然、人氣は城主よりも戦が強く、欲が薄い方に出る。

肝心の主君ですら、長年仕えた自身よりも無頼の輩を頼むとなれば、どうか。

「城の中で斬り殺されるつもりはないが、小細工をされても面倒だからな」

遼東の住民たちは、比較的歳三たちに友好的である。

俄然、城の中で話し合うことが漏れ出るよりも、危険性は少ないというのが歳三の持論だ。

毒を盛られる可能性も考えて、歳三は城中で食事をせず毎日食べる場所を変えている。

今、歳三たちが居る店は、そういった経緯で発見したことを趙雲らは知らない。

いつもどこかに出かけている、といった印象しかなかった。

「公孫贄はいい將軍さ。私達を用いようとしているんだからな」

「そうですね」

「シャンも、そう思う」

ただ、周りに恵まれていない、とまでは歳三も言わなかった。

遼東の人間は、公孫贇のことを非常に好いているのを、歳三は散策の中で知っている。趙雲も歳三からの頼みごとの途中で公孫贇の話を書く機会が多い為、よくわかっている。

徐晃は人々の営みから、公孫贇が慕われていることを悟っている。

歳三は箸を置いた。

「ともかく、これからの話さ。香風は身軽そうなのを集めて偵察隊の結成を頼む」
徐晃は頷いた。

「一度大きく打ち払ったとはいえ、また大きく来ないとは限らないからな」

歳三が異様なまでに斥候を放つのを、徐晃はよく知っている。

そして重要さもよく理解しているから、素直に飲み込める。

「ああ、できることなら、何人が捕らえておいてくれ」

「うん」

歳三の眼が冷たく光つたのを徐晃は見逃さなかったが、触れないことにした。

城下の外れにある空き家を、歳三が何軒か探していたことを徐晃は知っている。

何をするつもりかはわかるが、聞くつもりまではなかった。

徐晃のことは済んだか、歳三は趙雲へと向いた。

「星は、例の人物は見つかったかね？」

例の人物、とは先の戦で大きな役割を果たした弓使いのことである。

弓を使う赤銅の女である、ということ顔の広い趙雲に探してもらっていたのだ。

趙雲が歳三から頼まれていた頼み事というのは、このことである。

困ったように、趙雲は歳三の言葉に答えた。

「何分、情報が少ないですからなあ。主が見た、という情報以外にはあまりにも少なく」

人探しというものは、情報が少なければ少ないほど難しい。

かつて新選組において監察方を握っていた歳三のこと、よくわかる。

それでも、あの弓使いを見て惚れたのは事実である。

できることなら仲間に加え入れたいと、歳三は思っていた。

「そうか、見つからないか……」

「すみませぬ、主。私も手あたり次第に尋ねて回ってはいるのですが」

「見つけれぬからといって、責めることはないよ」

歳三は苦笑した。

「不逞の輩が相手ならともかく、あれは傑物だよ。会えぬなら、単に私と縁がなかった、というだけさ」

たったこれだけで、歳三は謎の人物への想いを断ち切ろうとした。

傑物とは然るべき時に出会えるもので、会いたい時にはどうにもならないことが常だ。

(坂本も、そうだった)

敵同士になつたが、歳三は坂本と酒を酌み交わしたいと思つていた。

叶うことは、坂本の死によつて終ぞなかつたが。

僅かな感傷に歳三が浸つていた時、一人の女がやつてきた。

この地方には珍しい、褐色の肌をした女である。

「あ、ここ、相席いいかなあ?」

見渡してみれば辺りはどこも満席である。

丁度四人掛けの、この一席だけが空いていたことになる。

「どうぞね」

「ありがとね」

徐晃に促されて、女が歳三の眼前の席に座つた。

左のみみあげを結つているのがよく似合う、扇情的な格好を含めて美しい女であつた。

悠々と店員に注文をしている姿を、歳三はじつと眺めている。

趙雲が不審と思つたか、歳三に声を掛けた。

「どうかされましたか？」

「見つけたよ」

「見つけた、とは？」

「君だな、ここ遼東の英傑は」

断定したように、歳三は眼の前の女に言った。

「君だろう、前の戦の時に加勢してくれたのは」

「困るなあ急にそんなこと言われてもーっ！」

「私の名は土方歳三だ」

有無を言わずに、歳三は名乗った。

傲岸不遜を地で行き、神仏相手にも名乗らねば名乗らぬ様な男が、自分から名乗る。

これだけで趙雲と徐晃は、隣に腰掛けている女が歳三の求めていた人物だと悟った。

歳三と、女の視線がぶつかり合う。

お互いに、一瞬たりとも逸らさない姿は、どこか戦の前を想像させる。

静かな果たし合いは、女がぶつと吹き出したことで終わりを告げた。

「あーあ、バレちゃったかあ」

と言う癖に、快活な笑みを浮かべている。

歳三は無愛想な面に珍しく、喜色を浮かべていた。

「本当は、私を探していたのではないかね？」

「そうだよお。毎日毎日行く場所が違うんだからさあ、追う身にもなつてよね！」
女が笑う。

「ああ、名乗られたからには名乗らないとね！ 私は太史慈。太史慈子義だよ！」

未来よりの残り香

注文された料理が運ばれてくる。

太史慈と趙雲らが名前を交わす中、歳三は思い出す。

小霸王とも呼ばれた孫策にとっての、太史慈とは一体なんだったか。

こんな奇縁があるのなら、三国志をもっと読み込むべきだったかな、とも思う。

(そりやねえぜ、歳三よ)

前にも、既に三国志の常識など簡単には通用しないと、痛感したばかりではないか。

女々しいにも程がある。

それに、歳三は弁舌の徒ではないが、口があるのだ。

拙い知識なぞに頼るよりも、本人に聞いてしまえば、早い。

(ま、それも落ち着いてからの話だ)

茶を飲みながら、歳三は太史慈の顔を盗み見た。

なんとも美味^{うま}そうに、飯を食っているではないか。

人の膳を邪魔するほど、歳三は無粋な男ではない。

静かに、水面を眺める様に茶を啜^{すす}っていた。

歳三はそんな風に押し黙っているのだから、自然、趙雲や徐晃も静かに食べる。流石に、空気を察したか太史慈が申し訳なきように口を開いた。

「もしかして私、邪魔しちやうた？」

「いや」

太史慈に、歳三は短く答えた。

「あまりに美味そうに食べるものだから、私も、と思つていたところさ」

歳三は忙しそうに店内を駆け回る店員を呼び止めて、何かしらを注文する。

趙雲が、それに続いた。

「でしたら私は酒でも追加をしましょうかな。シャンはどうする？」

「シャンは、大丈夫」

注文を取り終えた店員は、すぐに厨房へと飛び込んでいく。

「忙しいことだと想いながら、これが平和なのだ歳三は嘯み締めている。

民が下を向くことなく、家に閉じこもることもないのが、何よりも幸せであると。

「ところで土方……くん？　さん？」

太史慈の言葉に歳三はぶつと噴き出した。

歳三、若く見られる風貌をしているが、今更くんやさんを付けられて呼ばれる齡よわいでも

ない。

「思わず大笑いしそうになるのを必死に押し殺して、歳三は口を開いた。

「構わないよ、好きに呼んでくれ」

「そっか、じゃあ歳三ね！」

明朗快活な好人物である、と歳三は太史慈を評価した。

人物というものは言葉の端々から不思議と漏れ出てくるものだと、歳三は良く知っている。

太史慈の言葉は歳三が聞いていても心地良い、好漢の類の者である。

もつとも、太史慈は前にも言った通り女性であり、言葉以上の意味は特にならない。

「でさあ、歳三が本当に、あの軍勢を指揮していたの？」

太史慈が尋ねる。

歳三は首肯した。

「そうだよ。君が見ていた通り、私が指揮した」

「そっかあ。じゃあなんで一番最初に突っ込んだりしたのさ？ 絶対反対されるよね？」

太史慈の言葉に歳三が答える間もなく、趙雲と徐晃が声を上げた。

「止めましたとも、ええそれはもう止めましたとも。にも関わらず主という人は」

「シャンも、本当に心配した」

「本当にすまないと思つているよ」

先ほど歳三と会い見えたばかりの太史慈でさえ、白々しいと思うくらいの謝罪である。

恐怖心とか色々なそういうものを、どこかに落とせば、こうなるのだろうか。

歳三は茶を一口飲むと、今度は私の番だと言わんばかりに太史慈に目を向けた。

「太史慈、君は私を探していたのか」

「そりゃね、三倍もの相手に挑むなんて真似をする将つてのがどんなのか見てみたかったのさ」

あつけらんとした口調であるが、言外に無謀なことをしたなという評価も含まれている。

歳三はそう読み取った。

「三倍の敵を打ち破った、という言う噂を一番に流したのも」

「私だよ」

「最初から最後まで、戦いぶりを見られていたということか」

「そっだよ、なかなか格好良かったね！」

「惚れたかい？」

趙雲は驚いたように歳三を見た。

「主が、冗談を言うとは……これは、明日は嵐ですか？」

「至って、真面目だよ」

歳三は慫然とした表情だ。

「私はね、太史慈、君を私の仲間にしたいと思っている」

遂に言った、と徐晃は思った。

徐晃はずつと、食事をする振りをしながら太史慈の一挙手一投足を観察していた。

そこから感じられたのは、武人としての有り様と、誰かとの強い絆である。

糸のような細かいものではない、太い綱つなのような絆だ。

わからない筈がないだろうと、徐晃は歳三に視線を向けたが、歳三は素知らぬ顔である。

「へえ、私が欲しいんだ」

太史慈の雰囲気さがらりと変わった。

先ほどまでの、気の良さげなものとは違う、虎に似た獰猛な覇気が溢れている。

「私が雪蓮しうれんと冥琳の親友と、知ってて言っているのかな？」

「さあ、どうだろうね」

歳三は平然と、太史慈の覇気を受けている。

雪蓮と冥琳、というのはおそらく真名であろうと、歳三は睨んでいる。

これは猛々しきの中に、愛の情が含まれているのは確かだからだ。

僅かな知識を手繰り寄せて見当をつけるに、孫策と周瑜であろうと歳三は看破した。

この間、僅かな時しかない。

「確かに雪蓮と冥琳の繋がりは、金ですら断てる。私では、二人の友情に及ばないかもしれない、でもね」

太史慈の気が、大きく膨れ上がった。

「歳三に私を振り向かせられるだけの何かがあるって、言えるの？」

「あるよ」

さも当然のように、歳三は答えた。

太史慈とは、燃える火の玉の様な女である。

誰よりも熱く、激しく、眩しい女だ。

こんな傑物を惚れさせるのだから、孫策と周瑜も希代の存在であることに間違いはない。

「そうでなければ、そもそも君を探していたりしないさ」

だからと言って、歳三は負けることを良しとしなかった。

未だ会つても居ない存在に負けを認めるなど、歳三の矜持が良しとしない。

そんなことをするくらいなら、歳三は腹を切る方がマシだと思っている。

「そうか、そんなに言うならさ、私を倒してみたらどうかかな？」

「ほう」

歳三の眉が、ぴくりと動いた。

趙雲と徐晃は平然を装っているが、内心、冷や汗ものである。

以前に本人が言っていたように、個の武の力では歳三は趙雲や徐晃に劣る。

そして歳三の判断は正しいと、趙雲も徐晃も思っている。

思っているからこそ、太史慈に挑むという自殺行為を歳三がするとは思わなかったのである。

太史慈の腕前は、立ち居振る舞いからして歳三の上を行く。

歳三が、それくらいのことを、まさかわからないとは趙雲らも思いたくはない。

「主、まさかとは思いますが……」

「ああ、受けるよ。太史慈との決闘を」

柳に風、といった体^{てい}で歳三は涼しい顔である、負けることなど考えていない風だ。

「なにを馬鹿なことを言うのですか主！ 私の時は、私が殺す気もなく、更には賊という要素もありましたが、今回ばかりはそうはいきませんぞ！」

「趙雲の言い草じゃ私が殺さないと思っっているみたいだけど、私は本気でいくよ？」

歳三は、鼻で笑った。

「本気で来ないなら、私が殺すよ」

太史慈の眉が、ぴくりと動いた。

趙雲や徐晃らでさえも、歳三の自信がどこから来るのか、測りかねるところがあつた。歳三はいつもの傲岸不遜な態度で、言う。

「私が、本日をもつて今までの太史慈を殺して差し上げると言っているのだ」

「……それは、私に雪蓮と冥琳を忘れろということ？」

「違ふよ。過去は過去でしかない。私が真つ新まらにした上で、私と共に来ないかと言つてゐる」

歳三は切れ長の眼で、太史慈をじつと見た。

流石の太史慈も、少し怯んだが、負けじと睨み返した。

ひりひりとした緊張感が、二人の間で漂い始める。

「だからこそ、本気で来てもらわなければ困るのさ」

「どういう意味？」

「本気で挑んでも勝てぬ相手が居る、それが私だ」

歳三は、またも笑つた。

「だからこそ、殺す気ではなかつたから負けたなどという言い訳は、要らないよ」

歳三の笑みが、悪鬼羅刹の如く歪んだ。

いや、歳三の持つ狂気染みた闘争心が、笑みを歪んで見せているのだ。

「殺す気で来なさい。それでも勝てぬ男が、眼の前にいるのだよ」

太史慈は歳三の笑みを見つめ、ふっと笑った。

同時に張りつめていた緊張感が、霧散する。

趙雲と徐晃も、ほっと胸を撫で下ろした。

「そんな……」

思いきや、太史慈がふるふると震えている。

何事かと思いきや、歳三らが様子を伺うと。

「そんな面白いことを言うなよお！」

大輪の花が咲いたような、笑顔があった。

この反応は予想外だったのか、流石の歳三も面食らっている。

挑発に挑発を重ねたのだ、今この場で斬り捨てる、と言われる方が定法だろう。

が、太史慈は何度も言うように英傑である、何もかもが並の人間ではない。

「雪蓮、いやこれは大殿かな？ とにかくこんな人間に会うなんて久しぶりだよお！」

「孫策殿や孫堅殿と一緒にされては、困るな」

太史慈の言う大殿が、孫家開祖である孫堅のことであろうと思ったのは、半ば勘である。

喜色満面の笑みを浮かべる太史慈を察するに、当たりではあったようだ。

「どうして？ 雪蓮も大殿も、歳三が気に居るほどの英雄だよ？」

「決まっている、私の方が上を行くからだ」

言い切った、言い切ってしまった。

趙雲と徐晃の間にある共通認識は、それだった。

太史慈の中に光る、興味の光が、獅子が獲物を狙う光と変わったのだ。

これではもう、太史慈とは決闘でしか決着をつける以外なくなつた瞬間である。

「そうかあー。策を弄ろうされても困るし、場所と時間はこつちで決めていいよね？」

「もちろん」

「じゃあ時刻はこれから、私があの時弓を射つた場所で待っているからね！ 歳三！」

「ああ、軽く腹ごなしをしたら、行くさ」

太史慈は自分の食べた分の料金を置いて、もう一度歳三に笑いかけた。

歳三もまた、どこか含みのある笑顔で答えた。

そうして鼻歌でも歌いだしそうな軽い足取りで、太史慈は店を出て行った。

趙雲と徐晃が、長い溜息を吐いた。

店の中の人間たちも、太史慈と歳三の鬨こゝろ気に怯えきつていたが、重しが取れたようにすぐにざわめきを取り戻している。

趙雲は、批難するような眼で歳三を見た。

「馬鹿をやる馬鹿をやると思つていましたが、主がこんな馬鹿だとは思いませんでした」
「あれほど強く繋がりを持つ英傑を分捕るには、安い苦勞だとは思わないか？」

「ですが、死んでは何にもなりませんぞ？」

「ここで死ぬなら、俺はそこまでの人間だったっていうことさ」

歳三は明るく笑つた。

所詮死ぬならそこまで、そういった信仰が歳三にあることを、まごまごと思わせる笑みだ。

徐晃は、消え入るような声で言つた。

「死んじゃ、嫌だ」

「私は死なないよ」

歳三は、いつものむつつり顔である。

「既に、死んでいるからね」

歳三は机の上に金を置くと、席を立つた。

恐ろしい速さで店を出て行く。

言葉の意味はわからなかったが、趙雲と徐晃も金を置くと急いで歳三の後を追つた。

◇

歳三は歩いていく。

晴天の空の下、何も気にしないと云った風にすたすたと歩いていく。

必死に追い縋る様に、半ば走る形になっているのは趙雲と徐晃だ。

普段は二人に合わせて歩く歳三のこと、死闘を前に気が逸っているのかもしれない。

趙雲が、歳三に尋ねた。

「太史慈との決闘のことは、この際何も言いませんぬ。ですが」

「なにかね？」

「何故、太史慈が主を探していたのがわかったのです？」

歳三、足も止めずに少し考え込み、言った。

「蛇の道は蛇、といったところさ」

「……こんな時に謎掛けですか？」

「これでも私はね、洛中に蔓延はびこる不逞な輩を、取り締まっていたこともある」

歳三の言葉に、趙雲と徐晃はぎよっとした。

身形も性格も並の者ではないと思いつけていたが、まさかと言った顔である。

洛中、つまりは皇帝のおわす洛陽を取り締まる者だったのか、と思つたのだ。

もちろん、歳三のいう洛中と趙雲らの想像する洛中とは認識の違いがある。

「ああ、言っておくが、君たちの思う洛陽のことではないよ」

「では一体どこのことですか？」

「教えてもいいが、私からの冥府の土産にしたいのかね？」

歳三が、ふ、と笑った。

珍しく歳三が冗談を言ったのだと、趙雲らは思ったがとても笑える話ではない。

「主！」

「そう怒るな。いずれ、話す」

そうして歳三は、冷たく光る眼を向けた。

視線の先には、三叉槍を肩に乗せる様にして立っている赤銅の女が居る。

「まずは、ヤツをなんとかすることだ」

「思ったより早かったねえ。もう少し遅くなると思ってたんだけど」

太史慈が、朗らかに声を掛けてくる。

とてもこれから、死合をするような空気には思えない。

趙雲は思った。

本当にこの空気のまま、何事もなく酒宴になって打ち解けてくれればと。

しかし、現実はいまうまくいかないものである。

太史慈はやはり、殺すつもりで歳三を待っていた。

「で、死んだ後のことはちゃんと託してきたのかい？」

「そんなこと、するかよ」

歳三は、また鼻で笑った。

「鞘は刀を戻すためにあるのだ。その鞘を、戦う前から捨てる馬鹿がいるかよ」

半ば挑発に近い歳三の言だが、太史慈は面白そうに笑った。

鞘とは、帰る場所のことであり、刀とは歳三自身のことだろう。

つまり必ず勝ち、生きて帰るといふ、そういつた旨を言っている。

歳三らしい、風流を解する割には愚直なまでの例えであった。

「ほんつとうに面白いねえ！　でも、ここで殺さなきゃいけないのが残念だなあ」

心底残念がりながら、同時に殺気を放ち始める太史慈。

歳三に対する興味をたったこれだけで消し去れる当たり、やはり彼女も英傑である。

三叉槍を構え、今にも飛び掛かりそうな暴虎を前にして、歳三は依然として、無手。

それどころか歳三、突然しやがんで草をむしり、風に飛ばしている。

意味の分からぬ行為に、太史慈のみならず趙雲と徐晃も疑問符を浮かべている。

「……隙でも作るつもりかな？」

「まさか。風に舞う草葉の句が、できないかと思っただけよ」

歳三が、ようやく腰間の兼定に手を掛けた。

「その様子だと、できなかつたみたいだね」

「ああ。どうにも、出来上がらなかつたよ。星、合図を頼む」

趙雲はいよいよ観念した、という顔をして、懐から錢を一枚取り出した。

「これが地面に落ちた時が合図、ということですよ。よろしいですか？」

「いよいよ」

「相分かつた」

太史慈と歳三の言葉を受け、趙雲は錢を空へと飛ばした。

徐晃が固唾を飲んで、龍虎激突の瞬間を見守っている。

歳三、悠々として兼定の柄に手を添えたままだ。

一方の太史慈、三叉槍を構えたまま身じろぎもしない。

錢が落下していく。

落ちる、落ちていく。

今、草の上へ、すどんと、落ちた。

「はあああああああああつー！」

咆哮と共に太史慈が駆けだし、三叉槍が唸りを上げる。

狙いは歳三の首、ただ一つ。

けれども歳三、動きもしない。

ゆつくりと、太史慈の稲妻の様な動きに比べて、とにかくゆつくりと、手を腰間に伸

ばした。

兼定と国広が帯びられた左腰ではなく、右腰へ。

右腰に吊るされているのは、拳銃ホルスター囊である。

未だこの時代に存在するはずもない、未来の超兵器。

(坂本、お前の想いを、使わせてもらおう)

遂に歳三は拳銃を抜き、躊躇なく撃った。

撃鉄が倒れ、銃口から必殺の弾丸が飛び出す速度は、どの居合の達人よりも速い。

音速を優に超える銃撃は、凄まじい破裂音をも同時に発生させた。

32口径にもなる音速の弾丸を、太史慈が避けることができたのは偶然であろう。

歳三が何も仕掛けてこないということはあり得ない、という事前の予測から、取り出した珍妙な何かが武器であることは予測できた。

まさか弓矢よりも速く、飛来する何かを出すものだとは思ひもしなかったが。

太史慈は、弾丸を避けることが出来たのである、致命的な隙を晒すことと引き換えに、体制を崩した太史慈の隙を、歳三は好機と見た。

(すまないな、沖田。どうやら俺は、劍一筋で勝てる男ではないらしい)

胸中であつての盟友に想いを馳せながら、拳銃を捨て兼定の鯉口を切った。

鞘の中で兼定が走り、太史慈の秀麗な右顔面を食い破らんと蒼天の元で鈍く光る。

「くうううううー！」

辛くも、襲いかかる兼定の刃を三叉槍で受けた太史慈だったが、兼定は軽い音を発しただけだ。

瞬間、太史慈は気付いた。

必殺でなければならぬ筈の威力が、こんな軽い音の訳がない。

見よ、兼定の舞を。

三叉槍に弾かれた筈の兼定が、歳三の手中でぐるりと回り、左脛を狙ってきたではないか。

「っー！」

太史慈に最初の余裕はない。

歳三の、文字通りたった一発で全てが狂わされた。

喧嘩とは、弾みがついた方が勝つものである。

弾みがついているのは間違いない。歳三の方だ、太史慈だってわかっている。

だが、だからなんだ。

この程度で負けるのなら、太史慈が孫策や周瑜と共に進むなど、夢のまた夢である。

「はあああああー！」

またしても、またしても辛うじて脛狙いの斬撃を三叉槍で防ぎ遂おほせた太史慈。

猛攻を防ぎ切った、油断ではないが、そんな手応えがあった。

趙雲と徐晃が、思わず声を上げそうになったが、歳三の不利になると見て必死に耐えた。

あの切っ先の位置、三叉槍の抑え方、趙雲も徐晃にも見覚えがある。

兼定の刃が、三叉槍を擦り上がるようにして上段へと昇っていく、太史慈は三叉槍を外せない。

外せば、兼定は容赦なく太史慈の身体に喰らいつくだろう。

龍が飛ぶが如く、三叉槍を登り切った兼定は最上段から振り下ろされ、そして太史慈の首へと。

「——っ！」

暗い、闇を思わせる瞳と眼が合い、思わず太史慈は目を閉じた。

脳裏には孫策や周瑜との、揚州で過ごした日々が走馬灯となって甦って来る。

産まれてから友と会い、北の涯はで鬼に会うまでのすべてが、刹那となって流れ来る。意識が消える間際の言葉は、太史慈にとっては冥府からの使者の様に思えた。

「さあ、これで今までのお前は死んだ」

そう聞こえたのを最後に、太史慈の意識は闇へと落ちて行った。

◇

「些か、やり過ぎではないですか？」

こんな風に咎めたのも何度目だろうと、趙雲は思う。

目の前の男は、このくらいの忠言なら一切意に介さないということにはわかっているが。

「そうかね」

地面に倒れる太史慈を見下ろしながら、歳三はぞんざいに言った。

太史慈の周りの草原は、真つ赤な地に塗れている。

はずだった。

「いや、本当に殺すのかと思いましたが」

「本気で殺す気なら、俺アは太史慈を三回殺してるよ」

「最初の、あの龍の咆哮で、ですか？」

「そう聞こえるのか、君たちには」

歳三は兼定と拾い鞆に納め、拳銃を拾い拳銃囊にぶち込んだ。

もちろん歳三は太史慈を殺してなどいない。

最後の斬り下ろしの斬撃も、兼定を放り投げることで止めた。

太史慈の意識がないのは、単に歳三が首を絞め落したからである。

兼定を手放してからの歳三の手の動きはまるで蛇みたいだったと、徐晃は思っている。

た。

とにかくすると、太史慈の細首に絡みつき絞め落す様は、見事の一言に尽きる。

「主は以前、私たちより弱いと言いましたが」

「確かに、言った」

「それは剣に限ればの話、という枕詞が付いたりしませんか？」

歳三は太史慈を片手で抱きかかえ、もう片方の手で三叉槍を担ぎながら、天を仰いだ。

「ふむ」

と、少しだけ考えた歳三は趙雲へと向いて。

「さあ、どうだろうね」

と、静かに笑って見せた。

草原を揺らす様に、優しい風が吹き、硝煙の香りが歳三の鼻腔をくすぐった。

(懐かしいかな、この臭い)

鳥羽伏見に始まり、甲州、会津、宇都宮、果ては函館と。

戦場では最早、血や汚物の饅えた臭いよりも、この香りを嗅いでいたことの方が多

かった。

(妙な、感じだな)

太史慈を極力揺らさぬよう、遼東の城へ足を向ける歳三。

脳裏ではまだ、先ほどの硝煙の香りが鮮明に残っている。

歳三にとつては過去の、趙雲らにとつては未来よりの残り香。

(すべてがなくなつた時、俺は)

弾倉に込められた残り五発と、ズタ袋に詰め込まれた予備の弾。

だけではない、兼定とか国広とか、とにかくそういったものがすべてなくなつた時。

歳三と、あの日の函館とを結びつけるものが失われてしまうのではないか。

ふと思つて、頭かぶりを振つた

(馬鹿だな、俺は)

時折訪れる郷愁を、早く捨てなければ。

(俺は俺さ、どこに行こうとも)

硝煙の香りは、既に風に消えている。

今は、腕に抱く太史慈の、女性らしい良い香りが鼻腔をくすぐっている。

傍目には眠っている様な太史慈の顔を、趙雲や徐晃に気取られぬようそつと盗み見

た。

(本当に、いい女だよ)

歳三はまた天を仰ぎ見た。

雲一つない、綺麗な空であつた。

罨

太史慈が、目を開けた。

古ぼけた天井が、一番に目に入ってきた。

死体として寝かされているのだろうか、太史慈は薄ぼんやりと考えた。

「気が付いたかね」

聞き間違えるはずもない、あの男の声がすぐ真横から聞こえた。

太史慈が跳ね起きる。

光を背にするように、歳三は窓際の椅子に座っている。

顔は、よく見えない。

「随分と、寝ていたようだ」

「乙女の寝顔を見るなんて、趣味が悪いよー?」

「死んだ顔ならば、見慣れているさ」

笑いもせず歳三がそう言う辺り、太史慈は今の身の上を理解した。

太史慈は負けたのだ、この土方歳三という男に、殺されたのだ。

生物としての死ではなく、人間としての死を、与えられたのだ。

「そっか、負けちゃったんだね、私」

「言つただろう、私は強いと」

「ところでさ、あの最初のやつは一体何なの？ 凄いな、咆哮みたいだったけど？」

「私と共に来るのなら、いつか教えるさ」

歳三は光を背にしたまま、太史慈を見ている。

視線だけを、太史慈は感じている。

「そうだ、路銀はこちらで用意してある。多少だが」

寝台の横の小机に、ずしりと銭の詰まった小袋が置かれた。

歳三の行動の真意が読み取れず、太史慈は目をぱちぱちとさせている。

構わずに、歳三は続けた。

「孫策と周瑜の元に帰るのを、私は拒むことはしないよ。だからといって、このまま遼東に居て、私たちと顔を合わせて気不味い思いをすることもあるまい。出て行け、と言っているようであまり好きではないが」

「ちよ、ちよつと！ それは最初と言っていることが違うじゃないか！」

「ふむ？」

「あれだけのことをして、命まで懸けたのに、なんで私を手放そうとするのさ！」

「友と離れることの辛さは、私もよく知っているつもりだ」

視線が外れ、歳三が虚空へと向いたことを太史慈は感じた。

「自らの意思で、離れる決意をしてもらいたい。勝負に負けたからだけでは、いかないのだよ」

「私がいうのもなんだけどき、らしくないよ？」

「だろうね。それは私も思うよ」

歳三の見る虚空に、近藤と沖田の姿がぼんやりと浮かんでいる。

太史慈の孫策と周瑜の関係は、歳三の近藤と沖田との関係に似ているだろう。

かつて、関羽に憧れていた近藤に付き合つて、桃園の誓いの真似事をしたこと。

義兄弟の盃を交わしあつたことも、よく覚えている。

それでも、歳三たちは離ればなれになつた。

(道を違えるのは、難しいもんさ)

近藤は、皆で作り上げた新選組を守りたくて、斬首された。

沖田は、どうしようもない病魔に蝕まれ、この世を去つた。

(そういう時代だつた)

近藤や沖田だけではない、山南や坂本だつてそうだ。

歳三にとって善であれ悪であれ、あらゆるものが時代の流れに飲み込まれていった。

時勢もあれば政局もある、身体のこと、生きていく以上は切つても切り離せない。

例え生涯の友であつても別離の時はあり、死に別れる時もある。

(市村は、無事に日野にたどり着いただろうか)

ふと、そんなことを思った。

思つてしまうと、生き残つていゝのであろう仲間たちの姿が思い返される。

(斎藤君や永倉君は、無事に新しい時代を迎えられたのだろうか)

と、考へて、歳三は可笑しくなつてしまつた。

新しい時代の流れを拒みに拒んだ結果、訳の分からない時代に歳三は迎えられた。

奇縁にも程があるな、と笑い出してしまひそうだ。

(俺は生きてゐる)

何故かは、歳三は考へてゐない。

生きてゐるから、生きてゐるのだという確固たる想いがあるだけだ。

太史慈に、視線を向けた。

どうしたものか迷つてゐるという顔で、縋すがるように歳三を見てゐるようにも思へた。

歳三は太史慈の視線を無視して、椅子を立つた。

「とにかく、そういうことだよ」

と、だけ言つて檻ぼ樓屋ろを出た。

歳三の胸中は歳三自身でもよくわからない。

わからないから、わからないままに歳三は動いた。

そういうことだから、太史慈も歳三の胸中を推し量ろうとしても土台無理な話であった。

太史慈は歳三が出て行つた扉を、我を取り戻すまで見つめていた。

◇

歳三と太史慈が城内端の檻樓屋で別れてから、幾許か経つた。

太史慈について問おうとしても、兵の調練があるからと歳三は逃げていた。

だから趙雲と徐晃は、事の顛末については聞かされていない。

聞かされていないから、各々の仕事をしながら日々を過ごしていた。

ある日、歳三が城主に呼び出されたのを見計らつて、趙雲と徐晃は歳三を待ち構えている。

城主の部屋から歳三が出てくるのを待ちながら、趙雲は小さな声で言った。

「しかしシャンよ、珍しいこともあると思わぬか？」

「？」

趙雲の問いに、徐晃は小首を傾げた。

「城主殿の主に対する恐れ方、尋常ではなかった。それを呼び出すとは、少々腑に落ちぬ」

「単に、命令じゃないの？」

「そうだといいのだが……」

普段の不真面目な雰囲気趙雲にないことに、徐晃は不安になる。

歳三といい趙雲といい、彼等の勘はよく当たることを徐晃はよく知っている。だから余計に、不安だった。

そうこうしている内に、城主の部屋の扉が開いた。

「星と香風か」

歳三が、出てきた。

いつもの様に、無愛想な顔をした男である。

例え城主が相手であれ、簡単に相好そうこうを崩すような男ではないらしい。もつとも、今に始まった話でもないが。

「主、今日という今日は」

「待て、星」

歳三が、趙雲の言葉を遮った。

例の切れ長の目を、ぎよろりと光らせながら、歳三は言った。

「部屋を借りている。そこで話そう」

それだけ言うと、歳三はすたすたと廊下を歩いて行った。

趙雲と徐晃は一瞬顔を見合わせると、すぐに歳三を追いかけることにした。

◇

歳三が借りた、と言う部屋は城主の部屋から大して離れていないところにある。

ごく普通の、こじんまりとした質素な部屋だ。

椅子を一つ窓際に引つ張ると、歳三は腰掛けた。

「好きなように座ってくれ」

趙雲と徐晃も、真似をするように椅子を引つ張っていき、歳三の近くに腰掛けた。

「で、主よ」

「そうだな。では太史慈についてか、龍の咆哮についてか、城主の話。どれから聞きた

い」

趙雲の機先を制するように、歳三は言った。

話す気になつたらしい、そう思い趙雲は徐晃を見た。

「シャンよ、主からまず何を聞きたい？」

「えつと、良い話から聞きたい」

徐晃に、歳三は目を向けた。

「良い悪いが、あるとわかるのか？」

「なんとなくだけど。お兄ちゃんを見てれば、わかるから」

歳三は苦笑し。

「そうか」

と、だけ言った。

「では太史慈について話そう。つまるところ、私は振られたのかもしれない」

「あれだけやっておいて、駄目とは。主らしくありません」

「ま、私からして孫策から離れるなどという様な旨を言ったからね」

流石に、歳三の言葉に趙雲と徐晃は目を見開いた。

自分から、惚れただと負かすだと仲間にする等と言っておきながら、相反することを
するのか。

行っていることが支離滅裂であるとしたか、言う他ない。

「一番肝心な時に、説き伏せないとは、主は馬鹿なのですか？」

「私もそう思う」

趙雲の率直な批判に、歳三はけろりとしている。

事実、歳三自身も何故そんなことをやったのかわからない。

わからないままにやったのだから、散々馬鹿なことをしたと自分でも思っている。

しかし、悔いを含まないのが歳三であるから、案外とさっぱりしている。

「結局、どうやっても縁がなかったのだろう」

歳三が笑つて、太史慈についての話は終わった。

趙雲も徐晃もそれ以上は聞かなかつた。

既に、歳三の中では決着けりがついているのである。

聞くだけ無駄であるし、いつまでも頓着しない歳三が嫌いではないのも、ある。

場の空気を変えるように、趙雲が言つた。

「主が型破りなのは前から知つております故、何を言つても今更ですな。残るところは龍の咆哮のタネか、城主の話。私としては龍の咆哮について、知りたいですが」

「ふむ、君たちが龍と呼ぶ、この銃ホルスターのことか」

歳三が右腰に下げられた拳銃ホルスター囊から回転式拳銃を取り出した。

太史慈との戦いの時に使われたものである。

黒光りする変な鉄の筒、趙雲と徐晃にはそうとしか見えなかつた。

「本当にそれが、あんな音を？」

「そうだ。ここ、この引き金を引くだけで弾丸たまごが飛ぶ絡繰かぐりさ」

「威力はどれほどですか？」

「そうか、星は見たことがなかつたのか。香風は知つてはいるはずだ」

突然話を振られた徐晃は目を白黒させた。

「なんのこゝと？」

「私の、腹の傷だよ」

「あ……………」

ようやく得心したか、徐晃は声を上げた。

槍にしては細く、弓にしては太すぎる妙な傷。

歳三の負っていたそれを治療したのは、誰であろう徐晃である。

「あの傷……………」

「そうだ。種類は違うが、これと似たようなもので、撃たれたのだよ」

感慨深げに、歳三は言う。

「これがあれば例え戦を知らぬ子供でさえ、武の達人を殺すことができる一品さ」

歳三の脳裏には二人の剣客の姿がある、坂本と沖田である。

二人は誰よりも剣で強くありながら、銃への想いは真つ向から違っていた。

坂本は歳三にこれを渡しながら、無邪気に笑っていた。

——土方さまよ。これがあれば、武士だけが特別な時代は終わるぜよ。

——しかし、誰でも簡単に殺してしまえる時代でもあるんだぜ、坂本さんよ。

そう言うと、坂本は悲しそうにしていたのも、よく覚えている。

——僕は嫌だな、こんなもので今までの僕が否定される気がして。

沖田は銃が便利で強力なものであると理解しながら、嫌っていた。

剣で強くなることに拘っていた男だから、尚更不満であったのだろう。

歳三は、二人の気持ちもわかったし、理解もしていた。

ならば歳三はどっちだったのかというと、歳三は答えられないし、考えないようにしている。

「……主は一体何者なのですか？」

趙雲が万感を抑える様な声で、言った。

槍の名手であるから、沖田の様な一種の嫌悪感が銃にあるのかもしれない。

剣を一流まで習っておきながら、易易やすやすと手を変える歳三の方が、特殊とも言えた。

「それは、稟と風が居る時でなければ、不公平だ」

眠たげな眼をしながら、歳三は言った。

「いいでしょう。また追々話してもらおうとして、そんなものを太史慈殿に向けていたとは、主は正気ですか？」

「正気だよ。使わなければ、死んでいた」

どこか、歳三の顔は苦々しげでもある。

「私自身が凄いわけではないからね。道具に頼って勝ちをとつても、太史慈に振られるのは、当然かもしれない」

「道具は使ってこそですぞ、主。私としては、そんなものが戦の主流になるのは御免です

が」

少し、空気が重くなった。

徐晃は何も言わないが、どこか嫌悪している様にも見える。

逆に郭嘉や程立は、喜ぶのだろうなと歳三はぼんやりと思つた。

拳銃を元の拳銃囊に戻す。

「この話はやめて、城主の話をしよう」

「今までのが良い話ということは、その絡繰よりも悪い話ということですか？」

「そうなるな」

歳三はにこりともしない。

趙雲と徐晃が、真剣な眼差しで歳三の言葉を待つている。

歳三が、口を開いた。

「烏丸賊から、和平の使者が来たらしい。彼等は会談の相手として、私を指名しているよ
うだ」

◇

歳三から詳細を聞いて、途端に趙雲と徐晃は顔を青ざめさせた。

こんなこと、和平の使者と思う方が間抜けか阿呆の極みである。

趙雲は顔を陰しくしながら、それでも事態の解決を図ろうとしている。

「以前のシャンの偵察によれば、指定された場所は三方を点在する丘に囲まれた平原の、ど真ん中。兵の同道は中途まで、副官一人のみ同道可。向こうが設置した天幕内にて主が会谈をする」

三方に小高い丘がある平原など、兵を埋伏させておくのうつつつけの場所ではないか。

ついでに兵の同道を拒否し、武人らしく向かい合つて話し合おう、とまで言つてきている。

念には念を入れるとは言うが、ここまで入れてしまつては隠すこともできていない。うむ、と趙雲が結論付けた。

「罨ですな」

歳三、頷いた。

「だがね、これは問題だよ。受けねば私の首が跳ぶ」

トントンと、歳三は首筋を懐から取り出した鉄扇で叩いた。

「既に烏丸から和平の使者が来て、私を指名していることが城内、兵のみならず城下の民にまで広まり始めている。これでは、どうしようもない」

見てみる、と歳三は窓の外を差した。

市場で、店の軒先で、あらゆるところで何事かを喧伝している者たちがいる。

城主が此度の内容、民も知る必要があると歳三に言ったのは、このことであろう。

「受けざるを得ない、ということですか」

「そうだ。軍権を預けられているとはいへ、私は地位が低い。そもそも公孫贊殿の客將でしかないのだから。下手に断れば命令違反で処刑されるのも、目に見えている」

断る、という選択肢は最初から存在していない。

如何にして、入らざるを得ない畏から生き延びるか、を考える時なのだ。

「本当に、受けるのですか？ 主には逃げるといふ選択肢もあるのですよ」

「何もせず逃げる、というのを私が嫌いなものもある。が、これだけ民に広まっている以上、烏丸を敵に回すどころか幽州全体を敵に回すことになる。最悪、徐州に逃げ込んだとして美花でも庇かばいきれんだろう」

民を敵に回すことの怖さを、歳三はよく知っているつもりだった。

無力で暴力に対する手段を持たないからこそ、持たない者なりの手段を講じてくる。京で長州の間者が蔓延ることができたのも、偏に京の民の協力あつてこそであつた。無論、新選組に協力する民も居たわけだが、要はそういうことである。

「それに、組織からは簡単に逃げることはできんよ」

現に、新選組からの脱走者を全て捕まえ、処刑してきた男だ。

組織から逃げることの難しさを、よく理解している。

それが国、軍相手になれば尚更難しくなることを、心得ている。

「もう一つ、悪名は結構だが、汚名を被せられるのは私には耐えられん」

ここは歳三らしいなと、趙雲と徐晃は思わず微笑みを浮かべた。

勝つためなら何でもやる男だが、やはり誇りは持つているのだと嬉しくなったのだ。

歳三としては、一体どういう意味での微笑みかわからず、続けた。

「とにかく受けるしかあるまい。断れば死ぬのは十だが、受ければ一、二は生き残れる」

そう、締め括くくつた。

二人の言葉を待つように、歳三は腕を組んで趙雲と徐晃を見ている。

最初に口を開いたのは、徐晃だった。

「シヤンは、お兄ちゃんについていくって、決めたから」

「それが地獄へ続く道でも、か？」

「お兄ちゃんなら、シヤンを死なせないし、生きて勝つでしょ？」

「どうやら私は、果報者の様だ」

徐晃の言葉に、歳三は笑って答えた。

趙雲は二人のやり取りを静かに見届けると、いつもの口調で喋り始めた。

その顔は、晴れやかである。

「随分と、分の悪い賭けをなされるものですねあ」

「それがどうかしたか？」

「いえ、主はもつと手堅い人かとずっと思っていましたか」

「私はそんなに器用な男ではないよ」

歳三は、ぶつきらぼうに答えた。

「やつてもないのに死ぬのが、一番嫌なだけさ」

「では、何を考えているのですか？」

「命ある限り戦う、それだけよ」

歳三は笑った。

負け戦をこれでもかと経験してきた男である。

今更、苦境の一つや二つを前にしたところで、この男の笑みを崩すことはできまい。

生来の喧嘩師の、本領である。

趙雲と徐晃の言葉を覚悟と見て、歳三は口を開いた。

「なに、それでも勝算はあるさ。耳を貸してくれ」

趙雲と徐晃に、何事かを話した直後に、歳三らは出陣した。

烏丸の指定した刻限が、迫っていたのである。

虎口に入る

遼東の城より出て幾許かに、指定された平野があつた。

なるほど、徐晃の偵察能力は確かであると歳三は評価した。

三方を囲むように、小高い丘が点在している。

(これは誰であろうとも、兵を埋伏させるな)

と、歳三が内心呟いた。

しかし、歳三に止まるという選択肢はない。

軍勢を引き連れていざ虎口へ、と言うところで、若者が二人現れた。

格好からして烏丸であろう。

徐晃が殺気立つが、歳三は眠たげな眼を向けただけである。

烏丸の若者の内一人が、大声を張り上げた。

「そちらの黒きお方！ 土方歳三殿と、お見受けする！」

「そうだが」

うるさそうに、歳三は眉を顰めた。

「我らが首領は、二人きりで話し合いたいとのこと！」

「軍勢をここに置いて行けというのだろう。聞いている」

若者の言葉を遮って、歳三は言った。

一度頷いたが、また疑問が湧いたか、若者が問う。

「兵の数が少ないようにお見受けするが？」

なんでそんなことを知っているんだ、と歳三は相手の迂闊さを思いながら。

「和平の会談に、数多の兵は不要」

と、さあらぬ体で答えた。

納得したか、あるいは策がなったことが嬉しいのか、満足そうに若者は頷いた。

歳三はそれを疑問に対する了承と取り、振り返った。

「全軍、ここに待て。後は手筈通りに」

歳三が言うのと、整然と立つ。

短いながらも歳三の調練が生きているらしい。

が、歳三に向ける視線が、心配と怨嗟の二種類に綺麗に分かれていた。

余程、調練が苛烈だったのだろうか、いつそこで果ててしまえと思う者もいるようだ。

（目線で人が殺せりや、楽なもんだよな）

怨嗟の視線など、歳三は浴び慣れている。

ともかく、今は眼の前のことだと気持ち切り替えた。
若者の方へ、向く。

「(こちらはこの者を副官として同道する。よろしいか?)」

歳三は言った。

示したのはもちろん、徐晃である。

副官として選ばれて、嬉しそうに見えるのも間違いだらう。

徐晃の顔が、ほころ綻んでいた。

思わず撫でなくなるような、可愛い笑みである。

「では、我々についてくるように!」

「ああ、わかつているよ」

水を差す様な大声に、歳三は少し苛々しているようである。

そうした歳三の変化を機敏に察した徐晃は、歳三の手を引っ張った。

「行こう、お兄ちゃん」

「うむ」

若者二人を置いていくように、ずんずんと歩いて行く二人。

慌てて、若者たちが追いつがってくる。

追い抜きざま、批難の視線を向けられたが、歳三も徐晃も何処吹く風である。

「ところで土方殿」

「なんだね？」

若者の一人が、何か悪趣味を思いついたような声色で歳三に問い掛ける。

置いて行かれたのが少し、腹に据えかねたに違いない。

「副官としては幼く見えますが、まさか妹を嫁に迎えたのですか？」

徐晃が、斧に手を掛けようとした。

歳三共々愚弄された、と徐晃は理解したのである。

中でも徐晃の琴線に触れたのは歳三を愚弄したことである、自分のことは二の次だった。

しかし、意外にも歳三はやんわりと徐晃の動きを押し留めると、微笑を浮かべた。

「君には、そう見えるのかね？」

「は？」

「私には、最高の、愛すべき女が隣にいる。としか思っていないかったものでね」

歳三、尚も笑っている。

「烏丸にはどうやら、馬を見る目ばかりで、女を見る目はないようだ」

二人が、振り向いて歳三を睨み付けた。

今にも殺してやらんという空気であるが、歳三は笑うばかりである。

どころか、更に煽る。

「馬の尻ばかり見ているから、烏丸の若者は男色家ばかりなのかね？」

「違う！」

「なら、私の顔ばかり見てないで前を向いて歩いたらどうだ？」

露骨に舌打ちをすると、若者二人は前を向いた。

単純に分が悪いと思つたか、あるいはこれからのことを思つて耐えたか。

歳三は鼻を鳴らして、くだらないと呟いた。

「ねえ、お兄ちゃん？」

小さな声で、徐晃は歳三に尋ねた。

いつもの無愛想な面つらで歩いている歳三が、徐晃に目を向けた。

「最高の女つて、本当？」

もじもじと手遊びをする徐晃を見るまでもなく、歳三は言った。

「ああ。今すぐになでも、抱いてしまいたいほどにな」

かあつと顔を真っ赤にする徐晃。

敵地の真つ只中であるというのに口説きにかかるとは、やはり歳三は女好きである。

「さて、ここは敵地だ。もう少し気を引き締めて行こうか」

と、だけ言うと、徐晃はすぐにいつもの自分を取り戻した。

歳三が無類の女好きであるならば、徐晃はやはり武人であることは間違いない。

◇

天幕に近づくとつれ、歳三の足取りが軽くなつていく。

そう、気付いたのは隣を歩く徐晃だけであろう。

「お兄ちゃん、なんだか嬉しそう」

「香風には、わかるか」

「うん」

浮かれている、とするにはやや語弊があるか。

剣士として、新選組副長として、陸軍奉行並として数々の修羅場を戦ってきた男である。

慢心とか油断とか、そういったものが一番恐ろしいことは身に染みている。

歳三の今の心情を表すならば徐晃の言う通り、嬉しい、の一言に尽きる。

（俺も、暗殺を謀られるくらいにはなつたつてえことだよ）

暗殺を、一つの測りにしている。

確かに暗殺とは、それだけ個人が影響力を持つていることを示す標しるしにもなる。

が、普通ならば暗殺を計画されること自体を忌むか、避けるべきものなのだが。

（しかし、謀つたにしちゃ随分と舐められたもんだ）

歳三は内心、呆れている。

双眼鏡を使うまでもなく、丘の上に蠢く黒点が、見えている。

徐晃も歳三の内心を読み取ったか、呆れたように言った。

「兵の伏せ方が、下手」

「その通りだ」

伺うにしても、もう少しうまくやりようはあるのではないか。

そう思わずにはいられない杜撰なやり方である。

杜撰、と言えどもう一つ、歳三の目の前に広がっている。

（天幕の周りに、兵、か。警戒兵として置いてあるつもりなんだろうが）

会談の場所だという、天幕の周りに数名の烏丸兵が立っている。

何かあれば天幕に殺到し、歳三を殺すつもりだろう。

容易に、想像できた。

（俺もまだ、この程度ということか）

がつくりしながら天幕に入ろうとすると、前を歩いていた二人に止められた。

「申し訳ありませんが、腰の物をお外しく下さい」

一つも申し訳ないと思つてない癖に、と思ひながら歳三は兼定と国広を外した。

「そして、天幕の中は土方殿のみ入ることを許されます。副官の方は、外の方で」

徐晃にはそう言つて、天幕に入ろうとするのを阻む。

やはり一人にしたところで殺すつもりか、と歳三は看破し、徐晃へ向いた。

「香風よ、頼みがある」

「なに？」

「この兼定と国広を預ける。私の、いわば魂みたいなものだ」

眼を白黒させながら、徐晃は二振りの刀を受け取る。

敵に愛刀を預けたくないという、歳三の気持ちはわかる。

付け加えて、何故魂であるとまで言ったのかが、徐晃にはわからない。

「それが香風の元にある限り、私は死なないよ」

歳三は、静かに笑つた。

笑みを見て、徐晃は気が付いた。

これが、歳三なりの信頼の置き方なのだ、と、理解した。

抱きしめるように兼定と国広をかかえると、徐晃は大きく頷いて。

「わかつた」

とだけ、言つた。

歳三は徐晃の頷きを見て取ると、天幕の中へと入つていった。

もう、その時にはいつもの無愛想である。



「よくぞ参った」

天幕に入ったところで、装飾品に塗れた男が歳三を出迎えた。

見たところ、以前殺した首領格の男よりは派手に見える。

一見したところ、腰に武器はない。

(下品だな)

と、断じた。

異民族として忌み嫌っているというのも、今ならわかるかもしれない。

そんなことを考えながら、歳三は向かいの席であろうところに腰を下ろした。

「さて、和平の申し出、ということですが」

「なに、まずはここまで来てくれた苦勞ねぎらを勞ねぎらつて酒にでもしないか？」

歳三の賛否も聞かず、男は手を叩いた。

酔わせてから殺そうと言うのだろう。

狼は歯牙を抜いてから殺すのは、理屈としては合っている。

(俺が芹沢なら、喜んだだろうけどな)

かつての暗殺をふと、思い出した。

酔っていて尚、豪剣を振える芹沢を殺すのには難儀したものだ。

ただ、ここに居るのは芹沢鴨ではなく土方歳三である。

天幕に、酒の入っているだろうかめ甕を担いだ若者が入ってきた。

ぎよろりと、歳三の目が光る。

(帯剣した男が一人。そして入り口が一つ)

切れ長の眼を左右に向けながら、敵が押し入ってくるだろう場所を見定める。

こんな迂遠な方法を取るくらいなら、さっさと押し包んで殺した方が良かったらう。

歳三の人となり調べなかつた、烏丸の落ち度とも言うのは、酷か。

「では、一杯飲もうか」

杯を受け取っても、歳三は杯の水面を見つめるばかりで飲もうとしない。

「毒など、入れていませんぞ」

男が、歳三の不動を毒を警戒してと思ったか、先に杯を飲み干した。

につこりと笑いかけてくるが、卑劣さが滲み出てくるような不快な極まりない顔である。

(こんな男が相手じゃ、どんな珍味も毒になるよ)

酒に一口、舐めるように口を付けた。

(不味い)

もう、飲めない。

歳三はにこりともしないで、ただ杯を持って動かない。

予想とは違つたか、男が狼狽ろうばいした。

「酒が、嫌いなのか？」

「苦手だが」

歳三は杯の中身を、男に向けて捨てた。

飛沫が、男の靴に少しばかり掛かった。

「こんな不味いものが、酒とは思えん」

男のこめかみに、怒りの筋が浮かんだ。

それでも男は笑い顔の相好を崩さずに、若者にもう一度注つぐように命令する。

注つがれる度に、歳三は男の足元目掛けて酒を捨てる。

魂胆など見えているのだから、相手の機嫌を取る気など、歳三にはさらさらない。

「そんなに、嫌いか」

怒気を隠せなくなつたか、男が声を震わせる。

歳三は、涼しい顔で知らんぷりを決め込んでいる。

「では、とっておきの珍味を用意させましょう」

男と若者の視線が、交差したのを感じた。

(来るか)

面構えを一切崩さずに、歳三は密かに腕を動かした。

烏丸にはわからないだろうが、その手の置き方、どこか抜刀の構えに似ていた。

「では、こちらが烏丸の珍味となります。今、切り分けますので」

歳三の後ろで、あの若者が剣を抜いたのがわかる。

足音で、近づいてくるのもわかる。

(とんだ茶番だよ)

男が、剣を振りかぶったのを感じた。

「死ねえ！」

剣が、歳三の首筋目掛けて振り下ろされる。

(殺気も抑えず、声も抑えねえ暗殺者がいるかよ)

懐から抜刀術の如く取り出した鉄扇で、剣を受け止めた。

鉄で鉄を受け止めているとはいえ、勢いのあるものを止める相変わらざるの馬鹿力である。

る。

そんなことよりも、歳三には俄に怒りの感情が湧き上がっていた。

暗殺そのものに対してではない、暗殺者に対してである。

腰の踏み込みも、腕の振り方も、剣の質も、何もかもが甘いせいで、斬撃が弱い。

(暗殺をするなら)

かつ、と劍を弾くと立ち上がりながら劍士の横つ面を鉄扇で思いつ切り殴り倒した。頭蓋が割れた様な音がしたが、歳三は気にしない。

持っていた杯を、男に向かって投げつけた。

「ぐわっ！」

間拔けな声を上げながら、男が頭を抑えた。

眼をやったかと思う間もなく、歳三が読んでいた入り口から兵が雪崩れ込んでくる。殺到する刺客に、歳三は狼狽うろたえることなく対処する。

足を擦って砂を巻き上げ目潰ししたところを、えぐり込むように股間を蹴り上げる。

そのまま、悶絶して崩れ落ちそうになる男の襟首を掴み背負い投げ、後ろへと投げ飛ばす。

背後から歳三に迫ろうとしていた者たちが、わつと声を上げて男の下敷きになる。

死角より近づこうとしても、溢れる殺気で歳三にはお見通しである。

(もつと腕も剣も良いのを選びやがれ)

斎藤であつたなら、鉄扇ごと首を斬り落とせていたかもしれぬ。

そもそも、歳三が鉄扇を抜く前に、斬り伏せることができたかもしれぬ。

歳三の怒りは、妙な話だが暗殺に対する期待が、大いに外れたところが強い。

自然、声に出た。

「俺を殺したきやあ、齋藤君を連れてくるんだな」

それだけ言うと、歳三は天幕を飛び出た。

齋藤 それがし 某などと言われても、烏丸の者たちにわかるはずがなく。

しばし呆然としていたが、土方歳三の暗殺失敗を悟るとすぐに気を取り直した。

依然として、歳三が虎口に居るのは間違いないのである。

◇

「お兄ちゃん！」

「香風！」

徐晃から兼定を受け取ると、即座に抜き打ちで踊りかかってきた一人斬り殺した。

「逃げるぞ」

斧を使って文字通り烏丸を吹き飛ばす徐晃に言うと、歳三は駈け出した。

徐晃も、歳三に続いて走り出す。

後ろから烏丸の連中が追いかけてくるのがわかるが、彼等の足には敵わない。

存分に引き離しながら、徐晃は歳三に問い掛けた。

「大丈夫だったの？」

「大丈夫どころか」

歳三は、呆れた様に笑った。

「あんなもの、暗殺とも言えないよ」

わっ、と声が上がった。

丘の向こうに潜んで居た烏丸の、軍勢である。

(思っていたより、多いな)

ちらりと前後左右を見渡しながら、歳三は思った。

ともすれば、以前の時よりも兵数は多いかもしれない。

それだけ、歳三に対する憎しみが烏丸にはあるとも言えたが。

(いいじゃねえか)

恐怖の二文字は、この男にはない。

けれども今は、敵に背を向けたとしても逃げる時である。

虎口の入り口に置いていた兵たちも、既に撤退を開始している。

「ちゃんと手筈通りに動いているな」

歳三はそう呟いた。

何てことはない、異変があれば城に向かって逃げる、が歳三の言う手筈だった。

むしろ救出などといって突っ込まれてきたほうが、包围殲滅の恐れがあった。

これでも、歳三は一軍の将である。

兵を無駄にするようなことはしたくない。

(後は、無事に城につけるかどうかだ)

一抹の不安が、歳三にはあつた。

◇

二人の足は、早い。

あつという間に軍団に追いつくと、走る速度をやや落とした。

歳三と徐晃しんがりが殿しんがりについての、撤退戦である。

前は追う側だったが、今度は逃げる側とは面白いものだと、歳三は笑つた。
相手も、変わらず烏丸である。

(ふむ)

追いかけてくる速度は、烏丸の方が少し速いようである。

怒濤に響く足音が、近づいてくる。

(全体が速いというわけじゃあるまい)

足の速い一部が、突出してきていると見た。

「香風よ」

「なに？」

「合図をするからそれに合わせて振り向くのだ」

「それから？」

「思いつ切り斧を振り抜け。心配はいらん、私が援護する」

「わかった」

歳三が援護してくれる、ならば憂いはないと徐晃は思っている。

一つ、二つと呼吸を重ね、歳三が今だと叫んだ。

瞬間、徐晃は振り返り斧をぶん回した。

追いつきかけていた烏丸の一部が、空を舞った。

斧を振ったせいで、徐晃の脚が止まる。

好機、と見たか烏丸の一部が徐晃に斬りかかろうとする。

黒い影が、湧いたかの様に見え、血飛沫が上がった。

徐晃の影を縫うように、歳三が突出しては斬り殺し、下がる。

体勢を立て直した徐晃と共に、また逃げ出す。

(この手には昔、散々やられたもんさ)

逃げながら、足の早い追手を振り向きざま斬り殺す。

維新志士の中でも脚自慢の手練たれが、よくやっていた手だった。

歳三はそれを、四方から包囲して捕殺する、という手段で対抗したが。

「お兄ちゃん」

「なんだ、香風？」

「斧に、当たるとよ？」

「なに」

歳三は、いつもの調子で答えた。

「心配せずに振つてくれればいい。私はこういう戦いは得意でね」

乱戦の心得が、歳三には大いおおにある。

京、という狭い街路や天井の低い家屋に幾度となく動きを制限されながら戦つてきたのだ。

徐晃の暴風のような斧の狭間をついて敵を斬り倒す等、兇戯にも等しい。

◇

そうやって何度となく、追いつがる敵兵を蹴散らしていけば、自然追いつくものは減る。

なれば逃げ切るのも容易になる。

とは、歳三は思っていない。

(そろそろ、来る筈だ)

人間のものではない、力強い足音が聞こえる。

規則的に、地面を蹴る四つの足音。

(来やがったか)

烏丸の、騎兵である。

人が走るよりも速く、歩兵よりも強い騎兵は、厄介だった。

倒すのはもちろん、軍勢の横を突かれる恐れがあった。

事実、烏丸の騎兵たちは歳三らに近づこうとせず、横から強襲を仕掛けようとしていた。

こればかりは、歳三にもどうしようもない。

被害が少ないことを祈るか、あるいは当たりもしない銃を撃つてみるか。

歳三、少しだけ躊躇した。その時、騎兵が一人、落馬した。

男の首には、一本の矢が深々と突き刺さっている。

(まさか)

尋常ならざる弓の腕前を持つ者を、歳三は一人しか知らない。

次々と、騎兵の首に矢が突き刺さり落馬していく。

突然現れた弓遣いに恐れをなしたか、騎兵たちが下がっていく。

正にあの日、あの時と同じように、弓を構えた赤銅の女が進路上に立っていた。

「太史慈?」

徐晃が疑問符を浮かべる。

太史慈が、大声を上げながら近づいてくる。

「歳三ー！ ごめんよー！ 私はやつぱり雪蓮しえれんと冥琳めいりんのことを忘れられそうにない！」
どこか、涙を浮かべているようにも見える。

太史慈なりに、必死になって考えたのだろう。

考えに考えぬいた結果、彼女はここに居る。

「でも！ でもさ！ それでも歳三と一緒にいきたいんだ！」

「いいや」

歳三は笑った。

「まずは、虎口を脱することだがね」

太史慈と徐晃、稀代の豪傑を両翼にして、歳三は遼東の城を目指してひた走る。

烏丸はいつの間にか、追跡の手を緩めていた。

◇

太史慈の合流もあり、歳三たちは全軍無傷で遼東の城に戻ってきた。

軍勢を急いで城の中へと入れさせる。

(まずは、一段落か)

そう歳三が思った時、徐晃が小さく声を上げた。

「あ、星」

城門にもたれかけ、趙雲が立っている。

明らかに不機嫌そうな顔であった。

歳三に心当たりはない、趙雲が今回同行していないのは、歳三の策である。

「主は私がこうやって城門を開けている間、女子おなじを口説きに行っていたのですか？」
なんてことはない、嫉妬である。

どうやら新しく合流した太史慈を見て、妬いているらしい。

「ああ、こんなにも疲れる役目を押し付けて置きながらこの仕打。酷いですなあ、主は」
歳三、城門を閉じさせないために、趙雲を敢えて連れて行かなかつたのだ。

虎口は三方を閉じられていた。

ならば、どこを閉じれば四方を閉じることができると考えた時。

自然、城門であると歳三は勘付いたのである。

現に趙雲の足元には、城門を閉じようとしたのであろう者たちの遺骸が転がっている。

「そんなに疲れたか」

「ええ、ええ、疲れましたとも。もう歩けませんな」

「そうか」

歳三は趙雲に歩み寄ると、有無を言わせず抱きかかえた。

腰に手を回し脚の下に手を回す、いわば西洋の騎士が姫を抱きかかえる格好である。突然のことに趙雲は唾然としていたが、状況を掴むと顔を真っ赤にした。

兵だけでなく、民も皆が歳三と趙雲に注目している。

「あ、あの、主？ これは些いさか、恥ずかしいのですが？」

「歩けないのではなかったのかね？」

「い、いえ！ 歩けます！ 歩けますとも！」

「ふむ」

歳三はすくと趙雲を下ろすと、すたすたと歩いて行き号令を飛ばした。

「城門を閉じよ！ 烏丸が来るぞ！」

切り替えが早い、というよりこれは。

「星、からかわれただけ」

徐晃の言葉に、趙雲は地団駄を踏んで答えた。

◇

「何か、策はあるの？」

城門を閉じる命令を飛ばす歳三に、徐晃は尋ねた。

策もなく戦う男ではないと、わかっている。

事実、歳三には策があった。

「うむ。太史慈は遼西に居る公孫贊殿のところへ向かつてくれ」

「どうして？ 折角歳三と戦えるつていうのに酷いじゃないか！」

「そう言うな。公孫贊殿の所に郭嘉と程立という者がいる。彼女らに、こう伝えて欲しいのだ」

心底悲しそうな表情をする太史慈に、歳三は言った。

「義豊が助けを求めている、とな」

「それって……」

歳三は答えず、ただ笑った。

「さあ行け、城門が閉まるまでに時間が無い！」

笑いながら急かすという器用な真似をしながら、歳三は太史慈を送り出す。

太史慈は馬に飛び乗り城門へと走らせながら、歳三に振り返る。

「と、歳三！ 私の真名は！」

「大丈夫だ」

歳三はきつぱりと太史慈の言葉を遮った。

「帰ってから、聞こう」

静かだが、力強い言葉だった。

太史慈は花咲くような満面の笑みを浮かべると、遼西へと向かつて城門を抜けていっ

た。

「さて、主には色々聞きたいことがありますが、一先ず置いておいて」
趙雲が嫉妬を含みながら、歳三に問う。

「これから、どうされるおつもりですか？」

「決まっている」

当然だという様に歳三は答えた。

「軍権を強奪しに、城主の元へ行く」

戸板に水を流すように、歳三はさらりと言い切った。

軍権強奪

俄に城外が騒ぎ始めた中。趙雲がまず、口を開いた。

「主、先に一つ聞いておきたいのですが」

「なんだね？」

「正気ですか？」

徐晃も、眼で歳三に訴えかけている。

軍権を強奪しようなど、どう考えても完全な叛逆である。

公孫賛と敵対する、と幽州全体に公言してしまうようなものだ。

そもそも、そんな暴挙を烏丸襲来に怯える民が、許すか。

時として民は強さを発揮するのだと、趙雲は暗に言っている。

が、歳三は変わらず眠たげな眼である。

「正気も何も、私はいっただって本気だよ」

と、言うのと少し考えて、言い直した。

「流石に強奪は、言い過ぎたかもしれない」

ほっと、趙雲と徐晃は息を吐いた。

「脅し取る、ぐらいか」

「変わっておりませんぞ」

即座に趙雲が突つ込んだが、歳三は素知らぬ顔である。

尚も何か言いたげな二人に向かつて、妙な話を、歳三はした。

「昔、村の者を使つて薬の元を收穫したことがあつてな。私はその指揮が滅法うまかつた」

「確かに、主の指揮ぶりを見ればなんとなくわかりますが、それが？」

「時々、兄あにイたちがやつてきて口を出す度に、作業の能率が落ちた」

趙雲は理解した。

命令が何箇所からも出ることによる兵の混乱を、歳三は危惧していると。

無論、徐晃も理解している。

しかし、歳三の行動はどう考えても過激と言わざるを得ない。

「ですが、主に降りかかるのは確実に悪名ですぞ」

「今更だよ」

鼻で、笑つた。

「悪名なんざ、着慣れてるさ」

「兵も民も、主を恐れるようになります」

「それがどうした」

鬼だ、修羅だと、歳三は言われ慣れている。

血が通っていないとも、木の股から生まれた等と噂されたこともある。

ブリユネからは時に、血の冷たい吸血鬼の様だね、と半ば本気で言われたこともある。もちろん、歳三は吸血鬼の詳細を聞いてから、手を叩いて喜んだが。

（俺ア、喧嘩師だからな）

どこまでいってもそこまでの人間だと、わかっている。

必要さえあれば、自分ではない誰かを担ぎ上げても良いとさえ、思っている。だから。

「私には、星が居ればそれでいい」

涼やかな顔で、歳三は趙雲に笑いかけた。

趙雲、なるべく平然を装っているが、耳を赤くしている。

歳三はそれに気付かない振りをし、徐晃に向いた。

「もちろん香風もそうだ」

照れたように徐晃が頬を掻く。

歳三は続けた。

「二人だけではない、稟も風も、そして太史慈が居るのであれば、私は望外の幸せ者だよ」

嘯みしめるように歳三は言い。

「私が兵や民に好かれる必要はない。それは、私の分ではないさ」とまで、言った。

歳三、しばし待つ。

趙雲と徐晃に、言葉が染み渡るまで、待っていた。

二人が頷いたのを見て取ると、歳三は行動に移る。

「さあ、行こうか」

もう、歳三の顔はいつもの無愛想に戻っている。

歩いて行く歳三の背中を徐晃と追いながら、趙雲は主と仰ぐ人物を思い返していた。

やると言ったなら絶対にやる男、それが土方歳三。

嫌という程わかりきっていることではないかと、趙雲は心の中で溜め息をつく。

同時に極度の高揚感も覚えている。

趙雲自身も、自分が人を振り回す方だと理解している。

それが、いつの間にか振り回される方になっていく。面白いと言う他ない。

正直な感想が、口から漏れ出ていた。

「主は嫌われ者になろうと努力されているのですなあ」

「なに、性分さ」

歳三は趙雲とのやり取りに、どこか懐かしさを覚えながら、苦笑した。沖田にも、同じことを言われたことがある。

あの剽ひょうせん軽な若者が今の歳三を見たら、何と云うだろうか。ふと、気になった。

(いいさ。何とでも、言ってくれ)

とだけ思うと、戦へと歳三は意識を切り替えた。

◇

城主の元へと殴り込みをかける、と言つては少し物騒ぶつそうが過ぎるか。

止める衛兵を押しつけながら、部屋へいの扉を開け放つた。

中では喧けん々けん諤がく々の議論ぎろんがなされているが、歳三は意見飛び交う最中へ平然と歩いて行く。

部屋の中央でようやく足を止めた歳三に気付いたか、水を打った様に静けさが訪れる。

城主も含めた幾人かが、歳三の顔を見て青い顔している。

(やはり、烏丸と謀りやがったのはこいつらか)

しかし、今のところ烏丸との共謀について糾弾する気など、歳三にはさらさらない。

歳三の頭のなかにあるのは、如何にして軍権を奪うかにある。

猛者である趙雲と徐晃を左右に控えながら、歳三は言った。

「さて、烏丸がこうして城を囲んでいる中、貴殿らは如何なされる」

歳三は静かに微笑んでいる。

武官の一人が、勝手に城門を閉めるのは重罪である、と言ってきた。

顔が、青ざめきつている。

「ほう、貴方は何もせずはこの城の民が烏丸どもに蹂躪されれば良い、と仰るのですか」

冗談めかしながら歳三は言ったが、眼だけは笑っていない。

「それはつまり、この遼東の民はどうでも良い、と。貴方は思っている」

武官が更に反論しようとするより先に、歳三は言った。

「真に遼東の民を思うならば、今は閉門に關して不問にしていたきたい」

あくまでも民のことを思ってやったのだと、歳三は言っている。

武官も馬鹿ではない、これを罪に問うならば遼東の民はどう思うか。

押し黙る他、なかった。

城主が声を震わせながら、貴殿ならどうする、と問うてきた。

笑みを崩さず、歳三は言った。

「私は公孫賛殿の客将の身。全ての決定権は私にはありません」

ですが、と続けて。

「私に全てを任せて頂けるのであれば、この事態を收拾してみせましょう」と、言い切った。

一斉に批難の声が上がった。

なんたる無礼、なんたる不遜と、罵詈雑言が飛んでくる。

徐晃が己の得物に手を掛けようとしたのを、歳三は手で軽く制した。

お前ならなんとかできるのか、と文官の一人が叫んだ。

その言葉を待っていたと言わんばかりに、歳三は畳み掛ける。

「もし、私に全ての軍権を渡すのであれば。公孫賛殿と共に四方の敵を打ち破ってみせましょう」

趙雲は隣で歳三を見ながら、内心感嘆した。

救援の遣いを既に出しているながら、まるで相手に悟らせない。

どころか、遠回しにこの状態から救援要請までも出せると思い込ませる口振りである。

更には嘘を一つも言っていないのが、余計に性質たちが悪くもある。

大した役者ぶりである、と思いつながら、歳三の肝は鉄で出来ているのだ、と再確認した。

文官の一人が、城主に進言する。

このまま歳三の言う通りに軍権を任せれば、裏切られるだけである、と。歳三は、言った。

「ならばこの城を枕としてお死になさい。私には先程述べた通りの秘策がある」
軍権を渡して生きるか、渡さずに死ぬか。

形としては譲渡を促している様に見えるが、半ば脅しであるし、強奪と言っても過言ではない。

歳三には四方包囲の中で使者を出せる策がある、と城主たちは思い込んでいる。

出せるから、公孫賛と連絡を取り合つて烏丸を撃滅もできるし、逃げることもできるのだと。

城主が震えながら、一つの印綬を文官に持つてこさせようとするのを、歳三は止めた。「少しお待ちを」

大きく肩を震わせながら、城主は歳三の言葉を恐々としながら待つている。

「私が全軍を預けられたことを、兵士のみならず人民全てに伝わるようにしていただきたい。烏丸との和平を、皆に広められた貴殿なら、できるでしょうか？」

ぎよろりと、歳三の眼が光つて、城主を射抜いた。

最早、城主は力なく項垂れるばかりである。

こうして歳三は、遼東の城に於ける軍最高司令官に就任することに成功した。



城を攻囲する烏丸を眺めながら、歳三は内心で呻いた。

(暇な喧嘩だよ。やはり喧嘩は、守るより攻めるに限る)

が、ここは生粋の喧嘩師である。

守ることに關しても手を抜かないのが、歳三という男だ。

城の兵力約6000を三隊各2000ずつに分け、8時間交代で防衛に当たさせた。

この時、歳三の懐中時計が大いに役に立った。

時間の概念を測る物としては使えないが、区切りとするならば十分役に立つ。

休憩も食事も、ゆっくりと取れるので兵士の誰も、文句は言わなかった。

(相手も、単純過ぎる)

防衛側は基本、城壁から弓を射掛け、壁に取り付くものに熱湯などを浴びせかける。

烏丸は遊牧民族の側面が強く、攻城戦に關してはあまり経験がないのだろう。

兵に關しても歩兵や騎兵ばかりであり、数で押せば城は落ちると思つてゐる節がある。

それも、ある意味では間違いないが。

(少し、見回るか)

歳三は烏丸の矢を全く介さずに、悠々と城壁の上を歩いている。

仮にも総大将がこれである、事情を知る兵は止めようとするが、歳三は知らない顔だ。一人の弓兵をじつと見ると、すたすたと歩み寄った。

「君」

びくりと、兵士の肩が震えた。

この兵士も土方歳三の雷名をよく聞いている一人だった。一見優男、その実は鬼の如し、と。

三倍の兵力差を打ち破った話と、恨み言が流れるまでの苛烈な調練の噂を、何度も聞いている。

そんな男に話しかけられて、恐れ慄くおののなという方が無理だ。

「狙つちや駄目さ」

何を素つ頓狂な事を言い出すか、と兵士は眼を丸くした。

弓は番つがえ、構えて狙うのが当然のもの。そういつた基本も知らないのか。と、叫びそうになるのを堪こらえた。

あくまでも歳三は今、軍全権を預かる身である。

下手な事を言つてしまえば、処刑されても何もおかしくはない。

「ふむ。確かに、弓に關しては私も素人だ」

歳三の言葉に、兵士は顔からさつと血の気が引くのを感じた。

全身から冷や汗が吹き出し、身体がとても重い。

心を読まれている、としか思えなかった。

化生けしやうか怪物が、眼の前に居るのではないかと思つたほどだ。

だが、歳三は兵士を責めるどころか、勇気づけるように肩を叩くにつこりと笑つて。「君は戦の素人だろう?」

と、言った。

一体どこまで見抜いているのかと、兵士はいよいよ恐怖した。

歳三の言う通り、この弓兵は本格的な戦鬪行為は初めてであつた。

訓練は一通り重ねているが、実戦はない、典型的な例である。

「あの辺り、あの辺りを目指して射うつんだ。人は狙えないが、地面は狙えるだろう?」

地面に円を描きながら指差す歳三に、兵士は馬鹿にするな、とやや意気込んだ。

しかし、歳三の言いたい意味がよくわからない。

とりあえず射ちたまえ、と言う歳三。

半信半疑のまま、兵士は言われた通りに弓を射つた。

するとどうだ、射られた矢が唸りを上げて烏丸の兵士の身体に刺さつた。

「こうすれば敵の方から、飛び込んでくるようになる」

次々と矢を射掛ける。

先程とは打って変わって、面白いように矢が当たりだす。

矢は、鉄砲と違って上に向けて射つとどうしても威力が数段落ちる。

故に有効打にするには、ある程度城壁に近づくことが必要なのを、歳三は見抜いていた。

歳三が差した辺りこそが、矢を城壁に射掛けるのに一番良い距離なのである。

「ほらね」

それだけ言うと、歳三は興味を失った様にすたすたと去っていった。

弓兵はしばし、黒い影の様な後ろ姿を呆然と見つめていた。

◇

烏丸の包囲が始まって、数日が経過した。

日に日に、烏丸の兵力は増えていくようだったが、遼東の城はびくりとも動かなかった。

指揮が鋭いのもある。雷光のように一つの場所から飛び出す命令は、兵に混乱を与えない。

猛将である趙雲と徐晃の存在も大きかった。

が、一番は歳三の存在であろう。ぎよろぎよろと冷たい眼を光らせてどこにでも現れる。

西の城壁を守る兵に助言を与えたかと思えば、東の城壁から烏丸を見下ろしていたり

する。

城の中で軍規に反する行動をしようとする兵士たちの傍らにふと、立つていたこともあつた。

妖怪としか思えない神出鬼没ぶりに、兵は烏丸よりも歳三を恐れていた。

そして件の歳三は今。じつと、城壁の上に椅子を置いて座り、時折双眼鏡を覗いてる。

「防城戦とは、案外と暇なものですな」

「貝の蓋の様に閉じた城を攻めるのは、普通は下策だよ」

こんな風に気軽に歳三に話しかけるのも、趙雲か徐晃しかいない。

事実、呑気そうに話しかけたのも趙雲であつた。

「それに、火砲がなければ城相手には攻め手が少ない」

「かほう、とは？ 衝車しょうしゃや雲梯うんでいではなくてですか？」

歳三は趙雲の言葉にふむ、と頷くと。

「どうやら、私にはまだまだ学ぶことが多いようだ」

と、だけ言った。

趙雲の言葉から推測するに、歳三にとって未知の攻城兵器が、存在することになる。

(銃がなくとも、面白れえじゃねか)

喜々として光り出す歳三の眼を見ながら、趙雲はまた余計なことを言ったかな、と

思った。

そんな風に趙雲が思っているのも露知らず、歳三は口を開いていた。

「それにね、こんなに楽な戦はないよ」

歳三は眼下の烏丸に睨みを聞かせながら、言う。

「味方が来ると、わかつているんだからね」

「ふむ、では味方が来ない籠城戦を、主は経験したことがあるのですか？」

「あるよ」

平然と、言った。

五稜郭での、芯まで冷えるような寒さの日々を、歳三は今でも忘れていない。

腹の傷も、時に疼くことがある。

「ではここに居るといふことは、勝ったと？」

「いや、負けた。そして土方歳三という男は終わる筈だった」

面白そうに、歳三だけが笑った。

「妙な話さ」

笑い続ける歳三に、趙雲は啞然とする他なかった。

尋常ではない尋常ではない、とは思っていたが、この男は何者なのか。

主君と定めて着いて行くと決めた以上、詮索をしないのが武人の在り方である。

だが、あまりにも謎めいていて、確かめたいという気持ちも大きくなりつつある。

趙雲がつい、聞いてしまいそうになった時、歳三が先に口を開けた。

「私は、稟と風を信じている。もちろん、太史慈のこともだ」

歳三は趙雲に柔らかく微笑んでいる。

その想いわかる、が今は待つてくれと眼が言っていた。

趙雲は即座に、疑問の心を切り捨てた。

今は、ということはいつかがあるということだ、と趙雲は受け取った。

受け取った以上、気持ちは既に戦の中にある。

「公孫賛殿の軍は来る。だから私は、烏丸をここに貼り付けなければ」

「おや、それは一体どういうことですか？」

「烏丸を逆に包囲殲滅するには、このまま奴らに攻撃させ続けなければならぬ。しかし、どうも頭のキれるのはどこにでも居るようだな。退却の指示を出し、進言しているのが、居る」

「ずつと、千里眼を使っていたのはその為ですか」

双眼鏡だ、と歳三は訂正してから、言った。

「やがて厭戦の気運は全体に広がり、烏丸は退却するだろうが、そうされては困る」

「何か手はあるのですか？」

「あるよ」

歳三は、即座に言った。

「星よ。確か、酒に詳しかったな？」

趙雲、今度は疑問符すら浮かべなかった。

無駄な話を、特に戦の最中にするような男ではないと、わかっているからである。

すぐに、答えた。

「ええ、それはもちろん」

「ここで一番質の悪い酒を、持ってきてくれ」

「どうなさるおつもりです？」

にやりと、悪どい笑みを歳三は浮かべた。

ああ、これは何か面白いことをする顔だな、と趙雲は悟った。

「烏丸の親玉に、一芝居打ってやるのさ」

「ほう？」

「耳を貸してくれ」

何事かを、趙雲に耳打ちする歳三。

策を聞き終えた趙雲は、悪戯いたずらを仕掛けるような悪童の顔をしていた。

「それは、面白そうですね」

「だろう？ それにこれは、星だからこそより効果的でもある」

「その御心は？」

「誰から見ても、星は可憐な蝶だからね」

真正面からそんなことを言われた趙雲はしばし、顔を赤くして立ち尽くしていた。

歳三はそんな趙雲を尻目に、どこかに消えていたが。

◇

歳三、城壁の上にとっかかりと胡座あぐらをかく。

包囲する烏丸の中でも、一番派手な装飾品を付けた男が特に見えるような場所を選んだ。

城主と組み歳三を暗殺しようとした、例の男である。

他の烏丸の者たちも、何だ何だと歳三らに注目し始めている。

傍らに徳利とっくりを持った趙雲と、武装をしていない兵たちが現れた。

歳三は片手に杯を持って、趙雲に徳利の酒を注そそがせた。

舐めるように飲むとして、男に向かって酒を捨てる。

無論、捨てられた酒が男にかかることなど微塵もないが、男は顔を歪ませた。

偽りの和平会談での、再現である。これを侮辱と取らずになんと取る。

「烏丸のものは」

よく通る声で、歳三は言う。

「馬の尻ばかり追い掛けているから、こんな可憐な女ではなく男しか見ないのだろう」
兵たちが、大きな笑い声を上げた。

武装をしていない者は、歳三が選り抜いた、敵の前でも笑える胆力を持つ兵たちである。

続いて趙雲が、色香を辺りに振り撒きながら歳三に撓しなだ垂れ掛かる。

歳三はあやすように趙雲を撫でながら、明らかな嘲笑を浮かべた。

「女も酒もわからぬ、馬鹿ばかりだ」

男の顔が一気に紅潮し、赤ら顔になった。

双眼鏡を覗かなくとも怒気を発しているのがよくわかる。

周りが止めるのも聞かず、怒鳴り立てている。

歳三に射掛けられる矢の量が、数倍にも増えた。

依然として、歳三は相好を崩さずに趙雲を愛でている。

「主は、怖くないのですか？」

「烏丸の弓など、怖くはないさ」

趙雲の問いに、歳三は続けた。

「弓で私を殺せるのは、私を知る中でも太史慈くらいだろうさ」

言い切った。

歳三の心中には、自分に矢など当たらないという信仰の様なものがある。

その信仰が骨となり血肉となり、この男の面構えを作り上げているようだ。

事実、この傲岸な男を恐れるように、矢は外れて飛んで行く。

「そういうものですか」

「そういうものだよ」

趙雲も、歳三に愛でられる内にそんなものかと思うようになり、身を任せることにした。

存分に烏丸を挑発すると、止めと言わんばかりに杯を投げ捨てて、歳三と趙雲は引込んだ。

烏丸の攻勢は増々強まったが、歳三は笑うばかりである。

◇

一夜経ち、歳三の大芝居は大いに当たったことを誰もが知った。

烏丸は撤退を考えることなく、遼東の城を落とさんと氣勢を上げている。

包囲する人数も増えるばかりで、城主と取り巻きの武官文官は顔を青くするばかり。

一方、徐晃は芝居に呼ばれなかったことで、趙雲とは対照的に不満顔であったが。

そんな中で歳三は一人、今日は何かあるに違いないと読んでいた。

喧嘩師特有の、勘である。

徐晃を副官に兵を集め、城門の前で静かにその時を待つていた。

城外から悲鳴が聞こえたと同時に、城壁から声が降つてきた。

「白馬が見えます！ 公孫贊殿です！」

兵だけでなく、閉じられているばかりの民家からも歓声が湧いた。

援軍来たる、ただそれだけで遼東の城全てが息を吹き返したようだった。

報せに、歳三にしては珍しく感動の声を上げた。

「いつか公孫贊が凡将と言つたが、あれは間違いだつたよ」

徐晃に笑いかけながら、言う。

不満そうにむうつと頬を膨らませながら、徐晃は歳三を見た。

「稟と風の、その意見を容れられる人間だ。立派な大將軍さ」

歳三は嬉しそうに笑つた。

総大将が動かずに負けるという経験を、歳三はかつてしている。

徳川將軍が動いたならば、旗本八万騎が働いたならば、と何度も苦渋を舐めてきた。

公孫贊自らが兵を率いてくるということに、より感慨深いものがある。

「さて、我々も動く番だ」

歳三は徐晃の頬を軽く突付いて、そつと耳打ちした。

「これが終わつたら、香風の言う事を何でも聞こう」

「本当？」

「私はね、人を糠喜ぬかびさせる嘘は付かない主義だよ」

と、言うのと兵に振り返り、兼定を抜いて大声で叫んだ。

「今こそ、城より打って出て公孫贊殿と共に烏丸を撃滅する時である！」

城門を開かせる。

右往左往する烏丸の姿が、見えてきた。

わっ、つと兵士たちが関とぎの声を上げて、命令を待つている。

「全軍、私に続け！」

走り出す歳三に続いて徐晃が大斧を振りかざし、兵士たちも武器を持って烏丸へと突撃する。

兼定が、光を受けてぎらりと光った。

◇

公孫贊軍本隊と呼応しての、逆包囲殲滅は大成功に終わった。

郭嘉と程立はやはり最高の軍師であると、歳三が何度も思うほどである。

情報を集めれば集めるほど、歳三は感心する声を漏らさずには居られなかった。

「凄いな、稟と風は」

兼定の血を拭いながら言う歳三に、徐晃は首を傾げた。

「二人は三方を通常軍で抑え、逃げ道を残していた。正に私がやられたのと同じだな」
歳三が城から打って出ることも、織り込み済みとしか思えない兵の伏せ方だった。

最初に姿を見せた白馬も、公孫贊が来たと烏丸に印象付ける為と歳三への合図だったらしい。

将としての歳三の在り方を見抜いた上での、見事な采配である。

結果、烏丸は極度の混乱の中、内から外からの包囲攻撃を受けて、壊滅。

生き残った烏丸たちも、逃げ道として開けられた方へと吸い込まれていった。

ここで凄まじいと歳三が思ったのは、最精兵の白馬義従がそこに伏せられていたことである。

公孫贊と白馬義従の本体は、逃げ道に埋伏して潰走する烏丸を存分に打ち破ったようだ。

大戦果だな、と歳三はひとりごちながら、徐晃に尋ねた。

「さて、香風に聞きたいことがあるんだが」

「なに？」

「臣下の礼の取り方を、教えてもらいたい」

徐晃は眼を丸くして驚いた。

皇帝にだつて頭を下げそうにない男が、臣下の礼を知りたいなど天変地異の前触れでは。

そう思うくらい、普段の歳三は無愛想で突飛で不遜な男なのである。

「お兄ちゃんが頭を下げる？」 「冗談？」

「冗談なもんか」

歳三は無然とした表情で言った。

「今の私は軍権を強奪した、いわば叛逆者だ」

一応は讓渡の形を取っているとはいえ、さんげん讒言一つで歳三の首は跳ぶ。

特に遼東の城主と取り巻きは、公孫贇の到着を幸いと歳三の暴挙を訴え出るに違いない。

だからこそ、歳三は更に芝居を打つ必要があつた。

「そんな私が、処刑されずに生き残るには、公孫贇殿に軍権を返し頭を下げるしかない」

徐晃は驚いた顔をしている。

「らしくない」

「当たり前だよ」

くすくすと、歳三は笑つた。

「稟と風が、公孫贇の近くに居るからこんな強硬策をしたんだ」

信頼されている、と言えば聞こえは良いが、比例して随分と面倒なことを押し付けられる。

とんだ部下思いの主人であると、徐晃は素直に思った。

「二人が可哀想」

「しかし、私らしくて面白いだろう？」

徐晃は、歳三の言葉に笑って答えた。

なんだかんだで、そういう歳三が好きなのである。

遠くから、馬が一騎駆けて来るのが見えた。

歳三は眼を細めて、呟く。

「ああ、やはりうまくやってくれたようだ」

軍馬に乗って大きく手を振る太史慈に、歳三は微笑みながら手を振り返した。

器

軍靴で土を踏みしめながら、歳三は徐晃と太史慈を横に、城門の入り口に立った。

公孫贊が白馬義従と共に、趙雲に続いて来るのが見える。

隣には、郭嘉と程立が控えていた。

(なるほど、随分と重宝されているらしい)

歳三は嬉しくなった。

郭嘉と程立の能力がちゃんと評価されていることか、もしくは公孫贊の度量に対してか。

どちらも、というのが正しい。

旗本でないからと、生まれが武士でないからと、迫害された。

れつきとした身分ではないから、献策を容れられず侮蔑されたこともあった。

そういつた全てが流れていくような万感たる想いが、ある。

(公孫贊は、いいな)

無愛想な面構えを崩すことなく、内心で歳三はそんなことを考えていた。

(しかし、今はそれどころじゃねえ)

ちらりと後ろを見れば、城から城主と取り巻きたちがやって来るのが見える。

公孫賛に歳三について讒言ざんげんしようとしていることは、確実だ。

けれども、この男はむしろ幸運だ、くらいにしか思っていない。

(こいつア、手間が省けた)

快勝に湧いている住民たちが、城主が城門へ走っているのを不思議に思うのは無理もない。

野次馬よろしく、城門へと向かう者たちが現れ出す。

誰かが公孫賛殿が来ている、と叫べば住民たちが更に集まりだす。

いつの間にか歳三の周りには、人垣と言うには十分過ぎる人集りだかに囲まれている。

こうなるのを、歳三は待っていた。

(強いやつと喧嘩をするなら、騒ぎを大きくすることだ)

これも一つの、手である。

公孫賛が城門に付く頃には、いよいよ祭とも思える大騒ぎとなっていた。

趙雲がさつと公孫賛から離れて、歳三に耳打ちする。

「これは一体何の騒ぎですか、主？」

「まあ、見ていな」

一瞬だけ、口の端に笑みを浮かべると、歳三は公孫賛に向いた。

う、と公孫贊が少しだけ怯んだ。

笑みも浮かべず、ただぎらぎらと光る眼を向けられては、大抵こうなる。

十分に間を開けて、歳三は口を開いた。

「公孫贊殿」

よく通る声だったが、続かない。

次は何を言うつもりだ、と皆が歳三に注目している。

公孫贊が、息を呑むのが手に取るようにわかった。

趙雲から歳三が軍権を持っていることは伝わっているだろう、最悪の可能性を、考えたか。

城主や住民たちも、同じことを考えているだろう。

長い時間の様で、僅かな時が流れ。

「この度の大勝、お見事でした」

世辞の言葉と共に歳三が地に膝を付け、両手を組み、頭こぶを垂れた。

完璧と形容して良いほどの、礼である。

公孫贊は突然のことに戸惑っている。

趙雲が、郭嘉が、程立が、知り合つて日の浅い太史慈でさえ、目を見開き驚いていた。

徐晃だけは、いつもの様にぼうっとしていたが。

「そして公孫贊殿がこの城に来られた以上、私の役目も返上するのが定め」

歳三は懐から恭しく印綬うやうやを取り出すと、頭を垂れたまま、差し出した。

「この印綬をお返しします」

啞然、という他ない。

誰もが突拍子もない展開に付いていくことが出来ない中、郭嘉と程立はいち早く脱した。

歳三の意図を、読み取ったのである。

「公孫贊殿」

「な、なんだ郭嘉？」

「こうして礼を取っている以上、印綬を受け取ることが貴女様の成すことです」

「う、うむ。わかった」

公孫贊が白馬から降り、歳三から印綬を受け取る。

歳三は尚も頭を上げることなく、再び手を組み礼の姿勢を戻した。

恭順の意を、示していると言っている。

「一つ、よろしいですか？」

「なんだ、程立？ 気になることでもあるのか？」

「はい。この度の烏丸との戦、何か裏があるかと思ひまして」

城主が、程立の言葉によつて漸く我に返つた。

口々に歳三が軍権を強奪したなど、烏丸を呼び寄せたなど叫び始める。

徐晃や太史慈など、それぞれ斧と槍とに手をかけたくらいだが、趙雲が静かに諫めた。歳三が頭を垂れたまま動かないのが、不気味だったからである。

「そうですか。この件は全て客将・土方歳三が招いたこと、と言いたいのですね」
程立の言葉に、城主と取り巻きたちは一斉に頷いた。

「では、この方を見てもらいましょうか」

誰をだ、と皆が疑問符を浮かべる中、繩に縛られて引つ立てられたのは、一人の男である。

格好からして、烏丸。

存分に打ち破られたせいか、身形はひどく薄汚れ、猿轡まで嘯まされている。

「皆さんはこの人に見覚えはありますか？」

住民たちはもちろん首を横にふる。

城主と取り巻きたちはぶんぶんと、音がするほどに横にふつた。

「なるほど、ではそこで頭を下げっぱなしの人にも聞いてみましょうか」

若干だが、程立の言葉には嫌味が混じっているように聞こえる。

普段と変わらぬ眠そうな眼だが、事実歳三に対する批難が見えていた。

しかし、歳三。

そう言われても頭を上げようとせず、微動だにしない。

これには公孫贊が心配した。

「どうした、土方？」

「客将である以上、公孫贊殿の命令なしに頭を上げない、ということでしょう」

「な、なるほど……土方、もういいぞ」

「公孫贊の言葉を受けて、歳三はやつと頭を上げ、組手を解き立ち上がった。

「ありがとうございます。公孫贊殿」

「いや、あまりそう礼をされてもむず痒いな……ほら、土方はあいつに見覚えがあるか

？」

指差す先には、あの男が居る。

歳三を殺そうと仕掛けてきた、烏丸の頭領である。

「やあ、和平会談の時にはお世話になりましたな」

男が歳三を睨んだが、歳三は何処吹く風である。

「和平会談？　土方は交渉役だったのか？」

「ええ。烏丸からの直々の指名だと、城主から承ったので」

「それなのに、何故こんな戦になったんだ？」

「端から、私を殺すつもりだったからですよ」
辺りがざわめいた。

公孫賛も、なんとなく筋書きが読めてきたらしい。

城主に対する視線に、厳しいものがある。

「私を殺すことにしくじり、逆上してこの城まで攻めてきたのでしよう」

歳三の喋る予想に詭弁だと、城主が叫んだ。

軍権を奪い取る為に和平を失敗させ、開戦に持ち込んだのだと取り巻きの続いた。

公孫賛に対する叛逆が本心だと喚き立て、趙雲の門兵殺害を不法だと糾弾した。

流石に、咎めずにはおけなかったのか、公孫賛が趙雲に問い掛けた。

「門兵殺害、それは本当なのか？」

「ええ、そのことに関しては否定するつもりはありません」

趙雲はきつ、と城主らを睨んだ。

ひつ、と悲鳴を上げて竦む彼等に、公孫賛は増々厳しい眼を向けた。

謂れ無き責めであるならば、竦む必要などない。

「ですが、城門を閉じて主を締め出そうとしていたのは確かです。あのまま私が門を開けていなければ、主は門前で烏丸に取り囲まれ死んでいたことでしょう」

趙雲の睨みに怯える城主らの傍ら、段々と住民らにも事の次第がわかってきたらし

い。

明らかに、歳三を殺そうとする段取りがあつたように思えてきた。声にならない静かな殺気が、漂い始めている。

郭嘉は敏感にその空気を感じ取ると、提案した。

「ではどちらが正しいか、聞いてみることにしましょう」

「聞いてみる？ どういうことだ、郭嘉？」

「単に、真実を話せば罪を減じ死罪を免じるということです」

公孫賛が黙って頷いたのを見て、郭嘉は更に続けた。

「更には最初に告発した者だけの罪を減じる、ということにしましょう」

「なるほど、わかった。それにはこいつも喋る機会がないと公平ではないな」

す、と公孫賛が手を上げて烏丸の男の猿轡を解かせようとした。

兵士が猿轡に手を掛けた、その時。

城主の取り巻きの一人が叫んだ、土方歳三暗殺を企んだのは城主と烏丸の頭領だ、と。

◇

公孫賛は溜め息をつき、歳三は無表情で事の成り行きを見ていた。

所詮は己の保身と嫉妬に狂い、利害関係の一致のみで繋がっていただけの組織である。

一度壊れれば、後は想像するに難くない。

堤防が決壊したかのように、聞いてもいない悪事まで暴露し合う始末である。

「捕らえろ」

呆れたように公孫賛が命令すると、兵士たちが捕縛に掛かる。

私は罪を減じられる筈だ、と最初に叫んだ男が縄を掛けられながら叫んだが。

公孫賛はそれ以外に罪があるようだが、と返すと口を噤んだ。

「あのー、できれば城主の人だけは残して欲しいんですけどー」

程立の言葉を受け公孫賛は眼だけで兵士に指示すると、後には遼東の城主だけが残された。

取り巻きたちは皆、兵士に捕まえられて城の牢へと連れて行かれている。

残された城主には、じつとりとした冷たい視線が向けられていた。

歳三たちの誰かではない、住民たちからの、視線である。

公孫賛か、あるいは歳三による裁きを、期待しているようにも見えた。

「土方。今回の一件、思うところはあろうが、私の顔に免じてくれないか」

「元より私は単なる客将。許す許さないもありません」

歳三はそう言う。

「この者を裁くも裁かないも、公孫賛殿の一存にあります」

「私としては、土方の好きなようにしてくれればいいんだがな」

「この者を斬るのは簡単です。しかし」

兼定の柄に手を掛けながら、歳三が例の、鋭い眼で睨みつける。

城主は、ひい、と小さく悲鳴を上げた。

「斬ってしまつては、ここ遼東を守るものが居なくなる」

「遼東を去る、と言いたげな口振りに趙雲や太史慈が、首を傾げた。

周りを囲む住民たちでさえ、怪訝な顔を浮かべている。

「あれ？ このまま遼東に、幽州に居るつもりじゃないの？」

もつともな疑問を、皆の気持ちを代弁するように太史慈は投げ掛ける。

歳三は太史慈を向くことなく、城主を逃さぬかのように見ている。

「それとも、歳三はここが嫌いなのか？」

「好きとか嫌いとかじゃないさ。私が居ても、この様な謀略が毎度起こるだけだ」

城主を見る歳三の眼は、ぞつとするような寒気がする暗い眼である。

生きた心地がしない、とはよく言つたものだ。

切れ長の眼と、今にも刀を抜けるように柄に手を置いているのだから、余計に恐ろし

い。

ぶるぶると、城主は震えるだけである。

「ならば、私が去るのが幽州にとつて一番良いだろう」

歳三の言葉を、どこか予想していたという顔を、公孫贇はした。

「だからこそ、こいつを斬つては守りに穴が空く」

「ふむ。確かに私としても今回の件は許し難い。しかし、代わりとなる者を考えると、か」

公孫贇が溜め息を吐いた。

「よくて配置換え、しか手がな……」

こうして領民の前で悩みを見せても、侮られないのが公孫贇の人徳であろう。

公孫贇には誰もが同情し、頭痛の種となった城主の方を憎む。

そういった向きが、住民にまであるのが公孫贇の統治の良さを表していた。

だからと言つて、丸く収まるという話ではない。

(人手不足というのは、嫌なものだな)

歳三も公孫贇に同情しながら、露骨に安堵の表情を浮かべている城主を見ている。

この場で許したとしても、城主が住民を危険に晒したという話はいずれ広がる。

そうなれば、別の地で暗殺や追い落としといった憂き目が起こるのは、間違いない。

公孫贇がいまいち煮え切らない態度なのは、そのせいだろう。

しかも、ここまで一連の流れを見た住民たちは、今にも城主を叩き殺しそうな勢いで

ある。

(少し、煽り過ぎたか?)

今更ながら、芝居が過ぎたかと思う歳三であったが、どうしようもない。

何か手は、と歳三が考えた時、視線を感じた。

程立の眠たげな眼が、歳三を見ている。

歳三、程立を見て即断した。

(全て、任せる)

思いながら歳三は頷くと、眠たげな眼が趙雲の方へと向いた。

趙雲が程立の視線を受けて頷くと、名案を思いついたかのように、言った。

「公孫賛殿。つまり、人手があれば主はこの者を斬っても良い、ということですか?」

「その通りだが……」

公孫賛が、悩ましげに答えた。

さつきからわかりきっていることを、という視線が趙雲に刺さるが、彼女もまた、英傑。

何百もの視線を無視して、さらりと言った。

「なら私が、主の代わりに次の城主が見つかるまで残りましょう」

面白いように、城主の顔が引き攣った。

部外者が何を余計なことを、と叫びたそうにしているが、歳三の睨みの前では息も漏らせない。

冷や汗と脂汗を、流すばかりである。

「今回は主に武功を持って行かれっぱなしですからな。ここは一つ、私も目立たなければ」

「それでしたら、風も今しばらくここに残ろうと思うのですよー」

趙雲の言葉に程立までも同調した。

程立が同道を願うのは流石に予想外だったか、公孫贄は少しだけ困惑している。

「私としてはありがたい申し出だが、土方はそれで良いのか？」

公孫贄は真のお人好しである、と歳三は思いながら、少しだけ考えた。

(俺ア、風に全て任せただ)

任せた以上、歳三に異論を挟む気はない。

視線を城主から、二人に向けた。

「私からも、頼む」

とだけ、言った。

趙雲と程立が、それぞれ領いたのを見ると、兼定を握る手に力を込めた。

城主が必死に命乞いをするのを、歳三は冷ややかに見ている。

ふと、兼定を抜く手を緩めた。

(詰め腹は、多分ないのだろうな)

隊士の不法を厳格に処罰してきた歳三のこと、少し気になった。

斬首に処するのが順法であるか、と考えた一瞬を歳三の隙、と見たか。

城主がやぶれかぶれに腰の剣に手を掛けた。

剣が鞘を抜けるよりも早く、歳三の兼定が鞘走るのが早かつたろう。

鋭く半円を描く様に光った兼定は、城主の左腕を強かに斬り上げた。

向かい抜き撃ちの剣で、歳三の度胸と技量に叶うはずもない。

あつ、と声を上げる間もなく、城主の遺骸がどうと地に倒れた。

(居合のいの字もなく、それでいて死に際も汚すとは)

最後にはこうなるように仕向けたのは歳三であるが、少しだけ哀れにも思えた。

武士というものは、いかに美しく死ぬかの生き物である。

この様な無様な死を、自分が晒すことになるかもしれない。

(嫌だな、それは)

兼定の血を拭って鞘に納めた。

辺りは、不気味なほどに静まり返っている。

「とりあえず、死体を片付けてくれ」

公孫贊がそう言うまで、誰も動かなかつた。

◇

「公孫贊殿。少し、遅くなりました」

「こつちが呼んだんだ。そんなに畏かしこまらないでくれ」

血と埃を洗い流す暇いとまくらい、なんでもない。

そもそも、城内のある一室に歳三を呼び出したのは、公孫贊の方である。待つ身になるのは公孫贊だ。

それでも、歳三は客将としての分を通そうとしているのだろう。

傲岸不遜な男だが、案外と律儀なところもあるのだと公孫贊は思った。

「いや、しかし」

「おいおい、私がそこまで短気に見えるか？」

歳三、即答した。

「見えません」

「だろう？」

公孫贊は小さく笑った。

鋭く砥がれた剣の様に、はつきりと物を言うところは嫌いではない。

歳三に同じく座るよう促してから、公孫贊は言った。

「土方。私からの忠告だが、もう少し物言いを考えた方が良い」

嫌いではないから、死なせたくなかったのが公孫贇ひととなりという為人だ。

どうしても、言っておきたくなる。

「今の漢王朝は、口の聞き方一つで平気で殺しにくるぞ」

「肝に銘じておきます」

「嘘だな」

まるで覇気がこもっていない物言いに、公孫贇は苦笑した。

「土方は、まつりごと政とは無縁そうだな」

「考えないようにしていますから」

と、歳三。

「それに関しては稟と風。郭嘉と程立が居るから、任せていられます」

「ああ、確かにあの二人は稀代の逸材だよ。喉から出るくらいに欲しい」

公孫贇は疲れたように言った。歳三はただ曖昧な笑みを浮かべるだけである。

弱みを簡単に人に見せるのは、それだけ人を信じていることができるからか。

歳三にはわからない。

（私には、到底無理だ）

一概に魔窟と化していた京都と、見たところ平穏な幽州を比べることは出来ない。

出来ないが、公孫贊も歳三の知らぬところで、闇討ちや暗殺の危機はあったのではないか。

それでもこうして、お人好しであり続けられる姿が、歳三は眩しくてたまらない。(鬼や修羅に、人民を安んじらせることはできない)

自分には人を治める器が大きく欠けていると、歳三は公孫贊を見て痛感せざるを得ない。

「だから、土方が羨ましくもある」

「私が？」

これには歳三、驚いた。

公孫贊の在り方に羨望しているのは、むしろ自分の方であると思っていたからだ。

珍しく呆然とする歳三に、憤慨するように公孫贊は言った。

「何を驚いているんだ。私が土方を羨むところを軽く述べるだけでも三つはあるぞ」

「私にだって少なくとも三つ、公孫贊殿を羨む所があります」

眼が合い、少ししてからお互いに笑った。

自分にはないものを羨み合っている、ということに気付いたのだ。

かたや無位無官の男、かたや一州を治める女。

周りから見れば、どちらが大きく優れているかは一目瞭然だが、本人たちは違うらし

い。

(ああ、お前の大福は大きかったな。総司)

試衛館の頃の、他愛のない日々がふと思い出された。

——なんだ、お前の大福の方が大きいじゃねえか、総司。

——何言ってるんですか土方さん。僕は大きい方をあげましたよ。

どうにも堪えきれなくなつて、歳三は一頻り笑つてしまつた。

「他人のものはよく見える、が自分のものはよく見れない。大切なことを、忘れていた」

「そうだな。私も、土方にないものを持つているのだな」

語る公孫賛の言葉には、嫉妬の感情が一切感じられない。

それがまた、歳三の心を清々しくさせた。

(やはり、良い人だ)

歳三が必要としている何かを、公孫賛は持つているような気がした。

となれば、歳三の腰は軽い。

「そうです。私は、公孫賛殿を羨ましく思い、そして」

「待て、それ以上は言うな。土方」

公孫賛が、歳三の言葉を遮つた。

相変わらずどこか疲れた笑みだったが、それでも公孫賛は力強かつた。

一瞬、歳三が気を呑まれた程である。

(ああ、これが公孫賛の本当の顔なのか)

と、妙な納得と自分の見る目の無さを、恥じた。

公孫賛は、続けた。

「土方、君は少しばかり結論を急ぎ過ぎだ」

公孫賛は歳三が何を言わんとしているのか、気付いているのだろう。

「漢は広い。だからこそ、仕える相手を見誤らないで欲しい」

気付いていながら、公孫賛はあえて受け入れなかった。

歳三を受け入れれば、どれだけの利が幽州にあるか公孫賛がわからぬ筈がない。

それでも、公孫賛は歳三のことを想って言ったのが、ありありとわかった。

「自分で言うのも何ですが、随分と思いい切りましたな」

大いに驚きながら、歳三は言った。

「何事も手に入れるのは難しいが、手放すのは更に難しいでしょうに」

「ああ。本当に、なんて馬鹿なことをしているんだらうと思っているよ」

公孫賛は苦笑いを浮かべている。

後悔の色が見えないのが、歳三にまた美しきを感じさせた。

「実を言えば土方を御しきれる自信もないし、郭嘉と程立からも止められていてね」

「稟と風が？」

「黒龍を飼うことの恐ろしさを、何度も教えられたよ」

何の話か、と問うのを歳三はやめた。

公孫贇は別に区切りを付けようとしている、と勘付いたのだ。

それを止めるのは、歳三にはひどく無粋に思えた。

「土方。君は本当の意味で、仕える人を必要としないのだろうか。ただ戦うのに都合が良いから、従っているだけだ」

「そうかもしれませんがな」

否定は、しない。

例え身一つに成り果てても、己の喧嘩をしようとしていたのが歳三という男である。

幽州に来たのも、元はといえば自らの武名を広める為だ。

ここまで公孫贇に入れ込むのも、歳三からすれば考えの外にあった。

「私もいつか、君の軍門に降くだる時が来るかもしれない」

「それは考えすぎでしょう」

「いや、私は幽州一州をどうこうするのが限界だよ。それが私の器さ」

歳三は、何も言えなかった。

「私は土方を見ていると、そう思えてくる」

公孫贊の姿が、どことなく流山での近藤を思い起こさせた。

歳三には学というものがない、芯にあるのは単純な、喧嘩師の本能である。

それしかないからこそ、歳三にとつて物事とは全てが向いているか向いていないかでしかない。

だが、公孫贊は違う。

歳三よりも遥かに学があり、地位もあるからこそ持つてしまうものがある。

そういう持つてしまったものがあるから、公孫贊は自縛する思考に陥っている。

(どうしようもなく、近藤さんと似ているのかもしれない)

歳三はここに来て、熱病から醒めたような思いを持つた。

ただ、かつての盟友の姿を公孫贊に重ねていただけに過ぎないのかもしれない。

公孫贊は歳三を見ているが、歳三は公孫贊を見ていない。

これはとても、無礼なことだと歳三には思えた。

◇

しばらくの間、二人の間に沈黙が流れた。

歳三は眠たげな眼をして、じつと公孫贊を見ている。

ふ、と公孫贊は笑つて歳三を見た。

「別に土方が言う必要はないが、どうか受け取つて欲しい。私の真名は白蓮ばいれんだ」

「しかとその真名、この義豊が受け取りました」

歳三は自らの諱を返答にして、頭を下げる。

公孫贊が歳三に真名を預けることにしたのは、何故かはわからない。

わからないが、受け取ることが公孫贊を知ることの一步だと、歳三には思えた。

「義豊……それが君の真名か。しかし郭嘉らはそう呼んではいかなかったみたいだが？」

「私の国では、真名ではなく諱いみなと、呼んでいましたから」

「ああ、呼ぶことを忌むのか。つまり歳三、の方が都合がいいか？」

「その方が、助かります」

「もう堅い物言いはやめてくれ。ああでも、示しが付かないから、その、二人の時にだが」

いつもの調子を取り戻したかのように、わたわたとする公孫贊に歳三は微笑んで。

「わかった」

とだけ言った。

歳三は、既に公孫贊への羨望を断ち切っている。

断ち切っているから、公孫贊の姿は凡将にしか見えなくなっている。

人より素直でお人好しな、普通の女がそこ居た。

仮にも一州を治める相手に並と表する歳三の感覚は、よくわからない。

「もう、いいか？」

「あ、ああ。すまなかつたな。変に手間を取らせて」

「なに、私と白蓮の仲だ。気にすることははない」

公孫贊が少し、顔を赤らめた。

あまり、そういつた経験がないのかもしれない。

（俺は何を見てたんだろうなア）

歳三の、正直な感想であつた。

「白蓮、この先もしも私が他の誰かに仕えることになつてもだ」

だから、この約束も歳三の内から滲み出る想いからであるのは間違ひなかつた。

「私は必ず、貴女の味方をしよう」

「やめとけて。私は貧乏くじ体質なんだ。そんな約束、歳三が困るだけだぞ」

「なに、天下を敵に回したことくらいなら、既にある」

鳥羽伏見の戦場で翻る、錦の御旗が思い出される。

あれを思えば公孫贊の心配も、歳三にはちつぽけなものに思えた。

「今更貧乏くじの一つや二つ、なんてことはない」

「歳三の過去は、聞かない方が私の為になりそうだな」

「私自身、話しても信じられない事のほうが多い」

二人して笑い合つて、歳三は部屋を後にした。

公孫贊が最後に見せた朗らかな笑みが、やけに印象的だった。

◇

部屋を後にして、さて徐晃との約束はどうなるものかと歩き出した矢先。程立が、立っていた。

待っていたのか、と歳三が問うより先に、程立が口を開いた。

「お兄さん、お話があるのですよー」

「話とは、香風との約束についてかね？」

「それも後で詳しく聞く必要がありますねー」

「そうか」

何かしらの形で郭嘉と程立にも報いなければ、と思っていた歳三である。

徐晃との約束のどうこうを知られても、別に痛くも痒くもない。

女も、喧嘩と同じくらい好きな男なのだ。

城を落とすのも女を落とすのも、歳三からすれば同価値であろう。

「ともかく、お兄さんに風は話したいことがあるのですー」

程立の眠たげな眼が、歳三に注そそがれる。

いつになく真剣な眼差しを、歳三は感じた。

「わかった。それはどこでする？」

「既に準備は完璧なのです」

「そうか」

程立がそう言うのなら、そうなのだろう。

歳三は程立の手際の良さを、郭嘉と同じくらい信頼している。

「では、付いて行こう」

程立の後を、付いていく。

歩幅は圧倒的に歳三の方が広いが、程立を追い越すことなくゆっくりと歩く。

(ああ、そろそろ話す時が来たのかもしれない)

これが程立と道を別つか否かの、分水嶺になるのではないのか。

なんとなく、歳三は勘付いていた。

月下の誓い

月が出ている。

城壁の上に腰かけながら、歳三は月を眺めていた。

丸い月は、歳三の姿を闇の中できつかりと浮かび上がらせている。

(不思議なものだ。戦乱の時代が来るといふのに、月はこんなにも変わらない)

そう思って、歳三は口角を僅かに上げた。

鳥羽・伏見で見た月も、会津で見た月も、蝦夷で見た月も、同じだったではないか。

少なくとも歳三には変化を感じ取ることができないくらいには、変わりなかった。

(真の意味での無慈悲とは、あのような存在を指すのだろうか)

人や物事の動向にどこまでも無関心で、我を突き通す。

そこに情はなく、手心もない。

歳三は月から眼を離して、目を閉じた。

瞼を通して優しい光が透けて見えるようである。

(が、これも一側面を見れば、無慈悲なものだ)

歳三は目を開けた。

見ているのは、星である。

明るい月に負け、それでも懸命に光ろうとしている星を、歳三は見た。

揺らめく星の明かりは、灯が消える様に瞬またたいている。

見ようよつては、月が星を消し去ろうとしているようにも思えた。

「……月明らかに、星稀なり、か」

「それ、お兄ちゃんが考えたの？」

歳三は、振り返らない。

声の主が誰かは、わかっていた。

いや、歳三がこうして月を眺め始めた時から、彼女はずつとそこに居た。

「いや、誰だったか、相当に詩のうまい人物が考えた一節さ」

「ふうん」

徐晃は物陰からゆっくりと歳三に近づくと、座る歳三の膝の間に腰を下ろした。

歳三の背が高いことは、何度も言った。

その膝の間に徐晃が座ると、丁度父が幼子を抱いて座っている様な具合になる。

当然、男であるならば動揺の一つも見せてもいいだろうが、歳三はぴくりともしなかつた。

変わらずに、ただ星を眺めている。

「香風は、いいのかね」

「なにが？」

「私は、気が狂っているのかもしれないのだぞ」

「……シャンは、そう思わないかな」

徐晃は振り向いて歳三の顔を見た。

歳三も、星を見るのを止めて、徐晃の顔を見た。

形の整った端正な顔立ちが、徐晃の目一杯に映った。

「何故、そう思う？」

「……お兄ちゃんは、シャンとの約束、守ってくれるから」

「こうすることがかね？」

歳三は苦笑した。

前の戦いするとき、歳三は徐晃に対しなんでも言うことを聞く、と約束をした。

こうして徐晃を抱くように座っているのも、その一つである。

「約束したから、全部話してくれたんでしょ？」

「まあ、そうでもある」

歳三は徐晃を見つめながら、長い髪の毛を梳いた。

徐晃は嬉しそうに目を瞑って、されるがままに甘えていた。

◇ それは歳三が徐晃と戯れている日の、昼の話である。

◇ 真つ先に、かびの嫌な臭いが鼻をついた。

日当たりの良くない、人が好き好んで近寄りそうにないところに、その部屋はあつた。程立が扉を開けた時も、軋む音が酷い。

ろくに掃除もされていないのか埃つぼくもある。

そんなところに、徐晃を始めとした全員が集まっていた。程立に連れられた歳三が、最後のようだった。

「皆、居るのか」

「集められたのがこんなところとか、嫌やになるよね」

太史慈の言葉に、歳三は静かに首肯した。

肺を、悪くしそうである。

結核に苦しんだ沖田を、つい思い出してしまふ。

喉を思わずさすつた。

「わざわざ、こんな部屋でなくても良いのではないか、風？」

「これから話すことは、人に聞かれては困りますからね」

いつもの口調で、程立は歳三に答えた。

程立が理由もなく辺鄙な場所を選ばず筈もないかと、歳三は思った。

「特に漢王朝の正式な官位を持つ公孫贇殿には、ですけどー」

流石に歳三も面食らった。

さらりと、程立はとんでもないことを言った。

何を話そうと言うのか、まるで予測が付かない。

郭嘉だけは、事前に程立と話しているのか動じなかったが。

「一体何を話すつもりなんだ」

「いえ、まずは」

郭嘉が太史慈を見た。

「あ、私？」

「そうです。歳三様から真名、いえ、諱いみなを授かっていることは聞き及んでいます。が」

「私は太史慈子義、真名は梨晏リアン。よろしくね」

真名は神聖なもの、と郭嘉から教えられている歳三である。

こう軽くては、少々拍子抜けするところもある。

そのまま、口に出していた。

「随分と、軽いな」

「だつてさー、歳三が真名……じゃなくて諱を教える仲間なら、いいかなつて」
「そうか」

本人がそれでいいなら、歳三に異論はない。

さらに言えば、自分が信頼されているが故、と言われては歳三も悪い気はしない。

武士というよりは侠客に近い習性だが、石田村の悪党バラガキだった歳三には軽くその気があ
る。

何も歳三とて、最初から武士を目指そうとしていたわけでもないのだ。

が、今それは関係ない。

郭嘉は太史慈の変わり身の早さに怪しさを覚えていてるようだ。

「梨晏はなぜ、歳三様に付いていこうと思つたのですか？」

「んー、ついていこうと思つたからじゃ、駄目？」

「駄目です！」

用心深い性格なのだろう。

ましてや稟は軍師である、時として動物的な勘で物事を判断する武人とは訳が違う。

冷静な判断こそが、すべてだ。

「それはな稟、主と梨晏は一度激しい時を過ぎしあつた仲なのだ」

郭嘉を、趙雲が茶化すような言葉で遮った。

訂正しようとした歳三だが、それよりも郭嘉の様子に訝いぶかしんだ。何やら顔を赤くして、ふるふる震えている。

「どうした、稟？」

「な、なな、なあー!？」

郭嘉は、鼻血を吹き出した。

濁流、とでも言えはいいだろうか、とにかく凄い量である。

歳三は目を見開いて驚き、辺りを見渡すが誰もがいつものことかという顔をしている。

知らぬは歳三ばかりらしい。

どころか、今初めて見たと言う顔をしている歳三が皆に驚かれている。

「はーい、稟ちゃん」とんとん

程立が郭嘉の首筋を叩き、郭嘉も鼻血の処置を施していく。

いくら周りが平気な顔をしているとはいえ、歳三としては無事を確認せずにはいられない。

「おい、それは大丈夫なのか？」

「心配ご無用なのですよー。いつものことなのです」

程立によれば、想像力豊かな郭嘉は、主に男女の極意に関する妄想が極まると鼻血を

噴出してしまうらしい。

これはずっと前からある郭嘉の悪癖らしく、歳三の預かり知らぬところで何度も披露しているようだ。

そんなことを何故歳三が教えられてなかったといえ、皆知っているとお互いに思っていたから、である。

確かに、これだけ派手な癖なら歳三が既に知っていると考えてもおかしくないだろう。

「本当に大丈夫か、稟？」

「え、ええ。大丈夫です歳三様。癖みたいなものですから」

「心の臓に悪い癖だなあ」

沖田を労咳で喪った歳三には、少々堪こたえる。

歳三、血は見慣れているが、斬って出る血とは少々勝手が違うらしい。

その辺りの感覚は、当人でなければ些ちかわかりにくい。

「稟の奇癖は、理解した。特に問題ない、ということもだ」

歳三、仕切り直す。

「まあ、確かに激しく戦い合ったよ。それで、お互いを認め合った」

「そうだね。あの時は歳三に殺されるかと思ったよ」

「私もさ」

「だったら少しは辛かったなーって顔してくれないと張り合いがないじゃんかあ！」

「元からこういう顔だ」

「そういえばそうだったね」

太史慈は、愉快そうに笑い、歳三はいつものむっつり顔で返した。

郭嘉は二人の仲を静かに見ていたが、やがて溜息を一つつくくと、眼鏡の位置を直した。
「歳三様と梨晏の件についてはわかりました。私からは以上です」

次が本番か、と歳三が思ったとき、程立が前に出てきた。

ゆらり、ゆらりと揺れながら、眠たげな眼を歳三に向けたまま、近づいてくる。

「どうした、風？」

遂に歳三の目の前に来た風に、歳三は尋ねた。

そして、風は。

「お兄さんは、この国の人ではなく、そしてずっと後の時代の人ですねー」

と、言った。

◇

「さあ、どうだろうね」

歳三、即座にすつとぼけた。

なぜか、と言われれば簡単である。

自分が後の世から来た、などと言いつ出す人間を、正気と思える人間がいるだろうか。

(……彼女は、私をどう思ったのだろうか)

ふと、森で出会った女性を思い出したが、詮無いことだと切り捨てた。

それよりも徐晃が、歳三をじつと見ている。

「お兄ちゃん」

「なんだね、シャン」

「約束」

「ふむ、確かに私は『なんでもする』と約束したがね、それは香風との話だ」

「じゃあ、シャンの前では誤魔化さないで、お兄ちゃん」

歳三はじつと徐晃の眼を見た。

綺麗な、紫色の瞳だ。

ブリュネの持っていた鉱石凶鑑という、アメジストにもよく似ている瞳が、歳三を映し出している。

数瞬、視線が交差した。

「シャンは、絶対に信じるから」

歳三は決意した。

徐晃から眼を離すと程立に目で先を促した。

「具体的に例えるなら、私たちが歴史書になるくらいの一そんな感じの人ではないかと」

「……………」

郭嘉と徐晃以外の皆が、何を言っているんだという顔で程立を見ている。

しかし、歳三は否定も肯定もしない。

それがむしろ不安を掻き立てた。

皆が、歳三の顔を見ているが、いつもの通りの不愛想な顔を以て、その感情はわからない。

ゆつくりとした動作で腕を組んだ歳三は、程立の言葉に沈黙で答えるかに見え。

「よく、わかったな」

初めて答え、肯定した。

「ここまで言い当てられてしまつては、言い訳のしようもない。神算鬼謀というものは、本当に敵に回したくないものだな」

皆が声を上げそうになるのを、歳三は手を上げて制した。

「とはいえ、私はほとんど覚えてないのだよ」

「覚えていない、とは？」

郭嘉が少しだけ眼を細めて聞いた。

歳三の正気は後に置いておいて、程立の言う通り歳三が後世の人間ならば、それはどういうことか。

それはつまり、如何様にも歴史の勝利者になれるということでもあるし、取り入れられるということでもある。

ここに居るのは誰もが一騎当千の部将、あるいは権謀術数に優れた軍師。

己の涯はてを容易に決めかねないことになるからである。

が、歳三はそんな皆の心持ちの遥か上を言った。

「私は、あまり書物には興味がなかったからね。詳しくは覚えてないのだよ」

歳三は凶鑑は好きだが、文字ばかりの本はあまり好きではなかった。

例外と言えば、仏蘭西訳本の歩兵操典くらいであろうが。

(近藤さんなら、覚えていたであろうが)

軍神・関羽を敬愛し、三国志を愛読していた近藤であるならば、彼女らすべての疑問に答えられていただろうが、生憎とここにいるのは歳三である。

特に歳三は国の終わりによりも、人の生き様の過程の方に興味があつた。

「忘れたと言つても、誰々が強いとか何者が軍師である、とかは覚えていたな」

「ああ、だからあの時、私の名前を聞いて主は驚かれていたのですな」

「その通り」

趙雲の言葉に、即答した。

皆が、沈黙した。確かに非常に突飛もない話である。

が、しかし。完全に否定しきることもできない雰囲気、歳三にはある。

太史慈が、ちらりと歳三の右腰に下げられたものを見た。

続いて徐晃が、趙雲が、郭嘉が、程立が、拳銃ホルスターの拳銃を見た。

歳三はというと、さあらぬ体でお手上げというように両手を上げた。

「それに、完璧に覚えていたとしてもね、私はもう忘れたよ」

「では、この漢がどうなるとも忘れた、と?」

「その通りだ。星」

歳三は続けた。

「私が読んだものは、皆が男だった。だから、もう忘れることにした」

「男!? えっ? 私が男だったの!」

「そうだ、梨晏。更に言えば香風も星も稟も風も、男だった」

歳三は鼻で笑った。

「くだらないとは思わないか? 男か女かの時点で間違っているのに」

「そうなのかあ……ということとは?」

「これからどうなる、と言われても困る。ということだよ、梨晏」

◇

ひとしきり皆が納得したところで、歳三は程立を見た。

眠たげな眼を、あの切れ長の眼でそつと見据える。

「それに、実のところ風が私に求めているのは私の過去でもなければ知識でもなからう」
程立、答えない。

「そうだろう、風？ 私に風に示すべきは実力、ただそれ一点だ」

軍師の実力を生かすも殺すも、一番は優秀な將軍と兵士である。

どちらが片手落ちになつては、どんなに強大であろうと軍は崩壊する。

歳三は、それを間近で見えてきた。

そして今回の戦は、ある種の程立による試験が含まれていると歳三は見ている。

「それを私は示したはずだ。では、風。私を呼び出した本当の理由は何だ」

歳三はじつと程立を見ている。

「夢を」

歳三、口を挟まない。

「夢を見ました」

程立が話すことに無駄があることないと、完全に信頼しきつている。

いつものようにゆつくりと話す程立の言葉を、一言たりとも聞き漏らすまいと聞いている。

「泰山を登った風が、流星を呑んだ黒龍に乗って蒼天に昇る太陽を掴むのを、見ました」
夢の話しか、と歳三は馬鹿にはしない。

古来、夢見において危機を脱したり逆境を乗り越えた話は多い。

歳三とて、亡霊がいるのであれば斬つてやると思うくらいには、その存在を信じている。

「お兄さんは、どう思いますか？」

「どう、とはわかりかねるな」

歳三は苦笑した。

「いくら私でも、夢見の技術わざはない」

徐晃や趙雲、太史慈らもお手上げという様子だった。

郭嘉が程立の言葉を補う。

「古来よりこの国において流星とは即ち、天の御遣いを指します」

「陽光とは、お兄さんがこぼした程昱の由来でもあり、そして——」

◇

「思い返してみれば」

徐晃を愛でながら月を眺める歳三が、不意に言った。

猫のように身を委ねていた徐晃が、不思議そうに歳三を見上げる。

「もう少し言い方というものはあつたかもしれないな」

「どうかな。シャンは、そうは思わないけど」

「どういうことだね？」

「お兄ちゃんはお兄ちゃんだから。いつも自信満々で、不愛想な方が、好き」

歳三は思わず苦笑した。

「私に変わるな、と。そう言いたいのか？」

「ん……そんな感じ」

「難しい話だな」

人は変わってしまうものだと、歳三は思っている。

あの近藤でさえ、田舎の芋剣客から幕閣に名を連ねる周旋屋政治家になってしまった。

京都の、魔力に吞まれてしまったのだと歳三は今でも思っている。

では果たして、歳三は変わらなかつたのか。

そう思うと、この男にしては少しだけ不安になる。

（俺は、月ではなく星だからだろうか）

綺羅星どころか巨大な月が、歳三の周りには大勢居る時代なのだ。

いつか、自分が月の光に消え去ってしまったもおかしくない。
だが、そんな不安も歳三の厚い胸板に寄り掛かった徐晃の体温が、すべてを吹き飛ばした。

「じゃあ、約束」

「うむ？」

徐晃が、ん、と背を伸ばして歳三の唇に軽く口づけをした。

紫色の瞳が、己の顔を映しているのを歳三は見た。

「お兄ちゃんは、お兄ちゃんらしくいて」

「ああ、わかった」

月下、一人の男と一人の少女が約束を交わした。

◇

そして、全ての結果は明朝の東門にて明らかになる。

さらば幽州

朝陽が登る少し前の、まだ暗さの残る東門の前に、歳三と徐晃は居た。

明朝の開門の時刻までに集まるのが、皆と交わした約束であつた。

来ないのであれば、歳三を信じるに値する主君として認めない。

そういう約束である。

(香風の他に、何人来るだろうか)

歳三はぼんやりと考えた。

元より、人に好かれる性格であると思つてはいない。

近藤の様な将器や、坂本の様な人の良さもない。

そんな男に、誰が好き好んで付いていきたがるのだろうか。

(いや、それは香風に失礼だな)

と、隣に立つ徐晃の頭を優しく撫でた。

徐晃はややくすぐったそうにそれを受け入れている。

歳三が自身を卑下することは、歳三を選んだ徐晃を下げることに繋がる。

それにだ、徐晃と約束した歳三は、こんな弱気になるような男ではない。

(私は、自信ありげで不愛想な男であらねばな)

いつもの顔に戻ったと、撫でられながら徐晃は思った。

どこか不安げだった瞳には、並々ならぬ覇気が宿り始めている。

「ん、お兄ちゃんらしくなったね」

「なに、香風のおかげだよ」

「おやおや、なんともまあ、妬けてしまうご様子ですな」

最初に現れたのは趙雲だった。

腰には酒の入っているのだろう瓢箪と、壺がさげられている。

旅装に見えるがあれが趙雲なりの正装なのだ。

壺の中身は確かメンマと言う、趙雲の好物である。

歳三も一度貰ったことがあるが、確かにこれは良いものだ。この男には珍しく、認め
た逸品である。

徐晃の頭から手を離して、歳三は言った。

「なに、月見酒に付き合ってもらっていたからな」

「ほう？ ならば私との酒にも付き合ってもらってもいいのではないですか？」

「お前は酒量が多いのだ。ちびりちびりとやるのなら、考えてもいい」

「主は逆に少なすぎるのですよ。もう少し、酒を楽しむことを覚えるべきですな」

「努力しよう」

歳三は小さく、趙雲は盛大に笑い合った。

咎める声が、兵士からではなく別のところから上がった。

「星、まだ朝です。もう少し静かにするべきですよ」

「でも、その明るさが風にはいいところだと思うのですよー」

郭嘉と程立も、揃っていた。

郭嘉は旅装、程立は遼東に残るためにいつもの格好である。

この集まりに、なにか懐かしさを覚えた歳三は少し考えて、思い出した。

「ああ、香風たちと初めて出会った時と、変わらぬな」

「そういえばそうですね。まさかあの時は私も風も仕える人を変えるとは思いませんでした」

「とか言いながら稟ちゃんも結構のりのりだったではないですか」

「そ、それはそれですよ！ 風！」

と、俄かに騒がしくなり始めた時にやってきたのは、大きな三叉槍を担いだ太史慈である。

「酷いなあ。私のいないところで昔話はやめてよお」

「いるところでされても、困るだろう？」

「そうかなあ？ 歳三の昔話は結構気になるんだよ？」

「梨晏」

太史慈の言葉を強く遮ったのは、郭嘉である。

「歳三様の過去は」

「詮索しない、探らない、話してくれるのを待ってただ信じる。そういう約束、でしょ？」

「わかっているじゃないですか」

「そりゃね。私も雪蓮しゅれんと冥琳から離れて歳三に付いていく、って決めたからね。気長に

待つよ」

もつとも、と繋げて。

「とても自分語りが好きそうな男じゃないだろうけどね、歳三は」

「よくわかっているじゃないか」

静かな視線の交差が、歳三と太史慈の間で起こり、すぐに離れた。

一度激しく戦い合っていることもあるのか、二人の間には何か独特の呼吸の様なもの

があるらしい。

ただ一人だけ、歳三と戦ったことのない徐晃が軽くむくれているのを、歳三は見逃し

てはいない。

「歳三は覚悟しておいた方が良く、雪蓮と冥琳だけでなく、大殿様からもきつと眼を

付けられるに違いないからね」

「なに、その点は心配いらぬよ」

歳三は静かな微笑みを浮かべて。

「私が、一番に天下へ名を上げるからな」

一陣の風が、拭いた。遂に東門が開けられたのだ。

歳三のオールバックを揺らし、羽織コウモトの裾を巻き上げる。

昇りくる朝陽が逆光となつて歳三の姿を陽光に隠し、黒衣も相まつて魔神であるかのようだ。

「では皆、行こうか。徐州へ」

ざつ、つと踵キビシを返し羽織を翻して歳三は行く。

徐晃は歳三の横についていき、郭嘉は三步遅れて影を踏まぬように付いていく。

太史慈はそんな歳三の横に面白そうに並んでいく。

それを趙雲と程立は、静かに見守っていた。

◇

ふと歳三が立ち止まり振り返ると、趙雲と程立はまだ歳三たちを見ている。

東門は遠く小さくなつた。

人々の営みが始まり往来が増え始めても、変わらずそこに立っていた。

「歳三様は、果報者ですね」

「ああ。彼女らだけでなく、徐州には美花もいる」

「えっと、まさかと思うけどそれって……」

「青州の名豪族である孫乾公祐殿、と言えばわかりますか？ 梨晏？」

「えっ、やっぱり美花か！ いやー、幽州に来る際にお世話になったんだよね！」

「おや、それは意外な」

郭嘉と太史慈が孫乾の話題で盛り上がる中、歳三は気付いた。

東門の楼の上に、見覚えのある顔の人物が立っている。

歳三はただ、その人に手を振ることもせず、ただ力強く頷き、呟いた。

「さらばだ、幽州。そして白蓮」

「……いいの、お兄ちゃん」

「ああ。私と白蓮は、それでいいのだ」

ぼん、と軽く徐晃の頭を撫でると歳三はもう、幽州を振り返ることはなかった。

◇

徐州において、孫乾公祐の名は絶大であった。

知り合いであることがわかれば尊敬され、更には窮地を救ったのがわかれば歓待された。

そんなことを行く先々で繰り返されては、流石の歳三も困り果てる。

飲みなれない酒を、それも濁酒の様な不味い酒を否応にも飲まなければならぬ。

これが悪意からくるものならばどうとでもできるが、何より善意から来るものである為、歳三には余計に堪えた

孫乾からの使いの馬車が来た時など、真つ先に乗り込んだほどである。

「歳三様は宴がお嫌いですか？」

そう、郭嘉に問われたのを歳三は疲れた顔でこう返している。

「元々一人で膳を取ることが多かったからね、大人数は苦手だ」

なにより、と続けて。

「人の好意になれてないのかもしれない。私は嫌われることが多かったからね」

それだけ言うと、腕を組み眼を閉じた。

傍目からは怖い顔をして考え事をしているのだろうが、よくよく聞き済ませれば規則的な呼吸音が聞こえてくる。

そうとは絶対に見せないが、気疲れしていたのか。

郭嘉は歳三の心遣いに感心すると、顔を赤らめながら歳三の隣に座り、辺りを素早く見まわした。

別の馬車に乗っている徐晃と太史慈はこちらに無関心であるし、うんと一人気合を入

れた郭嘉が歳三の肩に自分の頭を載せた。

「ずつと風と頑張っていたんですから、これくらい……いいですよね」

殺気に鋭い歳三であつても、害意がなければ起きることはしないらしい。

郭嘉は屈強な身体から溢れ出す男の熱を心地よく感じながら、いつの間にか寝入つていた。

（希代の軍師といえど、稟もまた、乙女なのだ）

と、思うのは郭嘉に寄り掛かれながら、起きていた歳三である。

寝入っていたのは本当だが、郭嘉が隣に來た時には既に起きていた。

ある意味、ねや 閨であつても女よりは先に寝ないこの男の、奇特な習性であるとも言えた。

（しばらく、こうしていよう）

郭嘉が起きて退けるまで、寝たふりをするのが我が務め。

乙女には恥を搔かせぬこと、これは男の責務であると歳三は自分に戒めているからである。

夜陰を走る馬車の中、歳三は郭嘉の寢息を静かに聞いていた。

◇

徐州、孫乾の居城についた時には朝だった。

郭嘉は素知らぬ顔で歳三の向かいに座っているが、夜半ずつと歳三の肩に頭を載せて

いたことを、歳三だけは知っている。

が、言わぬが花と歳三もまた、素知らぬ顔で元の姿勢のまま、目だけを開いている。

馬車が城門から往来に入った。

人々が、ああ孫乾様をお救いなさった方だ、と口々に言っておりがたがるのには、閉口したが。

「立派なものだな」

ぼつりと、歳三は呟いた。

決して幽州の城が悪かった、というわけではないが、孫乾の居城はそれ以上に栄えているように見える。

人の往来も、城壁の具合も、楼の高さも、堀の深さも、何もかもがよくできていると言わざるを得ない。

「美花の治政は目立たぬこそあれ非常に穩健で優れていると聞いています。それがこの結果であると、はつきりとわかりますね」

「うむ」

「それに、美花自身もそれなりの武人であると聞き及んでいます」

「美花が？」

歳三は驚いた。

あのほんなりとした雰囲気、人に尽くすことが喜びと言わんばかりの姿から、武具を振るう姿をとても想像できなかつたのである。

それに、武人特有の覇気の様なものを感じられなかつたのも事実だ。

(いや、人を見た目で判断してはいけないと、何度思ったことか)

改めて歳三は自分を戒めたが、郭嘉が補足を入れた。

「武人、と言いましてもできる、のであつて歳三様の様に変秀でているわけではありません。あくまで治政や外交が本業であつて、武の方は自分の身を守る以上には、というこつとらしいです」

「その割には、盗賊に後れを取つていたのだな」

「それはですね」

郭嘉の声が俄然小さくなつた。

あまり人に聞かれたくない話、と感じ取つた歳三は揺れに合わせて身体をよろめかせたように、郭嘉へと身体を傾けた。

「私たちもあれはおかしいと思ひ、幽州にて風と情報を集めていたところ、外患と結託して美花を追い落とそうとする豪族が居るようだという情報を掴みました」

あまり内緒話をしているように見えては不味い、歳三は姿勢を正した。

郭嘉の話が本当であるならば、それは一大事である。

だとすれば歳三の到着を良く思っていない一団が、どこかに居るはずである。瞬間、歳三が殺気立つ。

この群衆の中に暗殺者が居るかもしれない、その懸念が、漏れ出た。当然、続く馬車の太史慈と徐晃の二人にもその念は届く。

二人が自らの獲物に手を掛けたのを、歳三は切れ長の眼でそつと見た。

「ともかく、私が最初にするこは」

馬車が、城についた。

城の前には、満面の笑みを浮かべた孫乾が立っている。

歳三がひらりと馬車から飛び降りると、孫乾が駆けよつて来る。

そのままの勢いの孫乾を、歳三はそつと抱きしめた。

「帰つて来たよ、美花。約束通りに」

「ええ。ご主人様の雷名、ここ徐州まで届いております」

幾許か、お互いの温もりを交わし合った後、孫乾は何もなかったかのように歳三から離れ皆の方を向いた。

徐晃らは孫乾の突然の行動に呆気にとられ、郭嘉に至つてはあの奇癖を披露するのも忘れていた。

「皆さままようこそお戻りくださいました。そして梨晏も、お元気そうだなによりです」

「い、いやー、青州を通ったその節は、本当に感謝してるよ」

「うふふ、梨晏がご主人様と共にいると言うことは、梨晏もご主人様に惚れられましたか？」

「え!? あ、いや、私は別にそんなんじゃないやなくて、それに歳三は他にも……」

助けを求めた相手が悪かった。

土方歳三は生粋の女好きでなのであり、女性の扱い方は誰よりもうまい。

「天下の太史慈がそんな弱気でどうする。どうせなら私が土方の一番だと名乗ってみたらどうだ？」

「ああ、ええと……うう……」

思わぬ伏兵を出された太史慈は答えに窮し、そして。

「へ、兵を鍛錬してくる！ 美花との約束だったからな！」

逃走した。

「あら、梨晏はまだ時間がかかりそうですねえ。皆さま、道中お疲れでしょうから、宴席とお休みになられる方には部屋とを用意しておきました。存分にお寛ぎください」

そんなことを呑気に言う孫乾であった。

◇

歳三がまずこの城にてすることはなんてことはない、夜這いである。

孫乾の用意した宴もほどほどに中座し、部屋に戻った様に見せかけて孫乾の私室に入り込んでいた。

村の悪習ではあるが夜這いの技と、監察方を握っていた男の見事な合わせ技だった。さて孫乾が帰ってくるまで月でも眺めようかと思つたとき、部屋の扉が開いた。

「(う)主人さ」

部屋にまさか歳三がいるとは思わなかつたろう。

思わず飛び出そうになつた孫乾の驚きの声は、歳三の口づけによつて塞がれた。

そのまま、孫乾は抱かれるようにして部屋と引き入れられ、歳三は扉をしめる。

未だ驚きの表情を隠せない孫乾に、歳三は優しく微笑みかけた。

「あの時の約束を、果たしに参りました」

ああ、この人はなんてこんな声を出すのだろう、と孫乾はとろけるような思いだった。いつもの、傲岸不遜で不愛想な声ではなく、どこか初々し気で青年の様な声を出す。

こんな姿を持つ男だったのか、と目が覚めるようだった。

「唇を、吸いますよ」

既に奪っているくせに、何故今更そんなことを聞くのか。

「いじわるな人ですね」

「ええ。私はいじわるなのだ」

また、唇を重ねた。

一つ、二つと唇を啄つばまれる度に、孫乾の身体は未知の熱さに燃え上がり始めて行く。しかし一方で歳三はその気にならないのか、不思議そうな顔をしている。

いよいよ孫乾は切なくなつたが、女としての矜持、最後の手前言えるわけがない。

「美花の唇はどうしてこんなにも甘いのか。花の蜜でも、塗つておられるのか」

それなのに、目の前の男は素つ頓狂なことを言っているではないか。

孫乾はいよいよ切なくなつた。

「ご主人様、私は……私、美花は……！」

「わかつています」

歳三の眼が、ぎらりと光つた。

あれは獲物を狙う目であると気付いた時には、孫乾の身体は優しく抱え上げられ、寝所の上に降ろされていた。

見下ろされる形になるが、不思議と怖くはない。

歳三が優しい微笑みを浮かべているからだろうか。

「今宵は、寝かせませぬぞ」

それが、孫乾が覚えている最後の言葉だった。

孫乾の意識は、天に昇つた為、聞ねでの睦言は歳三しか覚えていない。

黒龍の片鱗

昨夜の情事後の後を丹念に洗い流した後、いつもの仏蘭西式士官服フランスに袖を通した歳三は郭嘉の姿を探した。

生真面目な彼女のことである、歳三が孫乾と男女の営みに耽つていた間にも、この城の情勢の把握に努めていたに違いないという、ある種の確信があつた。

しかしそれは、歳三にとって少し苦い思いもある。

(稟も、女なのだ)

仕事を任せつきりにしていたことにはない、女として扱えていないことに罪悪感を覚えているのである。

まったく、奇妙な話であつたが、この主従だからこそ成り立つ関係でもあると言えた。昨日の馬車の件は自然な発露に過ぎない。

前々から郭嘉は歳三に信頼の関係を越えたものを持つているのを感じていた。

しかし、だからと言って、無節操に手を出すほど歳三も伊達に経験を積んできた訳ではない。

孫乾とはまた違った、迫り方というものがある、ということはこの女好きはよく心得

ている。

(それに、相手が軍師であるならば俺も力でなく知略で越えてえもんだな)

女を抱くことと戦いは歳三にとってよく似ている、としたがやはり、この男にとってはどこか共通した価値観があるのは間違いないらしい。

◇

と、そんなことを考えていたのをおくびにも出さずに郭嘉の居場所に当たりを付けた歳三は、軽い朝食と共に郭嘉のこもっていた資料室を訪れた。

机に向かって乏しい明かりで、資料を漁っていた郭嘉の背中には、どこか疲れが見える。

「おはよう、稟。精が出るな」

「お、おはようございませう歳三様！ それに、手のものは一体……？」

「ん？ ああ朝食だよ。昨日の宴にも出さずとここで調べ物をしていたのだろうか？ 食べるにしても軽く滋養のあるものにしてある」

「見たところ二人分あるように見えますが……」

「何故だと思う？ 軍師・郭嘉よ？」

生真面目な彼女は顎を押さえて考え込む。

歳三がわざわざ二人分の朝食を持ってきて見舞いにきた、その意味を推察する。

(ああ、沖田が俺を見て嘖き出してたのがわかるような気がするぜ)

一方で歳三は顔がにやけるのを抑えながら、いつもの不愛想を浮かべていた。

死んでみてから、死んだ沖田の気持ちがなくわかれるというのも妙な話である。

あの不思議な青年も、歳三に変な問題を与えては嘖き出して笑っていた。

が、歳三は沖田ではない。

そんな郭嘉の恋心を傷つけるような真似はしない、歳三は鋼かもしれないが郭嘉の心までそうではないのだ。

わからない、という顔をした郭嘉に向かって、歳三はいつものむっとり顔で答えを出した。

「俺が食うのさ」

目を真ん丸にする郭嘉に向かって歳三は続ける。

「それとも、こんなしかめっ面と食事をするのは嫌かね？」

悪戯小僧のようにくすくすと笑う歳三は、郭嘉も見なかったことがない歳三の表情だった。

瞬間、湯でも沸かせるのでもないかという風に真つ赤になった郭嘉に、歳三は優しい笑みを浮かべながら膳を置いた。

「さあ、一先ず休憩を入れよう。その後で、話を聞かせてくれ」

未だ言葉を発することが出来ず、机を片付けるばかりの郭嘉。

それを見て歳三は、こうして郭嘉の可愛い一面を見られるのなら、沖田のいたずらもたまに役に立つものだと考えていた。

◇

ともあれ、女好きと戦好きが等価のこの男は、切り替えも異常に早い。

飯を食い終わった時には笑みを堪えた不愛想などではなく、いつもの冷えた鉄から滲み出るようなむっつり顔で郭嘉の話を聞いている。

政治、治安、流通、文化、軍事、わからぬことはその都度、郭嘉に質問しながら理解に努めている。

その甲斐あってか歳三の中で徐州の総合力は幽州よりもやや上回ると言う結論に達した。

もつとも、年がら年中北方の異民族から侵攻を受けるような土地と、比較的洛陽に近く交通の便も良い徐州と比べるのは酷とも言えたが。

そして、歳三がもつとも聞きたかった件は、息を殺し辺りを伺いながら聞いた。

「謀反の件、どうなっている？」

これには郭嘉も少し眉を顰めた。

確かに孫乾誘拐に徐州の豪族が関わっていた可能性が高いが、まだ可能性の段階である。

だというのに、この男の中では既に謀反になってしまっているらしい。

「歳三様、謀反というのは」

「単なる可能性である、と言いたいのか」

二人の視線が交錯する。

火花が散る、という表現がよくあるが今がそれと言えた。

最初に視線を逸らしたのは、まさかの歳三であった。

「わかった。美花が集めていた情報は？」

「昨晚でまとめておいたのがこちらです。既に拝見しましたが見事な収集能力です。し

かし……」

「しかし？」

「これだけの確信がありながら、何故美花は手を出さなかったのかがわからないのです」

郭嘉は眼鏡を直しながら、一度光らせた。

「いや、出せなかったのがが」

ふむ、と歳三は郭嘉から示された資料を読んだ。

読んでいく内に、首謀者の名前が目に入った。

「この、孫候という人物は？」

「美花の親戚筋に当たる人になります。美花が幼い頃からよく美花に仕えていたようで

して、美花も信じられなかったのか彼に關しての資料は他の者に比べて断然多いです」郭嘉から渡された孫候の資料は、なるほど、他の者の数倍はあろうかという厚さがある。

歳三はそれを一枚一枚めぐり丁寧に読んでいく。

なるほど、孫乾が孫候の謀反を信じられないのもよくわかる。

中でも、美花が幼い頃に起きた叛乱の、鎮圧を取ったのが孫候であるところを見ると孫乾の心情は測るに値する。

ただ、ただそれ故にだ。

政治や軍事にも深く関わりながら、ある一時を境にして動きが変わったのが歳三の勘に触った。

「稟、この日付の辺りから妙に動きが謀反へと傾いていないか？」

「言われてみればそうですねが、単純に何かしらの段取りが付いたのでは？」
違う、と歳三の勘が告げている。

そしてこの男は自身の勘を神仏よりも信じている。

幾瞬かの沈黙が流れ、思い出した。この時期にあった時のことを。

「稟、私にはよくわからないが、この時期は私たちと美花が出会った時の前後ではないのか？」

「言われてみれば……そうですね。日数から考えて恐らく、美花がこの居城についた後、位のことかと思われれます」

「普通、逆ではないか？」

「確かに。主君が居ない方が謀略はやり易い筈なのにこれでは……」

「見つけてほしいと言わんばかりではないか」

歳三はここ、初めて孫乾に会ってからの彼女の態度をもう一度考えた。

盗賊から助けたことを恩に感じ、夜這いまで仕掛け公孫贄への紹介状までも書いてくれた、献身的な女性。

そんな孫乾が、歳三のことを親以上に信頼している孫候に話さないことがあるだろうか。

歳三は静かに笑った。

孫候の意図が僅かながら見えてきたのである。

「？　どうかされたのですか？」

「信頼され過ぎるのも考え物だと思わないか？」

「まさか」

と郭嘉は言った。

孫候は、自らを犠牲にして叛乱分子の炙り出しをしようとしている。

あるいは賊に孫乾の誘拐を許すという失態の罪滅ぼしとして、だ。

まさか、とは突拍子もない歳三の想像力に郭嘉の理解が追いついたが故の言葉だった。

が、歳三にとってはまさかななどではなく、そうと決まれば、と歳三の腰は軽い。

兼定と国広の具合を確かめると早々に席を立とうとする。

「これより私は香風を伴って孫候殿の御宅に踏み込む」

「しかし、美花殿はまだ黒と断じた訳では……」

「では郭嘉は何色であると思う？」

「限りなく黒に近い、灰色であるかと」

「稟よ」

郭嘉ですら、背中に流れ落ちる汗の感覚を覚えなければならぬほどの凄みが、歳三にはあった。

「新選組わたしに灰色はない。白か黒かだ」

が、その凄みも瞬時にして霧散した。

歳三は殺気と打って変わって苦笑している。

「この場合は、待たれているのだろうか」

それでも、郭嘉は軍師である以上、主に忠告をせねばならない。

首を刎ねられようとも、忠言を行うのが務めである。

「畏だつた場合は？」

「畏を喰い破つて戻つて来るさ。それが私の、求められていることだろう？　なあ、稟」

どこまでも、この男は真つ直ぐでわかりやすかつた。

そうではないか、私が仕えると決めた人は、こういう人であると。

郭嘉は苦笑し。

「ええ、その通りです」

と、答えた。

◇

「ご主人様」

「なんだ？」

話は決まつた、と郭嘉と前後策を練つているところに孫乾がやつてきた。

なにやら孫乾は少し慌てている。

まさか孫候のことがばれたかと内心焦つた歳三だが、違つた。

「来客です。洛陽からの使者が、おいでなさっています」

「今はそんなもの追い返せ」

流石歳三、天下に喧嘩師は己のみと言つたところだろうか。

元々將軍に仕えるという武士の気概よりも、もつと戦つてみたいと言う気持ち強い男だ。

それはこの国の皇帝に対しても変わることはない。

皇帝や傍臣に敬うという気持は露程もない。

が、その政治感覚のなさが郭嘉を慌てさせた。

「駄目です土方様。それでは美花の立場が危うくなります」

「追い返すだけでもか」

「ええ。今の役人は贅を尽くすことしか考えていません。また、歳三様からも賄賂の一つでも贈らなければ、中央への讒言によつて処刑される恐れがあります」

「それは困るな」

その癖、声は滅茶苦茶に落ち着き払っている上に困つてもいない。

何か、歳三の中での独創が生まれつつあるようであつた。

「相分かつた。美花は歓待の用意をせよ。梨晏には兵に失礼がないように、と伝えておいてくれ」

「わかりました。それとご主人様」

「なんだね、美花」

「孫候殿の件、すべてご主人様にお任せします。ご主人様がどんなご裁断をくだそうと、

私は決して恨むことはありません」

そう言つて一札すると、孫乾は部屋を出て行つた。

(呆れるくらいに、良い女だよ)

と、歳三は己の審美眼の良さに満足しながら、孫乾の信頼に応えるために、郭嘉にあることを聞いた。

「……稟よ、この辺りは野犬は出るか？」

「ええ、丁度国境の辺りに行商人が野犬に襲われる被害が出ております」

「そして野犬の群れを避ける様に賊徒らが集まっている、と」

「その通りです。商人や農民たちも、野犬の群れは恐ろしいですからね」

歳三は、眠たげな眼を一瞬だけ鋭くしたのを、郭嘉は見逃さなかつた。

「そうか、ならば良かった」

「良かった、とは？」

「死体が残らなければ検分はされんだろう。しかし人の肉の味を覚えた犬は危険だから、早めに処分しておくように」

郭嘉は、歳三の思惑の一切がわかつたらしい。

余計なことを言わずに、ただ一言。

「わかりました」

と、だけ言った。

「では、早急に梨晏と連携を取り、歳三様の到着を待ちます」
「任せた」

歳三は部屋を出て、腰の兼定の具合を確かめた。

◇

月も頂点を過ぎ、地の果てに沈もうかという夜分に、歳三は徐晃を連れてある場所を訪れていた。

何を隠そう孫候の自宅である。

しかし、夜分故に孫候の自宅の門は固く閉ざされている。

さてどうしたものか、いつそ侵入するかと考えていたところに、薄暗い路地の方から老人が一人現れた。

体軀やせ細つてもなお、気力が満ちている老人である。

さぞ、名のある者だろうと歳三が思った時に、その老人は手招きをした。

曰く、こちらに孫候宅の勝手口がある、と。

「どうする？」

「愚問だよ」

徐晃の問いに、歳三は短く答えた。

「私も香風も、弱くはないだろう？」

「……うん」

歳三が徐晃の強さに万感の信頼を置いているのを感じて、徐晃は頬を赤らめた。

そんな二人の姿を微笑ましく見つめながら、老人はお早くにお願いします、とだけ言い路地裏へと消えていった。

歳三らも闇の中へとついていく。

辺りに人の気配はなく、驚くほど簡単に孫候宅に入り込むことができた。

そしてとある一室、先ほどの老人が姿勢を正して座っている。

ここにきてようやく、歳三も徐晃もこの老人が何者であるかを理解することが出来た。

「お待ちしておりました」

深々と礼をする、老人こと孫候。

「私が、この度の謀反の首謀者、孫候公德でございます」

歳三も徐晃も姿勢を正す。

が、孫候のあまりの潔さに徐晃は少し吞まれ気味だ。

歳三に関しては、予想していた範疇だったのか、少し悲しそうな眼で孫候を見ている。

「これが徐州にて謀反を企む豪族たちの連名状になります、こちらが、城内に住む者たち

の連名状となります」

「……貴方ほどの人がどうして、と言うべきではないのでしょうか」

黙々と謀反の証拠を差し出す孫候に、歳三は思わずそんなことを言っていた。

孫乾や民衆からの信頼も厚い孫候がこんなことをしたのは、偏に孫乾の為。

裏切者の汚名を着ることになろうとも、孫乾を誘拐してまで徐州を乗っ取るうとしたのが許せなかったのだろう。

現在、徐州では太守である陶謙は病に倒れ、全権を孫乾が握っている状態にある。

歳三らが遭遇した賊徒は、単なる賊徒ではなかったと言うことだ。

「貴方ほどの人だからこそ、このような汚れ役を背負った」

「それはお互い様でしょう、土方様」

孫候は翁らしい柔らかい微笑みを浮かべた。

「幽州での鬼神の如き活躍は聞き及んでおります。自身を悪鬼羅刹に見立て味方を鼓舞し敵を畏怖させる……見事な戦略ではありませんか」

「買い被り過ぎですよ」

歳三は首を振った。

「私はただの喧嘩師です。戦いあるところに行きひたすらに戦うことしかできない、そういう男です」

歳三は不愛想な表情を変えずに言った。

「例え、死んだとしてもそれは変わりません」

「駄目ですぞ土方殿。貴方の様な人は既に乱世のみの英雄ではなくなりつつあるのです」

孫候が少しだけ声を荒げた。

それが歳三への忠告なのか、あるいは愛する主が惚れた男に対する説教なのか、歳三にはわからなかった。

「もっと人を信じなされ、美花でなくても儂でなくても構いませぬ。そこの、貴方をひたすらに慕う彼女だけでも、心を開いてみなさい」

歳三の心に、ずんとした何かのしかかった気がした。

（心を開いた……仲間）

果たして、歳三にそんな仲間が居たか、どうか。

江戸の田舎に居た頃、試衛館の頃ならば確かにいた。

近藤に沖田に、永倉に原田に斎藤に藤堂に、時間はかかったが山南も居た。

では京都の頃はどうか、新選組副長という鬼の異名を羽織って戦い、新政府軍とは陸軍奉行並として戦っていた。

（ああ、そうか）

ようやく、歳三も気づいた。

変わっていたのは何も近藤ばかりではない、歳三も沖田も、京に上り皆が変わっていったのだ。

それなのに、自分だけは変わっていないかつもりでいる。

だから本当は、置いて行かれたのは自分の方かもしれないと言う気持が、少し強くなった。

そんな歳三の心情を表すには、少しばかり時間がなさ過ぎた。

「難しい話ですな」

「そうですね……では、代わりに教えてくださらぬか。何故、難しいのか」

しかし何故、こんな簡単なことが難かしいのかは、歳三は一言で表すことができる。

「それが、私の土道であるが故に」

「そうですね……それでは、これから美花をよろしくお願い致します。それがこの老人の、最後の頼みです」

「無論です。香風、今すぐに連名状を持って稟に渡してくれ。なるべく、人には見つからぬようにな」

「お兄ちゃんは、どうするの？」

「人は、成したことの責任を取らねばならぬ時がある」

兼定を、鞘から抜いた。

孫候は曲がりも何も謀反の首謀者である。

民の反発が如何に大きかろうと、それを許すことは絶対にできない。

それが法であるからだ。

「その介錯を務めるのは、私にとっては名誉なことなのだ」

だからこそ、鬼の謗りを受けるのは歳三だけでいい。

そのつもりで徐晃を離そうとしたのだが、簡潔な言葉でそれは拒否された。

「嫌」

「……どうしてだ」

「お兄ちゃんが地獄に落ちるなら、シヤンもついていく」

「幸せ者ですな、土方様は」

孫候は、笑った。

その笑顔は、満足して死に逝く者の笑顔によく似ていた。

歳三は、徐晃にも孫候にも負けた気がしていた。

きつと徐晃は梃子でも動かぬだろうし、孫候も説得を手伝うつもりもないだろう。

歳三はふ、と笑うと折衷案を出すことにした。

「ではこうしよう。私は最後に孫候殿に男として聞きたいことがある」

「うん」

「だから、聞いていないことにしておいてくれ」

「わかった」

徐晃が頷いたのを見て、歳三は孫候の後ろに回った。

孫候は歳三が首を斬り落としやすいように、ぐつと姿勢を歪めた。

「孫候殿、最後に何か、私に託ことづけはありますか？」

「ふふ、鬼だ修羅だと噂される割には、未練の多い人ですな、土方殿」

「まったく、未だ修業が足りぬ身です」

「冥府魔道に落ち、災厄をもたらす黒龍となり果てることを恐れ成されるな。今の貴方には、共に地獄に堕ち、共に天道へと昇る仲間がいなさるではないか」

徐晃の紫色の瞳が、視界に入った。

見えなくとも、趙雲の、郭嘉の、程立の、孫乾の、太史慈の姿が暗闇に見えるようである。

歳三は、彼女らを振り払おうと目を閉じた。

「まだ、お認めになられぬのですか。私には土方様が過去の亡霊に囚われているのが見えまする」

暗闇の中の暗闇の中に、薄くぼんやりとした人影が見える。

近藤が、大きな顎を開けて笑っている、沖田が、いたずら小僧のようににっこりしている。

原田が、腹の一本傷を出して大笑している。山南が、微笑んでいる。

「その亡霊を、私ごとお斬り下さい、土方様」

歳三はかつと目を見開いた。

そこにあるのは孫候の瘦せた首筋と、徐晃の姿である。

(私は、ここに居るのだ)

歳三は、ただ感謝した。

「……すまぬ、孫候殿。肝心の私が貴殿の晩節を汚してしまうとは」

「構いませぬ。後進と将来の婿殿を育てるのは翁の定め……では土方様、さらば」

歳三も、間髪を入れずに兼定を振り下ろした。

(これが、ここでの武士というものか)

手に、肉と骨を断つ感触が伝わってきた。

首が、飛んだ。

(さらば)

それは誰に対しての別れかは、歳三だけが知っている。

◇

孫候の遺体を整えてから、歳三はふと呟いた。

「黒龍、か」

程立にも、同じことを言われた。

もう、否定することはできないだろう。

亡国の漢を助けると言われる天の御使いを抑え、黒龍として現れたのは何の因果か土方歳三。

「私が流星を呑み、陽光を掴み蒼天に消え去る……」

陽光とは、程立が程昱と名前を変えた理由。

支えるべき日輪と定めた相手、曹操孟徳。

三国志における最大最高の英雄と、歳三は戦う定めにあるというのか。

また再び、滅亡の淵にある国に枕をし、敗軍の将として死するのか。

それはとても。

「いいじゃないか」

「？」

歳三は兼定を拭いながら、疑問顔の徐晃に静かに微笑んだ。

とても純粹で、透き通るような笑みだった。

そこには獯猛さも勇猛さも欠片もない、子供の様な無邪気な笑みだった。

(近藤勇に総司よ、俺はまだ、地獄に行くには早えらしいぜ)

黒龍というあだ名も、気に入った。

元より歳三、黒色が好きな男でもある。

そして災厄をもたらすという、喧嘩師らしい自分の生き方に向いている神獣ほけものではないか。

(どうでえ死んだ甲斐があつたらしい。俺の面白れえ人生はまだまだ始まったばかりのようだ)

しかし、その前にやることがある。

「黒龍初の立ち上がりにはちと地味だが、まあいいだろう」

「今度は何をやるの?」

こうして、ついてきてくれる仲間おんなも、いる。

歳三は徐晃の頭を撫でながら、容易極まりないことを簡単に言つてのけた。

「決まつてるよ、役人殺しさ」

乱雲陰り立つ

宴会とは華やかなるものである。豪華なる料理が用意され、美酒と称される酒が大量に用意され、美しい女人が煌びやかな舞を踊る。

少なくとも洛陽から来た使者である行宮あんぐうはそう思っていた。

だが目の前の、宴会と称されたこれはなんだ。

粗末な机の上に乗せされた、とても洛陽の大役人をもてなすとは思えない料理の品。安物としか思えない不味い酒。

女人どころか屈強な兵とすらなり瓢箪のような役人たちがばかりが並べられている。

行宮は激怒した。

これは徐州陶謙の失態である、すぐさま美人で知られる孫乾を行宮へと奉公に出さねば取り潰しの沙汰を出す、と考えていた。

とにかく、下衆下根の考えそうなことである。

行宮は今回の視察の名目で、孫乾を己の愛妾として徐州より洛陽へと持ち帰るつもりであった。

既に、行宮の中では名手孫乾も、人ですらなく物である。

「？」

ぶるり、と行宮は思わず震えていた。

それが何故かはわからぬが、ひとまずは行宮の怒りの矛先はこの宴会に向けることにした。

向こうから孫乾連れ去りの名目を与えてくれたのは結構、その上弱者をいたぶることが出来ると言うのは、行宮にとっては絶好の機会だったからである。

「おい、そこの。これはどういうことだ」

「は、はっ……」

「これが、徐州のもてなし方か？ 仮にも遠く洛陽より参った者をもてなすものやり方か？」

「い、いえ……それは……」

「誰がこの宴を用意した！ はつきりと致せ！」

「ひっ、土方様でござりまする！」

土方、と聞いて行宮は片眉を上げた。

確か幽州の方で、公孫賛と共に異民族相手に大戦果を挙げた者が、そんな名前だった気がする。

気がするだけである。

行宮にとって北方の異民族などどうでもいい、こんな舐めた宴会を用意したことの方が、大事である。

「今すぐそのものをここに連れてこい」

「は、は？ で、ですが土方様は孫乾様の大切な御方、私どもでも呼び出すことは簡単ではございませぬ」

「貴様、孫乾を私より偉いと申すか！」

「そ、そのようなことは、けっして！」

「私は孫乾をいずれ愛妾に置くものぞ。土方がどうした、いますぐここに連れてこい！」
役人たちは怯えるばかりでどうしようもない。

もう一度、素晴らしい喝を加えるべきか、と行宮が思い出した時に勇気を振り絞った一人の役人が前へと進み出た。

他の顔を青くするばかりの役人どもとは違い、覇氣十全に溢れ、更には色男でもある。それが、行宮の気には食わなかった。

洛陽の大役人である行宮を前にして、右往左往する十把一絡げの役人どもが普通の反応である。

にも関わらず自信満々に、そして決して美男とは言えない行宮とは比べ物にならない男振りが、なおのこと気に食わなかった。

これは如何にしても殺さねばならぬ、と心内で思いながら、行宮は聞いた。

「おい、そこのお前。土方という田舎者はどこにいる?」

「田舎者の顔を、見たいのですか?」

「私は二度同じことを言わせるものが嫌いぞ? 土方を出せと言うておる」

「居るではありませんか?」

「なに?」

ぱつと、服を脱ぎ捨て現れたのは、黒衣の偉丈夫である。

ひい、と役人たちの誰もが情けない悲鳴を上げた。

つくづく、芝居がかった登場が好きで男であるが、これは行宮の度肝を抜いた。

「私が土方歳三である」

敬意も愛想の一欠片もない名乗りである。

顔は不愛想に、声は冷徹なまま、そんな男を処罰せずにはいられぬ行宮であつたが、続

く言葉になお驚いた。

「孫乾殿の命により謀反を企てた貴様らの御用改めである。者ども、神妙にいたせ」

終わりだ、と役人の誰かが叫んだ。

行宮はようやく理解した。

顔を青くした役人たちが恐れ戦いていたのは、けつして行宮などではない。

ここに立つ土方歳三にあったということである。

この事実には、行宮は周りが謀反人であるにも関わらず顔を真っ赤に紅くした。

一番偉いのは場において行宮でありそれが絶対である、それが破られたことに行宮は激怒した。

「おのれ！ この無礼者が！」

そう叫んだが、飛んだ首が行宮の膳に乗った。

行宮でもあつても、いや、行宮だからこそ悲鳴が上がった。

本来、行宮のような男は人が首を斬られるのを遠くから眺めて笑っている男である。

近くで人が死ぬような乱闘があつたことなど、この男の人生にはない。

「ひいー！」

「孫乾殿に背いた反逆者である。皆、斬れ！」

歳三の怒号が、屈強な兵を動かし役人たちを斬り殺していく。

最初からこれは宴会などではない。

行宮の前で裏切者を殲滅せしめるための、偽りの会だったのだ。

兵の一人が、ぐいと行宮の身柄を引き寄せた。

そのまま、ひきずるようにして行宮を部屋の外へと連れていく。

「な、何事ぞ!? どいかに連れていく！」

「兵の謀反……。すぐに洛陽に戻って」

それだけ言うとう硬い石の床の上をずると引きずっていく。

服がまくり上がり醜く太った足が擦れ、肌が裂け血が噴き出し、行宮は悲鳴を上げたが兵はかまうことなく、城の裏手へと行宮を引きずっていった。

◇

「殺す、殺してやる……」

馬車上の人となった行宮がしきりに呟いている。

足は石畳みと砂の上を引きずりに引き摺られ、ずたずただ。

馬車に乗せられる時も、物でも投げ入れるかのようにぶんと、投げられた。

その後は汚いものでも触ったかのように手を払う兵の姿である。

少ない護衛として馬車の後ろについてくるその兵に、行宮は恨みの視線を投げかけるばかりであつた。

「援軍」

口数の少ない、兵としては小柄な騎兵が、そんなことを呟いたのを行宮は聞いた。

見れば徐州の城の方から騎馬隊が駆けつけてくるではないか。

「……土方か」

その中に歳三の姿を見た行宮は露骨に機嫌を悪くしたが、騎馬隊の中に絶世の美人が

いることに再び気を良くした。

三つ編みと肌を大きく露出した服、江東の方の女に多い褐色の肌、行宮は知らぬが名は太史慈である。

よいよい、と行宮は心の中で破顔した。

兵の無礼と歳三の無礼を、あの太史慈を黷らせることで許してやろうと決めたのである。

瞬間、行宮の身に感じたこともない恐怖が襲いかかった。

歳三が、行宮をじつと見ている。

後にも先にも、行宮がこの視線を感じたのは、先の宴会の時だけである。

「ま、まさか土方……」

気付いた時にはもう遅い。

歳三が太史慈に何事かを伝えると、太史慈は強弓を構えた。

狙いは、行宮。

ひい、と思わず失禁しながら頭を抱えた行宮だったが、太史慈必中の矢は、行宮に当たったことはなかった。

歳三、行宮などという愚物ごときに太史慈の弓を使わせるのを嫌ったのである。

太史慈の放った矢は、見事に馬車の車輪へと命中し行宮は地面へと放り出された。

「ぐうう……痛い……」

「お前に甚振られてきた領民や某たちのほうが、よほど痛かったと思うがね」

砂埃を立てながら、援軍こと歳三の軍勢が到着した。

不思議なことに、歳三たちの軍馬には紐で生肉が括り付けられている。

これも、歳三の策であるが行宮はまだ知る由もない。

ひらりと軍馬から降りると、歳三は行宮を引きずっていた小柄な兵に声を掛けた。

「すまぬな香風。こんな愚物の相手をさせて」

「別に、いい。でも、今度……その……褒めてくれたら、嬉しいかな」

「ああ。十分にその働きをしたよ」

ぐうう、と痛みに悶える行宮は目の前のやり取りをただ見るだけである。

本来なら行宮が付き従えている筈の美女を、目の前の男が、しかも愛によつて従えて

いるなど。

行宮にはとても理解できない現実だった。

なるほど、行宮は洛陽では万能の人物だった。

気に入らない男が居れば簡単に処刑できたし、気に入った女がいれば男がいようと婚

約者が居ようと夫が居ようと強権で以て略奪し、己のものにしてきた。

だが決して、愛だけは手に入れることはできなかった。

悔しくなったのである、こんな洛陽の位階も持たない田舎者如きが、愛を持っていることなど。

「土方あああ！」

それが恨みつらみとなつて歳三への恐ろしい悪言となるが、歳三は素知らぬ顔だ。どころか、耳を澄ませてみると行宮に余裕をもつて語り掛ける始末である。

心の中でありとあらゆる歳三への罵詈雑言を並べたてながら、耳を澄ませた行宮であるが、今度は別に恐怖した。

野犬の、唸るような声が四方八方から聞こえてくるではないか。

行宮が野犬に気付いたのを見計らつてか、歳三は呑気に語り掛ける。

「野犬ですな」

「おい！ はやくなんとかしないか！」

「ええ、すぐに」

すると、馬の後ろに引きずつていた生肉を、行宮へと投げかけた。

他の兵たちも、徐晃も太史慈も習うように生肉を行宮へとかけていく

「な、んな……きさ……ま！ 何をする！」

行宮の言葉を無視して、歳三は馬に飛び乗った。

そして行宮に背を向けて、馬を歩かせていく。

辺りから響く野犬の音がだんだんと、大きくなつていく。

歳三はこれで最後と言わんばかりに行宮に振り返った。

「お前の様な小役人如きに、兼定も国広も、香風の斧も梨晏の槍も使うには値せん」

「洛陽では十常時……張讓様の……！」

「そうか。では、野犬にそう言つてみると良い。少しは手心を加えてくれるかもしれないぞ」

それきり、歳三は振り返ることはなく、兼定と国広の目釘を確かめていた。

悲鳴が聞こえ、肉を噛み千切る音が聞こえる。

歳三はそのまま無視して、腹心の二人に語り掛けた。

「香風、梨晏。このまま国境の邑むらに集まっているとされる賊を討ちに行く」

と、言うが歳三は笑つて。

「もつとも、美花と稟が指揮しているのだから、とつくに終わっているかもしれないな」と、言った。

徐晃はいつもの通りそうだね、という様な風であつたが、太史慈は少し困惑顔である。

「歳三はさあ………なんというかあれだね、うちの大殿様もよく虎つて言われるけど、歳三は鬼だね」

「よく言われるよ」

不愛想に返した歳三に対し太史慈も。

「ま、らしいつちやらしいけどね」

笑うことで返したのだから、太史慈も多分、歳三の持つ何かあに中てられているのは確かだろう。

◇

徐州の国境、そこは幽州での隘路以来の地獄が広がっていた。

「酷い有り様だな」

と、その遠因を作り出した男は呑気にそんなことを言う。

元来、徐州では孫乾による穏和な融和策があった。

それは賊でもあつても帰農するのであればそれまでの罪は問わない、というかなり寛大なものだったのである。

他にも、ここで述べるには足りないくらいの融和策が孫乾統治下の元ではあつたのだが、それでも謀反が現実的になるほどの賊が発生しているのが現実であつた。

が、その現実を打ち破ることにしたのが歳三と郭嘉である。

孫候の策によつて集められていた賊を、正規軍によつて三方向から撃滅する作戦を二人は取つたのだ。

更生する余地なければ殺すほかなし、ということを徐州全土に知らしめたのである。

「それにしても、四方向から攻撃しないなんて、歳三も随分甘いんだね」

どの辺りが甘い、というべきかわからないが、太史慈が歳三にそんなことを聞いた。

「窮鼠猫を囓むと言う言葉もある。あまり逃げ道を絶つべきではない。それに、相手にもそれなりに頭の回るやつが居たらしい。国境くにさかいに近い故、それを越えて攻撃するのは流石に躊躇われた」

賊の殲滅が目的、とはいえあくまでそれ以上のことは望んではない。

下手に国境を越えて侵略が目的と取られて周辺の州牧と対立することも、洛陽から討伐軍を送られることも望んではないのだ。

行宮こそ始末したが、それ以上に敵対するような行動をすることはない、というのが歳三と郭嘉の共通の認識である。

歳三の短い言葉からある程度の事情を察した。

「なるほどねえ……それにしてもさ、妙だね、この死体」

太史慈が死体の一つを槍でひっくり返した。

歳三には、剣で斬られた死体にしか見えない。

「どういふことだ？」

「頭だよ。どいつもこいつも黄色い布を巻いている」

言われて、歳三は周りの死体を見渡した。

首がなくなってしまうているのはともかく、太史慈の言う通り、賊たちは頭に黄色い布を巻いていた。

一体何を示すのか、と歳三が考えた時、徐晃がぽつりと呟いた。

「……青色を倒すのは、黄色」

「どういう意味だね、香風」

「風が言つてた。風水では青の次は黄だつて」

徐晃の言葉に怪訝な声を上げた。

「……つまりこいつらは漢帝国を倒そうつてことかい？」

「なるほどな。そして風の夢見もある」

「歳三も、そうなると思つているのか？」

「ああ。風は稟と同じくいつもの確だ。無駄なことなどはよほどのことがなければ言わない」

「ということとは、この国は……」

「ああ。荒れるな」

突風が、歳三らの髪を揺らした。

それはこの国に吹き荒れる戦乱の予兆を感じさせた。

◇

そして歳三らの予想通り、城に戻ってすぐに各地で叛乱勃発の報告が飛び込んだ。

世に言う、黄巾党の乱である。

青州討伐命令

漢全土が黄巾党の乱で揺れる中、徐州はどの州よりも平和であった。

先の政変があつたにも関わらず、徐州再編が孫乾や郭嘉が考えているよりも早く終わらせられたのは僥倖ぜいこうしうであつたといえよう。

一つは孫候の存在が大きかつた。

おおよそすべての叛乱分子、汚職役人のほぼすべてを先の宴会で一網打尽にできたのは、偏に彼の策である。

もちろん、賊の殲滅もまた、徐州に多大な影響を与えたのは間違いない。

孫乾は穏和な融和策だけではない、過激な強硬策も取ることが出来ると言う認識は、芽生えかける悪の心を一気に引き抜くのに一役買った。

それと、影の引き立て役として黄巾党蜂起とほぼ同時に姿を消した行宮の存在である。

徐州に訪れる度に民衆を苛め、多大な賄賂を要求していた男が消えたことは、民にかかる年貢が減り、更には洛陽からの監視の目を弱めることに繋がり、民心安んじからせるにはうってつけだったのだ。

もつとも、存在そのものが害悪と言わんばかりに嫌われた男は、今頃野犬の腹に収まったことなど誰も知る由がなく。

黄巾党蜂起と共に消えたので、黄巾党に加わったという報告だけが洛陽になされることとなった。

◇ つまり徐州は今、土方歳三を必要としないほどに戦火の種がない、ということである。

徐州の孫乾の居城、執務室の一角を間借りした歳三が、郭嘉らと共に地図を眺めていた。

見事な漢全土の地図である。

郭嘉と程立が、二人して各地を放浪していた時に書き上げたという逸品だが、歳三が商人であるならばこれに持てる金すべてを出しても惜しくはないほどの出来であった。

その地図の上に、歳三が小刀片手に掘っていた木型を駒の様に置いていく。

太史慈が、歳三の不可思議な行動に疑問の声を上げた。

「ねえ歳三、その、駒を置くのは何の意味があるんだい？」

「こうすればどこにどれだけの敵が居て、どれだけの味方がいるかわかりやすいだろう？」

「そうだけどき……ちよつと黄巾党の数、多くない？」

「まあ、仕方ないさ」

漢全土にて蜂起、としたが黄巾党の現れた地域は既に壊滅させられた徐州を除き、冀州・兗州・豫州・青州の四州が実態である。

しかしこれら四州は関中とも呼ばれる平原の多くに集中し、実際大勢力となつていく。

これだけの数が相手では、流石の歳三であつても面倒だった。

(黄巾党ついても、もとは農民みたいなもんだ。まともにやつても面白くねえやな)

と、考えているのだから、黄巾党など脅威ではなく短期で終わらせるつもりでいる。

むしろ問題は、黄巾党より後にあると歳三は睨んでいた。

「たつた今、洛陽から命令が届きました」

孫乾が一枚の文を持つてくる。

何が歴史を変えることになるかはわからないことは、歳三は良く知っている。

鳥羽伏見では、たつた一枚の旗が勝負の明暗を分けた。

ならばあの紙切れ一つが、その分水嶺になりかねないことを、歳三は勘ながら感じ取っていた。

「帝より大將軍に任じられた何進様より、各地の諸將は黄巾党討伐をせよ、とのことで

す」

「これで漢帝国は本格的に弱体化を露わにしたわけですか」

郭嘉が顎に手を置いてそんなことを言う。

確かに各地の諸將に討伐を任せるなど、洛陽に全土の黄巾党を討伐するだけの余力がないというのと同義である。

つまり、洛陽の威光は地に落ちつつあると言うことだ。

残っているのは、僅かな権力にしがみつき甘い汁を尚吸おうとする毒虫ばかりか。

「ええ、そしておそらくですがこの乱が終わった暁には」

「諸將の任地による軍閥化……群雄割拠の時代が来る、というわけです」

孫乾と郭嘉の会話に、歳三は何も語らない。

ただ手慰みに、木彫りの駒を作るばかりである。

(今は、俺の分じゃねえ)

歳三の本分は戦いである。

今は、孫乾や郭嘉と言った、情報戦の状態である。

そこに歳三が口を出しても邪魔なだけであることを、この男は良く知っている。

(今はただ、聞くだけさ)

新しく二つの駒、皇帝と大將軍の駒を地図上の洛陽に置くと、歳三は盤上をじつと眺

めた。

徐晃と太史慈らも同じように、歳三が置いた駒を眺めている。

◇

半ば寝ているかのように、歳三は動かない。

ただひたすらにじつと、自らが作った駒を眺めてみては、眼だけがぎよろぎよろと動いている。

この男の頭の中では何が起こっているのかはわからないが、声を掛けるのが躊躇われる雰囲気があった。

現に、孫乾に報告に来た文官が、端の方で座る歳三を見てはぎよつとしてそそくさと出て行く。

何を待っているのか、と問われることもなくずっと、そうしていると、郭嘉がやってきた。

「歳三様」

初めて、自ら掘った木像の様に動かなかった歳三が、首を動かした。

目は、極めて眠たげである。

「どうした?」

「幽州の風から、情報が届きました」

「なんだって?」

歳三の眼がくわつと開いた。

途端に身体に精気が漲ると、身体の向きを郭嘉の方へと向ける。

「よく、間の冀州と青州は黄巾党だらけなのに届いたな」

「それはですね」

と、郭嘉は白魚の様な指を地図の上に泳がせた。

そこは歳三が駒を置いていない唯一の場所、海路である。

「梨晏は青州から幽州に渡るとき、美花に船を造ってもらったそうです。それを使いま
した」

「造船なんて一朝一夕でできるものじゃないだろう。まさか梨晏」

揚州一体は川が多く造船が盛んな地域である。

以前、酒の席に揚州出身の孫策と周瑜と幼馴染であると話していた。

だから、まさかと歳三は思ったのである。

幽州まで太史慈が居たのは造船技術の一部を盗んだからではないか、と。

「いえ、それはないそうです」

即座に、歳三の懸念は郭嘉によって一蹴された。

ならどうでもいいか、と歳三は気持ちを切り替える。

「出所はれつきとしたものなんだろうな？」

「ええ。設計図自体も、梨晏の門出にと渡されたものらしく、揚州では既に古くなっているかもしれない設計図だそうです」

「そいつはいい。大軍を動かすのには船は重要だ。美花に渡しておかないとな」

「それに民の流通手段も格段によくなりますし、河川の整備に流民を使えます。これです更に黄巾党に加わろうとするものたちは減るでしょう」

郭嘉は今でいう公共事業を行おうと言っているのである。

流民といえど元は民、賊にも黄巾党にもなる存在だが、きちんと遇してやれば民として根付く。

そう言った効果を狙ったものであろうことは、歳三にもなんとか想像できた。

(まあ、その辺は郭嘉ならうまくやってくれるだろうさ)

郭嘉を信頼しているからこそ、歳三は前で戦えるのである。

しかし今、歳三が欲しいのは戦うための情報である。

そういった主の雰囲気が変わったのを敏感に感じ取った郭嘉は、これまでの話をすつとやめると本題を切り出した。

「風の献策ですが、黄巾党の乱に乗じて青州一円を歳三様に乗っ取ってしまおうのと」と

歳三の眉がぴくりと動いた。

これからは徐州孫乾の土方ではなく、青州の土方となる。

つまり、大名格に一步近づくとということになる、と歳三の単純な頭は理解した。

その上で、一つだけ聞いた。

「できるのか？」

「できません」

「なら、やろう」

程立と郭嘉ができるというのなら、できると歳三は信じている。

そして、二人ができるというのならできる力が己にあるとも、歳三は信じている。

鼻歌でも歌いそうなほど上機嫌に、見た目はむつつり顔のまま立ち上がった歳三は部屋を出ようとして。

「それと、これは風からの情報ですが、義勇兵を募っている妙に強い一団がいることと、歳三様らしき人と子をなしたとされる猛将が荊州に居る、とのことです」

どこか思い当たる様な情報はなしを聞いて、初めて何もないところで躓きそうになった。

居住まいを正すと、じつとりとした眼でこちらをみる郭嘉に向かって一言。

「いずれ荊州にはいかねばならんな」

と、だけ言った。

◇

程立からの問題情報が無事全員に行き渡った中、洛陽から遂に黄巾党討伐の命が来た。

それを、歳三は針の筵であるはずなのに平然とした顔で聞いている。

徐晃や呆れ顔の太史慈はともかく、郭嘉など射殺さん勢いで見ているにも関わらず、だ。

「内容を頼む、美花」

「はい。我ら徐州一門は州内の乱を治めた後、青州の乱を討伐せよ、とのことですよ」

「なら、すぐに向かえるな」

「そうですね。ですがご主人様は荊州一門と共に行動した方が良いのでは？」

「そう拗ねるな美花」

歳三は苦笑している。

女で失敗しようともけつしてこりないのが、この男の真骨頂である。

孫乾の耳元で一言二言、恐らく他人には理解できない睦言を呟くと、孫乾は顔を赤くして下を向いてしまった。

一体何を言ったのか、驚く太史慈と郭嘉だが、歳三は鋭い流し目でそれを黙らせた。もう、ここに居るのは女好きの歳三ではない。

戦好きの、鬼と呼ばれた歳三である。

「それでだ。私たちは青州の親玉を叩く為に出撃することになる」
が、と歳三は続けた。

「馬鹿正直に真正面からでは敵の大將に辿り着く前に、こちらの兵力がまず足りなくな
る」

幾ら相手が民兵とはいえ、宗教で団結した一団である。

歳三、その時代の人ではないから一向一揆の凄まじさは知らないが、近藤の歴史講義
を寝物語に聞いていたのだからなんとなく面倒くささがわかる。

それに、京都時代では宗門はいかなる高位の御人と繋がっているかわからないとい
う、恐ろしさがあつた。

(いつの時代も、宗教つてのは厄介なもんだな)

厄介だからこそ、歳三には秘策がある。

「ちまちまやつてても仕方ないな。久しぶりに、やるかね」
「やるつて、何をさ？」

太史慈が聞いたのを、歳三は意味深に笑い返した。

(京都では)法度だったが、(ここ)は京都じゃねえからな)
いくらでも使える、という精神的余裕がある。

もつとも、これを余裕というには些か、異常であると言わざるを得ないのだが。

果たして歳三の秘策とは。

「火付けだよ」

歳三の顔は、あくまで不愛想である。

「要はこうだ。油の入った甕かめと僅かな食料をわざと奪わせて、村だが砦だかに運び込んだところで火矢を放つ」

「私は？」

「本命の梨晏は油甕を狙って壊してくれば最高だ。これは夜襲の必要はない」

「でもさ、私でも狙えない位置に甕があつたらどうするのさ」

「梨晏が弓で狙えないところに油甕があるならば、兵を黄巾党に偽兵して夜半に火付けを行う。これは夜襲になるな」

歳三は最後までむっとり顔のまま、黄巾党が迎えるだろう結末を口にした。

「そしてどちらも火が回って混乱してきたところを三方向から殲滅する、降服は認めない」

平たく言えば攪乱作戦からの奇襲、殲滅攻撃である。

言ってしまうえばこの前の孫乾と郭嘉らによる三方向攻撃からの、更に大掛かりな作戦だ。

確かに残酷ではある。

これまでは劍、槍、矢だった死因の中に混乱による圧死と焼死が加わるのだから惨いといえは惨い。

が、黄巾党が各地で行っている略奪や凌辱の嵐の話の聞けば、当然と思わざるを得ないのも、戦乱の常であると言えた。

「お兄ちゃん」

「どうした、香風？」

「なんで三方向からなの？　今回は越境は気にしなくていいんでしょう？」

「今回は窮鼠猫を噛むのを心配しているんじゃない。こういう戦はさつさと頭を叩くに限る」

歳三はとんとんと頭を叩いた。

「得てして、そういう頭の連中は守りの堅い要塞に居るものだ」

「？　じゃあさつさとその要塞を落せばいいじゃないか？」

「その要塞になりそうな場所が、風と稟の調べでいくつあると思う？　梨晏」

太史慈は押し黙った。

歳三は何も地図の上に無作為に駒を置いていたわけではない。

守りの強さや兵の強さ、現状わかる食料の多寡を微妙に変えて彫り上げていたのであ

る。

これを見て、絶対にここが黄巾党の頭がいる、とはわかるはずがなかった。

何よりも同じ大きさの駒が、つまりは同じくらい兵力の黄巾党が多過ぎるのだ。

「つまり逆の発想さ。支城になつてゐる村や砦を落して逃げていくやつらを追つていけば、自然と頭の居る要塞は割れる。それにだ、人が増えれば自然と消費する食料も増える。これで敵の戦闘力は間違ひなく落ちる」

そして歳三は更に先を見ている。

人が増えれば食事の量は増える、これは自明の理だ。

圧死、焼死が加わると言つたが、黄巾党の死因に更に餓死が加わるのは間違ひない。

郭嘉が、当然食料が減れば行かうであろう略奪を気にしてか、歳三に聞いた。

「周辺の作物は？」

「我々がすべて収穫したのち、焼き払う」

「お待ちください、それでは民衆への怨嗟は私たちの方に向くことになります」

「全部黄巾党がやったことにすればいいのさ。そんなの誰も気づきやしないよ」

平然と、歳三は言つた。

太史慈はようやく、自分が付いてきた人は本当に鬼なのだと思得した。

元々、生きてままの人間を野犬に食わせるなど、尋常の感性などではないとは思つて

いた。

死体の検分ができないからと、理に適っているからと普通やるだろうか。

だが、それをやる男が目の前に居る。

こんな非道ともいえる作戦を幼馴染は取るだろうか、と知らず比較して太史慈は首を振った。

「でも、でもさ。それでも民衆からの反感が間違ひなく来るんじゃない？」

「なら、軍からいくらか供出できるようなものを作らせるんだ。汁飯とかなにか、そういうものなら嵩かさを増せるだろう。民衆には恩も売れる、黄巾党は付近から略奪しようにもどうにもならない、結局籠るしかない。どうだ、良い案だとは思わないか、梨晏？」

歳三は笑っている。

だが眼は笑っていないことに太史慈は気付いた。

幼馴染もこんな笑顔をするが、ここまで獐しょう猛まうさが見えない笑顔も初めてだ、といよいよ比べ始めていた。

「そして、命を懸けて出てきても腹が減つてふらふらの、どうしようもない連中だ。殺すのは容易いだろう」

「では、完全に籠る体制に入られたらどうしますか？」

「落すのは簡単だよ。夜に大量の篝火を焚いて出て来なければ皆殺し、投降すれば命を

助けると夜通し言ってやればいい」

歳三はなおも笑っている。

「城内に満ちているのは火付けで蹴散らされたか、夜襲で散々火矢を叩き込まれた連中さ。その怖さは身に染みてわかつている」

だから、と歳三は続けた。

「火が付こうが付かまいが、ひたすらに火矢を放つ。そうすればいずれ内部で暴動が起きるだろうさ」

歳三の話は、容易にその光景を想像させた。

一本通しに話を通り過ぎていくから、想像力豊かなものが聞けば吐き気を催すかもしれない。

「私はね、人よりは恐怖の感情の出所を理解しているつもりだよ」

その癖、この男自体は恐怖の出所が滅茶苦茶な場所にあるのだから尚更性質たちが悪いのである。

「この作戦、幽州の公孫賛と連携を取りながら青州を取り戻すぞ」

「確かに公孫賛殿も冀州奪還を袁紹や曹操殿と協力して取り返すよう命を受けていると思いますが……」

郭嘉は珍しく消極的な声で言った。

別段協力しなくても青州は取れると郭嘉は踏んでいる。

だから歳三の一人手柄で青州を、洛陽からぐうの音もなく統治権を奪い取りたい。

それがわからないお人でもあるまい、と視線を向けると、歳三は郭嘉ににやりと笑って返した。

どきり、と郭嘉の胸が高鳴った。

読まれている、という期待があり、そしてやはり読まれていた。

歳三は郭嘉にはなくあえて徐晃へと尋ねる。

「香風よ、私は確かに三方向から殲滅すると言ったな」

「うん」

「なにも皆殺しにするよりも、他の土地に逃げて行ってもらった方が簡単だと思わんかね?」

「つまり、残った黄巾党は冀州と兗州に押し付ける、ってこと?」

「違うよ、押し付けるんじゃないやなくて頼むんだよ」

くすくすと歳三は笑った。

「その間に俺たちは豫洲の援護に行く」

す、と歳三の顔から笑顔が消えた。

郭嘉、これでお前の不安は取れたかと言わんばかりの、無表情である。

「さて、郭嘉から見てこれはどう思う？」

「多少の穴はありますが、ほぼ異論はありません。後は完璧に詰めていきましよう」

ああ、やはり読まれていたという想いと同時に、この人に付いてきて良かったと言う万感たる思いが、郭嘉にはあつた。

鬼の仁義

「ぎゃあー！ 誰か！ みんなどこだあー！」

炎に巻かれ、熱さで眼球が弾けた男が歩き回る。

「ぐえっ、俺の、うえっ、やめっ！」

不運にも右往左往する軍勢の中で倒れ込んだ男は、哀れにも踏みつぶされていく。

「やめろお！ やめてくれえ！」

ある男が、一人の剣士の前に懇願していた。全身を血に塗れ、右手に握り込んだ細身の刀身からは絶えることなく血が滴り落ちている。

剣士は、首をこきりと鳴らした。

「一つ聞こう」

「へ、へえ！」

「お前は、やめてと言われて一度でもやめたことがあるのか？」

男の身体は固まった。

黄巾党に身を落してからは、いや、男にとってはそれは出世だったかもしれない。

冴えない貧農の倅から、今絶頂にある黄巾党に加われば、成功が確約されていると思

えたからだ。

だから、やめなさいという老母の懇願を断って、黄巾党に加わった。

だから、やめてという襲撃した農家の女を、犯した。

だから、やめてくださいと実りを貯めた壺にすぎる農夫を殺して、奪った。

剣士の眼は冷やややかだ。

ない、と答えれば殺すという凄みがある。

「あ、あります！　ありますから！　た、助けてください！」

血塗れの剣士は一度、片刃の細剣の具合を確かめると。

「そうか」

と、だけ言つて剣閃を奔らせた。

首が身体から離れていく。

遠ざかる自分の身体を見ると言う、奇妙な浮遊感を感じながら、男は母の顔を思い出していた。

◇

「これで6つ目か、早く幽州からの援軍と会つてみたいものだな」

血で柄卷きを腐らせた歳三が、そんなことを言った。

柄糸を血で腐らせるなど、どれだけ戦に没頭しているかよくわかる。

太史慈や徐晃でさえ若干肩で息をしているというのに、歳三はまるで無縁そうに柄糸を解き始めていた。

「いや、さすがにこれは私らが早過ぎるんだと思うよ！」
というのは太史慈である。

徐晃もうんうんと首を振って同意している。

確かに歳三の進軍速度は異常である。

それもこれも火付けが異様なまでにうまくいっているから、という理由もあるのだから。

「仕方ないだろう。私が荀田を実行しないためには、なるべく早く黄巾党を蹴散らす必要がある」

郭嘉が付けた条件の一つに、速攻が不可能であれば焦土作戦を許可する、というものがある。

つまりは早く黄巾党を攻略しなければ、その分歳三が周囲の作物を根こそぎ奪い取る命令を出すことに繋がる。

それは流石に、太史慈も徐晃もさせたくない。

既にあまりの火付けの苛烈さによって、黄巾党のみならず青州にまで悪評が広まりつつあるのだ。

これ以上悪評が広まれば無用の誤解と闘争を生むのではないか、それを二人は危惧している。

一方、連日その報告を受けているにも関わらず、歳三は素知らぬ顔なのが憎たらしかった。

が、憎たらしいだけで憎めないのが、惚れた弱みというやつであろうか。

「で、この夜営地に関しては大丈夫か？ 梨晏」

「もちろん、四方に策を張って篝火も万全。警戒兵は常に二人一組で行動するように命令してある」

「なら、いい」

こういつた夜営地設営に関しても、歳三の近代戦思想が生きていると言っても過言ではない。

もつとも、効率が良いから使っているつもりしかない歳三がそうなので詳しくは書かない。

それに、夜営地の出来具合よりも気になることがあった。

「で、幽州からの援軍というのは？」

「風からの話だと……星とあと三人が来るって」

「強いのか？」

「二人は……」

「ふむ……」

歳三は一体誰だろうと考えだして、やめた。

それよりも柄の糸を巻く方が先決である。

器用に柄糸を巻いていた歳三であつたが、続く徐晃の報告で動きを止めることになるとは、誰も思つていなかった。

「二人はわからないけど、一人は有名……関羽雲長だつて」

「関羽だと？」

歳三にその名前は決して関係のない話ではない。

盟友であり義兄弟でもある近藤勇が、三国志の様な英雄譚が好きであつたと言う話は既にした。

中でも近藤は、関羽雲長を敬愛していたのは有名な話である。

歳三も耳が痛くなるくらいに関羽殿は関羽殿は、男とは義とは滔々と語られたものである。

その関羽雲長が、援軍に来ると言うのか。

「そうか」

傍目にはわからないが、付き合いの長い徐晃と武人である太史慈にはわかった。ただ眠たげだった眼には覇気が宿り、身体からは戦の時と同じ精気が漲っている。

太史慈は歳三の変化を強力な味方の到着を、ある意味で喜んでいと取ったが、徐晃は違った。

付け加えるように小さく。

「あと、関羽は女の人」

と、呟いたが、歳三は無反応だった。

無反応であったのが、徐晃には嬉しかったが、はたと、徐晃は気付いた。

何故私は嬉しいのだろうか、歳三が女というところに反応しなかったからか。

歳三が無類の女好きで既に孫乾に手を出していることは徐晃も知っている。

郭嘉にも手を出すのも、いずれ時間の問題だろうともわかっている。

その中で徐晃は自分をどうして欲しいのかわからず、先の様な事を言ってしまったのだ。

いつものようにぼうつとした表情でそんなことを考えていた徐晃だが、歳三がこちらを見ているのに気づいた。

自然、居住まいを直すことになる。

歳三に切れ長の眼は、時にすべてを見通しているように見えるからだ。

「香風よ」

そう、時にこのようにして、歳三は女の気持ちを見通してしまふのだ。

「今日は私と共に寝よう」

「ちよ、ちよちよつと歳三!?! こんなどころでかい!?!」

「何をそんなに慌てている。共に寝るだけがそんなに不味いのか」

「いや、だつてさ、もつとこう、雰囲気とかあ!?! 何言つてんだ私!?!」

「文字通りただ寝るだけだよ。何もしないさ。行こう、香風」

歳三の後ろにとことことついていく徐晃を見送つて、太史慈は顔を赤面させながら地面に蹲うずくつた。

指の間からちらちらと二人の行く先を見送つていたのは、太史慈なりの抵抗だろう。

◇

朝、徐晃は歳三の言葉通り、あの男の寝所で目を覚ました。

が、ここで言う言葉通りとは、歳三の言つた通り何もされなかつた、ということである。

私は何かをされるほど魅力がないのだろうか、と徐晃は考えながら先ほどまで歳三が寝ていたのだろう、未だ暖かい隣の寝床をさする。

急に、悲しくなつた。

本当は戦で戦功を立てて褒められる方が嬉しかったはずなのに、いつの間にか女として見られることの方に喜びを感じてしまっている。

「……………」

涙が、零れそうになった。

「良い朝だな」

なのに、この男の声を聞くと泣き顔を見せたくないと思ってしまうのは、武人の性^{さが}なのだろうか。

徐晃は歳三に気付かれぬように涙を拭くと、寝床の中でふいとそっぽを向いて素知らぬふりをした。

「なんだ、香風は寝坊する方なのか」

笑いながら歳三が近づいてくる。

絶対に顔を見せてやるもんかと思いつつも、そっぽを向けるだけなのは、やはり顔を見てほしいと言う気持がどこかにあるということに相違なかった。

「ふふ、すまん。香風」

何を謝ったのかはわからないが、徐晃の頬に何か熱いものが触れた。

驚いて歳三の顔を見た時には、徐晃の唇は歳三によって熱く、激しく塞がれていた。

今までのことが全部どうでも良くなるような、情熱的な接吻に徐晃は眼を白黒させて

いる。

歳三の懐の中にある時計の長針がきっかり一つ動くまで、接吻は続いた。

ようやく、目の前一杯に広がっていた歳三の顔が遠くに行つたことに気が付くと、徐晃の顔は真つ赤になつていた。

こんなことを当たり前にすることを望んでいたのかと、改めて思うと徐晃の顔はさらに真つ赤になつた。

「香風よ、幽州からの援軍が来ている。落ち着いたら、来てほしい」

そういうと、歳三は寢所を後にしながら。

「続きは、東萊城でな」

とだけ言つて去つていった。

歳三の中では東萊城は既に陥落しているも同然らしいが、それよりも徐晃は自分が歳三に女扱いされたことに嬉しくて涙を流していた。

◇

あの劉備一行に会う、となつては歳三も少しは期待をしていたりする。

関羽など近藤があればだけ心酔する存在なのだから、どれほどのものなのか見極めたいと思つているのだ。

しかし、劉備一行が居ると言う、張られた天幕の向こうに居るのは意気消沈した美女

三人のみ。

いい加減見た目で判断するのは危険だとわかりきっている歳三でも、これには毒気を抜かれてしまう。

三人と共に幽州からの援軍としてやってきながら、野營地でふらふらしている趙雲を捕まえると、歳三は理由を聞いて愕然とした。

「おい星。なんであの三人組はあんなに落ち込んでるんだ」

「だいぶ、こう、お花畑とか理想が高いお人たちでしたからなあ。風によつて完膚無きにまでに叩きのめされたのですよ」

「で、その後処理を私に丸投げしてきた、というわけか」

「ははは。それは主が私たちをほったらかしにするのが悪い、という意味表示ですよ」
風らしい、歳三の嫌なところを突いた復讐方法である。

鬼と鳴らした歳三でさえ、こればかりは頭を抱えた。

正しければ良し、悪しければ斬る、そんな単純な定法で生きてきた男である。

鳥羽伏見を越え会津を越え蝦夷まで辿り着き、それでもなお喧嘩師だった男に、説教は辛い。

(そもそもこんな説教は近藤さんや総司の仕事だぜ)

劉備たちの前に姿を現しながら、不満を心の中でぶちまけていく。

(俺アなんかより永倉君や原田君の方が余程いい、下手すれば斎藤くんより俺はこんなことに向いてねえ)

黄巾党どころか幽・青・徐の三州で鬼と言われる歳三が入って来ても、三人はまったく覇気がない。

(さて、どうしたもんかね)

三人たちと同じように席につき、それでも無言の三人を相手して、歳三は天を仰ぎたくなる気持であった。

先に聞いていた話では、一番へこんで見えるようなのが丸っこい顔をした童女の張飛翼徳。

そして右側に控えるようにしながらも、やはり沈んで見える、長い髪を一つにまとめたのが関羽雲長。

(戦^やつてみなけりやわからねえが、これは隙がねえな)

あまりにも不甲斐無いならば近藤の憧れの為に関羽を射殺するつもりでもあった歳三だが、それを改めた。

まず隙が無い。張飛と違って常に周囲に気を張っているし、顔は沈んでいてもこちらの一挙手一投足に目を光らせている。

(で、こいつが)

劉備玄德。徳の人、あるいは仁の人と呼ばれているところからして、歳三とはまるで正反対の存在である。

容姿、胸が大きく、長い赤髪のところどころを羽根飾りようなもので飾り立てている。それ以外は、特に取り立てて見るところはない。あるとすれば。

(関羽並に胸がでかい、つてえくらいか。結構なことだが)

歳三は思案した。

こう落ち込まれていては、話を進めたくても進めることができない。

近藤でもいれば史実の劉備殿は関羽殿はと激昂しているだろうが、生憎ここにいるのは歳三だ。

目の前にあるものが本物であると、とつくの昔に割り切っている。

「仕方ない、と溜息の一つでも付きたくなりながら、歳三は問いかけることにした。

「で、何をそんなに落ち込んでいる?」

「私たちのやっていることは、偽善だって、程立さんが……」

「ふむ」

「それで、その答えは土方さんが持っているから聞いてみてください、つて」

歳三、不愛想な面のところで肩眉を上げた為か関羽と張飛の得物が動きかけたが。

(あんにやろう本当に丸投げしてきやがったな)

すぐに傲岸不遜のむつり顔に戻った為に、関羽と張飛は若干肩透かしを食らった。「それで、私たちの理想は駄目なんですか？ 民の為に、戦えない弱い人の為に戦うというのは、悪いことなんですか？」

「別に、悪いとは思わんがね」

歳三とて、王城の守護者であつた時期のある男である。

あの頃は確かに、押し借りや乱暴狼藉を働く不逞浪士を捕縛していたのだから、確かに民の為に戦っていたのだろう。

「だったら」

「しかし一つ聞くが、私は民の為に黄巾党を討伐しているが、黄巾党も元は単なる農民であることは知っているだろう」

「それは……はい。洛陽からの重税や圧政に耐えかねた者も多いと聞いています」

「では黄巾党の為に戦うということも、ある意味では民の為に戦うことと同義になっている、とは言えないかね？」

鳥羽伏見で錦の御旗が翻った時、善と悪は完全に逆転したのだと思い知らされた屈辱を思い出す。

そうして新政府と戦い続けたわけだが、これもまた、戦えぬ武士や民の為に戦っていたと言えるのではなからうか。

と、そこまで考えてどうでも良くなった。

(らしくねえな。俺の考えることじゃねえよ)

とにかく、今は。

「まあ、今のは詭弁だよ」

喋り続けることにある。

喧嘩のこつは如何に弾みをつけるかにある、弁舌も一緒だ。

弾みがつかなければ言葉だつて出て来ない、その点歳三は弾みが付き始めていた。

「ともかく、程立が言いたかつたのは一つだ。君たちは民の為に戦う。では、他に民の為に戦う集団が現れたら、君たちはどうするのかね？ 軍門に降るのか？ 共に戦うのか？ それとも己の理想の為に戦うのか？ 守りたい民を犠牲にしても」

「それは……」

「それを答えられなかったのだから、程立は怒つたのだろうよ」

多分な、と心の中で思いながら歳三はあの腹黒軍師をどうしてやろうかと考えていた。

すこし時があつた後、困惑した表情で関羽が歳三に質問を投げかけてきた。

「それにしても、妙に肩肘張つていて疲れないのか、歳三は疑問だった。

「では、土方様は何のために戦っているのですか？」

「私はね私の為に戦っている。誰がどう言おうがそれだけはいはるつもりはない」
それが、土方歳三だ。

鬼と呼ばれた男の、仁義である。

「もつと言つてしまえば、漢帝国やそこに住む民のことなどどうでもいいのかもしれない」

が、と言つて。

「だからと言つて、民に仇なすものを許すつもりはない。さて聞かせてくれ劉備玄德」
歳三の眠たげな眼が、きつと劉備を睨んだ。

「君は、己の為に戦うが、その戦いが民を守る戦いに繋がっている私を、はたして悪として倒すことができるのか」

劉備、しばし長考して答えた。

「……では、間違つていたんですか？ 私たちのやっていたことは？」

「君たちはいつも答えを急ぐな。言つておくぞ、君たちの言う、民のために戦うというのは決して悪い理想などではない。だがいつか、絶対に壁にぶち当たる理想でもある」

それが今回はたまたま程立で、その後歳三が充てられたわけだ。

まったく、してやられたと思ひながら歳三は続ける。

「ああ、確かに、程立の様な人間にとっては、君のような理想論そのものを過ちと呼ぶか

もしれぬ。だが、だがな劉備よ。その過ちによつて救われた人間が、少なくともいるのではないか？」

劉備らの顔が、やつと少し明るくなった。

やれやれ、子守りも楽ではないなと^{よわい}齡三十五になる男はこつそり思つた。

「劉備よ、私は自分の為にしか戦えぬ男だ。この劍も、私の為にしか振るわれぬ劍だ」
劉備はうんうんと頷いている。

張飛は眼を輝かせ、関羽は感心したように聞いている。

なるほど、弁舌の徒は口だけで中身がない屁みたいな存在だと思つていたが、これだけ人を動かすことができる^とわかるとやめられなくなるのもわかる、と歳三は一つ学んだ氣になつた。

「けれどもだ、中には民の為に振るわれる劍があつても、良いのではないか？」

「民の為に……振るわれる劍」

「道を違えることを恐れるな、君の理想は誤解されやすいかもしれない。だからこそ、自分の選択を信じよ劉備。そして強くなれ」

「……はい」

「そして時に立ち止まって振り返り、これからの道を見よ。ただ前に進むだけが人間ではないのだから。そしてその努力を誰が理解せずとも、私だけは認めよう」

「はい！」

「ただし、その進む道が私と戦う道であつた時は容赦はしない。今言えるのは、それだけだ」

「は……え？」

「考えることだよ。考えて考えて、悩んで答えを出すことだ。少なくとも」

歳三は珍しく、にっと笑つて。

「私の様に、死んでから気付くような人間にはならないことだ」

歳三は席を立つた。

最後は軽く煙に巻いたような感じであつたが、これが歳三のできる精一杯であつた。

嫌な汗が、背中を流れている。

「おい、郭嘉を呼んでくれ。私は少し下がる」

天幕の外で立っていた警備兵にその声を掛けると、趙雲は天幕の影からひよっこり出てきた趙雲に思いつきり渋面をした。

「どうされましたか、主」

「……私はもう疲れた。二度とこんなことはしないぞ、絶対にな」

「あつはつは！ 流石の主も苦手なものがあるのですなあ！」

「その苦手に奮闘する私を着に酒を呑んでいたのは誰だろうなあ。今度軍中法度に酒類

の飲食を禁ずると加えておこうか」

「主、私が悪かった」

ともかく、と歳三は気持ちを切り替える。

これで劉備も少しは現実を見て戦いを始めるかもしれない。

そうなればそれでこそ、近藤が憧れていた存在を越える意味があるのではないかと
思っている。

(ああ、近藤さん。俺は関羽なんざ越えてやるぜ)

沖田がいれば噴き出しそうな歳三の決意に、本人ばかりが気づかない。

これでは友に自分より仲の良い友人がいる子供の嫉妬ではないか、と。

◇

ともかく、歳三との会話によって元気を取り戻した劉備らは、郭嘉との作戦会議で双方大まかな方向性が決まったことになる。

青州樂安・斉方面に劉備らが、東萊方面に歳三らが向かうことになった。

が、これが郭嘉と程立らの策であることを気付いていたのが、この場に何人いたか。

少なくとも自身の寝所で兼定の具合を見ていた歳三だけは、知らされていただろう
が。

兼定の刃が、暗闇のなかでぎらりと光り、歳三の姿を映した。

刃に映っていたのは果たして人か、鬼か。

東萊城攻略戦

歴史上、土地を治める大名や欧州ヨーロッパでいう領主がまったく別人になるには理由がある。が、だいたいの場合においては領地を武力によって篡奪されることがほとんどだ。

平和的な方法で変わるのには、將軍や王による命令か、あるいは子孫への継承か。さて、歳三らの場合、青州をものにするとはどういうことか見てみるとしよう。

現状青州を領地としている孔融と歳三らはなんら血縁関係もなければ一部を除いて面識もないし、領地を譲ることを考えるほど孔融も耄碌もろうくはしていない。

無論、今の洛陽から歳三が青州を賜る可能性などないに等しい。

ならば、残る手段は武力による篡奪しかないわけである。

しかしかといって、洛陽の正式な官位を持つ孔融を攻撃すれば、即ち歳三らも朝敵。

つまりは黄巾党と同じく、他の勢力に追われる不屈き者になり果ててしまう。

(が、そこで黄巾党が蜂起したのに意味がある)

と、歳三は兼定をゆつくりと鞘に納めながら考えた。

(孔融が、もし孔融が黄巾党によって死んでしまえば、俺たちが暫定的に青州を治めるのはなんの問題もねえはずだ)

そも孫乾公祐は青州と徐州をまたにかける有力豪族であるし、太史慈などはそれこそ青州東萊郡の生まれで地元民にも名前を良く知られていると言う利点がある。

孔融が死ぬ、この一点に歳三らの青州攻略の意味が変わることになる。

だから、郭嘉と程立は軍勢を二つに分けたのだ。

北の幽州からと、南の徐州から、青州を真つ二つに割るように軍勢を南下、あるいは北上させ黄巾党の東西の繋がりを絶つ。

続いて軍勢を西の冀州・兗州へと押し込む部隊と青州東の東萊郡へと押し込む部隊に分ける。

(ここからが、肝だぜ)

悪辣と言つていいのはここからである。

無論、青州を治める孔融は国外脱出など考えることなどないだろう。

清廉な人物として知られる孔融ならば、益々民を置いて逃げ出すなど考えにくい。

つまり、歳三らの迷惑通りに孔融は現在、青州東部地域にて最大の東萊城にて立て籠もつてしまつてゐるのだ。

「主よ」

「なんだね、星」

「たった今、香風と梨晏から報告がありました。黄巾党の陣四つを落したと」

「そうかね」

歳三は不愛想に答え、地図上の東萊城周りに新たに木彫りの駒を置いた。

「これで東萊城を囲む勢力は当初の三倍になったというわけですな」

「うむ。孔融殿も善戦しておるようだが、なかなか、難しいと見える」

「我々は援軍に向かわないのでですか？ 主よ？」

「援軍に向かいたくとも城を囲む黄巾党は我らの数倍はある。機がなければ迂闊に突っ込めんよ」

「機ではなく、気がないのでしよう？」

いい加減、諸将らも歳三を初めとした郭嘉、程立の悪辣な策に気づいていたらしい。

趙雲が歳三の首を抱くように、ゆっくりと後ろから抱きしめた。

豊満な胸が背中にあたるが、むっつりとした顔のまま歳三は東萊城を睨んでいる。

「あえて四方方向からの殲滅作戦を取らずに戦力を分散させて、各地の黄巾党の陣を飢えさせる……まったくよくできた嘘ですな」

「最初は本当だったよ。ただ、稟と風のお陰でもっとうまくいっただけだ」

「でしようなあ、こんな戦略的過ぎる策、主には少々荷が重い」

「まったくだよ」

歳三が初めて笑った。

「軍師というものは、実に恐ろしい。そう思わんかね、星」

東萊城を囲む勢力が三倍に増えたとは、先ほど歳三が言った。

そう、当初からの作戦である、あえて三方向から黄巾党を撃滅する作戦は、意味を変えたのだ。

今はわざと黄巾党の戦力を削がずにある地点に一極集中させることで、包囲殲滅を伺っているのだ。

その地点とは即ち、孔融の守る東萊城である。

「元々大軍団が攻め立てていた東萊城に黄巾党の残党が加わるのは自明の理、いくら堅城とはいえ我々に攻められたものたちが集まる黄巾党、必死になって陥落させようとするに違いない」

「主の火付けにやられたのでは、敵も溜まったものではないですからなあ」

「そして今、我々は東萊城を前にしてあまりの大軍に手を出すこともできず、他の小さな黄巾党の陣営を潰すことしかできない……孔融殿はそれで良いといい返事をしてください」

歳三の手元には東萊城から送られた密使がもってきた手紙がある。

そこにあるのはまだこの城は落ちないから、歳三たちには他の黄巾党を叩いておいてくれ、という清廉で強直な人物らしい、清々しい字で書かれたものだった。

それこそが、歳三の罨だと知らずに、自分から沼にはまり込んでいるのが、歳三のみならず配下の諸将には哀れに思えた。

郭嘉と程立の描く最高の状態での歳三の青州占領、それは孔融が黄巾党との戦闘によつて戦死することである。

東萊城近くで野営を続ける歳三ら本隊の軍はさながら、東萊城獲物の弱り目の陥落を舌舐めずりして待つ獸と言えた。

◇

そうして、東萊城の北門が落ちたのはそれから四日後。

徐晃と太史慈があらかた近くの黄巾党の陣を叩き潰し、歳三の元へ帰還してのことである。

これで大義名分はすべてそろつた。

歳三は孔融に言われて黄巾党の陣を叩いていただけであるし、東萊城陥落の危機となつて突撃した、というのも周囲になんの不可解な点を残さない最良の状態と言えた。

歳三は天幕を出て兵士らに命令を下す。

「皆の者！ 孔融殿が守る東萊城の北門が落ちた！ 我々はかねてより孔融殿から他の黄巾党を討てと命令されていたが、このままでは孔融殿の命が危ない！ 全軍、北門へ呐喊せよ！」

おう、と鬨とぎの声が上がる。

この中には青州出身の兵もいるだろう、孔融に何かしらの恩を受けた兵士もいるだろう。

そんな彼らは死んでも孔融を助けなければと奮起するし、周りの兵はその心意気に打たれ同じく奮起する。

歳三は兵士たちの士気の上々つぶりに一回だけ頷くと、自ら軍馬に飛び乗った。

「全軍、突撃―」

うおおお、という怒濤のような声が響く。

その先頭をひた走るのは黒衣の龍神、土方歳三。

ここから、土方歳三の一世一代の大博打が始まるのである。

歳三の突撃が早過ぎれば孔融は死なず、遅すぎれば東萊城を閉められ余計な被害を出す。

(さあ、やってやろうじゃねえか)

兼定を鞘から抜いた歳三は、静かな笑みを浮かべていた。

◇

結論からいえば、第一段階はうまくいった。

歳三の本隊の突撃は、散々打ちのめされてきた黄巾党を蜘蛛の子を散らす様に四散さ

せるのに役に立った。

さもあらん、歳三の行ってきた攻撃は黄巾党をして。

「鬼が現れた」

「災い為す黒龍だ」

「官軍の黒鬼だ」

と、言わしめてきたものである。

東萊城にとりついてきた黄巾党は、我を忘れて大地に四散したが不幸であったのは北門近辺にいた連中である。

歳三の頭の中には最早、黄巾党の撃滅しかない。

そんな男が静かな笑みを浮かべて突撃してくるのだから、誰もかれもが城の中へと逃げ込もうとした。

「俺だ！ 俺が先だ！」

「俺の方が先だ！」

「俺だってなあ！」

俺だ俺だの大合唱で内城の門は打ち破られ、波が引くように黄巾党が押し寄せていく。

もう、策は半分以上なつたも同然である。

歳三は軍馬から飛び降り、そこを斬ろうとした黄巾党を一人斬り殺すと、腹心たちの名前を呼んだ。

「香風、梨晏！」

「……なに？」

「なんだい歳三？」

徐晃は大斧を振り回し、太史慈は三叉槍を元気に振り回しながら歳三に応える。

「我々も城中に突っ込む。星！ 外の黄巾党退治は任せたぞ！」

「相分かりました主よ！ 武運を！」

華麗に槍を振るう趙雲の姿を見て、あれなら大丈夫だろうと微笑みを浮かべた歳三は、向かってきた黄巾党の一人を殴り飛ばし、もう一人を投げ飛ばしながら城中へと駆けこんでいった。

既に、歳三の顔に笑みはない。

◇

城中は酷い有様だった。

最早これまでと力の限り暴れる黄巾党と、主だけは討たせまいとする兵士たちの乱戦。

更には孔融殿を助けると、突撃してくる歳三らの三軍が入り乱れる状況であった。

兵士に斬りかかっている黄巾党の一人を、鋭い蹴り技で首を折り殺すと歳三は叫んだ。

「孔融殿はどこだ！」

「土方殿でありますか!？」

「そうだ！ 孔融殿は、孔融殿はどこにおられる!？」

こんな必死になって、黄巾党を殺し続ける男が、如何にして青州の篡奪者に見えようか。

兵士はつい、孔融の居場所を指し示していた。

「向こうでございます！ 土方様！」

「そうか、ここは任せる！ 必ずや孔融殿をお守りしよう！」

「ありがとうございます！ 土方様！」

歳三は兼定を振るい、時には国広も振り払って黄巾党の中をひた走る。

その後ろに続けと言わんばかりに振るわれる大斧と三叉槍は、あらゆる障害を吹き飛ばしていく。

走る、斬る、走る、蹴り殺す、走る、投げ殺す。

器用にも足を止めることなく黄巾党を殺し続けながら、歳三は遂にある一角に辿り着いた。

幽州や徐州でも見たような、立派な部屋のある場所である。

(ここに孔融が居るに違いない)

勘等なくともすぐにわかったが、廊下には黄巾党が満ちている。

ぐつと兼定を握り直すと、歳三は走り抜けようとしたが、大声によつて遮られた。

「止まれえ！ 止まらねえと殺すぞお！」

奥から出てきたのは、如何にも武人と言つた屈強な人物を羽交い絞めにした、同じく屈強な人物である。

一見細身に見える歳三とは対照的ではあるが、両者とも他者とは別格の力強さを感じさせた。

が、性根に関しては別だろう。

歳三はともかくとして、孔融の手に武器はなく、孔融を羽交い絞めにする黄巾党の男は刃を孔融の首筋に突き付けていた。

人質のつもりであろう。

なるほど、ここから無事に逃げるにはそれが一番手っ取り早いであろう。

(「いつア……予想外だったな」)

歳三、思案した。

それが隙になった、この場で空虚を作つてはいけないことを、わかつてはいたが作つ

てしまった。

「おらあ！ 孔融の命が惜しければどきやがれえ！」

その隙を、敵は押し込んでくる。

今まで歳三の勢いで突き進んできた部隊も、孔融の人質姿を見て怯みだしている。どうするか、歳三考える。

こうなれば、と腰間の拳銃ホルスターに手を伸ばした時、孔融が叫んだ。

「土方殿！ 私に構うな！ 私ごとこの者を斬れい！」

「な、なんだてめえ！」

「太史慈殿、貴殿が生き証人である！ 青州は土方殿に預ける！ 故に印綬を！」

「黙れえええ！」

孔融を黙らせようと男の刃が振り上げられた。

よりも速く歳三が風の如き速さで孔融の胸を突き、男の胸を兼定で貫いた。

「御免、孔融殿」

「あ、謝らないでくれ……土方殿」

歳三が兼定を一思いに抜いた。

孔融を人質にしていた男はどつと後ろに倒れ込み、歳三は孔融を迷うことなく抱き止めた。

血が、歳三のシャツを汚していくが、構うことなく抱き続ける。

「ここ、これが青州を治める者の印綬だ。土方殿」

「それ以上お喋り召されるな、孔融殿！」

「これも私の見通し不足が招いたこと、乱世の常よ、土方殿」

血を吐き身体から熱を失ってもなお、孔融は喋るのを止めない。

「ふっ、ふふ……先に地獄で待つておるぞ、土方歳三……黒龍よ」

それつきり、孔融は動かなくなった。

（わかつていたのか、孔融殿）

歳三は慎重に孔融の死体を床へと横たわらせた。

顔は、満足したような顔をして眠っている。

これを隙、と見たか一人の黄巾党がやあ、と歳三に斬りかかった。

無論、歳三に届くことなく必殺の向抜撃打剣によって心臓を一突きされ、絶命した。

黄巾党の男の顔は、未だ自分が死んだことがわからないような、驚いた顔をしていた。

（男として死ぬからには、孔融殿の様に死にてえやな）

自らの手で死地においやり、自らの手で殺したこととなった、青州を治める者、孔融。

歳三は初めて、孔融に会わなかった自分を殴りたくなっていた。

（先に会ってりやあ、絶対にこんなことはしなかったぜ）

だが、それも後の祭りである。

水の一粒が風に吹かれて飛んでいくように、孔融のことを心から消した歳三は黄巾党に向いた。

胸から真っ赤に流れる孔融の血が、涙の様にも見えたのは、徐晃と太史慈だけだろう。「まだ、やるか？」

歳三の、鉄から滲み出るような恐ろしい声が、黄巾党のみならず配下の兵士たちの耳を打った。

◇ この一言で、青州黄巾党は降服を受け入れたと言っている。

歳三の心に苦いものを残したが、こうして東萊城攻略戦は終了し、大義名分を手にして歳三は青州を治める者となったのである。

黒龍と対なる者

青州域、黄巾党より奪還と孔融死亡の報は瞬く間に漢帝国全域を駆け巡った。

同時に土方歳三の名も全国に轟いたと言つても過言ではない。

だが洛陽からしてみれば歳三など無名の徒であり、田舎者の無名武人でしかありえない。

しかも宦官の専横により、政治が硬直化した今の洛陽には歳三を臨機応変に扱うことは土台無理であつた。

それは土方歳三を洛陽に召喚することも、青州における仮の領主としての任命もできぬほどであり、漢帝国の弱体化を益々晒したことになる。

各地の先見のある諸将などは呆れかえりながら、漢帝国と歳三の行く末を見ているのは間違ひなかつた。

このまま青州を治めるか、それとも滅びるか、あるいは。

そういつた思惑が坩堝るっほとなつて冀州、州、豫洲をかけた黄巾党の乱は激しくなるのだが、歳三はそんなことを知らずにとある場所に居た。

東萊城の、執務室である。

城内の遺体を片付け、破られた北門を修繕し、孔融の葬儀を終えた歳三に待っていたのは、趙雲による弾劾であつた。

◇

椅子にどっかりと腰を下ろし、机の上に兼定と国広を無造作に投げ出している歳三。けれども、兼定も国広も一足で手が届く範囲に置かれているのであり、本当の意味で投げ出しているのは少し違う。

そして机の向こうには、槍を手にした趙雲と、多くの兵の姿があつた。にも関わらず、歳三はいつもの鉄面皮を崩すことなく、静かに口を開いた。

「話を聞こうか星。いや、趙雲子龍。それと、後ろの兵たちよ」

あまりの自信から放たれる冷たい声に、兵たちは冷や汗を垂らした。

左右を太史慈と徐晃という凄腕で固めているからの自信、というわけではないのだらう。

例え、彼ら全員が斬り込んできても生き残ると感じさせる、冷たい声であつた。

多くの兵士たちが歳三の気に吞まれている、そんな中で趙雲は口を開いた。

「私は、主……いえ、土方殿が孔融殿を見殺しにしたのではないか。そう考えているのです」

「後ろの兵たちも、同じ考えか」

歳三が鋭い目で兵隊を見た。

別に、歳三からしてみれば睨んだわけではないのだろうが、何人かの兵が震えた。それくらい、この男の眼光は鋭い。

ふむ、と一度考える素振りをした歳三は懐から一枚の書を取り出した。

「ここに、孔融殿の密使が遣わした書がある」

「それには何と？」

「この書には私への命令があつた」

歳三は悠々と語る。

「孔融殿は東萊城を囲とし、各地の黄巾党を殲滅せよと私に命令した。そう言われた以上、私にはどうすることもできなかつた」

「拝見してもよろしいですか？」

「もちろん」

歳三は書を太史慈へと渡した。

書を受け取つた太史慈は机をぐるりと迂回して、書を趙雲へと渡す。

太史慈の眼は、いくらか険しい。

「先に行つておくけど、字と印に關してなら本物だよ。それは私と美花……孫乾が確認してゐる」

「おや、聞きたいことが先に言われてしまいましたな」

太史慈に牽制されても趙雲の飄々とした態度は変わらない。

書を見たいものは居るか、と兵士たちに孔融の書を見せて回っている。

それを、歳三らはじつと眺めていた。

◇

わざわざ歳三を疑う兵士たち全員に見せたのだろうか、それなりの時間をかけてから趙雲は歳三の前に戻ってきた。

が、趙雲の態度は変わらない。

依然としてその眼には歳三への懷疑が含まれている。

「孔融殿は土方殿に他地域の黄巾党殲滅を命じた、それはよくわかりました」

趙雲が、ぎらりと眼を光らせた。

「では何故、土方殿は城の近辺に本隊を配置していたのか、その理由は？」

「いくら堅牢を誇る東萊城であっても、陥落する可能性が存在しないわけではない。故に、陥落する可能性も視野に入れた上で、すぐさま孔融殿の救援に迎えるよう、部隊を置いておく必要があった」

ついでに、本隊ではなく分隊である、と付け加えて歳三は一旦黙った。

そして。

「なるほど、君たちはどうあつても、私が青州を治めるのを断りたい、そういうことだな」
結論を、言った。

「それはそうか。私は世には鬼だとか黒龍だとか言われている。それが、気に入らない」
ふむふむと一人頷きながら歳三は続ける。

「孔融殿は孔子の子孫であると聞く。つまり私は仁の存在からはすべからく遠い。だから青州を治めるには仁が、そう、仁が足りないと言いたいのだろうか？」

兵士たちが、その通りだと言わんばかりに頷いた。

(馬鹿馬鹿しい)

歳三、心内で吐き捨てた。

その結果が、これではないか。

漢帝国の衰退、黄巾党の叛乱、青州刺史孔融の謀殺。

それらすべてが、孔子の言う仁を生んだ国で起きたことではないか。

(古臭えもんにつまでしがみついてやがるんだ)

歳三にはそう思える。

普通の武士であつたならば、孔子の仁については特と勉強し、理解しているはずである。
もちろん孔子の子孫である孔融に対しての尊敬など、特段あつてもおかしくない。

だが、歳三は武士は武士でも目指している武士は源平の戦国武者だ。

歳三は関東の荒えびすだとか、そういう古い時代の武士を目指している田舎者であり、商人の合理性をも持つ特異過ぎる武士なのである。

だから、こういう型にはまり過ぎた形骸には無性に腹が立つ性分である。が、表には出さない。

「よく、わかった」

表に出せば、今ではなくともいつかは必ず殺されると、歳三もわかっている。

それくらい、孔融は名声は低くとも臣民にはそれなりに慕われていたのだ。

下手に故人を侮れば、どんなしつぺ返しを食らうかなどわかったものではない。

かといって、歳三が青州を手放すつもりも、毛頭なかった。

「ではこの青州刺史を現す印綬を、孫乾に返還、いや、移譲しよう」

これには兵士たちがざわめいた。

目の前の男は青州の支配権を手に入れておきながら、さっさと手放さそうとしているのである。

普通、一州を手に入れておきながら簡単に誰かに渡す真似をする馬鹿はいない。

誰もが、歳三の真意を測りかねた。

「そして私は君たちの言う、仁を学びたいと思う。そこでだ趙雲。君が思う仁の人は、一

体誰だ？」

「そうですなあ……となると、今黒龍に対なすと言われていている白龍の元」

兵士たちに見えないように、趙雲が歳三へにやりと笑いかけた。

「劉備玄德殿のところへ行かれるのがよろしいでしょう」

◇

東萊城であてがわれた一室で、歳三は羽織コトを脱いだ。

あてがわれた、としたのは歳三は既に青州の頂点に立つ者ではないからである。

青州全権は今、孫乾が持っている。

この人事については誰も反論する者がなかった。

いや、正しくは反論することが出来なかった、というべきであろう。

(政治は息苦しいから嫌きらいだ)

歳三は苦々しい顔をしながらシャツの前襟を崩した。

それもそうだろう、と歳三は椅子に座りながら考える。

孫乾は青州と徐州を股にかける大豪族であり、陶謙から徐州一州の全権を任されている。

その政治手腕に関しては徐州を見れば明らかだ。

更には他の豪族に任せる、としても黄巾党の乱で疲弊した中で力のある豪族はそれこ

そ青州には孫乾しかいないのである。

これでは他にどうしようもない。

それに、その場に居た太史慈が賛成したのも良かった。

太史慈は元々青州東萊の出身であり、江東の虎と称される孫堅の元で武名を挙げているのも効いた。

(旗揚げしてなかったのが、逆に良かったか)

結果論にはなるが、正式に軍勢として旗揚げをしていなかったのも、良かった。

要は徐州からの兵が青州を奪還し、きちんと所持者に物を返した、とこれで多くの者は見る。

本来ならば、全ては歳三の下で権力が動いたに過ぎないのだが、そうだと見れるものは少ない。

孔融の死に対する怒りも、歳三ではなく黄巾党へと向かうことになるだろう。

(ここ)まで読んでいたってえのか、風と稟は)

歳三は久々に怖気を感じるようになる。

この場に居ないのに、この場のすべてを支配されている様な気さえする。

兼定に、右手がかかり、にわかになち上がっていた。

いったい、何を斬ろうとしたのか歳三にもわからない。

わからないままに、歳三は兼定を鞘から振り払い中空を斬った。何を斬ったのかは歳三自身にもわからなかったが、怖気が綺麗になくなっていった。

◇

歳三は昨日とは打って変わって、きつちりと仏蘭西^{フランス}士官服をきつちり着込んでいる。

左腰には兼定と国広を差し、右腰には拳銃^{ホルスター}囊を付ける。

月明りの中で軽く頭を撫でつけられてば、いつもの歳三の完成である。

少しばかり髪が伸びてきただろうか、と思わなくもない。

こちらに来てから、髪を切る機会など一度もなかった。

(こちら、か)

歳三はしばし逡巡した。

もう故郷への郷愁は断ち切っているつもりだが、時折歳三は考える時がある。

(こちらに來ているのは俺一人なのだろうか、そして突然に帰ると言うこともないのだろうか)

今のところ、どちらの兆候もないのだが、それでもと、つい考える時がある。

歳三は首を振った。

いくら考えたところでわからないものはわからない。

なら、そのままでもいいではないかと思う。

それに。

「ここは、良い女ばかりだからね」

ふと眩いた時に、後ろから誰かが起き上がる様な、衣擦れの音がした。

歳三は少し微笑みながら、寢所で寝ている人物に声を掛けた。

「起こしたかね？」

「……ん」

「まだ寝ていると良い、香風」

「……うん」

寢所で徐晃が寝ぼけているのだろう。

小さく返事を返すと、また規則的な寝息が聞こえてきた。

昨夜はあの小さな身体を心行くまで堪能したことを思い出し、ふつと息を吐いた。

(戦の熱と香風の熱、あれは確かに、幻なんかじゃねえさ)

歳三は徐晃を起こさぬようにそつと部屋を後にした。

目的は一つ、趙雲子龍である。

◇

部屋の扉の一つを叩く。

開いておりますよ、と声があったのを聞いてから扉を開いた。

中では趙雲が、メンマを肴に月を見ながら酒を飲んでいた。

「まだ、起きていたのか」

「来ると思っていましたからな」

趙雲が、妖艶ようえんな微笑を浮かべた。

歳三はそれを軽く流すと、静かに扉を閉めて部屋の隅から椅子を持ち出し趙雲の隣にさつさと座った。

そしてこの男にしては珍しく、杯を要求した。

「おや、飲まれるのですか？」

「ああ。そうなる気分もあるさ」

「珍しいことも、あるものですか」

趙雲が笑うのを、歳三はただ見ている。

と、口を開いた。

「お前の」

「？」

「星の笑い方は、私は好きだよ」

瞬間、趙雲の顔は真っ赤になり、身体は縮こまってしまった。

こうなるくらいなら、最初からやらなければいい、とは歳三は言わない。

妖艶な振りをしながらも、まだまだ初心うぶに変わりはないのだ。
杯を、一つか二つ重ねた。

飲む速さは確かに遅いが、一献一献嗜み締める様に飲むので趙雲としては嫌いではない。
い。

むしろ好きでもある。

趙雲が常備している酒は常にその地で最高のものである、それが評価されていると感じるのは、悪くない。

「星よ」

「なにかな、主？」

「あまり私を肴に酒を飲むのはよしてくれないか」

「おや、これは失礼」

先ほど、失態を見せてしまったと思っているのか、今度は縮こまる様な真似はしなかったが、顔は赤い。

歳三はそれを指摘するほど野暮でもなく、ただ趙雲の美酒を楽しんでいた。

「ところで」

趙雲が居住まいを正したところで、本題を切り出してきた。

「一応、現在土方歳三に対し嫌疑を抱いていることになっている私に、こんな夜更けに何

用ですかな」

そう、趙雲は今、この城の歳三懷疑派の筆頭將軍という形になっている。

これも程立による指示だということは歳三も知っているが、それ故にこうして会うのは危険である。

もしこの密会が暴露した場合、どうなるかは想像に難くない。

しかし、歳三はただ静かに笑った。

「ただ、星と逢瀬を楽しみたかった、と言いたかったのだが」

趙雲、この時は本気で驚いた。

あの、鬼だ黒龍だと恐れられる男が、恋い焦がれる少年の様な声を出した、と。

が、その声は酒に酔っていたからそう聞こえたのだと思うくらい、いつもの不愛想に戻っていた。

「趙雲に会って確認しておきたいことがあった」

「何をです？」

「とぼけないでくれ。劉備玄德は今、どうしている？」

「えらくお気にされておるのですなあ。劉備殿のことを」

「白龍、今そう呼ばれている劉備殿のことを気にしない黒龍はいまい」

目の前の男は鬼であり龍であり、蛇でもある。

一度くらい付いたら死んでも離さない、そんな気概の男である。

そんな男に目を付けられた劉備のことを趙雲は。

「おお、劉備殿はご愁傷さまですなあ」

と、言うしかなかった。

「茶化すな」

「失礼いたしました。ではお話ししましょうか」

趙雲はいつものふざけた雰囲気捨て、真面目に喋り始める。

「劉備玄德……その人が幽州に来た時のことから」

趙雲、白龍について語る

趙雲が語り、喉を潤す為に酒を口にしたらとところで歳三は聞く。

それに答えると、趙雲は先を続ける。

そういう問答が、月が下がり始めるころまで続けられて。

「そして、今に至る、というわけですな」

ようやく劉備についての長い話は終わった。

半分以上、歳三についての愚痴であったのは言わぬが華であろう。

歳三も、愚痴は苦笑しながら聞き流していた。

明らかに程立のものと思われる愚痴まで含まれていたのである。

本当に恐ろしい軍師だと思いつつも、歳三は劉備の行動を己の中で吟味し、

言った。

「武勲は私に勝る、というわけではないのか」

「そうは言いますがね、あれだけ叩いた後にまた大兵力を動かすのならそれこそ馬鹿と
いうもの。烏丸もそこまで愚かではありませんまい」

そう言われればそうだ、と歳三は頷いた。

城内の者と通じるくらい頭の目が討ち取られたのである。

それでもまだ公孫賛とやり合おうなどとするのは、歳三並の戦好きでなければ普通はしない。

現に、歳三の脳内にはだからこそ烏丸は攻め立てるべきだ、という架空の戦術がある。が、言わない。ただ相槌をして返した。

「それもそうだ」

「ですが劉備の横に仕える関羽と張飛、あの二人は違いますぞ」

「違う？」

歳三は疑問の形で返したが、あの二人が違うことはわかっていた。

いつでも、どこからでも襲いかかろうと、すべて薙ぎ払い打ち勝つ。

そんな強さを内に秘めていたのだから、歳三はもし二人が暴れ出したらと、嫌な考えを巡らせたものである。

だから、劉備との話を多少なりとも煙に巻いたのは、そういう理由がある。

「私に勝るとも劣らない武の者です」

「つまり、私では勝てないというわけか」

「これは主、ご冗談を」

趙雲は笑ったが、歳三は苦り切っていた。

やってみなければわからないと人は言うが、好んでやりたいとは思わないのが歳三の常である。

集団戦の中で生き残るためになんでもするし、一騎打ちでもなんでもやった。そう、歳三は勝つ為なら火付けもするし銃だつて使う。

だから、歳三の悪評は鬼の如き政治だけでなく戦いにまで及ぶ。

(やはり俺ア、蛇だよ)

心の中で自嘲しながら、歳三はふと気付いた。

趙雲はやたらと関羽と張飛を褒め讃えるが、では劉備は一体何なのか。

あれだけの猛者を従えるのであれば何かあるはずと、歳三の勘が囁いている。

「で、劉備はどうだったのかね？」

瞬間、趙雲の顔が困った、というものになった。

が、すぐに元の飄々とした顔に戻る。

言い難いこともあるのかも知れない、歳三はそう思った。

「何か、言い難いこともあるのかね？」

「実はですね……不肖この星、劉備殿に吞まれかけたのです。」

照れくさそうに笑う趙雲を見て、歳三は劉備に軽い嫉妬を覚えた。

少なくとも趙雲は、こんな風に笑う姿を人に見せるような人物ではなかった筈だ。

と、いう歳三の不機嫌を感じ取ったか、趙雲は慌てて訂正を入れた。

「いやいや！ 吞まれる、と言いましたも本当に吞まれそうになっただけで、今思うと何故あそこまで惚れこもうとしたのか……私は、その、主一筋、ですのに」

歳三は嬉しくなったと同時に、少し怖くなった。

手持無沙汰に机の上に置かれていた趙雲の手にそつと手を伸ばすと、軽く握り込んだ。

「主？」

徐晃よりもやや冷たいが、それでも熱い血の奔流が感じられる、美しくしなやかな手だ。

こんな綺麗な手を持つ者を、少し見ていなかっただけで失うことになっていたかもしれない。

そう思うと、歳三はどうか手を離すつもりにはならなかった。

「どうかされましたか。本当に？」

「すまん。手を離せば、星が劉備の元に行ってしまうそうだね」

珍しく、歳三が不安な心情を溢したのを見て、趙雲は己の失態を悟ると同時に嬉しくなった。

歳三は徹底的な現場主義であり、基本的に必要なこと以外は喋らない。

そして自身の心内に関しては秘密主義のきらいがある男である。

そんな男がどこか弱々し気に頼りにしてくるのだから、趙雲としても満更でもない。

「大丈夫ですよ主。例えばこの身が千里離れていようとも、私は……私たちは主と共にあるのですから」

◇

幾分、手を握り合っていただろうか、どちらかが言うまでもなく両手は自然に解かれた。

歳三はこれまた珍しく、気恥ずかしそうに頬を搔きながら。

「星。すまなかつた、酒の酔いということで二人の秘密にしておいてくれ」

と、言った。

趙雲は見た目にこそ出さなかつたが、舞い上がるような気分でもあつた。

夜の密会での、二人の秘密、なんと甘美な響きを持つていることか。

趙雲は、歳三の意外な一面を見れたことに気を良くしながら。

「相分かりました」

と、答えた。

その時には歳三既に、いつもの不愛想な面おもてに戻っている。

が、何故かそれが面白かつた。

歳三は普段、人には鬼だ黒龍だと恐れられている。

しかし、その実は糞真面目で不器用な男であるという違いが、そう感じさせるのだろうか。

「主は、面白い方ですな」

思わず、趙雲はそう溢していた。

対する歳三はどこか苦り切っていた表情で。

「最近星が、時々沖田の様に見えるよ」

とだけ、言った。

沖田とは誰か、と趙雲は聞こうとしたが、歳三が遠くどこかを見ている様な眼をしてるので、やめた。

代わりに歳三の頬をぎゅつと、抓った。

「痛いな」

「その沖田殿が男か女かは知りませぬが、主には大切な方のご様子。しかし、今ここに居るのは誰ですか？」

言われて、歳三ははっとした。

趙雲に沖田の面影を、無意識に重ねようとしていたのではないか。

いや、もしかしたらまだ、あの蝦夷地で死に損ねたという未練があるのかもしれない。

(我ながら、女々しいことだ)

歳三は軽く笑つて頭を振ると、沖田の微笑を振り払つた。

「そうだな、すまない星。では改めて教えてくれ。星が吞まれそうになったという、劉備玄德のことを」

◇

趙雲はその秀麗な指を顎に当てて少し考えると。

「劉備殿のことを一言で表すならば……仁義と徳の人ですな」

と、言つた。

仁義が何かと簡単に言えば、人が行うべき正しい道のことである。

では徳は、というと表現するには少し難しい。

それは漢帝国の政治の根幹にあたる部分に、徳という概念があるからである。

ともかく、趙雲は真顔で。

「丁度、主とは真逆に当たります」

と、言うくらいには歳三には仁徳がないとするべきだろうか。

「そこまで言われると、流石にへこむな」

「まさか。では今回の敵陣への火付けの策、考えついたのは稟ですか？」

「私だよ」

間髪入れずに、歳三は即答する。

趙雲は思った通りだという顔をしていた。

「私が考えて、私が実行した」

「ええ、主の行動はそれはもう理に適い過ぎている。仁徳など関係ないくらいに」
「どういふことだ、と歳三は疑問符を浮かべた。

趙雲が何を言いたいのか、わからないのである。

わからないから、趙雲の言葉を歳三は待った。

「劉備殿は戦の先にも後にも降服勧告を行つてから、戦うのですよ。そして関羽殿と張飛殿が真正面からなぎ倒すのだから、例え負けても相手は恨むどころか清々しさを感じてしまう」

「ふむ」

「しかし主は、黄巾党のみならず孔融殿の配下にまで恐怖を植え付ける、まるで逆の関係なのですよ」

なるほど、と歳三は思った。

何も歳三は好きで火付けをしているわけではない、戦に都合がいいから使っているに過ぎないのだ。

だから、他に良案があれば諸手を上げて火付けなど捨ててしまふだろう。

女だけでなく戦にまで節操なしの男なのである、これでは仁徳などあろうはずがない。

孔融の部下たちが、孔融の遺言を聞いていても尚、歳三を信用できなかつたのも、そこにあるだろう。

苛烈さはいつかは敵ではなく味方に向く、歴史が繰り返してきた必然であるからだ。

「もつとも、私としてはこの国は少々孔融殿の徳治が行き過ぎている様な感じがします
が」

と、趙雲は付け加えた。

「孔子殿の子孫故か、そういう仁徳に厳しかった。だから歳三様から離れていた私を担いで、青州から主を追い落とそうとしたのですよ」

「ふむ」

「無論、ぼつと出た主が気に食わないのも、いくらかはいるとは思いますが」

趙雲が裏切つたなど端はなから考えていなかつた歳三にとって、青州兵の恐怖はようやく理解できるものであつた。

自ら信じてきた基盤を揺るがす存在が、新しい主人となる。

それは恐怖以外の何物でもないだろう。

丁度、武士という身分が揺らぎ始めていた幕末を生きた歳三には、それはよくわかる。

が。

(他人の影に隠れて、ってというのが気に食わねえな)

青州に対する怒りは、また別のところにあった。

これはまた怒ってらっしゃる、と趙雲は歳三の気を引くために新たな話を切り出した。

◇

「この国は矛盾を抱えているのですよ」

と、趙雲はそう切り出した。

歳三は青州への静かな怒りを忘れて、趙雲の瞳を見た。

「矛盾？」

「そう、徳治と法治、この二つが陰陽の如く寄り添うことによってこの国は成り立っております」

「どういうことか、私にはよくわからんな」

「前代の秦の行き過ぎた法治を救うために、漢は立ち上がったのですよ」
歳三は少しだけ思案した。

徳治と法治、これら二つがあり、先に法治があつて後に徳治が来た。

しかし、二つの矛盾する政治が混在するというのならば。

「建前としては徳治ではあるが、中身は法治である、と?」
「正にそれ」

少しだけ徳治と法治の説明を挟むとすれば、その矛盾がより際立つ。

徳治とは主君の徳、多くは道徳や礼儀などの徳を指し、更にこれによって国を治めることを王道と呼ぶ。

ただ、この王道政治の厄介なところは、自然災害や臣民の乱すら主君の徳に理由を求めのだが、それは余談。

逆に法治とは、読んで字のごとく刑罰や軍事で国を治めることであり、これを霸道と呼ぶ。

「今の漢は、徳治によって抑え込んできた法治の部分が表へと溢れ出し、悪用され」

「臣民は皇帝である霊帝の徳が失われたと嘆いている、ということか」

「主もなんとなく見えてきましたか」

「ああ。私にも見えてきた」

漢帝国は全く異なる二つの主義を呑もうとし、遂に末期症状を呈し始めている。

歳三と趙雲の共通の見解がこれだった。

「しかし、そうなるはこの漢はこのまま立ち枯れるか、倒されるかではないか」

「ええ、そうなるでしょう。黄巾党の乱はその発端、いずれ群雄割拠の時代が来ると私も

風も話し合っておりました」

「で、何か良い案が浮かんだと言うわけか?」

歳三の言葉に、趙雲はにやりと笑って答えた。

「主よ、以前の言葉に嘘偽りはありますまいな?」

「どの言葉かな?」

「まったく、主にとつては皇帝の席など本当に必要ないのですなあ」

趙雲は呆れながら笑って。

「だからこそ、付いて行く甲斐があるのですが」

と、言った。

◇

二人は手分けして、話を盗み聞いているものがないか部屋中を丹念に調べた。

元々、二人は気に敏感な方だから人が近づけばわかるのだが、今度はもつと丁寧調べた。

これから話す内容は、聞くものが聞けば間違ひなく訴えられ、首を跳ばされる。

そういう話をしようとしているのだから、少しばかり神経質になろうというものである。

もつとも、真剣な表情の趙雲と違い、歳三はいつものむつつり顔だから胸中伺い様が

ない。

「間者、密偵は居らぬようだ、星」

「そのようですな。では、私と風の策をお話ししましょう」

今度は酒はなし、と趙雲自ら徳利に蓋をするほどである。

二人、席に座つて向かい合つて、趙雲が先に口を開いた。

「まずは劉備殿。とりあえずは氣を付けてください。あの御方は危険です」

「私には、横の二人のが危険と思えたが、その理由は？」

「彼女の確かに理想家です。しかし彼女の天真爛漫さには人を酔わせる力がある。過程も現実も、全て放り出して成功させると思い込ませるような、そんな力があります」

そいつは恐ろしい、と歳三は本気で思った。

歳三、多くの剣客と斬り結び動乱を駆け抜けたが、そんな素質を持つ人間はたった一人しか知らない。

（坂本龍馬、だな）

もつとも、坂本龍馬は目的達成までの明確な絵地図を持っていた筈、と歳三は思ったが。

（本当に、そうだったのか？）

言われてみれば、到底無理ではないかと思う様なことを散々やり、あるいはやろうと

していた。

もし、劉備玄徳が坂本龍馬と同じ魔力を持つのであれば。

坂本龍馬は極端な武力を好まなかったが、劉備玄徳がこれから大きく飛躍するには、ぞくり、と歳三の背中に冷たいものが走るような気がした。

と、同時に血が熱く滾るのを感じる。

地に伏せる龍を、この目で二度も見ることになるとは望外の喜びである。

「わかった。風が劉備殿をやり込めたのはそういう訳だな？」

「そういうことです。何も知らなければ主すらも取り込みかねませんでしたからな」

趙雲が吞まれかけたのだ、歳三も吞まれないという保証はどこにもない。

だからこそ、程立は劉備の理想論を片っ端から否定した。

そうすることで、劉備は歳三の前ではただの意気消沈した娘でしかなかったのだ。

「それで、どうするんだ。劉備殿が恐ろしいことがわかったが」

「そう、劉備殿は仁徳の体現者であると、誰もが思うでしょう」

「ここで趙雲は言葉を切ると、歳三をじっと見た。

「では、主は何の体現者になると思いますか？」

歳三はじっと考えた。

これは、一つ間違えれば趙雲と程立に見限られても可笑しくない問いだ。

趙雲と程立の言わんとしてゐることを、ただ考える。

劉備が仁徳の首魁であるならば、歳三は鬼であり黒龍であり。

そういえば、と歳三は思い出す。

劉備は先にも述べた、穏和とも言える戦い方によつて、行く先々で白龍の化身と呼ばれてゐると聞いた。

歳三、閃く。

「わかつた」

歳三は言った。

「つまり、白龍の対となる黒龍である私は、法治の体現者か」

「正解です」

と、趙雲は満面の笑みで応えた。

「主と劉備殿が手を取り合うことは、今のところまず無理でしょう。しかし本当にそれでいいのかと私と風は考えましてな」

趙雲は続ける。

「この漢帝国の様に、陰陽の如く混ざることもなく互いに関係し合いもう一度国を盛り立てていく。およそ間違いなく、この国は新しい時代を迎えることが出来る様になりま
す」

王道と霸道、その二つを同時にやっつけてしまおうと、趙雲は言っているのである。

一歩間違えれば反逆物の思想でもある。

だが、歳三はそれを面白いと思っていた。

その過程にあるに違いない、過酷な戦の存在に静かに血を滾らせていた。

「そしてゆくゆくは、現皇帝の血筋である劉備殿を皇帝に燻おたて挙げる、では語弊がありませんな」

と、趙雲は言葉を変えて。

「祭りあげた上で、主が將軍となつて政治をする、というのはどうですか？」

と、言った。

歳三は無言でそれを受け、ぎらぎらと眼を光らせ始めた。

(面白れえじゃねえか)

近藤という無名の田舎剣客を、大名格にしようとし、実際に押し上げた男である。

趙雲も程立も、歳三の氣質をよくわかつている。

歳三自身を祭り上げるより、他の誰かを祭り上げた方が燃える男なのだ。

「俺ア皇帝に興味はねえが、大將軍にも興味はねえ」

あまりの興奮に、地言葉が出てしまっているが、歳三気付かない。

趙雲も、歳三の素性を知っているのだから、何も言わない。

ただ、燃える男の姿を眩しそうに見つめていた。

「俺ア、天下第一の副將軍でいい」

◇

「すまん。久しぶりに熱くなっちゃった」

「いやいや、主はとんでもない野望の持ち主でございましたか」

少し気を落ち着けた歳三は、またいつもの言葉遣いへと戻っていた。

しかし趙雲は一見、歳三の鉄を張り付けた様な心の中で燃える炎になんとも心を躍らせていた。

ぞくりぞくりと、身体中が歳三を求めている様な、そんな気さえする。

しかしそれを気取られぬように、とあくまで話の続きに興味があります、という風には話を続けた。

「主君に大欲あらば軍師はより張り切る、と風は言っておりましたが、これは張り切り甲斐があるでしょうかなあ」

「なんでかね？ 皇帝になろうとする方が余程大きいと思うが？」

「皇帝と大將軍を意のままに操り、しかも自分は副將軍を牛耳る。いやはや、これが皇帝以上の大望と言わんとして何というのか、この星に教えてくれますか？」

今すぐにも抱きつきたい、という胸中を抑えながら、趙雲は歳三の鉄面皮を見る。

「ないな」

「でしよう?」

二人、顔を見合わせて大笑する。

笑い終えてから、歳三はいつもの不愛想に戻って、今後の話を始めた。

それが、趙雲の心をざわめかせた。

「つまり、劉備とまた会え、ということか」

「そういうことになりますな」

趙雲の心を、ちくりとしたものが刺した。

歳三はそういうつもりで言っているのではない、わかっているが、心が嫌がった。

ここに居るのは趙雲子龍星ただ一人であると言うのに、という叫びが、喉元まで上がってきた。

それでも、趙雲は忠実なる臣下であるべく、言葉を続けようとした。

「ですが白龍はまだ幼い。必要な分の血を浴びてはいません、だから」

趙雲の言葉は、歳三の唇によって塞がれた。

何をされたのか趙雲は理解できない、出来ないうちに、唇は離れていった。

「星の唇は果実の様な味がするな」

「あ、主。主は一体何を」

「もう一度」

もう一度、言葉通りに、唇を塞がれた。

先に何か食^はんできたのか、歳三からは甘い液が流し込まれてくる。

趙雲は顔を赤くしながら、負けじと舌を入れ返して歳三の口内を食った。

月が二人の情事を恥ずかしがってか、地平の先に沈もうとしている。

それから二人は、息を欲してか唇を離し合った。

「そう、星の唇は何度も、味わいたくなる」

「そういう主の唇は、血の味が強いですな」

自分の心を見透かされたくない一心での、趙雲の抵抗だったが。

「嫌かね？」

「それは！」

接吻一つで陥落させられた。

「つ……何度も何度も卑怯でございますよ、主」

「そうだよ、私は卑怯なんだ」

少年の様な声色で、少年の様な無垢な笑みを浮かべる歳三に。

「主よ、はしたないと思わないでください」

趙雲はもう、しなだれかかるしかなかった。

北よりの吉報

歳三の調練は苛烈である、という話は以前書いた。

基本的には恨まれることが多いが、何故か歳三を慕うような者が不思議と現れるとも。

それは歳三の理想が、西洋の近代軍編成と歳三の独創によるところが大きいのが理由である。

一番変わったところは出来ない者を置いていくことなく、皆が出来る様になるまでやるところであろう。だから、実戦では統一を乱すことなく連携して動くことができる。

他にも歳三は兵たちとは独特な人付き合いをしているのだが、長くなるので今は書かない。

要するに、軍歴の長いものには嫌われやすく、軍に入つて日の浅い者や軍に入るしかなかったような者からには人気があつたのだ。

そして今日も、独自の調練を終えた歳三は汗を流すために、城の裏手にある井戸に来ていた。

衣類を全て脱ぎ、兼定と国広をすぐにも取れる様に置き、井戸の中に桶を落した。

水を汲んでは被る、という動作を繰り返しながら、歳三は不愛想な顔で考え事をして
いる。

(徐州の兵はともかく、青州の兵は私に不信感がありすぎてどうにもならんな)

軍事面に関しては歳三に一任されているようなものなので、歳三の悩みが尽きることは
ない。

最近はおつばら、徐州兵と青州兵との間に練度が広がっていることに対する不安で
あった。

(徐州の者たちは、美花のことと賊殲滅のこともあって信用してくれているが、青州兵は
な)

徐州の者は歳三の言うことをよく聞く。

徐州筆頭である孫乾と歳三が懇ろな仲なのもあるが、一番はその武勇であった。

この時代、一騎打ちを代表する様に將軍が前線に出て当たり前の時代である。

その斬り込みを誰よりも好む歳三に、兵が鼓舞され付いていくのは当然と言えた。

しかし、青州兵は違う。

孔融死亡の遠因は孔融自身の命令にあるのだが、前の東萊城防衛線では黄巾党の数の
前に尻込みした、と吹聴する者が兵の中に居る始末である。

無論、歳三としても後ろ暗いところがあるし、一部は事実であるので処罰はしていな

いが、この背後関係には別の意図が隠されているのが、歳三の頭痛の種であった。

（梨晏が遺言を聞き届けてなお、私に反発するのは豪族どもの出世欲も強くあるのだからな）

孔融が死んだことで起きた弊害は、兵の反発というより豪族たちの反発であった。

青州の政治にある種の空白が生まれたことで、豪族たちがその間隙に入ろうと躍起になつていたのである。その嫌がらせの一つが、青州兵の訓練に対する反発であった。

（軍令で処刑するのは容易いが、さてどうしたものか）

歳三として新選組と軍の違いはよくわかっている。

新選組は近藤や歳三らの政府幕府から委託された私設警察組織に近いが、青州兵は軍隊だ。

手を間違えれば滅びるのは自分である。

（せめて稟か風が居てくれれば、この悩みを取り去ってくれるのだろうか）

が、二人は遠く徐州と幽州に居る。

居ない者を頼るわけにはいかなかったので趙雲辺りと相談するか、とあらかたの方針を決めた時。

後ろから忍び寄る者が居た。

気付いていない振りをして、後ろの気配を探る。

足音の踏み方から体格は小柄で痩せ形、児戯おんぎようの様な隠形であるが、隠形は隠形である。歳三は敵、と見た。

井戸に落ちた桶をすすると引き上げる、中にはほとんど水が入っていない。

歳三の頭の中には既に、桶を投げつけその隙に兼定を取り抜撃ぬきうちで斬り捨てる形ができている。

後半歩で歳三の間合いに入る、というところで歩みが止まった。

念のため兼定をいつでも抜ける様にして振り返ると、そこに居たのは。

「殺気を飛ばすなんて酷いのですよー、お兄さん」

「武士の後ろから隠れて迫るほうが悪い」

程立であつた。

どうやら、戯れのもりで後ろから隠れて迫つてみたらしい。

が、歳三からしてみれば迷惑千万である。

兼定を元の位置に置き直すと、再び桶を井戸へと落した。

「少し待ってくれ、すぐに服を着る。」

言うや否や、身体を手早く拭くと、士官服をきつちりと着こなした。

尋常の者なら笑顔の一つでも見せればいいのに、と思うところだが、歳三はただ見栄を取った。

婦人にみだりに裸を見せるべからずという、掟を持つているのかもしれない。服装も、顔もいつもの通りで歳三は程立の労を^{ねぎら}労った。

「それにしても久しぶりだな、風。幽州以来か」

「ええ、お久しぶりです……歳三さん」

くすつと笑う程立が、まったく別の誰かに見える。

歳三は度肝を抜かれる想いがした。

(見た目は童女の癖に、百戦錬磨の女性^{にょしょう}みてえな声ア出しやがる)

やはり女性は恐ろしい魔物だ、と女好きのこの男は密かに思った。

「お兄さんのそんな顔、風は初めてみましたよ」

「恐らく、私も初めてした顔だろうよ」

苦々しげに、歳三は程立に言い返す。

「そんな喋り方も、できたのだな」

「お兄さんの前でだけ、ですよー？」

いつもの気の抜けた声で、意味深な言葉で返す。

歳三はぐつ、と言葉に詰まった。

郭嘉は表情に出易い為わかりやすいが、程立の眠たげな眼は、その胸中を悟らせない。程立の眼と合わせること数秒、歳三は観念したというように視線を逸らした。

「さて、風がここに何故ここに居るのかも含めて聞きたいことはいろいろあるが」と、歳三は程立へと歩み寄った。

「まずは褒美だな」

と、程立の頭に手を置いた。

自然、大男が童女の頭に手をやる凶になるが、不思議と絵になった。

歳三の色男振り、程立が持つ独特の雰囲気、そうさせたのかもしれない。

「これはなかなか、いいものですねー」

と、程立は一言いうと、歳三の手を頭に寄せたまま歳三の顔を見るという器用な真似をして。

「お兄さん、皆を集めてほしいのですよー」

とだけ言った。

歳三はただ頷くと、さっと城の方へと踵を返していった。

程立は歳三が去りゆく方を見詰めながら、頭に自分の手をやって、すぐに下した。

◇

執務室に趙雲、徐晃、太史慈を集まっているのを見て、歳三は真つ先に計られたと悟った。

見れば悪戯が成功したような笑みで、趙雲が笑っている。

程立がこの東萊城に来ると最初から知っていたのかもしれない。

歳三は苦々しげな顔を一瞬すると、すぐにいつものむっつり顔に戻った。いつまでも意地を張るよりは、疑問を解くのを優先したようだ。

「で、見たところ大した軍勢はないが、風はどうやってここに来たのだ？」

執務室から見える城下を見下ろして、歳三は尋ねた。

丁度、程立が執務室に入ってきたところである。

程立、淀みなく答えた。

「船を使いましたー」

「船？ 太史慈の船をか？」

「いえ、新しく建造した船ですー」

これには趙雲と程立以外の者が疑問符を浮かべた。

太史慈が幽州に行くのに船を使ったのは知っているが、その他の船とは。

「梨晏ちゃんの設計図に風の考えを合わせて造った、新しい船ですー」

「陸路は、使わなかったのか」

「黄巾党と官軍に溢れる冀州や兗州に比べれば、余程の差がありますよー」

程立の言葉、道理である。

黄巾党はもちろんのこと、末期症状を示し始めた官軍も一部が暴徒と化している、と

いうことは歳三も聞き及んでいた。こういったことは脱走兵を取り締まる側だった歳三もよくわかる。

人間、負け戦となると何をしでかすかわからない者もいるのである。

数に勝る黄巾党の前に、官軍が野盗と変わりない存在に成り果てるのも無理はない。そういう意味で、陸路よりは陸を臨んで進む海路の方が安全というのは、理に適っている。

歳三は納得したと程立に視線を送ると、程立は言葉を紡いだ。

「それと、公孫賛殿から兵力をいくらか貰って来たのですよー」

「軍勢を？ 一体どうして？」

「お兄さんを慕っている兵たちですー」

これには歳三も、余程驚いたと見える。

いつもの眠たげな眼をぎらりと開き、口は何かもの言いたげだ。

「公孫賛殿から伝言もあるのですよー」

「白蓮からか？」

「む、公孫賛殿と真名を交換し合っているとは、お兄さんも隅に置けませんねー」

「茶化すのは後でいい、白蓮はなんと？」

「はいー。この軍勢たちは歳三を忘れられないようだ、私の手には余るから歳三が預

かつておいてくれ、ということだそうでー」

ああ、と歳三は腑に落ちる思いだった。

程立の護衛に合わせて歳三の首を討ち取りにきたのだと考えれば、よほど納得できる。

(だとしたらそいつア妙だな)

しかし、それならば程立を人質にでもすれば、よほど早く済む話でもある。

歳三は意味が分からず、ただ憎まれ口を叩いた。

「わざわざ幽州から私を追って来るとは。よほど恨まれたものだ」

「違いますよ」

それを、間髪入れずに程立が否定した。

「みんな、歳三さんが好きだから青州に来たのですよ」

歳三はそれこそ目が点になった。

おべっかが嫌いな男である、人に好かれる様なことをしてきたつもりは、ない。

むしろ趙雲の方が人気があるのではないかと、歳三自身思っていたくらいだ。

幽州でも、ただひたすら我を通してきただけの男に、命を預けようとする者が居るとは。

「もちろん風たちとの好きとは違います。ですけど、海を渡つてまで歳三さんに仕えた

いという兵たちの気持ち、わかっていただけですか？」

わかるとも、と歳三は叫びたくなつた。

男でも女でも、心から仕えたいと、支えたいと感じる気持ちは絶対に不変であると歳三は信じている。かつて、新選組に心血の全てを捧げた男は静かに感謝した。

己の流儀が通じる者がここにも居ると言う事実には、嬉しくなつたのだ。

「わかつた。あとで見ておこう。何人くらい来たのだ」

「二百人です」

「うむ、絶対に、会いに行こう」

この歳三の静かな感動は、歳三以外にもひしひしと伝わっていたらしい。

太史慈などはいい話だよ、と言いながらうんうんと頷いていた。

◇

程立という人間は、割と唐突に話題を変える人間でもある。

それも、話が一段落ついたところで急に変えるのだから、皆違和感なく受け入れてしまふ。

今回もそうだった。

「そうそう、幽州と徐州で海運業を始めることになつたのですよー」

「海運業？」

坂本が聞いたら手を叩いて喜ぶだろうな、と歳三は静かに思った。

いつか日本の海どころか世界の海を手中に収める、などともんでもないことを言っていたが、あの時歳三は確かに坂本ならできるかもしれない、と胸中思っていた。

(やはり、坂本と劉備。この二人は人を惹きつける何かを持っているのだろうか) そう考えていると、程立がむくれていた。

歳三はなぜかわからないが、その疑問はすぐに氷解した。

「むー、風が話しているときは他の人のことを考えないで欲しいのです」

「風には、わかるか」

「ええ、風はお兄さんのことが大好きですからー」

まるで何でもないことのような事を言い、太史慈を赤らめさせる軍師である。

もつとも、歳三は不愛想から不変であり、程立の言葉が当然であるかの如くである。

これだけふてぶてしい男もそうは居ないだろう。

話をつづける様に目で促すと、程立は頷いて続けた。

「幽州と徐州、そしてお兄さんのおかげで安全になった青州。この三つの州を繋げることで莫大な利益が見込まれているのですよー」

歳三、話はわかる。

これでも若き日に商人の奉公を勤め上げた男である。

更には坂本龍馬からの入れ知恵も、多少はある。

安全な海運業が軌道に乗れば、それだけ人の流れも増え、物流は刺激され利益を生む。

だが、この手の事業の懸念についても、よく知っていた。

「しかし青州を含めると言ったが、青州はこの前黄巾党から奪還されたばかりだ。まさか徐州だけの金で回すわけにもいくまい」

そう、青州が荒れに荒れてしまっていることは周知の事実だ。

今、新しく何かを始められるほどの体力はないと、政治にほとんど関わらない歳三だつて知っている。商売には元手が居る。そして肝心の元手がない青州を下手に含め
ては、幽・青・徐の海運業構想は立ち枯れになってしまうのではないか。

歳三にはその不安があつた。

けれども、何事も救い主というものは居るようである。

程立はその不安は杞憂ですよ、と言うと最も心強い者の名前を挙げた。

「そこは、公孫贊殿が主な出資者となつてくれたのですよ」

「ああ。確かに白蓮は商人を重用していたな」

「はい。公孫贊殿が旗印となつてくれたので幽州の張世平殿を始めとした、有力な商人が大勢集まってくれたので、今では徐州と同じく幽州の港でも造船が始まっています」

歯車は、確実に回り始めていると歳三は感じていた。

たった五人から始まったちっぽけな集団が、国を回し始めていると言う実感である。

このまま海運業構想がうまくいくのであれば、青州の復興も加速度的に進むであろう。

歳三は持ち前の勤で、以前の郭嘉の話を思い出していた。

「それはもしや河川の整備も含めて、か？」

「はい。もしかして稟ちゃんから聞きましたか？」

「ああ。流民を集め河川の整備をすと言っていたが、なるほど。青州でもそういった職や農地から追い出された者を造船に河川整備にと使うつもりなのだな？」

「そうです。流民の人たちも下手に命を落とす黄巾党に入るよりも、安全で食事とお金が保証されるこの事業に一目置いてくれる筈なのです」

黄巾党などという命の危険がちらつくものより、一時でも衣食住が保証された安全を望むのは、多くの人間の性である。これは一見ではわかりづらいが、黄巾党の弱体化と国力の増強に通じることは確かだ。

ふと、ここで歳三は不安に駆られた。

青州では孫乾到着までに如何に自分が上に昇るかの、水面下の権力闘争の真ただ中である。

せつかくの復興も、そんなしようもないことに資源を割かれたのではどうしようもない。

「風、青州の豪族の件だが」

「ふつつつぶ、それについては稟ちゃんにお任せあれーなのですよー」

これだけで、歳三の暗雲立ち込める心は涼風に吹き流されるようであった。

そうだ、今の孫乾には郭嘉が付いている。

郭嘉が居るならば、必ず歳三にとって最善になるようにすることができし、現にしてきた。

（孫候殿にも言われたじゃねえか。もつと人を信じろ、と）

一抹の不安が、歳三の心にあつたのかもしれない。

しかしそれすらも見通して不安を吹き飛ばすとは、これはやはり軍師の技というべきか。

「さて、最後はお兄さんお待ちかねの黄巾党の情報なのですよー」

と、程立が言うとき歳三の眼がぎらりと光った。

程立は内心、これを最初に言えば不安など抱かせなかつたかなと思うと同時に、徐晃と太史慈までもがどこか眼つきが歳三に似てきていることに気付いた。

眼光が、以前よりも鋭い。雰囲気までも似てきて隙がない。

これらが良いことなのか悪いことなのか、今の程立には判断しかねることなのでとりあえず、流すことにした。

◇

程立は歳三の様に、長つたらしい前置きなどなくずばりと物を言う。

「風は広宋方面に官軍と黄巾党の大軍勢あり、との情報を届けに参つたのですよー」

冀州鉅鹿郡広宋、と歳三はぱつと机に広げられている大地図を見た。

歳三手彫りの駒が置かれているそこは、青州からもほど近い。

（劉備の進軍が順調なら、今頃辿り着いてもおかしくない筈だ）

と、歳三が考えているのを読み取ったか、程立は代わる様に言葉が続けた。

「その方面には劉備殿の軍勢と、その師である盧植という雇われ将軍がいるらしいことも掴んできましたー」

「ふむ」

「それで、会いに行くのですよね、お兄さんは？」

程立の眠たげな眼が、歳三を射抜いた。

徐晃と太史慈は何のことやら、という感じで歳三を見たが。

「うむ」

と、歳三はそれしか言わないので何のことかわからない。

太史慈が、声を上げた。

「それは歳三にとつて重要なこと？」

「そうだな。私にとつては分水嶺になるかもしれん」

「なら、私はいいよ」

「ござつぱりとした笑顔で、太史慈は納得した。

徐晃も同じように頷いているから、歳三が良ければそれで良いのだろう。

「いい仲間に恵まれましたねー」

「ああ、まっただ」

程立の言葉に、歳三は笑顔で返した。

が、その笑顔もすぐに凍り付くことになる。

「今回は風もお兄さんの軍勢に同行していきますからねー」

瞬間、歳三は趙雲の顔を見た。

面白そうに笑っていることから、このことも最初から示し合わせていたに違いない。

（本当、食えねえやつらだよ）

りゅつふぎつく〃

凍りついた笑顔をいつもの無愛想に戻すと、歳三は改めて程立に問いを投げかけた。「で、風よ。本当についてくるのか？」

「ついていくに決まっていますよー。今回黄巾党の向こうにいるのは単なる城ではなく官軍の將軍と軍師たちです。お兄さんはそんな人たち相手に、弁舌で渡り合っていくことができますかー？」

歳三、程立の弁に何も言い返すことが出来ない。

論ずるよりも行動で示すところのある男なのだ、歳三は。

それが、複雑な政治の中で生き抜いてきた官軍の將軍相手にまともに論ぜるかといえば、否である。場を見渡してみても、程立以上に適任の人材も居ないだろう。

「わかった。程立の参加は決まりだ」

必要とわかれば、歳三は躊躇しない。

程立の行軍を即決すると、即座に護衛を選抜した。

「では風には香風がついてくれ、で、星は私と一番槍だ」

「ん、わかった」

「ほう、この私を一番槍に使ってくれるとは、主はわかってらっしゃる」

徐晃も趙雲も、歳三の判断に迷うことなく同意した。

歳三の戦術眼をずっと間近で見えてきた二人である、今更疑いも何も無い。

残るは太史慈であるが、歳三は少し考えてから、太史慈の眼をじつと見て言った。

「梨晏は別に青州兵を率いてもらうが、これは難しい役所になる」

声色が、少し堅い。

この男にしては珍しい、と思つたか趙雲が茶々を入れたそうだったが、それを徐晃が止めていた。

「なにも言わずに引き受けてくれるか？ 恐らく、これは梨晏にしか任せられない」

と、まで歳三は言つた。

これはどんな困難な事を任されるのか。

趙雲などは一番槍もいいですがそつちの方が面白そうですね、などと言っている。

太史慈は歳三の魂胆を読もうとして、諦めた。

歳三の眼を見つめていても、頬ばかりが熱くなり身体が火照るのである。

だから、努めて明るい口調で誤魔化すことにした。

「大丈夫だつて。もう私はこの身全部を歳三に預けちゃつてるからね、なんでも言つて

よー！」

「その割にはまだ抱いてもらってないみたいですけどー」

「ちよ、ちよつと！ 急になんてこと言うのさ！ 私は別に、その……そんな……ああんもう！」

突然の程立の横槍に、顔を真つ赤にして反論する太史慈。

これでは自ら抱かれていませんと言っているようなものである。

一方、徐晃と趙雲は視線を逸らして何処吹く風を装っている。

そして渦中の根源でもある歳三は、半眼でこちらをじつと見ている程立に頭を抱えていた。

「……やはり、怒っているのか？」

「そうですねえ。散々幽州でお兄さんの活躍と艶事の噂話を聞かされる身にもなつて欲しいのです」

要は放つて置かれていたのが寂しかったのだろう。

それを、歳三たちをからかうことで発散しているらしい。

普段から隙を作らない様になっている歳三も、女性方面を突かれると、少し弱い。

「わかった。今度埋め合わせはさせてもらう」

「言質はとりましたからね、お兄さん」

「ふむ。私にしては少し事を急せいたかもしれないな」

と、歳三は未だにあたふたとしてゐる太史慈を見て呟いた。

◇

太史慈が落ち着きを取り戻してから漸く本題と言わんばかりに、歳三は口を開いた。

「今回、我々ほどのような進路を取るにせよ、黄巾党の陣營を突つ切つて官軍と合流しなければならぬことが風のお陰でわかつた」

「黄巾党は冀州を中心とした軍勢ですが、溢れるほどの軍勢は兗州や豫州に行き渡るほどののですー」

「それで、この乱の首謀者は、風？」

「姿こそは確認されていませんが、張角、張宝、張梁の三人だそうですねー」

「顔が割れてないのは厄介だね、下手して逃げられたら元も子もないよ」

太史慈の言葉に皆が頷き、程立が言葉を続けた。

「ですので、お兄さんと風たちのお陰で情勢が安定した幽州から公孫賛殿が南下を始め、官軍の包囲網は出来上がりつつあるとは言えますー」

程立の言葉を元に、歳三は幽州に馬の駒を置いた。

それでも、黄巾党の圧倒的な軍勢の前には些細な違いにしか見えないのだから恐ろしい。

現実を認識すればするほどこの乱を鎮圧するのは無茶なのではないか、そんな弱気な

思考が芽生えるものだが、歳三にそんな恐れは一つもないらしい。

いつものむつり顔で、程立に次の情報を話すよう促していく。

「黄巾党を攻撃している官軍の位置も、ある程度わかっているのだったな？」

「はい。まず筆頭として曹操殿と袁紹殿、次いで朱儁將軍しゆしゆんと皇甫嵩將軍こうほうそう、そして洛陽から手腕を買われて雇われた盧植ろしよくと言う人が鎮圧に当たっています」

「盧植殿！ 公孫贊殿から聞いたことがありますぞ、主」

「続けてくれ、星」

「はい。元々公孫贊殿と劉備殿は盧植殿の私塾に通っていたそうぞ、今回の義勇軍旗揚げに關しても劉備殿はその縁を頼って公孫贊殿の元へ来たとか」

なるほど、と歳三は一人納得した。

劉備が当時の拠点に入城していた時に、歳三に面会を求める兵士が異様に増えたのである。

もちろん東萊城攻略戦を眼の前にしていたから会う暇もなかったのだが、そうか幽州から来ていたのかと歳三は少し、郷愁に近いものを感じていた。

だが、今はそんなものは関係ない。

歳三はぎろりと眼を光らせて盧植率いる軍勢の駒を見た。

「盧植殿は青州からほど近いところに居るようだな」

「ええ。この様子だと劉備殿も合流している可能性が高いと思われそうです」
趙雲と程立が歳三を見た。

その視線の意味を解するのに、僅かの時間も必要なかった。

劉備玄德をどうするにせよ、一番の重要人物が盧植であることは間違いない。

つまり、歳三が官軍で最初に出会うべきは盧植であると言えた。

が、一つだけずっと最初から横たわっている問題があった。

「いずれにせよ、官軍と合流するには黄巾党を討ち破らなければならない、か」

逆を言えば、青州が未だ黄巾党による戦火に巻き込まれる危険があるということを示す意味もあった。

地図を見れば自ずと答えは見えてくる。

趙雲が皆を代表するように今の状況を口にした。

「ふむ。地理的に見れば青州はある意味、黄巾党に逆包围されてもおかしくない状況ですな」

趙雲の言葉に全員が頷いた。

机の上の大地図には、黄巾党を示す駒が多く置かれているが、いずれも青州にほど近いものが多い。

つまり官軍が黄巾党に当たっているからこそ、青州は無事であるとも言えた。

逆に言えば、万一官軍が敗れる事態になれば青州へと一気に黄巾党が流入してくる危険がある。

歳三はもちろんとして、皆もそんな状況になるのは御免被りたい。

ならば策どころかすることは単純だ。

「我々も黄巾党討伐の軍勢として打って出る」

攻撃こそ最大の防御というが、今が正にその状況だった。

殻にこもるのも結構だが打って出る方が勝つ、歳三はそう戦況を見ていた。

しかし、不安点も多い。

青州兵は未だ歳三の指揮に不満気である、黄巾党に呼応されて包囲攻撃となっても困る。

黄巾党も怖い。厚い人の壁は突撃を柔らかく受け止め、入り込んだものを喰らい尽くす。

一見手がないように見える、だからこそ。

「だからこそ、軍を二軍に分ける」

と、歳三は言った。

◇

「二軍に分ける、ってどういうことやっ？」

皆を代表して歳三に疑問の声を上げたのは太史慈だ。

程立は歳三の魂胆を見切っているかもしれないが、如何せん歳三以上にやりにくい相手である。

「ここは素直に、歳三に尋ねるのが太史慈にとって楽であった。

「簡単さ。黄巾党を突破する部隊、これが一軍で黄巾党を誘い出す部隊、これが二軍だ」
「主、その内分けは？」

「一軍を率いるのはもちろん私。そして二軍……青州兵たちを率いるのは梨晏だ」

「そうだね。でもなんで歳三が丸々全部率いないのさ？ 戦力はそっちの方が確実に増すと思うよ？」

「それも一理ある。が、青州兵は私よりも梨晏に対する方が素直だろうよ」

これが歳三の本音が、と太史慈は思った。

今の青州兵は歳三が扱えば、制御不可能となりかねない危険な存在でもある。

獅子身中の虫を飼っていられるほど、歳三も余裕があるわけではないのだ。

しかし、青州での人望厚く名声高い太史慈であるならば反発はあつてないようなものだろう。

「んー、なら仕方ないか」

太史慈は歳三の戦術が嫌なのではない、共に戦えないのが残念なのである。

この辺り、太史慈も歳三と同じく根っからの武人であると言えた。

いいよ、引き受けた、と太史慈は言う。と歳三に続きを話すよう促した。

歳三、領いて二軍の駒を手に取った。

「まず第一に、二軍を敵の左翼にぶつける」

と、歳三は駒を黄巾党の大軍にぶつけるように近づけた。

こども数が多い相手では敵に右も左もあるのかわからないが、とにかく想像し理解できることが重要だ、と歳三は思っている。皆が領いているのを確認しながら、歳三は次に黄巾党の駒を動かした。

「敵は恐らく、二軍を迎撃するために左翼を動かしてくるのは間違いない」

と、大凡おおおよその駒をごつそりと動かすと、敵中央と左翼の間に僅かな隙間が生まれている。

そこへ、歳三は一軍として伏せていた駒を切り込ませた。

「そして左翼が敵の中央との連携が薄くなったところを徐州、幽州、そして我々で突破する」

歳三は場を見渡し、皆理解していると判断した。

戦術としては至って普通と言える、陽動と奇襲の組み合わせであるが決まれば効果は高いこれ。

しかし、懸念も多い。

趙雲が代表して、この作戦の最大の欠点を上げた。

「ふむ、これは一軍、二軍共に包囲されずにうまくいきますかな？」

「その通り。この戦術の肝は敵の左翼が動くかどうかにある。動かなければ我々は突撃することすらできません。下手に突撃すれば包囲されて殲滅されるだけだ」

「この顔ぶれなら包囲されても突破できそうだけど、その分犠牲は大きいだろうね。それが歳三は嫌なんだろう？」

「そうだ。よくわかっているじゃないか、梨晏」

太史慈の言葉に歳三は深く頷いた。

悪鬼だ黒龍だなどと言われているが、歳三は安易な兵力の損耗を嫌う。

それが人道的見地から出ているかと言われたら、微妙なところではあるが。

「うん。歳三が難しい役所つて言ったのもわかるよ。一軍が突撃できるだけの誘いをし、尚且つ被害を最小限に離脱しなければならぬ。これは確かに、難しいなあ」

太史慈は考えるが、こういった戦術や戦略はあまり得意な方ではない。

ちらりと歳三の方を見たが、手を貸す気はさらさらなさそうに太史慈を見ていた。

お手並み拝見、というつもりなのだろうか。

と、そこで程立と眼があつた。太史慈は程立が少し苦手である。

心中すべてを見透かされていそうで怖いのだが、この際はそうも言つてられない。

戦いに勝つ、それこそが皆の共通意識である筈なのだから。

「ね、ねえ風。何か二軍がうまく誘い出せるような策があつたりしないかい？」

「もちろん、風には策があるのですよー」

二つ返事で程立はあつさりと答えを出した。

「はいー。ここで青州兵たちに食料に偽装した荷車を運ばせる、と言うのはどうでしょうかー？」

「そつか。黄巾党も大軍過ぎて末端では飢えが広まっているらしいし、食料があるつていう情報を流せば間違いなく釣ることができるね」

「ついでにお兄さんが青州兵に一定の信頼を置いている、との意思表示にもなりますねー」

「？ それはどういうことなの？」

「食料の輸送部隊は言うなれば軍隊の命綱、それを任せると言うことは信頼している部隊だ、という印象を与えることになりますー」

太史慈は感心した。

単なる四部隊である、ということであれば青州兵の反発は免れなかつたろう。

そこで輸送部隊という大任を任せること、青州兵の自尊心を守ることができる。うまい馴らし手である。

「もちろん中身は表以外は全て油麩がめにしておきます。二軍離脱の際に、梨晏ちゃんの弓で火をつけ左翼の混乱も狙え、一軍の突破のみならず二軍離脱の助けにもなると思われ
ますー」

「それは……凄いな。風も、火付けが好きなの？」

「お兄さんの真似をしてみましたー」

最後にしゅああしゅああとそんなことを言つてのける腹黒軍師に、歳三は苦い顔である。

太史慈はくすり、とおかしくなった。

なんだ、自分が単に苦手意識を持つていただけで程立は悪くない。

そう思うと太史慈は程立に晴れやかな笑みを浮かべ。

「風、ありがとね」

と、言つた。

◇

太史慈が風に礼を述べている時、趙雲はこつそりと歳三の傍に寄つて耳打ちをしてい
た。

「主よ、先ほどの梨晏への対応、少し荒療治過ぎではありませんか？」

「そうは言うがね、やはり仲間同士で疑心暗鬼とまではいかなくとも苦手意識を持つて
しまうのはよくない、と私も散々学んだのだよ」

歳三も顔を前に向けたままひっそりと趙雲に返した。

もの嫌いの激しい男の言うことだから、妙に説得力がある。

趙雲はやれやれと言った様子で。

「まあ、結果良ければと言いますし、今回はあまり言わないでおきましょう」と、言った。

歳三は趙雲にすまないな、と小声で返し、隣で今の会話も聞いているだろう程立に尋ねた。

「二軍についてはわかった。しかし、我々の食料は一体どうするつもりだ？」
「それに関しても、風から提案があります」

と、風はがさごそと机の下を漁ると、一つの袋を取り出してきた。

辺りに、少しばかり獣の様な臭いが漂う。

徐晃などは露骨に、歳三は肩眉を顰めた。

（一見獣の皮を張り合わせただけに見えるが、単なる物でないのは風のことだ）

歳三はそれほどまでに、程立を信頼していると言える。

もちろん、程立は歳三の信頼を裏切る様なことはしていなかった。

「我々は幽州でこんなものを作っていました」

ぱつと広げて見せられた袋には、何やら棒状の布を縦にし上下を縫い付けた二本、横

に一对片側だけ縫い付けられたものが見て取れる。

袋の横と下部分はきつちりと縫い合わされ、上の口は紐によつて開閉が自由になつていた。

どこかで見たことある様な、と歳三は思つて、思つた通りのことを口にした。

「ズタ袋、とは少し違うな」

「これはお兄さんの言うズタ袋を参考にさせていただきました。これは本当は背負つて使うものなのです。では、実際に誰か背負つてもらいましょうか」

「じゃあ、シヤンが」

名乗り出たのは意外にも徐晃だった。

歳三も、程立が背負うと言つたところでなんなのか見当がついていたが、徐晃がそれを背負つた姿を見て改めて確信した。

「なるほど。軍用の背囊、リュツフザツクか」

歳三が仏蘭西語であるリュツフザツクを何故知つているかは、以前も度々出てきたが函館戦争まで従軍した仏蘭西軍士官、ジュール・ブリユネ大尉の影響が非常に大きい。

この男が洒落者でもあることも何度も書いたが、軍の装備にも変に日本語を当てるよりは、外国語を当てた方が洒落ている、ということとで仏蘭西語には疎くても単語の方は割と詳しいのだ。

程立も未だ聞きえぬ欧州言語ヨーロッパに刺激されたか。

「『りゅつふぎつく』ですか、それは良い名前ですね。今度からこれはそう呼ぶことにしましょうー」

と、言つてあつさりと言前まで決めてしまった。

それにしても、程立考案の『りゅつふぎつく』は良い出来である。

肩に掛けるが簡単なのはもちろん、横一対の紐を前で縛ればより身体に固定させることが出来る。開け口も大きいので物の出し入れが簡単だ。

これなら戦鬪の邪魔にもならず、中に水や食料と一緒に運ぶことができる。軍の食料を輸送部隊だけに任せず、個人単位でも持ち運ぶというのは、ある種の革命であると言えた。

「風よ。やはり君は天才といふべきだな」

「それほどでもありますよー」

ふん、と胸を張る程立に歳三は小さく笑いながら、最後の懸念を問いた。

「これは確かに良い。が、数はあるのか？」

「もちろん2万ほど数は用意してあります。公孫賛殿の軍でも採用されているおかげで、売り上げは幽州でも好調なのです。すぐに軍全体に配備しましょうかー？」

手堅いことに既に公孫賛には売り込み済みらしい。

しかも公孫贇自らが軍備として採用しているからか、民にまで浸透し始めているとは。

程立は軍師の才だけでなく商業の才もあるのだな、と歳三には珍しく感心しつぱなしであつた。

が、気持ちをしぐに切り替える。

程立がここまで場を整えてくれたのである。

何としても黄巾党如き賊に負けるわけにはいかない。

「これで我々は万全を期すことが出来た。皆、黄巾党など蹴散らしてやろう」
応、と勇ましい返事が返ってきたのを歳三は頼もしく思ったが。

(さて、黄巾党の数を前にこの気概を持ち続けられるかな)
とも思っていた。

黒龍、人海を断つ

「流石にきついかなあ、これは」

己の得物である三叉槍を振り回しながら、太史慈はぼつりと呟いた。

敵の数が、多過ぎる。

地の果てまで黄巾で埋め尽くされている光景を、太史慈は見たことがない。

正に圧巻の一言に尽きる戦場であつた。

「歳三も同じ光景を見てるんだらうけど、怯えてないよね？」

と、言いながらちらりと太史慈は視線を、遙か向こうに見える小高い丘に向けた。

丁度黄巾党の死角になる、あの丘の裏側には歳三たちの本隊が居るはずである。

歳三の姿を一目見れたらなあ、と太史慈は残念に多いながら、槍を振るつた。

突撃してきた黄巾党が、吹き飛ばされる。

「嫌な戦場だよ」

思わずそう漏らしてしまふくらい、異様とも言える戦場だつた。

太史慈ら青州兵たちの本来の目的は、補給物資を黄巾党にわざと襲撃させて左翼を本

陣から引き剥がすことである。故に、この情報は黄巾党に筒抜けにしてある。

ここまでは良かった。

部隊が想定地点に到着する前に、黄巾党の襲撃にあったのである。

陽動のつもりが、逆に奇襲を受けた形になるが、太史慈による必死の指揮によつて混乱はすぐに収まった。しかし、青州兵は怯えていた。

黄巾党にである。

「敵の数が多過ぎます！」

太史慈の近くに居た兵が悲壮に叫んだ。

そのくらいわかっているよ、と思ひながら太史慈はまたも槍を振るう。

問題は数が多いことではない、恐ろしいくらいに敵が食らいついてくることである。

目が落ち窪み、頬が痩せこけ、腕が骨と皮になりながらも、黄巾党の軍勢は突撃してくる。

そして皆一様に言うのだ。

「張角様の為に！ 張宝様の為に！ 張梁様の為に！」

まるで呪詛のようだ、と太史慈は思う。

黄巾党はある意味で呪われているのだ、信じるだけで救われるなんてこと、ある筈なのに。

太史慈の槍の一振りで、また多くの黄巾党が吹き飛ばされた。

兵の練度はまるで素人で、歳三が調練した兵よりも遥かに弱い。

しかし、繰り返される絶対的信奉の言葉を聞いているだけで気が滅入って来る。本当に呪われてしまいそうだ。

こういう時、歳三はどうするのだろうか、ふと思つてまた丘の方に眼をやつた。黒衣の男が立っている。

その横には見知つた姿である、趙雲らしき姿も見える。

「歳三？」

あんなところに立っているのは伏兵が露見するのではないか、と太史慈は心配した。

その時、黒衣の男こと歳三の首がぐるりと回つて、太史慈を見た。

遠く、ここからでは豆粒の様にしか見えないが、歳三は確かに笑っている。

太史慈はそう直感した。

それだけで、呪詛も怨嗟の言葉も全て跳ね返せるような気がして来た。

向こうに張角は妖術使いと聞いているが、それがどうした、こちらには黒龍が付いている。

「そうそう、ちゃんと仕事は……しないかね！」

太史慈の腕に並々ならぬ気合いが入った。

「はあああああー！」

どつ、と黄巾党の軍勢を吹き飛ばすと太史慈は叫んだ。

「皆！ 撤退するよ！ 荷車は全部置いて行って！」

わつ、と青州兵たちは武器や鎧までも投げ出さな勢いで逃げ出した。

この様子なら、太史慈の指示がなくなるとも荷車は置いて行かれていただろう。

その姿に太史慈は少しばかり悲しくなった。

同じ青州の生まれであるというのに、どうしてこうも肝が据わっていないのだろうか。

歳三と比べるのは酷であるとはわかっている、けれどもどうしても比べてしまう。

「あーあ。私もすっかり歳三にぞっこんだなあ」

照れ笑いを浮かべながら、太史慈は走りながら火矢を強弓に番つがえた。

そして器用にも振り返りながら、荷車へと火矢を放った。

荷車の表の食料へと群がる黄巾党を吹き飛ばす勢いで突き刺さった火矢は、油甕がめを容易に突き破り一気に発火させた。太史慈は続けて二つ三つ四つと火矢を放っていく。

「ああああああああ！」

「熱い！ 熱い！ 熱い！ 熱い！」

「誰かあ！ 誰かあああ！」

運悪く荷車の放火に巻き込まれた黄巾党の兵たちの、断末魔が聞こえる。

やせ細った姿も相まって、地獄の餓鬼が炎に塗れて燃えているようにも見える。

あまり気持ちのいい光景じゃあないなあ、と太史慈はなるべく考えないようにして、荷車すべてに火矢を放つていくが、意識は周囲の青州兵たちの言葉に向いていた。

「あの荷車は囷だったんだ！」

「土方はやっぱり俺たちを信頼していないんだ！」

「あいつは嘘つきだ！」

何が信頼してないだ、と太史慈は胸中毒づきたかった。

青州兵の中にも、歳三に自ら直談判して付いていこうとしている連中は居るのだ。

自分から行動も起こしていないのに、無条件に信頼されると思う方が間違っている。

その癖、ただ豪族の指示に従って歳三に嫌がらせを続けたのは誰だと太史慈は叫びたかった。

が、容易ならざる言葉が青州兵の間から聞こえてきた時、流石の太史慈も肝を冷やした。

「青州はやはり太史慈様が治めるべきだ！」

「そうだ、今なら土方が居ない！」

「青州は太史慈様のものだ！」

軍中で歳三を批判するのは、まだ良い。

だがこうして堂々と謀反の嫌疑を掛けられてもおかしくないことを言えるのか。これも全て、青州の政治に入り込みたい豪族たちの声なのか。

「これは……私の手にはあまる事態だよお……」

太史慈は小声で漏らした。

趙雲ほどの機転もなければ程立の様な謀才もない、と太史慈は自分では思っている。

このままでは本当に、土方歳三に対する反逆の旗頭にされかねない。

「一体どうしたら……」

青州へと悶々としたものを抱えながら走る最中、太史慈はふと思い出した。

そういえば、青州を治める為に孫乾が訪れる手筈になっている。

孫乾に付いて、程立に並ぶ軍師・郭嘉も付いてくるのは間違いないのではないか。

この危機についても、程立は郭嘉に任せるようなことを言っていたではないか。

展望が明るくなつたのを見て、太史慈は憂いを絶つよう様に首を振った。

「しっかりしなきゃ、私！」

郭嘉なら、歳三と程立が信じる郭嘉ならなんとかしてくれろと思ひ、太史慈はただ走った。

◇

太史慈による陽動作戦は見事に成功したと、遠目から見てもよくわかった。

太史慈が率いる青州兵らは無事、撤退に成功。

左翼と本陣の連携は全くと言っていいほどになくなり、飢えに飢えた黄巾党の軍勢が荷車に殺到し燃え盛り混乱する様を見れば大成功だと太鼓判を押せる。

連携がなくともひたすらに大地を埋め尽くす黄巾党の軍勢を見なければ、の話であるが。

「いやしかし、こうしてみるとなんとも多い」

太史慈が見ていた丘の上で、趙雲が少しだけ声を震わせながら、軽口を叩いた。

目下全てを埋め尽くすほどの人、人、人の群れ、正に人海である。

そして目に映る頭全てに黄色の布が纏われているのだから、黄巾党の勢力が如何に強いかがわかる。皆、顔が引きつっていた。数は質を凌駕する。恐怖が蔓延していた。

しかしこの男、土方歳三だけは何が可笑しいのか、涼しい笑みを浮かべている。

「なに、この程度の兵なんざ私たちの前には居ないも同然さ」

本当に、眼の前には蟻の大軍しか居ない様な気軽さで、歳三は簡単に言っただけだ。

この男は剣戟槍弓が一万あるよりも、前装式のエンフィールド銃が百丁ある方がよっぽど怖い、ということを数々の戦争から熟知してきている。

だから、陽光を受けて鈍く光る刃を見ても、恐ろしい気持ちなどちつとも湧かないのだ。

ある種の氣違ひとも言えるが、真つ先に斬り込む將はこれくらいでなければ務まらない。

事実、大将格である歳三がこんなにも出鱈目でたらめに落ちついているのだから、自然と將兵の間にも落ち着きが伝播していつている。恐怖が人に伝染するように、狂気もまた伝染するものなのだ。

歳三は、なおも笑いを浮かべながら言った。

「むしろこんなにも居てくれて助かるくらいだ。これを叩き割つたとなれば、私達の名は更に上がるぞ」

本当に嬉しそうに、こんなことを言つてのけるのである。

一番槍を務める為に隣に立つ趙雲でさえ、歳三の頭が狂つたのではないかと思うくらいだ。

けれども、そんな趙雲の視線を受けてか歳三は笑つて。

「この数の前に臆したか、星」

と、言つた。

こうまで言われては、天下に槍一番は私か太史慈かと自負する趙雲が面白いと思はずがない。

自慢の槍をぶると頭の上で一回転させると。

「主こそ、この数を前に粗相などされたら困りますぞ」

と、言い返して見せた。

歳三はそれに大きく頷くと、趙雲に声を掛ける。

「さあ、行こうか」

「もちろん。一番槍はこの星が見事に務め上げます」

「任せた」

短くそう言うと、歳三は兼定を鞘から抜いた。

陽光を受けてぎらりと光るその刀身は、眼下のどの刃よりも血を求めているように見えた。

「諸君！」

歳三が兼定を振り上げ、丘の後ろに振り返った。

徐州の兵、幽州の兵、そして自ら志願した青州の兵たちが、歳三を見ている。

歳三の腹から轟く声が、兵たちの腹の底でこだまする。

「駆けあがれ！」

どつ、と隊列を乱すことなく、丘の上に一軍が現れたのを、黄巾党は果たして見ただろうか。

黄巾党の一部が、歳三たちの存在に気づいたようだがもう遅い。

先に歳三達に気づき、攻撃を仕掛け機先を挫いていたならば、彼等は勝っていたらう。

それほどまでに数というものは強い。

だが逆に言えば、同じように攻撃を仕掛けられ機先を挫かれれば、数も質に負ける。

「全軍突撃！」

歳三が叫び、趙雲と共に走り出した。

兼定が振り下ろされ、獲物を喰らおうとする刃が陽光を反射しまたた瞬いた。

「一番槍、土方歳三が配下！ 趙雲子龍が参る！」

だが、彼等はまだ歳三と趙雲を頭とした、一匹の黒龍に成り上がっていた。

そして龍に相對した愚かな人間の末路はただ一つ。

絶対の敗北である。

趙雲が黄巾党を吹き飛ばし、歳三も負けじと討ち漏らしを斬り殺す。

そして続く者たちが立ち塞がろうとする者共を劍で、槍で、あるいはその身体で叩き潰していく。

その鋭さは例えるならば錐きりの如く。

わつ、と全軍が黄巾党の陣に出来た隙を鋭く突き進んでいく。

その姿は正に、黒龍が現れ人海を断つていくと例えるに相応しいと言えた。

◇

走る、斬る、走る、殴りつける、走る、蹴り飛ばす。

一歩たりとも止まることなく黄巾党の海の中を走り続ける歳三の眼に、遂に切れ目が見えた。

(なんでえ、もう終わりかい)

と、落胆の声を心中で上げた歳三はもう一度兼定を握り直して、叫びながら走った。

「全軍止まるな！ 後ろを見るな！ 星の指示を仰げ！」

と、向かってくる自軍の合間をすりと通り抜けていく。

途中、軍中の真ん中に居た徐晃と程立とも会ったが、目で会話を果たすと歳三は走った。

徐晃も程立もわかつている眼だったのが、歳三にはわかったのである。

このまま軍中を突破しても、勢いを付けてきた黄巾党がこちらに突撃してくる可能性がある。

そうなれば勢いのまま、被害が出る可能性が無きにしも非ず。

だから、それを止める役目が必要だった。もちろんそれは歳三でなくてもいい。

それでも、歳三は黄巾党へと向かって走る。

途中ですり抜けていく徐州の兵が、幽州の兵が、青州の兵が、驚きの眼で歳三を見て

いる。

(ああ、こいつらが驚いているんなら、敵さんはもつと驚く筈だぜ)

と、嬉しく思いながら歳三、再び黄巾党と相對した。

將軍が、一度抜けた敵陣にまた向かうと言うある種の異常事態に、黄巾党は度肝を抜かれた。

黄巾党は皆一様に足を止めてしまうのは、致し方ないと言えるだろう。

その中でも、絶句しながらも斬りかかろうと剣を振り上げた者が居た。

歳三、即座にその者に狙いを定めると、兼定を振り抜いた。

兼定は見事腰の柔らかい、肋骨と腰骨の間を斬り裂いたが、未だその男は絶命していない。

その場で、たたらを踏んだ。

「聞けえ！ 黄巾党どもオ！」

歳三は倒れそうな男の、裂かれた腹の間にずぶりと腕を突つ込むと、腸を引き出した。あまりの痛みに、男は白目を剥いて絶叫を上げているが、歳三はやめることはない。

「これより先ア、この俺！ 土方歳三が相手する！」

返り血で顔を真っ赤に染めながら腸を握りつぶし、放り捨てた。

男はようやく絶命し、地面にどうと倒れ伏した。

ひつ、と悲鳴を漏らした者が、居た。

歳三は手近に居た黄巾党の者に兼定を右手で握りながら、左手指を目に突っ込み袂に出す。

そして苦痛のあまり折れ曲がった身体に、膝蹴りを叩き込んで殴り飛ばした。

またもや黄巾党から悲鳴が上がった。

先に、恐怖は伝染すると書いたが、正に今、黄巾党の大軍勢はたった一人の男に恐怖していた。

黒龍、土方歳三にである。

「お、鬼だ……」

「聞いたことがある……土方歳三って……」

「黒龍だ！ 青州の黒龍……土方だ！」

恐怖はやがて混乱に変わる。

歳三の正体に気付いた黄巾党の軍勢は、逃げ出そうと我先に走り出す。

しかし後ろに居るのは進もうとする黄巾党の軍勢である。

進むものと退くもの、そして一方は恐怖に駆られまともに思考のできる集団ではない。
い。

必然、起こる結果は収集がつけられないほどの大混乱だった。

歳三は兼定を振りかざし、突撃の用意を整えた自軍を見た。

恐らく程立か助言をしたのだらう、しっかりと隊列を整え直し、武器を持ち直した自軍の先頭で、趙雲が槍を肩にしながらから笑っている。

「主よ！ これでは一番槍の私がかすんでしまう。ここからもう一働きさせてもらえませぬか！」

趙雲の言葉に歳三はゆっくりと頷くと、もう一度同じことを言った。

「全軍突撃！」

わっ、と関とくの声が上がった。

趙雲が、兵たちが、歳三の横をすり抜けて黄巾党へと突撃していく。

(この様子なら、大丈夫さ)

そう思いながら、軍勢を通り過ぎた歳三は、待っていた徐晃と程立と合流した。

二人とも、特に戦闘に参加していないために身形は綺麗である。

ただ、徐晃は自慢の大斧を振るう機会がなかったからか、幾分不満そうではあったが。そんな徐晃の様子を他所に、どこかいつもよりぼんやりしている程立に、歳三は声を

掛けた。

「風よ、恐らく初めて軍勢を通り抜けたらうが、粗相はしていないかね？」

「そ、そんなことはないのですよー」

慌てる様子が、全てを物語っていたが、歳三はそれ以上何も言わなかった。

言ったところで程立の自尊心を傷つけるだけであるし、それに。

(初めは誰でも漏らすもんさ)

と、どこか感慨深げに思っていた。

珍しく歳三に見透かされている、と思ったか程立は歳三の返り血の酷さを指摘した。

「それよりも、お兄さんは顔を拭くべきだと思うのですー」

「そんなに酷いか？」

「ええ。今のお兄さんを見たら、官軍や義勇軍の方だつて敵だと思ってくらいですよー」

そういうものかと思ひながら懐から手拭いを取り出そうとした時。

「援軍、感謝する。しかし何者だ？」

と、後ろから声を掛けられた。

殺気は、ない。が、先に名乗ろうとしないのが気に食わない。

歳三はわざとゆっくりと、手拭いを懐から取り出した。

その泰然とした動作に、後ろの人間が少しばかり苛々としながら、言葉を重ねた。

「何者か、と聞いている」

「官軍か義勇軍か知らないが、顔を拭く暇もくれないのかね」

と、たっぷりと時間をかけて顔を拭いてから、振り返った。

そこに立つて居たのは、顔のみならず全身に傷を負った、三つ編みの美女であった。
(こいつもまた、名のある将なんだろうなア)

などと、ぼんやり思いながら歳三はその女性を観察した。

趙雲や徐晃などよりはよっぽど戦がしやすそうな格好で、両手の手甲が鈍く光っている。

そんな彼女の鋭い視線を受けていると、歳三はなんとなく悪い気がしてきた。

(山南さんみたいに生真面目なんだろうなア)

と、思わずにはいられない雰囲気があった。

そう思うとぐつと親近感が湧いてくる。

趙雲や程立に良い様にからかわれそうな感じだ、と思いながら歳三は名乗ることにした。

「青州、土方歳三」

徐州とは言わず、青州の土方歳三と名乗った。

もしかしたら相手は官軍かもしれない。

後々、青州を正式に領有出来なくとも、青州は土方歳三の土地であると言う印象を残す為であった。が、それも特に意味なく終わった。相手は官軍ではなかったのである。

「こゝれは失礼を。私は義勇軍を率いる」

「楽進さん、ですわー」

程立が眠たげな眼で言うのと、楽進と呼ばれた女性は驚いた様に眼を見開いていた。どうやら当たりであるらしい。

(ほうら早速からかわれてやがる)

と、歳三はいつもの眠たげな眼で、程立に問うた。

「知っているのか、風？」

「ええ。全身傷だらけで拳で戦う将、と言ったら楽進さんしかいないのですよー」

歳三、楽進が恥じ入る様に身体を縮ませるのを見逃さなかった。

楽進は身体の傷をなるべく隠す様に、腕を組んでいる。

それが、歳三には気に食わなかった。

「そうか。なるほど、道理で美しいわけだ」

「えっ、なっ!? 急になにを!」

「男子の向こう傷は愛でたいものだ。向かって負った傷なのだからな。それが女子にも当てはまらぬ道理はなからう」

歳三の突然の口説き文句に、楽進は顔を真っ赤にして下を向いている。

程立からは元々の、徐晃からはいつもより強めのじつとりとした視線を向けられるが、歳三は構いやしない。美しいものを美しいと言って何が悪い。

そう言いたげな口ぶりである。

「だから楽進よ、お前は美しい。だから顔をそう下げるな」

それでも尚、顔を伏せて隠そうとする楽進の顔を、歳三の両手が優しく包んだ。

くいつ、と顔を上げさせて、緋色の瞳をじつと覗き込む。

そして。

「お前を美しいと言うことに文句を言うやつがいるのなら、私が直々に斬つてやろう」
にっこりと微笑んだ。

楽進は頭から煙が出そうな勢いで顔を真っ赤にしているが、歳三はどこ吹く風である。

すつと楽進の顔から手を離すと、道でも尋ねるような気軽さで。

「ところで、盧植、という将軍がいるはずなのだが」

と、のたま宣った。

月夜に咲く花、蓮一輪

顔を赤くしたままの楽進に連れられて、歳三たちは官軍の本陣へと入った。

流石に正規軍の本陣である、立派なものだ。

武器一つから鎧や布に至るまで、どれもが良質なもので備えられているのがわかる。

(それにしてもは妙だな)

と、感じたのは恐らく歳三だけではなかつただろう。

徐晃は小さく眉を擧^{ひそ}め、程立は諦観したような、眠たげな眼である。

何が妙かといえば、まず兵士たちに覇気がない。

まるで勝とうという意志を感じられないのだ。

(この兵は満ち足りすぎている。飢えていないのだ)

と、歳三は評した。

勝利に対する欲求が薄い、というよりどうでもいいと表したほうが良いか。

官軍が勝とうが負けようが、自分が生き残ればそれで良い。

ここには着るものも食べるものも、雨風を凌げる程度の陣幕もある。

それでいいじゃないか、といった、そんな空気が陣には蔓延している。

「これじゃあ私たちや義勇軍の方がよっぽど活気に満ちているな」

「実際、黄巾党に連勝しているのは少数の官軍で、義勇軍の活躍の方をよく聞くのですよー」

歳三が楽進に聞こえぬ程に小さく溢した言葉に、程立は素早く反応した。

もちろん、前を行く楽進には聞こえぬよう、歳三と徐晃にしか聞こえぬほどの声である。

「官軍で名の聞こえている將軍は曹操殿や袁紹殿、皇甫嵩殿くらいです。後はほとんど義勇軍の于禁殿や李典殿、そしてお兄さんが口説き落とそうとしている楽進殿の活躍ばかりなのですー」

「風よ、今はそれは後にしてくれないか」

「しょうがないですねー。それと義勇軍といえば劉備殿ですか。それ以外では雇われ將軍の盧植殿以上の將軍は、官軍には風の知る限り存在しませんねー」

「これだけ立派なものがあつて、人が居ないのか、官軍には」
「そうですねー。ほら、あそこを見てください」

風が指差した先には、他の何よりも立派な陣幕が見える。

恐らく官軍の將軍たち専用のものでろう。

正面に立っている兵士たちも、他に屯たむろしている兵士よりは屈強に見える。

「お兄さん、耳をすませてみてみてください。」

歳三、程立に言われた通りに耳をすました。

風に流されて不平不満が流れて来るが、その中に馬鹿笑いや杯のふれあう音が聞こえてくる。

どうやら例の、一際仕立ての良い陣幕から聞こえてくるようだ。

（まさかあいつらア、勝つてもいねえってえのに戦勝の祝いをやってんのか）

歳三は目を見張った。

この戦はまだ始まったばかりで、勝つても負けてもいない状態である。

つまり、これから負ける可能性も存在する戦である。

だというのに指揮官だけが酒盛りを始めているとは、兵士たちが意欲をなくすのも相違ない。

（青州を治める為に宮仕え、なんて日が来たらア冗談じゃねえや）

歳三の想像以上に官軍、ひいては漢帝国というものは腐敗が進んでいるらしい。

前に行く楽進も、歳三の絶句を感じ取ったか悔しそうに言葉を絞り出した。

「国を想って立ち上がったのに、官軍はいつもああなのです」

「ああ、とはどういうことかね？」

「官位がなければ、まるで相手にしてくれない。献策をしても鼻であしらわれる。失敗

すれば私たちの失敗、成功すれば官軍の手柄。これでは私たちは何のために立ち上がったのか」

ぎり、と楽進が握りしめた拳が鳴った。

歳三も、眼の前の光景を見て楽進の言いたいことがようやくわかった。

本陣からの外れが、義勇軍にあてがわれた場所だとひと目で分かる。

粗末な陣に馬防柵も疎^{まば}ら、食糧事情も良くないのか瘦せた兵士が多い。

それでも、戦う意志だけはある分、こちらの方がまじだと歳三は思った。

(武士は食わねどなんとやらというが、軍隊は食わなきゃ話にならねえ)

そう思ったのなら歳三は早い、程立に素早く目配せをした。

程立も歳三の意志を汲みとった。

「星ちゃんたちをすぐに引き戻してくるのですよ。それと楽進殿、ひとつお願いがあるのですがー」

「なんででしょうか？ あの……」

「程立と申します。すぐに食事の用意ができるようにしておいてくださいねー」

「程立殿、食事の用意を……ですか？ それはできますが、食べるものは董卓様が来るまでは……」

「とにかく、用意しておいてくださいー」

半ば強引に、食事の用意を楽進に押し付けると程立は徐晃を連れ たつて戰場へと戻つていった。

一度、刃の海を越えれば肝も据わるのだろう、飄々としながらも堂々たる行軍である。楽進は困惑しながら、歳三に話しかけた。

「しかし土方殿。我々が食事をするのも官軍にとつては……」

「気に入らないことだ、と？」

楽進は静かに頷いた。

ふむ、と歳三は少しだけ考えて。

「何かあればその時は、私がなんとかするさ」

と、だけ答えた。

◇ およそ何の捻りもない言葉であつたが、楽進は万の味方を得られたように思えた。

快進撃を続けていた趙雲たちが舞い戻ってきたのは、程立が出てから一時もないくらいである。

それから義勇軍の陣では程立による指揮の元、すぐさま食事の配給が始まつた。竈かまどには火が灯つて白煙が上がり、兵士たちは俄にわかに活気を取り戻していく。

一方で歳三は、官軍と義勇軍との陣の境目に床机椅子しょうぎを置いてどつかりと腰を下ろし

ていた。

ここが私の陣である、と言うように膝の上には橋を渡す様に兼定が置かれていた。更には腕を組んで眼を瞑り、僅かに首を前に傾げているのだから寝ているようにも見える。

が、誰も声を掛けようとは思わなかった。

何もしていないことが、逆に恐ろしく思えたのである。

ほとんど付き合いない楽進ですら、怖気を感じるほどであった。

徐州や幽州の兵士なら、どれだけ恐ろしかったかよくわかっただろう。

そんな歳三に、声を掛ける物好きなき者が居た。

「……食べないの?」

「うん?」

女性の声であった。

それに、歳三の予期していなかった問いの形でもある。

ぱちくりと瞼を開けると、歳三の眼の前に并をもった一人の少女が立っていた。

肩と腹に派手な刺青を施した、陰陽の様な服を着た赤目赤髪の少女である。

びよんと、二房の長い髪の毛が跳ねているのが、実に目立つ。

(一いつはやべえぜ)

歳三は誰にもそうとは気付かれずに、一人冷や汗をかいていた。

寝ているように見えたあれでも、周囲に気を巡らせて人の気配を探っていたのである。

それなのに、この少女は何でもないように歳三の眼の前にまでやって来た。

害意もなく敵意もなく、ただ普通に現れることができる人間なんて、歳三は一人しか知らない。

(「こいつは沖田と同種の人間だ……腕も、尋常じゃねえはずだ」)

沖田総司。言わずと知れた新選組で一、二を争う剣の遣い手である。

しかし普段はまるで害意のない好青年であり、専ら歳三をいじることに時間を費やしていた。

眼の前の少女と沖田が、どうしても被る。

それだけで、歳三の頭の中で危険だと言う本能が叫ぶのである。

敵か味方か。今のところ刃を向けられていない分、敵ではない。

だが、こういう種類の人間は害意を感じればすぐに殺し行く、と歳三は間近で知っている。

「私は、要らないよ」

「……ん。……好き嫌い、よくない」

ぐ、と歳三は声にならない声を飲み込んだ。

食い物にも好き嫌いが多いこの男は、配給の食事を味見するだけで食べる気が失せたのである。

だから、一人膳をする気にもなれずに人から離れて居たのだが、それを一瞬で看破された。

内心悔しきで一杯だが、精一杯の不愛想顔で、なんとか言葉を続けることが出来た。

「私はいいいよ。良かったら私の分も食べてくれ」

「……………いいの？」

「構わないさ。美味そうに食う人間を見るのが、私は好きでね」

知らず、沖田の言葉に似ていた。

肺を結核に侵された沖田は、食が細くなり遂にはほとんど何も口にしなくなつた。

それでも歳三は沖田を遠ざけるようなことはせず、好きに一人膳の邪魔をさせていた。

——総司よ。そんなに人の飯を見るのが好きか？

——ええ。好きですよ。私はあまり食べられないから、人が食べる姿を見るのが好きなんです。

そんなやり取りを、思い出していた。

「……泣いているの?」

「泣いてなどいないだろう」

怖いくらいに心情を読んできると、本当に沖田に似ている少女だった。

「さあ、私に構わず行ってくれ。私はもう少しここで眠っている」

「……………わかった」

そう言つて去つていく少女と入れ違いにもう一人、少女がやつてきた。

派手な服装な割には儂げな印象を与えるのが、妙に歳三の脳裏にこびりつく。

(後々敵となるやつらはア、粘っこい印象なものだが、この感じは何だ?)

不思議に思うも歳三は顔には出さない。

ただ、そこらの将兵とは格が違ふと言ふことは見て取れた。

この傲岸不遜な男には珍しく、床几椅子から立つて少女を出迎えた。

「さぞ名のある方とお見受けします。私の名は」

「土方様、ですよね?」

小さな声で、遮られた。

本当に、その辺の将兵とは違ふらしい。

大男に見下ろされている形になっているというのに、物怖じしない芯の強さが、ある。

そんな少女を、歳三は悪く迎える気など毛頭ない。

自然、対応も丁寧だった。

「はい、その通りです」

「この度は官軍への援軍と義勇軍への援助、本当に感謝しています」

「それが、私の役目ですから」

「謙遜しないでください。おかげで詠ちゃんの策もうまくいきましたし、恋れんさんも土方様のお陰で満足に御飯が食べることができそうで本当に良かったです」

「失礼ですが、それは真名かと思われませんが、私はまだ」

「あ、すみません。親密そうに話していたので、もう真名を交換し合ったものかと」

少女が申し訳なさそうに笑うのを見て、歳三は更にざわざわと何かを掻き立てられていく。

その何かがわからぬままに、歳三は次の瞬間に眼を見開くことになる。

「恋ちゃんちゆうえんは呂布奉先と言います。そして私は董卓、董卓仲ちゆうえん穎と申します」

「貴女が、董卓殿ですか？」

思わず、間抜けにも聞き返していた。

◇

「失礼しました。先ほどのことは忘れていただけたら、と」

知っている者が聞けば驚くような謝罪を、董卓は快く受け止め許してくれた。

が、歳三の内心はざわめき続けている。

(呂布はまだわかる。が、この子が董卓だと?)

董卓が如何に暴政の象徴であるかは、歳三ですらもよく知っている。

しかし、目の前に居る少女は悪とか不善とはまるで関係なさそうである。

それどころか清廉そうで真面目そうで、純粹そのものといった少女ではないか。

彼女を悪逆の化身と呼ぶのなら、歳三などどんな二つ名が付くか分かったものではない。

「どうかされましたか？」

「いえ、想像していた董卓殿よりだいぶその、戦が苦手そうだなと思いましたが」

これでは剣も握れぬだろう小さな手だと、武士である歳三にはそう映った。

「はい。戦うことは嫌いです。……でも戦わなくちゃ生き残れないのなら、頑張るし

かないですから」

歳三にとっては雷に打たれた様な衝撃であろう。

戦うことが好きで戦う男と戦うことが嫌いだがやらなければならないから戦う少女。

何故、董卓という少女がこんなにも歳三の心をざわつかせるのか。

理由はそこにあるのかもしれない。

だから、歳三は董卓ともつと話をしてみたかった。

「楽進殿から援助をしていた、と聞いていますか？」

「お恥ずかしいことなんですけど、他の官軍の皆さんは義勇軍が活躍するのが嫌みたいで……」

「食料の支援や兵士の援護を故意に行わない、と？」

「はい。それでいつも詠ちゃんが私の代わりに怒ってくれますけど、土方様が突撃するまで私たちは本陣に戻れそうになかったから、心配していたんです」

「わからない、何故董卓にここまで心を乱されるのか、歳三にはさっぱりわからない。ただ、いつまでもその理由を探り求める為に話を続ける訳にはいかない。」

「歳三も董卓も、ここでは一人の前線指揮官なのだから。」

「ちよつと月^{ゆえ}ー！」

「あつ、詠ちゃんが呼んでるので、私は行きますね」

「行かないでくれ、とは言えなかった。」

「それは歳三の男としての矜持が絶対に許さなかった。ただ。」

「董卓殿、最後に一つお願いがあります」

「お願い？」

「私の真名は義豊と言います」

諱いみなと呼んできた真名を、受け取って欲しかった。

董卓は歳三の突然の申し出に少し驚いたような顔をしたが、すぐに微笑んで。「私の真名は月です。それではまた会いましょう、義豊さん」

と、言って去っていった。

何か清々しい小風が、歳三の心を吹いていくような一時だった。

胸のざわめきは、もうない。

夢の様なものだったのかもしれない、そう思いながら床几椅子に座り直そうとする。

気付けば、すぐ近くに呂布が立っていた。

(私の様な者の近くに安心して立っていたのも、呂布が居たからこそか)

それはそうかと自嘲しながら、歳三は呂布に話しかけた。

「いつからそこに?」

「……さっき」

「そうか」

「……………」

基本無口な少女なのだろう、歳三に負けず劣らずの無表情でもある。

歳三は床几椅子に腰かけようとした時。

「……義豊は……月のこと、好き？」

ぐつと、心臓を鷲掴みにされたような気がした。

これが恋なのか、はたまた愛なのか。

歳三は自分がそういつたものとは無縁の男だと思っっているから、余計に堪えた。

それでもなんとか、苦し紛れに言い返した言葉でさえ。

「真名とは神聖なものではなかったのかね？ 私はそう教えられたが？」

「……ん。私は恋でいい。……義豊なら、恋でいい」

簡単に返されてしまった。

(ああ本当に、口が強いところも沖田に似ている)

懐かしさのあまり笑みが零れそうになったところ、顔を、呂布に鷲掴みにされた。

赤い瞳がじつと、歳三の瞳を覗き込んでいる。

普段は白刃の中でも動じない歳三の心臓が、激しく高鳴った。

理由は、わからない。

「……恋は、恋」

と、だけ言っつて、呂布は歳三の顔から手を離した。

歳三は呂布の心情を感じ取ってすぐさま。

「すまなかつた」

と、だけ答えた。

(恋には、わかつたのだらうな。恋を通して沖田を見ていたことを)

公孫贖の時に犯した過ちを、また繰り返していた。

それに気付かせてくれた呂布には礼をいうべきである。

だがその礼は、先程の呂布に対する返答が正しいと歳三には思えた。

「私も、月のことは好きだよ」

「……ん」

納得したのか歳三から離れていく呂布。

ここに來てから心を乱されるばかりだな、と歳三は思いながら呂布を見送っていた。

が、呂布が突然振り返ると。

「……恋も、義豊のことは、好き」

と、だけ言って去ってしまった。

歳三はどかりと床几椅子に腰かける。

(まったく、本当に)

どう言ったものかわからない。

わからないから、歳三は腰から兼定を抜いた。

無心で刀を構えようにも、高鳴ったままの心臓がそれを許してくれそうにない。

「私もまだまだ未熟だな」

と、独り言ひとりごちた歳三は昔作つた下手な句を思い出しながら、刀を振るつた。何を切ろうとしたのかは、歳三ですらわからない。わからないままに、刀を振るつた。

◇

—— 知れば迷い 知らねば迷わぬ 恋の道

—— 豊宝

◇

歳三が刀を振るうことを止めたのは、楽進に盧植との面会の準備が整つたと知らされてである。

兼定を鞘に納め、手拭で汗を拭きとつたころにはすっかり、胸の高鳴りは収まつていた。

顔も、いつものむっとり顔である。

「それじゃあ、案内してくれるかね」

傲岸不遜な態度も、そのままである。

だが楽進が気を悪くすることもなく、むしろこの人なら当然と言うように受け入れていた。

既に、歳三の何かに中^あてられているのかもしれない。

それはともかく歳三が陣取っていた官軍と義勇軍との境目から、官軍の本陣に向かつて歩く。

しかし、かといって中に入り過ぎることもない場所に、その陣幕はあった。

なるほど、「雇われ將軍らしい、微妙な位置に盧植の陣幕は建てられていた。

「盧植將軍。土方殿をお連れしました」

陣内に向かつて一言告げると、私はこれで、と樂進は去っていく。

(本当に生真面目だな)

と、思わずにはいられなかった。

歳三を連れてきてほしいと言われ、本当に連れてくるためだけにここまで来たのだらう。

愚直とも言える実直さに好感を覚えながら、歳三は陣幕を潜^くった。

すると中に居たのは。

「あつ、土方さん！」

「お久しぶりです、土方殿」

「久しぶりなのだ！」

劉備、関羽、張飛の三人と。

「あのね、お初にお目にかかります、盧植と申します。これからよろしくね、土方様」
幼い顔立ちと、劉備以上の乳房が目につく女性、即ち盧植であった。

「こちらこそ、お初にお目にかかります。土方歳三と申します。盧植殿」

董卓の時ほど頭を下げることもなく、歳三は盧植と出会ったのであった。

鬼の毒

「いや、盧植殿のご高名、かねがね伺っております。一度会つてみたかった」

「そうなんですよ！ 風鈴先生フウリンつて凄いですよ、土方さん！」

「うーん……風鈴、そんな褒められるほどかなあ？」

劉備の言葉に歳三は頷きながら、考え込む盧植を見た。

小首を傾げながら、頬に人差し指を当て考える姿は、艶めかしいというより微笑ましい。

童顔とも相まって子供の様な仕草にしか見えないのだ。

最も、身体つきは乳も尻も脚も立派なものであり、大人そのものであるのだが。

(結構なことだ)

と、歳三は不愛想な面つらのまま、そんなことを考えていたら手の甲を抓つかられた。

切れ長の眼をちらりとやると、犯人は後ろに控えていた程立と徐晃のようである。

お見通し、と言わんばかりの眠たげな眼が、歳三をじつとりと見ていた。

「痛いじゃないか」

と、二人だけに聞こえる様に抗議すると。

「風のこと香風ちゃんのことも見てくださいと酷いのですよー」と、言われてしまった。

歳三にしてみれば可愛い嫉妬である。

笑いを堪えながら、傍目はためからではむつつり顔そのまま、口を開いた。

「ご自身が思っておられるより、人の噂は早いものです。盧植殿の名は青州にまで響いておりますよー」

「武ではなく智で勝利を収め続ける、正に私塾を開いていたに恥じない人ですなー」

歳三の言葉に、後ろに控えていた程立が前に出て続いた。

確かに程立の言う通り、武人特有の空気がないことから軍師であるとは歳三、感じていた。

「あはは、ちよつと運動が苦手なだけで、勉強を頑張っていただけなんですけどね」

と、盧植本人はこう言っているが、それだけでは兵は付いてこない、とも歳三は思っている。

歳三の持論ではあるが、兵が付いてくる将というのは大別して三種類ある。

一つ目は、共に行軍していて割の良い将、要は金払いが良い将がこれにあたる。

やはり戦は何といっても金である。武器であれ食料であれ、金が生命線に繋がるのだ。

二つ目は、勇猛な、あるいは覇氣溢れる猛将であり、歳三や趙雲などはこれに当たる。この時代はどうしても、前線に将が出なければ兵は腰砕けになりやすいのだ。

そして最後。三つめこそが、盧植のあてはまる優しさと思いやりとを持つた将である。

戦をする者には致命的に向かない資質ではあるが、乱世であるからこそ逆に輝くと
言っている。

「あまりご謙遜されなくてください。貴女はもつと自信を持っています」

「土方さん……ありがとうございます」

この傲岸不遜で不愛想な男でも、盧植の包まれる様な優し気な雰囲気は悪くないと思っている。

歳三ですらこう思うのだから、普通の兵ならば母の如く慕うであろう。

(俺には、とても無理な領域だな)

と、思っていると、劉備の顔が硬くなっているのに気が付いた。

よくよく見れば劉備の横に控える関羽と張飛の表情も、硬い。

三人の視線は歳三ではなく、横に立っている程立の方へと注がれていた。

「あ……あの、程立さん。こ、こんにちわは！」

と、なんだか素つ頓狂な挨拶を劉備がするものだから、歳三は苦笑を浮かべた。

「風のごとが、苦手かね」

一体幽州でどれだけ扱き下ろしたのか、歳三は聞いていない。

だが、劉備たちがこれだけ苦手意識を持つているのだから、なんとなしに想像はつく。ついたところで、歳三には屁みたいに軽い言葉で慰めることしかできないのだが。

(俺アそういう男じゃねえからなア)

やはり、歳三は弁舌より劍の男である。

しかしかと言つて、程立に後を丸投げされたことを忘れたわけでもない。

伊達に蛇蝎の如く嫌われていたわけではないのだ、記憶力も蛇のようにしつこい。

「悪気があつたわけではないのだよ。風も、漢のことを思つて言つたのだ」

「そうだったんですか!? 程立さんも漢王朝の復興を考えていたんですか!?!」

劉備が驚いた様な声を上げる。

が、驚いた声を上げたいのは歳三の方だった。

何故話がそんなにも突飛というか、自分の都合の良い方向に行くのか点でわからない。
い。

趙雲の言つていた天真爛漫さはここか、と納得しながら歳三は程立の冷たい視線を感じていた。

「そうですね。ただ、それにはやはり王朝の周辺をなんとかしないとイケませんねー」

程立の言葉に劉備たちだけでなく、盧植までもが顔を曇らせた。

漢帝国という大樹の腐敗は枝葉のみならず既に幹や根にまで及んでいるのかもしれない。

（根が腐ってるってんなら、新しく植え直して同じ名前を付ければいいだけだア）
が、歳三にとってはそんなことはどうでもいい。

未だ誰にも言っていない腹案が、この男の頭の中には、ある。

（坂本さんよ、あんたの理想。劉備と共に叶えることになるかもしれないぜ）

妙な話である、と歳三は笑いそうになった。

歳三はかつて劉備を坂本龍馬だと評したが、その坂本の案を劉備に対して使おうとしているのだ。

まったく奇妙なもんだぜ、と心中思いながら、理論を白熱させている程立を止めることにした。

「まあその辺にしておけ、風」

「……お兄さんがそういうのならー」

すっかり委縮してしまっている劉備たちに、歳三は声を掛けた。

このまま縮こまってしまつて、立ち止まつてしまうことが歳三には一番困るのだ。

だからとにかく、歳三が喋つて気を紛らわせてもらうに限る。

「劉備よ、今のお前の兵は白蓮から借りたものだろうか？」

「あつ、はい。そうです土方さん。つて、土方さんは白蓮ちゃんと仲がいいんですか!」
早速話の腰を折られて、歳三は頭を抱えそうになった。

なるほど、これは歳三の理解を超えた天真爛漫さだ。

こうもいきなり話題を変えられてしまうと、大多数の人間は流されてしまうだろう。
けれども歳三は多数の方に入る男ではない。

少しばかり頭痛を覚えながらも、歳三は聞きたかったことを尋ねることにした。

「ああ。白蓮に何かあれば、私は漢のどこに居ようと助けにいくつもりでいる。それはともかく一つ聞くがね、白蓮からの兵は、一体どうするつもりだ?」

「え? もちろん黄巾党と戦うために白蓮ちゃんから借りて……!」

「違う、黄巾党との戦いが終わった後の話だ。そのまま兵を借りるのか、返すのか。どうなのだ?」

「それは……できればずっと一緒に、皆が笑っていける国を創れたらな、つて」
「そもそもそれは君の兵ではないだろう。このまま借り逃げするのかね?」

歳三は面白そうに笑った。

やはり発想が常人ではないし、理想のままに兵たちを酔わせてそのまま連れ立って行ってしまいそうところも、劉備にはある。

だからこそ、歳三は現実を突きつけるのである。

「そうだな、仮定として兵たちが君についてきた、ということにしよう。では兵はどうやって養う？ 黄巾党になりかねない流民はどう扱う？ そもそも君たちに拠るべき場所と金はあるのか？」

前々から、聞いたかかったことの一つであった。

劉備の理想に賛同する者は、彼女自身の気質や関羽と張飛の存在もあつて確かにいるだろう。

しかし、劉備の理想には必要なものが多過ぎるのだ。

「劉備よ。理想は確かに結構だ。だが人を養うには、安全な土地が、賢い為政者が、強い軍隊がなければならぬ。その必要性を、風はもつと強く感じてほしかったのだ」

「桃香様」

「愛紗ちゃん……」

「土方殿の言うこと、一理どころではなく万理あります。私たちには足りないものが多過ぎます」

「鈴々、難しいことはよくわからないけど、でも歳三お兄ちゃんの言うことはよくわかるのだ」

「鈴々もそう思うの？」

劉備の眼が、助けを求める様に歳三を見た。

(ここいらが、一番重要かもしれねえな)

と、歳三が口を開く前に、盧植が言葉を挟んだ。

「あのね、前にも言ったけどね、桃香ちゃんはきつとすごいことをしてのける子だと思うの」

「風鈴先生……」

「だから、すぐに答えを求めるんじゃないなくて、もつといろんな人と会ってみたり、新しい仲間を見つけたことが重要なんじゃないかなって、風鈴は思うの」

「新しい……仲間？」

「そう。土方様に程立さんが居る様に、桃香ちゃんも軍師を見つければいいの。そうすればきつといい策を授けてくれたりするんじゃないかなって、風鈴は思うの」

一瞬、盧植の瞳がこちらを見たのを歳三は見逃さなかった。

(これア、もしかしたら薄々勘付いているかもしれねえな)

私塾を開いて多くの人間を見てきたと言う経験は、確実に盧植のものになっている。

歳三の真意がどこにあるかも、どうして程立が劉備に辛く当たるのも、何故かを気付きかけているのでは、と歳三は思った。

でなければ盧植ほどの人物が会話の最中に口を挟むような真似はしないだろう。

だったら、まるで害意がないようにしなければならぬ。

「その通り。前にも言ったが、答えを出すのを急ぎ過ぎるなよ、劉備」
「土方さん……」

「考えることだ。何が良くて何が悪いのか、簡単に割り切れるものではなからう」
それに、と歳三はここに来て初めて子供っぽい微笑を浮かべた。

声音もどこか、少年の様なものに聞こえる。

「私は、そんな劉備の理想が嫌いではない、むしろ好きかもしれぬ」

劉備の顔がぱあつと明るくなった。

(こりやア、劉備を慕うのが多いのも頷けるわけだ)

笑顔で人を惹きつけるなど、並の人間にできることではない。

坂本もよく笑っていたが、劉備も坂本も、この人の笑顔を見たいと思わせる何かがある。

無論、それが一体どういう仕組みなのかは歳三でもわからない。

わからないからこそ、恐ろしくもあると感じるのが、歳三の感性だった。

「土方さん……ありがとうございます！」

「礼を言われるようなことではないよ」

もう、既にいつものむつつり顔の、冷たい声に戻っている。

それでも劉備は、己を励ましてくれたことにひどく感謝しているようだった。
(俺としたことが、むず痒いな)

人から感謝されることが、少なかつた男である。

慣れがなさ過ぎたのが転じて、戸惑っているというべきだろうか。

そんな背中を、劉備や盧植に見られぬよう、程立がぎゅつと抓つた。

歳三はその痛みで我に返る。

(危なかつた……。坂本で慣れていると思つたが、劉備も坂本あいつも天性の人誑たらしなのを忘れるところだつたぜ)

歳三は程立に眼で感謝しながら、これ以上この場に留まる理由もないと思ひ始めていた。

盧植にも会えた、劉備にも会えた。

そして、劉備に歳三なりの毒も仕込めた。

十二分に上出来であると言えるし、このまま留まっても逆に劉備に吞まれかねない。

こうなつたら逃げるに限るが、なんと云つて逃げるとするか。

と、歳三が思つていた時、天幕の外から何か言い争う様な声が聞こえてきた。

双方とも、女性のようである。

盧植が、何かに気付いた様に声を上げた。

「あら、この声は賈馱ちゃんの……」

「賈馱、という女性は官軍の方ですか？」

「賈馱はいい人なのだ！ 董卓と一緒に義勇軍にも気を配ってくれるのだ！」

張飛が元氣よく答えたのを聞いて、歳三はこいつは丁度いいと心の中で手を叩いた。

絶好の、機会ではないか。

「少し様子を見てきます。陣中にて言い争いがあるのは兵士の士気に関わる。風」

「はい。では私たちはこれで失礼します。色々ありがとうございました、盧植殿」

「あはは、風鈴特に何もしてないかな、って思うんだけどね」

さっさと天幕を出て行く歳三と徐晃に代わって、程立が丁寧な礼を述べる。

それに対し盧植は何も言い返すことができず、ただ曖昧な笑みを浮かべるだけだった。

歳三の言い分、配下としての程立の言葉、全て順当であったからである。

盧植は天幕を潜る程立の背中を見ながら、不安な思いを募らせていた。

◇

「土方様は、なんというか、不思議な人だよね」

「風鈴先生もそう思いますか!? 土方さんって良い人なんですよ!」

盧植が小さく漏らした言葉に対し、鋭敏に反応した劉備。

歳三のことを良い人だと言う劉備に、盧植はまたも曖昧な笑みを浮かべることしかなかった。

程立と歳三による劉備の否定と肯定は、あれは一つの術ではないのかと盧植の中にはある。

相手に対し痛烈な否定をした後に、全てを肯定するような優しい言葉を掛ける。

悪人が行う思考誘導そのものではないか、と盧植は思うのである。

だが、程立はともかく歳三の方はそう考えていたか、どうか。

とてもそういう腹芸ができるような人間に見えないのも、盧植を混乱させていた。

そして、劉備たちである。

「これから皆と一緒に頑張れば、どこかの領地を任せてもらえるかもしれないね！」

「そうですね。やはり頑張った者に対する報奨というものはそういうものかと思いません。桃香様」

「鈴々、俄然やる気が出てきたのだ！」

今までの劉備は、宙に浮いている様な、夢を見る理想家で地に足が付いていない感じだったのが、急に現実的になり始めているということが、盧植の頭を更に悩ませた。

確かに現実と理想を擦り合わせるのには悪いことではない。

むしろ理想の実現には必要不可欠なことである、が、それも時と場合によるのである。

劉備の抱く巨大な理想に、現実が擦り寄った時、一体どうなってしまうのか。

盧植には何も考え付くことが出来ず、思わず。

「土方、歳三……」

と、黒龍と呼ばれる男の名前を呟いていた。

◇

天幕を出てみれば、益々大きく聞こえる応酬の声。

どこだと探し出す様な労も特になく、歳三は声の大元を見つけていた。

如何にも武将という風貌の女と、如何にも軍師という装いの少女が歩きながら言い

争っている。

「先程の突撃！　土方というやつは突撃がなくても私はやれていた！」

と、言うのは武将の方である。

各所の銀鎧が陽光を浴びて煌めき、妖艶な衣装を身に纏っているが、背中に負う身の

丈もあろうかという戦斧せんぶが、只者ではないことを周囲に知らしめていた。

「無理よ！　恋も限界が来てたし、兵たちも疲れ切っていた！　そんな中で華雄一人が

頑張れても！」

とは、軍師らしき者の方である。

董卓とはまた違った飾り帽を被り、戦には向かぬであろう一見地味ではあるが華やかな衣装を身に纏っている。

落ち着いた色合いがなんとも言えぬ、と歳三は感心していたが、感心しているだけではこの言い争いは止まりはしない。

歳三は二人の間に向かつてさっさと歩き始めていた。

「土方というやつが出来て、私が出来ぬ道理がなからう！ 私はまだやれる！」

「ほう、私が一体何をしたというのかね？」

「くっ……!? お前！」

「陣中での言い争い、見逃せんな。何かあったのかね？」

このまま戦斧で叩き切つて来る可能性も無きにしも非ず。

歳三は兼定の柄に手を掛けたまま、切れ長の眼でじつと華雄と呼ばれていた武将を見た。

無言の睨み合いが、数秒ほど続く。

先に眼を逸らしたのは華雄の方だった。

ふん、と大きく鼻をならすと歳三のことを無視して行ってしまった。

「もう華雄！ ちよつと！ ……もう！」

と、軍師風の少女も最後は疲れたように吐き出していた。

「どうやら、私のせいで一悶着あったみたいだな」

と、歳三が軍師風の少女に話しかけるが返事がない。

上から下まで、じつくりと視線を感じる。

どうやら値踏みをされているらしい。

当の歳三は値踏みできるものならやってみると、威風堂々と立っているままだ。

「……貴方が青州の土方歳三？」

「確かにそうだが、官軍では自分の名を名乗らないのが流儀なのかね？」

無礼には無礼で返す。

のが必ずしも歳三の流儀ではないのだが、なんとなしに意地を張りたくなつたのである。

程立からの冷たい視線を感じるが、歳三はどこ吹く風で無視をした。

「……どうしてボクを官軍だと思ったの？」

「ただの、勘。……では納得しないのだろうか」

歳三はなんてことのないように、事の真実を話した。

「盧植殿が言っていたよ、この声は賈馱殿の声だ、って」

「そう……」

目の前の少女は納得したように眩くと、ようやく名乗った。

「賈^{かく}驅よ。賈驅文和。賈驅でいいわ。月の……董卓の軍師をしているわ」
「月の軍師か」

「なんで月の真名を……って恋とも親しそうにしてたから、当然か」

見られていたのか、と思いつながら歳三は賈驅に違和感を覚えていた。

頼みごとをしたい人間というのは得てしてこういうものである、と歳三は知っている。
る。

だがそれを話さないのは賈驅なりの配慮なのか、矜持によるものなのかはわからない。
い。

わからないが、この男特有の嗅覚で、戦の気配を感じ取っていた。

「で、何か私に頼みたいことがあるのだろうか、賈驅？」

「……わかる？」

「ああ」

「……ところで、貴方の軍はまだ戦えそう？」

「何か、黄巾党に関してあったのかね？」

今この場で、戦えるかどうかなど聞いてくるのは戦に関してでしかないだろう。

歳三は先を促す様に、賈驅の眼を見た。

少し賈驅は狼^{うろた}狽えたが、意を決して小声で話し始めた。

「潁川えいせんでね、官軍の朱儁將軍しゆしゆんが黄巾党に敗れたの。それで今、長社城で黄巾党の大軍勢に困こまれながら、皇甫嵩將軍かうほうそうと朱儁將軍が援軍を待っているの」

「余程の負けをしたみたいだな」

「……そうね。朱儁將軍は所詮農民の叛乱だと高を括っていたみたいだし」

ぼつりぼつりと語る賈馱の内容は、官軍の実情を照らし合わせてみれば明白である。

歳三はふむふむと頷きながら、如何に戦うかを考え始めていた。

「……本来はボクたちが向かうべきなんだけど、官軍の本隊はああだし、私たちも限界、恋は大丈夫だけど、食料の方が限界。恋はよく食べるから」

「ああ。確かにそのようだったな」

大の大人である歳三の分ですら、平氣の平左で貰つていくような呂布である。

しかし、それだけ戦働きをするのなら仕方ないどころか当然である。

歳三が呂布を預かっているのなら、米櫃びつを何杯でもあてがうところだ。

そして華雄は自軍が疲弊しているのを知つても尚、救出の為に、もしくは自身の自尊心の為に長社への攻勢に出たがっていたのを賈馱は止めていたのだろう。

なるほど、と歳三はおおよその事態を把握してから賈馱にあることを尋ねた。

「それでだ、黄巾党の詳しい数はわかるか？」

「二万の將兵が恐れ戦おのいて城から出られないくらい、つて言つたらわかる？」

「そうか」

と、言うとき歳三は小さく笑って。

「大した数ではないようだな」

と、言い切った。

これには賈馱も眼を見開いて驚いた。

「ちよつとあんた！ 何言ってるのかわかつてるの!？」

「わかつているさ。ちよつと多いくらい、黄巾党がいるのだろうか？」

「違うわよ！ 報告では大地を埋め尽くすくらい、黄巾党の兵が！」

す、と歳三が手を上げて声を小さくするよう促すと、賈馱は今自分がどこにいるかを思い出したかのように押し黙った。

今は陣中である、あまり官軍が不利であるということが触れ回っては、官軍はそれだけで崩壊しかねない。

が、歳三にとつては黄巾党の大軍が相手であつたとしても、何も怖いと思っていない。つくづく、恐怖の出所がわからない場所にある男だ。

「例え剣林ならぬ剣の森であつたとしても、向けられる刃はせいぜい四本が限界よ。別にすべての刃が私に向くわけではない」

と、歳三は笑って賈馱を見た。

この時になつて賈馱は、土方歳三が何故鬼や黒龍と呼ばれているのかわかつたような気がした。

歳三の顔は笑つていても、眼だけはぎらぎらと輝いていたのである。

賈馱は未だかつて、このような手合いの特異な男に出会つたことはなかつた。

「さあ、潁川付近と長社城について教えてくれないか？ 数は黄巾党に大きく劣るかも

しれないが、それでも我々が、黄巾党を破り官軍の将兵たちを救つてみせよう」

賈馱は知らず、唾をごくりと飲み込んでいた。

長社城の戦い

「以前にも言ったことがあるようですが」

と、地に伏せた趙雲が言った。

「主は馬鹿なのですか？」

当の歳三は趙雲と同じく、地に伏せながら双眼鏡を覗いている。

歳三の横に張り付くように、趙雲と徐晃が地に伏せていた。

「馬鹿とは心外だなあ」

「こればかりは馬鹿だと言う他ありませんまい。何故この戦力差で勝てると思ったのです」

双眼鏡を覗かなくてもわかる、長社城を取り巻く黄巾党の数の多さを。

足踏みだけで地が鳴り響き、息遣いだけで巨大な化け物の吐息に思える。

数を数える等不可能、長社城を満遍なく囲みながら尚、城外を埋め尽くす黄の山。

歳三の手勢は含めて一万前後であるが、こんな人数相手に攻撃を仕掛ける等、自殺行為もいいところである。城内の手勢二万と呼応すればまだやりようはあると趙雲は思うが、果たして官軍が前に出てくるかどうか。

「それに皇甫嵩將軍はともかく朱儁將軍は傲慢な癖ごうまんに矮小な男わいしやうと聞いております。主の攻撃に果たして呼応してくるかどうか」

「ん？ そいつは妙な話だな」

「は？ それはどういうことですか？」

「私は端はなから長社城の戦力など当てにしていなよ」

と、歳三はとんでもないことを言つたと、趙雲は思った。

最初から手勢の軍勢のみで勝負を賭ける、と、同義である。

今まで散々奇策を目にしてきたが、今度ばかりは天運尽きたかと趙雲は落胆したが、隣の男の腹の中は全く違うようである。

「星よ。戦は何も突撃することが戦ではないぞ」

「それはわかりますが、今度はどうするのです？ どうしようもない数の差を、どう埋めるのか」

地の果てまで人が埋め尽くす光景を前にして、歳三は趙雲とは全く違う情景を思い浮かべているようだった。双眼鏡から眼を離さないまま、笑みまで浮かべている。

「どいつもこいつも数で押してきたやつらばかりだ。氣勢を挫けば離散するだろうよ」

「はあ、それで？」

「どいつもこいつも大声を張り上げて蒼天そうてん已死すでにし黄天こうてん当立たつべしと威勢のいいことを言つ

「ちやあいるが、あれは単に怖いのみ」

「怖い、とは？」

「ここにきて、ようやく星も気が付いた。」

「今、黄巾党が最も怖れている存在は官軍でもなく義勇軍でもなく、ただ一人。」

「私が怖いのみ」

「土方歳三その人である。」

「幽州、徐州、青州に渡る歳三の苛烈な戦歴は黄巾党の髓ずいにまで鳴り響いている。」

「が、黄巾党が歳三の存在を感知する暇いとまはなかつた筈である。」

「黄巾党が何故主の居場所を……まさか、偽兵を？」

「ああ。あれだけの大軍なら何人か紛れ込んだところで気付きはしまい。当然、出て行つてもな」

「統率の取れた大軍なら話は別だが、と歳三は付け加えて話を続けた。」

「先程から何組かに分けて長社城に向かつて土方が来ている、という噂を流し続けてみた。そうしたらどうだ、教義かなんだか知らないが、蒼天の大合唱だ」

「なるほど。しかし、それは逆効果では？」

「何故、そう思う？」

「恐怖心を煽る策はわかりませんが、これでは無駄に主の存在について警戒させるだけに」

なるのではありますまいか？」

「一理ある。が、だからさ」

と、歳三は涼し気な笑みを浮かべた。

「兵たちを置いて、私たち三人だけで黄巾党見物に来たのさ」

歳三たちが今居るのは長社城とその周囲を眺めることができる丘にあり、流石の黄巾党の大軍勢の端っこも届かぬ様な場所にいる。歳三が双眼鏡を覗いていたのもその為だ。

それに今から兵の待機場所に戻り、強行軍で突撃を仕掛けたとしても必ず一昼夜は掛かる。

もつとも、最初歳三が一人で黄巾党見物に行くと言い出した時などは、趙雲も徐晃もようやくと歳三の気が狂ったかと思っただくらいであったが、この男なりの戦略があったのだ。

「……じゃあ、今から走って戻って……突撃？」

「そんなことはしないよ。のんびり戻って鋭気を養いながら進軍する」

「……？　じゃあなんでお兄ちゃんが来てるって噂を広めたの？」

「それがこれの肝だよ」

と、歳三は双眼鏡から眼を話して黄巾党を見た。

「人間つてのは案外長いこと恐怖、つまり緊張してられないものだ。どんなに張りつめても二日か、三日が限界だ。私たちが狙うのはそこだよ」

合点がてんした、と言わんばかりに趙雲が感心の声を上げた。

「そういうことですか。主が来たという噂を流した上でわざと時間を掛けることで、精神的に疲弊し、尚且つ長社城のみに意識を向いた黄巾党の虚を突くのですな」

「その通りだ、星。だがもう一つやることがある」

趙雲と徐晃がそれはなんだと言うように歳三の顔を見た。

歳三はにやりと笑って。

「火付けだよ」

と、言った。

しかし、趙雲も徐晃も呆れ顔である。

「また火付けですか。主は本当に火が好きですなあ」

「……好きなの？」

「さあ？　好きか嫌いかで言うと、有効だから好きだね」

歳三は伏せついている地から、草をぶちりと千切り取った。

水分はすっかり失せ、火を付けければ瞬く間に燃えそうな枯草である。

これが、黄巾党の大軍勢まで続いている。

「それに今度は夜襲と組み合わせる」

「夜襲と、ですか。それは初めてですな。では今度は一体どんな策を見せてくれるのですか？」

俄然、やる気が出てきたか趙雲が歳三に問いかけた。

徐晃も一言一句も聞き漏らさまいと、顔を近づけた。

「それはだな」

と、歳三は己の戦術を披露し始めた。

◇

長社城内は将兵卒、誰にも限らず恐怖に渦巻いていた。

馬ですら、物々しい雰囲気を感じ取ってか怯え始める始末である。

それも仕方のないことだろう。

城外には今にも自分たちを殺さんとする者どもが、数え切れないほどに犇^{ひし}めいているのである。

怖れるな、という方が無茶であろう。

「皇甫^{こうぼう}高將軍！ 敵からの攻撃が再開されました！」

「わかったわ。前と同じように、交代しながら迎撃して」

「了解しました！」

皇甫嵩義真^{ギン}、脚にも至るほどの豊かな茶髪を編んだ髪の毛で纏め、妖艶な中華服を着込んだ官軍の歴戦の女將軍である。大勝、と言われる様なものはないものの、程立の言葉に出る程度には有能な將であるが、その美麗な顔は沈痛な面持ちであつた。

まず第一に、長社城が絶望的な状況にあること。

朱儁敗北の報を聞いて即座に出した応援の要請も、この黄巾党の数の前では返事は無しつひての礫。兵の士気は下がりそれでも尚、悲痛な防衛線を繰り広げられるのは偏ひんに、皇甫嵩あつてのものである。人望厚く無茶な戦いをしない皇甫嵩は兵から好かれる將であつた。

そして第二に、獅子身中の虫とも言える將が城内に居ることにある。それは誰かと言えば、先の潁川の戦いで黄巾党に大敗北を喫した、朱儁將軍のことである。

未だに何故自分が敗北したのかわからず、官軍が弱かつたせいだと兵に当たり散らす毎日を送っており、兵の士気を下げることに一役買つてゐる。

「それに、露骨に色目を使つてくるから嫌なのよね」

一言でいえばいやらしい、と表現するべきか。

とにかく朱儁の皇甫嵩に向ける視線は男の欲と見栄を合わせた複雑なもので、それを遠回しに嫌悪していると伝えても、朱儁は勝てば見直すだろうと兵を苛めるのを止めないのだ。

こんな調子で勝てるのだろうか、と皇甫嵩は時々思う。

漢帝国の腐敗は知っているが、かといって朝廷を見捨てるつもりもない。だからこそこうやって戦い続けているのだが、皇甫嵩の悩みは尽きない。

「私っていつになったら結婚できるのかなあ……」

と、幼い頃からの夢がぼつりと、独り言のように出てきてしまう始末である。

そう、皇甫嵩には結婚がちらつく歳になっても子供の様な理想があった。

それは実力も見えた目も兼ね備えた男に見初められることである。

けれども、その願いはいつになっても叶いそうにはなかった。

はあ、と大きく溜息をつく頬をぱしりと叩いて気持ちを切り替える皇甫嵩。

それでもまだ、彼女らは負けていないのだから、このままではいけないと気合を入れた。

「それにしても、二、三日前の急な停止は何？」

皇甫嵩には一つ、大きな疑問があった。

ずっと長社城に攻勢を続けていた黄巾党が、あるときぱたりと攻撃を止めた瞬間があったのだ。

その間はずっと、*蒼天已死黄天当立*の大合唱であったが、黄巾党は何をしたかったのか。

何故黄巾党は攻撃を止めてしまったのか。

が、いくら考えても結論は出そうにないし、外はもう陽が落ちている。

考えすぎて知恵熱が出そうだと思つた皇甫嵩は、兵の士気を上げる意味も兼ねて楼の上に出ることにしたのだった。

◇

「これは皇甫嵩將軍！　ここは危険です！」

「わかつてるわ。でも、貴方たちだけに任せていたら私の意味がないじゃない？」

「……ありがとうございます！　將軍！」

皇甫嵩の言葉を受けて、俄かに氣勢を上げる兵士たち。

奇しくも朱儁將軍は専ら安全な城内に居る為に、兵の士気は城内外で逆転していると
言う不思議な光景が見られるのも、ここ長社城くらいだろう。

皇甫嵩は闇の中に蠢く黄巾党を見た。

強烈な向かい風が、頬を打つが、皇甫嵩は眼を閉じることはない。

一体どうすればこの苦難を打倒できるか、それだけが頭にある。

すると、天啓の様に黄巾党の軍勢の向こうで光が灯った。

「……そうだ、火だ」

夜陰に乗じて兵を黄巾党に紛れ込ませ、後方に火を放つ。

そうすれば黄巾党は間違いなく混乱する、それに合わせて城内からも攻勢を仕掛けられ

と、そこまで考えて気が付いた。

私が見たものは、なに、と。

「皇甫嵩將軍！」

「わかっている、わかっているわ」

火が、燃えていた。

轟轟と、真つ赤な揺らめきが大地を舐め尽すように燃えていた。

その中心に、皇甫嵩はあり得ないものを見た。

一人の男が、笑って立っているのである。

いや、この楼からでは、皇甫嵩が掛けている眼鏡を使って更に凝らして見ても男の顔を見ることはできやしないだろう。それでも、皇甫嵩は男が笑っていると思えた。

黒羽織を炎にたなびかせ、傲岸不遜に笑っている男の姿に、眼下の黄巾党は騒めき始め

ていた。

「土方だ、土方が出たぞー！」

「やつは龍だ、本当に黒龍なんだ！」

「あいつは炎を操れるんだー！」

土方歳三、聞いた名前である。

幽州で徐州で青州で、華麗かつ残酷な戦績を残している、謎の武人。

それが、あの炎の中で笑う男なのか。

そう思うと、自然と身体が楼から身を乗り出す形になっていた。

一目見てみたい、その思いだけで見えるはずもない顔が、見えたような気がした。

「あつ……」

眼が、あつたような気がした。

あくまで眼があつたような気がしただけである。

だが確かに、黒羽織の男は皇甫嵩に笑いかけたような気がした。

男が、腰から剣を抜いた。そして振り下ろされる。

炎が意思を持つかのように、振り下ろされた剣に合わせて火勢が増した。

ただ、頬を打つ風が強くなったただけなのだが、皇甫嵩は男が炎を操っているのだし
か思えなくなっていた。

◇

翌朝、長社城の城外を焼いた炎に昨夜の勢いはなく、城壁の隅で燻るのみになっていた。
た。

皇甫嵩は陽が昇ってからようやく、昨夜の歳三の手品の種に気が付いた。

なんてことはない、夜陰の内に枯草を抜き取って、そこに立っていただけなのである。燃えるものがなければ、火など最初から点きはしない。

軍勢も、火の勢いが過ぎた燃え跡から襲いかかっていたのだろう。

辺りは焼けた枯草ばかりであったが、歳三の立っていた一点だけが、掘り起こされたばかりの土の色がやけに目立っていた。

「將軍！ 我々の勝利です！」

歳三の立っていた一点を見つめていた皇甫嵩は、兵の言葉で我に返った。

こうして歳三の手品の種がわかるのも、昨日までは大地を埋め尽くすほどだった黄巾党が、一夜にしていなくなってしまったからである。あれだけ居た黄巾党も、残っているのは焼けた死体ばかりで大地には黒々とした平野が広がっているだけだ。

「ええ、そうね」

と、楼から降りようとした時、下から声を掛けられた。

疑問に思いながら、楼から身を皇甫嵩が身を乗り出すと、居た。

他の誰でもない、土方歳三が、そこに。

「援軍に参りましたよ」

涼やかな笑顔で、笑っている。

皇甫嵩は胸が高鳴るのを感じた。

迎えに来たのは白馬の皇子ではなく、黒龍の化身であったが、この胸の鼓動をどうすれば。

少しの間、皇甫嵩と歳三は見つめ合い、負けたと言わんばかりに歳三が苦笑した。

「門を開けてもらえませぬか。私たちの仲間が入れませぬ故」

と、言われてからようやく、開門の指示を出す皇甫嵩であった。

◇

「この度の戦勝、誠にお見事です」

「いえ、皇甫嵩殿が敵の注目を集めていたからこそ出来た芸当です。本当の殊勲は皇甫嵩殿ですよ」

門を開け、歳三の軍を入れてから皇甫嵩は歳三にべったりだった。

歳三も、皇甫嵩のような美女に魅入られて悪い気はしない。

趙雲と徐晃からの冷たい視線も、どこ吹く風であった。

が、それを快く思わない者も居る。

朱儁であった。

自分が狙っていた女を、先に取られるのは男にとって屈辱の極みである。

屈辱には報復を、と、朱儁の中で幾通りもの追い落とし策が張り巡らされていった時、

後ろから大声を掛けられた。

「よう、潁川じゃ散々だったらしいなあ！ 朱儁！」

「……孫堅か」

苦虫を噛み潰したように、朱儁は呟いた。

その大声に気付いたか、歳三と皇甫嵩も、そして趙雲と徐晃も戻ってきた。

図らずしも、朱儁は前門に虎を迎え、後門に狼を迎えたことになる。

「皇甫嵩！ 元気だったか！」

「はい。孫堅殿も元気そうで」

これが梨晏の言つてた大殿、孫堅か。と歳三は思った。

(想像以上の傑物だなア、こいつア)

太史慈と同じ健康的な褐色の肌、煽情的な格好、そして隠されることのない激しい覇気。

大凡英傑と呼ぶに相応しい全てを兼ね備え、虎の如き凶暴さを内に秘めているのを歳

三は感じ、一人背中に汗を流す。

孫堅は皇甫嵩を見ている、しかしその眼は歳三を確実に捉えていた。

一步動けば狩られる、歳三は自前の想像力で孫堅の内情を読み切っていた。

「で、援軍に来てみたがオイオイオイ、黄巾党はどこに行つたんだあ!?! 折角戦えるつていうから策も権も連れて来たつていうのによお！」

孫堅が意味もなく吠える。

兵士たちが、比喩ではなく本当に縮み上がったような気がする。

歳三も、平気そうな不愛想を貫いているが、内心、感心していたりもする。

(本当に虎か、こいつア)

歳三も相当の戦好きを自負しているが、これは俺以上かもしれないと思う歳三。

このまま暴れ出しては困ると皇甫嵩ならず朱儁までも思ったのか。

「孫堅、お前は何しに来た！」

と、権力を傘にして威圧的に訴える者の、朱儁の声が震えていては意味がない。

まるで意に介していないが、蚊が居たから叩こうとした虎の様にぐるんと首を朱儁に

向けると。

「袁紹が黄巾党の本隊を、曹操が首領の張角を討ち取った。だからこの戦は終わりだつ

て教えに来たのよ」

重要なことを朝の挨拶であるかのように平然と言い、また首をぐるんと動かして歳三

を見た。

「それでまだ黄巾党に囲まれてるっていう長社の城に来てみたら、黄巾党なんて影も形

もありやあしねえじゃねえか！ これはどういう手品を使ったんだ？ 歳三さんよ？」

「さあ」

と、歳三は虎を前にしても、いつものむっとり顔で答えた。

それが余程面白かったのか、孫堅は大笑すると歳三につかつかと歩み寄り。

「まあそれは、洛陽に向かう道中で追々話してもらおうとするか」

がしり、と歳三の肩を抱くとそう言ったのであった。

洛陽へと至る道、黒龍は白龍を呑まんとす

歳三の軍は半ば強引に、孫堅の軍勢に守られるようにしてしれい司隸にある洛陽へと向かうことになった。が、この孫堅の行軍に納得いかない者がいた。

趙雲である。

徐晃等は歳三に頼り切っている為か何も言わないが、智恵が回る趙雲はあることを恐れた。

このまま、なし崩し的に孫堅の軍勢に吸収されることを、である。

無論、趙雲は即座に歳三に忠言したが、歳三は笑って。

「孫堅殿がそのつもりなら、最初からそう宣言してこちらを叩き潰してくるよ」と、言うとすぐにいつもの不愛想な面に戻り。

「まあ、相手がそのつもりなら、我々もそうするから、星もそのつもりでな」

どうやら歳三、油断など全くしていなかったようである。

趙雲もその旨を聞くと、孫堅という人物の為ひととなり人を見た主が言うならと、後に控えた。と、そんな感じのことがあったが、概ね道中は平和であった。

◇

洛陽に向かう途中も、あの戦はどうだったかとか、黄巾党はどうだったかなど戦談義を存分に花開かせた歳三と孫堅であったが、洛陽が近づくにつれて孫堅の口数は減っていった。

歳三も、同じく口を閉じることが多くなっていた。

空気が腐り、淀み切っている。

腐臭が洛陽に至らずとも漂い臭ってくるようであった。

歳三や孫堅の様な勘の鋭い者は、そういうのが、なんとなしにわかる。

「なるほど。聞いていた以上だ」

と、歳三が独り言ちたのを聞いて、孫堅はまた歳三の肩をひつつかんで引き寄せた。

「何かね、孫堅殿？」

「歳三、とりあえずお前は馬鹿のふりをしておけ」

「ふむ？」

これが孫堅の忠告であることはわかった。

わかったが、理由がわからない。

眼でそう訴えると、孫堅は声を潜めるながら続けた。

「今の洛陽は半端ないぞ、お前の様なヤツは容赦なく消してくるからな」

「それなら得意だよ。暗殺者程度、何人も斬ってきた」

「暗殺者が来るならマシだよ。お前、勅命で斬首なんて来たらどうする?」

孫堅の声は本気であつた。

今の朝廷は魍魎魍魎が跋扈する魔窟。

そんな中に飛び込もうとしているのを、歳三は存分に理解したが、尚も涼しい顔で。「それは困るな。今の皇帝を弑逆することになつてしまふ」

と、宣のたまつた。

真顔で、尋常ならざることを言うものだから、流石の孫堅も眼を見開いて驚いた。

この男は現皇帝のことなどどうとも思っていない。

どころか、自分の邪魔をするならば大逆を犯すことも平気で視野に入っている。

それらを理解した孫堅は、虎を思わせるような獐猛どうもうな笑みを浮かべた。

「そいつは困るな。そうなつたら歳三と戦わないといけない」

「朝廷の家臣としてか、それとも孫堅殿としてか?」

「もちろん前者、と言いたいところだが、本音は俺が戦いたいから戦いたい。お前もそう思わないか?」

「さあ? 私は貴女と同じで戦えと言われたら戦うのみの身分だからね」

歳三がさあらぬ体で返すものだから、孫堅は今度こそ毒気を抜かれてしまった。

孫堅は大笑いしながら歳三の肩をばしばしと叩くものだから、歳三の恐ろしさをよく

知っている幽州の兵など冷や汗ものでその光景を眺めていたが、歳三は笑顔であった。

歳三、実はこういう手合いは嫌いではない、むしろ好きである。

孫堅からは政略や謀略の影が一切感じられないから、話していてむしろ清々しいのだ。

だから、歳三は今度はおどけたように。

「私は女好きだからね。洛陽では荒淫に耽る馬鹿にでもなつておこう」

「そいつは丁度いいや」

と、言つて二人して笑うのであつた。

◇

「ああ、そういえばだな」

「なんだ、歳三？」

ふと、思い出したように歳三は言つた。

「私が長社城に行つたのはね、月……董卓と話したかつたからなんだ」

「董卓とか？」

「ああ。董卓の軍師の賈馱と取引してね。長社城のことを私たちで片付けたら、董卓との面会の時間を取つてもらふことを約束してもらつたのだよ」

そう、歳三は長社城近辺の情報だけでなく董卓との会う約束すらも賈馱から取り付け

ていたのだが、孫堅がこうしてやってきたことで有耶無耶になりそうなのを今更ながら気付いたのだ。

(俺としたことが……)

歳三、内心苦り切っている。

こういう男でも、目先の楽しさに眼を奪われて大事を忘れることもあるらしい。

しかし、孫堅は歳三の言葉を聞いて難しい顔をした。

「董卓とか……そいつはまた、難しいことを頼んだもんだな」

「なんだって?」

「今の朝廷の現状を鑑みれば、董卓と話そうなんて思うやつは、靈帝に対する胡麻擦り野郎か詐欺師くらいだよ。それを大勢捌さばいているのが賈馱さだなんだから、よくやってるよ」

「待て。まさか董卓が、まつりごと政を任されているのか?」

「つと、まあ……そういうことだ」

流石に口を滑らせてしまったと思つたか、孫堅にしては珍しく曖昧に返事をした。

が、歳三それどころではない。

(あの小さな肩ア一つに、国を背負わせてやがるだど?)

董卓の儂げな姿が思い起こされる。

叛乱鎮圧の為に戦わされ、政すらも任され有象無象の相手をし、誰からも褒められる

ことなく認められることもなく、国の為にただひたすら懸命に我が身を削っているのが、あの董卓だと。

怒髪天を突く、とはこの男場合には当てはまらない。

憤怒のあまり空気が歪んで見えるよう、と言う方が正しい。

隣に立つ孫堅など、歳三のあまりの怒り様に思わず息を呑んだくらいだ。

が、この男は感情の制御が異常に上手く、早い。

あつという間に怒気を心中に収めると平然とした風に孫堅に話しかけた。

「すまない、貸しが一つできたな」

貸しとは、現在の朝廷内部のことを教えてもらったことに対する礼であろう。

歳三らしい貸しの仕方であったが、孫堅は。

「一つじゃない、二つだ」

と、言つてにやりと笑つた。

「俺の戦場をくれてやった、その貸しだよ」

これには歳三も苦笑して。

「随分と強引な貸しだなあ」

と呆れながら笑うのであつた。

が、呆れてばかりでいるのが歳三ではない。

いつものむつつり顔に戻ると、歳三は孫堅に尋ねた。

「で、私はいつ、その貸しを返せばいい？」

「ほう、気が早いじゃねえか？ 嫌いじゃないぜ、そういうの」

「貴女に貸しを任せていると、どんどん利息が増えそうなんでね」

と、歳三が答えると孫堅は怪訝な顔をした。

「なんだい、随分商人みたいなことを言うんだな、お前？」

「これでも農民、商人、武士、大抵のことはやってきたつもりだよ」

歳三の突然の過去話に、孫堅はまたも大笑いして歳三の背中を叩いたのであった。

◇

そこへ、孫堅の兵士が駆け込んできた。

途端に機嫌を悪くする孫堅であったが、兵士の只事ただごとではないという空気を察して、す

ぐに言うよう鋭い目で促した。

兵士は一瞬、歳三が側に居ることに躊躇してから、言った。

「盧植將軍が、讒言ざんげんによつて捕縛されました」

「それは本当か？」

孫堅ではなく、歳三が先に反応した。

歳三のあまりの劍幕に、兵士はただ頷いて肯定を示すだけである。

詰め寄りながら、歳三は孫堅の兵士だと言うのに冷たい声で問い正す。

「一体どんな罪によつてだ？ 盧植殿はそういう讒言とは無縁の筈だ」

「そ、それは……」

「まあまあ、落ち着けよ歳三」

と、歳三の肩にぽんと、孫堅の手が置かれた。

「これが今の朝廷の半端ないところだ。お前、盧植と会ったことあるんだろう？」

歳三、無言で首肯して孫堅に答えた。

「俺もちらつとしか見たことないが、あれが賄賂とかを送れるような器用なタマだともうか？」

「まさか、賄賂を贈らなかつたことで怒つた役人が讒言を？」

「まあ、そういうところだろうな」

と、孫堅が己の見立てを立てたところで、歳三は既に考え込んでいた。

（これは、良い機会かもしれないねえな）

怒っているのか、と孫堅は先の董卓の時を思ったが、歳三に怒気はない。

むしろこれは、と孫堅は凶暴な笑みを浮かべて歳三を見ている。

歳三、孫堅の視線に気付いた。

孫堅の獲物を狙う虎の様な眼を見て、ああ、これは読まれているな、と直感した。

「孫堅殿も、着いてきますか？」

「おうともさ！ 何やら面白れえことをやりやがるんだろ？」

「もちろん」

と、歳三は短く答えてにやりと笑った。

孫堅はその返事に満足したか大きく頷いて。

「じゃあ、後で会おうぜ」

と、歳三を趙雲と徐晃の元へと送り出した。

韋駄天の如き速さで自分の軍を指揮しだす歳三を一度見てから、孫堅は大声を上げた。

「策！ 権！ こつちへ来い！」

歳三の軍を囲んでいた孫堅軍の中から、孫堅と同じような格好をした二人が出てくる。

髪の色も、肌の色も、服の色も冠までもそっくりだ。

が、違うと言えば顔つき位か。

一人は凶暴、一人は飄々ひょうひょう、一人は温厚。

それぞれ孫堅、孫策、孫権と言った、誰もが江東を代表する武人の一族である。

「よし、策は俺と一緒に半分の兵を連れて来い。権は残り洛陽へと向かえ」

「ちよつとちよつと、何をする気なのよお母様！」

と、二人の姉妹の内、孫策が代表する様に問いを投げかけた。それはそうである。

洛陽へと行軍中にこうも急に目標を変えるとは、どういう意図があるというのか。それに対し孫堅は我が娘に対してまでも凶暴な笑みを浮かべて。

「なに、面白いことだよ」

と、言った。

孫策は呆れて、だからそれは何、と聞き返したことを心底後悔した。

「決まってるあ、歳三と一緒に役人殺しだよ」

◇

劉備玄德は焦っていた。盧植と官軍と共に、義勇軍を率いて最後の黄巾党の籠る城こもを攻め立てて落城させたのまでは良かった。

するとどうだ、どこからか現れた別の官軍が、盧植を捕縛すると言ってきたのである。

盧植の方はただ、諾々ただくと罪を受け入れます、と言つて捕縛されてしまった。

劉備はもちろん憤慨した、一体何の罪が盧植先生にあるんですか、と。

帰ってきた答えは非情の一言に尽きた。

「軍監察、左豊殿の報告により盧植將軍が戦いを行わなかったのは明らかである。従つ

て、洛陽にて盧植將軍の官職剥奪、及び死罪を執り行うものである」

左豊が、そう言った官軍の兵の隣で笑っていた。

なんてことはない、左豊が賄賂を要求したのを、盧植は毅然と断ったのである。

その賄賂の中には劉備ら三人の身柄が含まれていたのも、劉備たちは良く知っている。

そして劉備らは、盧植は劉備たちを守るために謂れない罪を被ったのだと理解した。

こうなってしまう
死罪を受けることを覚悟してまでも。

張飛は、激昂した。

「こんな檻、鈴々なら……!」

「駄目だ、鈴々!」

「どうしてなのだ愛紗!」

「今鈴々が暴れたら、盧植殿の厚意が全て無駄になるのだぞ!」

「……っ!」

鈴々が悔しそうに、蛇矛を下す。

関羽もまた悔しきで胸が一杯であった。

青龍偃月刀の柄が砕けんばかりに握りしめていた。

「風鈴先生……」

劉備だつて、悔しかった。

戦うことが下手な劉備でさえ、靖王伝家を抜き放つて斬りかかろうと思つたくらいである。

そんな劉備に、盧植は笑顔を浮かべて最後の授業をするのであつた。

「あのね、風鈴はね、思うの。桃香ちゃんは絶対大きいことをするつて。だからね」

「せ、先生……」

「こんなところで立ち止まらないで、ね？ 風鈴は、大丈夫だから」

劉備は泣き崩れた。

盧植を入れた檻が離れていく。

涙を拭き、離れていく盧植を最後まで見つめ続け、地平線の彼方に消えるまで見送つた。

◇

筈だつた。

その当の搬送された盧植が、劉備の目の前に、居る。

それも、横に土方歳三が立っている。

劉備らは混乱の極致にあつた。

なぜ、どうして、と聞きたいことは一杯あったが、劉備はとりあえず。「良かったあ〜！」

と、大泣きして盧植に抱きつくのであった。

わんわんと泣き喚く劉備に呆れながら、歳三はぽつりと

「泣く子と地頭には勝てぬ、か」

呟いたのであった。

◇

ある程度泣いて落ち着いたのか、劉備はようやく立ち上がった。

そして聞いたのである、今一番聞くべきことで、同時に聞いてはならなかったことを。

「風鈴先生は罪を許されたんですか!?! 土方さん!」

「あのね、桃香ちゃん……」

「いや、そうではない」

歳三が冷たく言い放った言葉は、劉備の思考回路を一瞬にして停止させた。

「ただ、護送する官軍を皆殺しにしたらだけよ」

歳三は今なんと言ったか。

皆殺し、官軍を皆殺しなど、劉備がしたくてもできなかつた叛逆そのものではないか。

それを、歳三は平然とやって剩あまつぎえ盧植まで救って見せた。

ただ悲しむだけの劉備とは違って、しかし、官軍を皆殺しにして。

劉備の中では盧植を助けたいという気持と、漢帝国への叛逆への恐れで一杯であった。

が、歳三は劉備に構わず話を続ける。

「盧植殿、官職の印綬はお持ちですか？」

「は、はい。ハンコ」

「それと髪を一握り、頂戴致します。」

歳三は黙々と作業を続ける。

盧植から印綬を受け取ると、盧植の長く豊かに、先が巻いた髪を国広で一握り切り取って懐紙かいしで包むと懐に入れた。そして劉備に向く。

「劉備よ」

「は、はい。土方さん！」

「今の朝廷を、どう思う？」

「……それは」

劉備は、中山靖王の子孫である。

言うなれば今の霊帝の外戚に当たると言っていいたいだろう。

その劉備が、公然と皇帝を非難できるかと言えば、否だ。

ただでさえ、歳三がやってのけた暴挙に頭が真つ白になっているところに、今の劉備に普段の思考をしたままで歳三に反論しろという方が無茶だろう。

盧植でさえ、今の歳三に吞まれてしまっている中で、歳三を止められる者はいない。

「謂れなき者を罪に陥れ、贅を肥やすことしか脳にない役人どもが跋扈する朝廷を、このままにして良いのか？」

「……それは」

「だが、劉備よ。お前の手は汚すには綺麗すぎる」

そう言つて、歳三は自身の左腕の袖を捲まくつた。

「しかし、だからこそお前はそれでいいのだ」

歳三は国広で己の左腕を軽く斬ると、国広を鞘に納めた。

ぼたりぼたりと滴り落ちる血が、劉備の視界に鮮明に映る。

真つ赤な赤色が、黒衣が、歳三の言葉が、劉備の脳裏に焼き付けられていく。

「血を流すのは、私の様な者でいい」

歳三が、己の血で盧植の印綬を汚した。

「これで盧植殿は官軍と共に皆殺しにされた。それが全てだ」

そう言つて歳三はくると踵を返すと。

「ではな」

と、言つて去つていった。
ただ残された劉備たちは、呆然と歳三の後ろ姿を見つめるしかなかった。

腐都

血を滴したたらせながら歩く歳三を最初に出迎えたのは、趙雲だった。

遠目から劉備との遣り取りを見ていたらしい。

「主は人心掌握の芸事げいじにも堪能しているようすな」

と、口調はどこか皮肉気だが、目線は歳三の腕の傷に向いている。

やはり心配なのだろう。

普段の落ち着きも、どこかなくそわそわとしている様に見える。

一方で、徐晃の方は素直であつた。

「……腕、大丈夫？」

と、いつものように短く歳三に聞いた。

「なに、浅く斬つただけだ。大したことはない」

とは歳三の弁である。

事実、歳三の傷は浅く派手に血は出ているが、特に問題はない。

程立が何も言わず持つてきた清潔な布を受け取ると、器用に右手と口で左腕を巻き始

めた。

「それに、致命に至る傷の加減は、よく心得ている」

止血を終えた歳三が言った言葉に、聞かなきや良かったと徐晃は少し後悔した。

歳三は普段そうとは見せないが、どこか仄暗い影がある男である。

今も、不愛想な顔にどこか酷薄さを張り付けて、足元の革袋に視線を落した。

丁度、人間一人が入りそうなくらいの大きさのものである。

戦利品だと、盧植の護送部隊を襲撃した後に歳三が持ち帰って来たものだが、果たして。

「こいつみたいなの外道で、何度も試してきたからな」

歳三の軍靴が容赦なく革袋に叩き込まれると、くぐもった声が聞こえてきた。

これ以上は聞かない方が良さそうである。

言わぬが花とはいうが、今は言わせぬが花といったところか。

歳三は難なくその膂力りよりよくで革袋を肩に担ぎ上げた。

「とりあえず、補給部隊の荷車にでも放り込んでくるか」

と、すたすたと歩いて行ってしまった。

残された趙雲らはお互いに顔を見合わせて、何も見ず、聞かなかつたことにした。

◇

歳三が革袋を補給部隊に預けてから少しして、珍しい来客があった。

劉備玄德である。

息を切らせ肩で息をしているものだから、必死に走ってきたのがよくわかる。頬も軽く上気していたが、艶っぽさはなく顔はどこか悲壮でもあった。

「土方さん！」

劉備は歳三の名を叫ぶが、その後の言葉が通じないのか、突っ立ったまま動かない。

次の言葉を探そうとして、必死に絞り出そうとしているのが見て取れた。

「私、私……」

「何も言うな劉備。何も」

歳三は劉備の肩に軽く手を置いた。

励ます様な優しきを持った慈しみのある手だが、真意はどこにあるのか。

「私は劉備の理想が好きだ。好きだからこそ、その理想を劉備自身に汚してほしくはなかった。だから全ては私が勝手にやったこと、気にすることはない」

劉備は顔を上げて歳三を見た。歳三は穏やかな笑みを浮かべて、劉備を見ていた。

それでまた、感極まったのだろうか、劉備は目尻に涙を浮かべて感激している。

そして何か言うべきだろうと、迷いに迷った挙句出た言葉は。

「とにかく、ありがとうございます！」

と、いう至極単純で、しかし万感の想いが込められた感謝の言葉であった。

（礼を言われる様なことじゃねえよ）

けれども、歳三の内心は複雑である。

（俺には俺の理想やりかたがあるから、やっただけさ）

真つ直ぐな劉備の感謝が、この皮肉屋な男は照れ臭かったのもあるのだが。

ともかく、と言わんばかりに劉備の肩から手を離した。

劉備が小さく、あ、と漏らしたのを敢えて聞き逃した歳三は次の問題を提起した。

「礼を言うにはまだ早いぞ、劉備よ。今は危機を脱したが、これからの盧植殿の身の安全を守る事が第一。今はどこかに隠れてもらうのがいいだろう」

「隠れてもらうって……そんなのどこに……」

護送中の官軍に皆殺しにされた、という工作をしたとはいえ、盧植は大手を振って外を歩けるような人間ではなくなっている。

それは当然だ、未だに盧植には罪科が掛かったままであり、名目上は死人である。

盧植の出身地である幽州などに戻れば、途端に役人に捕縛されるだけであろう。

しかし劉備には盧植を庇う為の拠る場所など持っていない。

どうしたものかと真剣に悩む劉備を横に、す、と現れた程立が声を上げた。

「それなら青州がいいでしょうー」

「青州ですか、程立さん？」

劉備が程立にも臆することなく、疑問の声を上げる。

劉備も恩師の命が懸かっているならば、苦手意識なども言つてられないのだろう。

歳三は程立の見事な助言に胸中、感心しながら今思い出したと言うように話を続けた。

「そうか、程立の言う通り青州がいいな。青州ならば今丁度、孫乾と郭嘉がいる。彼女たちなら盧植殿の事に関してもうまいこと知恵を貸してくれるだろう」

「でもそうなるよ、また土方さんの手を煩わづらわせることに……」

「なに、自分から突っ込んだ話だ。最後まで責任は取るよ」

「土方さん……本当に、本当にありがとうございます！」

「いや、そう畏かしまらなくても良いさ」

と、歳三は苦笑いで劉備の礼を受けるが、もちろんこれも劉備の為だけというわけではない。

前に、盧植は武ではなく智の人間であると程立は言っていた。

歳三はそこに眼を付けたのである。

今、青州に必要なのは乱れた内政を立て直せる智を持った人間である。

歳三も少し会っただけであるが、盧植は義理堅い人間なのは間違いない。

ただ、青州に匿かくまわわれているだけではないだろうと、見通しを立てているのである。

そんなことだとは表に全く出さず、歳三はただ親切な男を装う。

「私の手の者を何人か連れていくと良い。それと徐晃か趙雲を共に」

「いえ、そこまでお世話になる訳にはいきません」

歳三の提案を断つたのは、話の途中から劉備の後ろに控えていた関羽だった。

劉備などは今気が付いた様で、驚きながら振り返っていた。

「愛紗ちゃん！」

「盧植殿の護衛は、桃香様に代わりこの私と鈴々が務めます。土方様は一筆言伝ことづてを書いて頂けたらと」

「鈴々頑張るのだ！」

が、歳三は関羽の提案に渋い顔をした。

この男は性格に因よらず女性的な、なよなよとした字を書くのである。

それを今まで一度も見せていないことから、恥ずかしいという気持ちがあるのだ。

「いや、文章は程立ほどたちて書いてもらおう。私が書くよりはマシな文章だろう」

と、もつともらしい理屈をつけて程立の真名を呼んだ。

「風」

「はい。美花ちゃんと稟ちゃんに言伝を盧植殿の隠匿の手伝いをするよう、書くのでしたねー」

「それと、美花と稟に頼む、と私が言っていたことを書き添えておいてくれ」

「お兄さんが書けばいいのでは――？」

「それは断る」

「何か理由でも――？」

と、訝し気な視線を送る程立から視線を逸らす歳三であつた。

◇

程立の探る様な視線を一身に受けながら居心地の悪い時間を過ごしていた歳三。

関羽と張飛も手紙を受け取つて青州に向かつてしまい、遂に孤立無援となつた中で、救いの主が現れた。もつとも、救い主は救い主でも、暴虎と変わりないものであつたが。

「おつ、いたいた歳三――！」

「孫堅殿。今回はご協力感謝いたします」

と、この傲岸不遜な男らしからぬ、頭を下げるという行為に孫堅は一瞬戸惑つた。

しかしすぐになりにやりと不適に笑うと孫堅は。

「なに、俺たちが勝手にやったこと、つてえ言いたいところだが、これで貸し三つ目、だな？」

と、言つた。

けれども、これでは定法に合わぬと思つたのは歳三である。

その定法を散々破ったものが定法を語るとは、ちゃんちゃら可笑しな話ではあるのだが。

「戦場を作ったことで今回の貸し借りは無しだと思っただが」

「いいや。ちゃんと後片付けしたのは俺たちだ。これは間違いないよな？」

孫堅が犬歯を見せる様に、にかつと笑った。こういわれてしまつては歳三はお手上げである。

確かに丹念に官軍の兵士に止めを刺し回つたのは孫堅の軍である。

歳三の軍は、今回の事件の首謀者探しに忙しかつたのだ。

こればかりは言い逃れのしようがない。

仕方ないと歳三は呆れた様に笑つたが、かたわ傍らの劉備は顔を青くしていた。

やはり朝廷に叛乱した、いや、叛乱させることになつてしまったことへ負いを感じているのに違いない。劉備はそういう優しさを持つ人間だ、と歳三もなんとなくわかつてきた。

が、孫堅はどうやら違つたようである。罰の悪そうな顔をして、劉備に謝つた。

「つと、お嬢ちゃんに聞かせるような内容じゃなかつたな」

「だ、大丈夫です！ 私は大丈夫ですから！」

「そうか。それならいいんだが……」

歳三、耳打ちする様に孫堅に話し掛けた。

「なんだ、意外と甘いところもあるのだな、孫堅殿も」

「苦手なんだよ、ああいう理想に燃えるような子は。俺の子はそういう風に育ててきていないからな」

「そういうものか」

わからない、という顔で歳三が言うものだから、これには孫堅が驚いた。

「なんだ、おめえみてえな良い男が、一度も所帯を持ったことがねえのか？」

「生憎な。恋とか愛とか、そういうのには無縁らしい」

くすくす、と歳三は笑って答えた。

「女を抱くのは、好きだがね」

「そうかい。まあ、いいさ」

と、どこまでも英傑らしい清々しきで、孫堅は笑みを浮かべた。

「こうしていつまでもこのまま孫堅殿、つてのも妙な話だ。俺の真名はイエンレン炎蓮。これから
はこれでいいぜ。それで歳三、お前は？」

「私か？ 私のは義豊だが、これは諱いみなと言つてな」

「なんだ、普段は呼ぶなつてことか？」

「そういうことだ。私が死んだら、好きに呼ぶと言い」

「随分と物騒な真名なこった」

と、顎に手をやって何やらにやにやと考えごとをした孫堅は大笑すると。

「が、そこが気に入ったよ。じゃあな、歳三。また洛陽の近くでな」

「ふむ？ またな。炎蓮」

と、気になる一言を残して孫堅は去っていったのであった。

◇

孫堅を見送つてから、歳三は劉備へと振り返る。

劉備はまだ、顔を青くしていた。

当の本人である歳三と孫堅が良いと言っているのに、真面目な娘である。

(これからは気苦労を背負う立場になるんだらうなあ)

と、歳三は呑気なことを考えながら、まだ顔を青くしている劉備の眼を覚ます為には、と目の前で手を叩いて起こす。

「でだ劉備」

「は、はい！」

「これから私たちが乗り込むのは炎蓮曰く魍魎魍魎ちみもうりようが跋扈ばつこする腐った都だそうだが、大丈夫か？」

「だ、大丈夫です！」

と、言う劉備の顔はまだ青い。

それも当然、歳三の言い方には悪意が存分に含まれており、聞く者の心が弱ければそれだけで縮み震えあがるようなものだ。

それでもなんとか顔を青くしているだけで済んでいる劉備は、相当に肝が強いと言える。

そんな劉備をからかう様に、後ろからぬつと顔をだす趙雲。

「まあ、主から十分に脅しを掛けられておけば大丈夫でしょう」

「あつ、趙雲さん！」

「お久しぶりですな、劉備殿」

趙雲を見てばあつと笑顔を咲かせる劉備に、これなら大丈夫だと思いながら歳三は言った。

「まあ、自己紹介は追々するとして、今の洛陽について再確認することにしようか」

◇

孫堅が洛陽の近くで、と言っていたのは歳三と劉備の軍を預かる為であった。

今更ではあるが、歳三と劉備は漢王朝の官位を持って居ない。

その為に洛陽内には軍を入れることが出来ない規則なのだ。

しかし、孫堅は正式な官位を持つている為に軍を連れて入ることが出来る。

つまり歳三と劉備の軍を、孫堅軍の兵士として扱うことで、洛陽内の兵舎で休ませることを孫堅は進んで担ったのだ。

危うく兵士を城外で野宿させることだったことに、劉備と共に感謝すると孫堅は真顔で。

「今回で貸し四つ目、と言いたいところだが、洛陽は見るなよ、歳三」

と、忠告を送ってきた。

「何も見ず、聞かず、言わずに南宮に向かえ。そこで何進かしんが待っている」

孫堅の重い、ひたすらに重い言葉に歳三はただ領き、劉備は孫堅の迫力に押されながらもなんとか頷いて、洛陽へと足を踏み入れた。

◇

一般に首都とはどういうものか。

文化の中心であり、人々の活気あふれる交流点であり、皇帝の鎮座する王城でもある。少なくとも劉備はそういう認識を持っていた。

しかし、目の前に広がる光景はなんだ。

誰もが目から精気を失い、下を向いて歩いている。

路地を一步覗いてみれば、痩せ細った犬が何かの骨を取り合って殺し合っている。

これが王城の地、洛陽の今の姿であった。

「いゝが、洛陽……」

「……酷く」

「……活気とは程遠いですな」

劉備、徐晃、趙雲がそれぞれ小さく感想を漏らした。

ただそれだけだ、人として極々普通のことはずなの。

声が出せるだけで、恨めしそうな視線を向けられている様な気さえする。

まさしく、洛陽は腐っていた。

が、歳三はこの渦中であつてもひたすらに冷静であつた。

「世が乱ればこういふものだが、今は見るな」

歳三は、先程から別の視線を感じている。

新選組時代に幾度となく感じてきた、暗殺者や隠密の視線だ。

監視されている、ということはいち早く見抜いた。

「私たちを見ている者がいる。無関心を装え」

なるほど、洛陽の現状に憂いてこの惨状を変えようと言うものが現れたら、現政権を牛耳る者にとっては厄介だろう。孫堅がひたすらに無視を進めたのもわかる。

徐晃や趙雲ほどの武人であつても、戦場での惨劇とはまた違う種類の現状に面食らっているらしい。歳三は小さな声で顔を前から動かさずに、言った。

「それでも眼が動くと言うのなら、私の背中だけを見ている」

「土方さんの……?」

「そうだ。今はこの洛陽の惨状に無関心であると相手に思わせることが肝心だ。下手に尻尾を出せば、勅令が降るのは間違いないぞ」

そう言うとき歳三は、先へ先へとずんずん歩いていく。

大男が大腿で歩くものだから、劉備などは追いついていくだけで精一杯である。

その後ろを、趙雲たちが余裕そうについていくのだが。

「おやおやあ、これはこれは。私も主の背中だけを見させてもらいましょうか」

「……シャンも」

「風もです」

と、言うので歳三は。

「勝手にしろ」

と、吐き捨てた。

ただ、歳三の切れ長の眼だけはぎよろりと動かなくとも洛陽の惨状を見て取っていたが。

（それにしたってこいつア酷すぎる。どんだけ引き籠ればこの有り様を知らずに済むんだ）

歳三、未だ見ぬ霊帝の姿に嫌な予感を覚えていた。

傀儡皇帝

平城門より洛陽城に入れば、そこは正に別世界であつたと言えた。

徐晃や趙雲は元より、劉備などは感心つしばなしである。

豪華絢爛とはこのことか、と歳三も思うものの、最も嫌な臭いが漂っているのがここだった。

（人が腐っている臭いだ）

この場合、実際に人が腐っていると言うわけではなく、性質なかみの話である。

事実、遠巻きからこちらを眺めてくる役人などは、心が腐り果てていると歳三は感じた。

（腐肉で腐肉を固めた、虚栄の城だよ、ここは）

そう、歳三は断じた。

兵士に促されるまま、武器を預け政務の場でもある南宮へと案内される。

内装もまた、外装と遜色ないほどの煌びやかさだった。

が、歳三にはやはりこれらも虚しく映る。

こんなものを守るために、民は苦しみ、兵は戦い、多くの血が流されたのだ。

(嫌な場所だ)

一刻も早くこの場を離れたいと思いつながら、歳三は膝をつき頭こゝろを垂れて皇帝を待った。

◇

ようやく奥の北宮から現れた皇帝を見て、歳三は微塵も敬意を抱くことが出来なかつた。

服装も服飾品も全て最上級の物で飾り立てられている、子供。

それが歳三の靈帝に対する第一印象だった。

だとしても、この靈帝が漢帝国で最も偉大であることに変わりはない。

歳三は頭を垂れたまま、両手を組んで賛辞を述べた。

「この度の黄巾党に対するご戦勝、誠におめでとうございます」

「コウキントウ？　ゴセンシヨウ？　それは何かのお菓子か？　なあ趙忠！　朕はコウキントウとゴセンシヨウを食べてみたいぞ！」

歳三の後ろで頭を下げている徐晃と趙雲などは、必死に怒りを抑えているといった体だ。

劉備など、今にでも叫び出しそうだが、それは歳三が冷たい眼で抑えつけた。

(わかるさ劉備。お前たちはこんなやつやつの為に戦ってきた訳じゃねえんだらう?)

そう、歳三は眼で訴えると、劉備は渋々と言った風に怒気を収めた。

歳三だって、こんな皇帝の為に戦っていたなんて思いたくはない。

だが、漢帝国は最早根腐れまで起こしていると、歳三が確信したのはこの時である。

(本当に、なんてえ皇帝だよ)

あの様子では霊帝は本当に黄巾党も、歳三が言った言葉の意味もわからないに違い
い。

北宮で大事に育てられていると言えば聞こえは良いが、あれでは外界と隔絶され幽閉
されているのと変わらない。斉藤一などが見れば、一段と醜悪な糞袋とでも断じただろ
う。

とにかく、歳三は早くこの場を離れることを願いながら、霊帝の駄々を聞いている。
すると、一人の女性がすすと現れた。

皇帝と同じ殿上にいるのだから、相対に霊帝に信頼されているか、高位の女性だろう。
玉石のような飾りはないものの、落ち着いた色合いながら高貴さを醸し出し、なおか
つ妖艶だ。

そんな女性を見つけた霊帝は、嬉しそうに声を上げた。

「お何進かしんではないか！ 朕はコウキントウとゴセンショーが食べたい！」

歳三、驚かずに零度の視線を僅かに何進へと向けた。

(こいつが、何進か)

物腰こそ柔らかかそうではあるが、表情にどこか酷薄さがある。

更に言えば何進こそが今の宮廷を牛耳る腫瘍であると、歳三は勘ながら気付いた。遠くに控えていた役人たちが、何進が現れただけで震えている。

歳三はとにかく、何進の機嫌を損ねるな、という視線を徐晃らへと送った。

幸い、離れていることもあり何進が歳三のことに気付くこともなく。

「大丈夫ですわ陛下。この場はわらわにお任せください。食べたいものも、趙忠が作つてくださりますよ」

と、霊帝をあやしているではないか。

歳三は舌を巻いた。

(こいつはこいつで、とんだ女狐だよ)

霊帝の扱いを、心得ている。

下手に子供扱いせず、一個の独立した大人として扱うことで自尊心をも満たしている。

事実、何進の言葉を聞いていた霊帝はみるみる内に機嫌がよくなり。

「うむ、何進に任せておけば政治は安心だな！」

と、まで言い出したのである。

これでは何進の政治に、靈帝がお墨付きを与えたのも同然である。

実際に政務に奔走しているのは董卓だ、と言うがこれはいわば、何進の権力の強化。何進が如何に靈帝に信賴され、認められているかを示す演技と言ってもいい。

(本当に、腐つてやがる)

と、歳三は北宮へと下がる靈帝を見る気も起きず、ただ床を見つめていた。

しばらくして門が閉まる音がした、靈帝が完全に北宮へと下がったのだろう。

だと言うのに、驚くほどに冷ややかで静かな時間が流れる。

(見下しながら、値踏みしてやがるな、こいつア)

不快な視線が歳三に突き刺さるが、歳三はただ無視する。

ここで何かを起こすにしても、歳三にあるのは自分の両腕と右腰の拳銃しかない。

武器と見なされずに没収されずに済んだものだが、使ったところで漢帝国は変わらない。
い。

ならば今は耐えるだけだとじつと、頭を下げていたが、上げる様にと何進は言った。

「その黒衣の男。確か……土方歳三、と言ったか。幽州、徐州、青州、豫州と四州に渡る活躍はここ、洛陽まで届いておる。なにか欲しいものはあるか？」

来た、と歳三は思った。

ここでの問答を間違えれば、下手すれば歳三の首は飛ぶだろう。

無論ただで死ぬつもりはないが、歳三は全注意を払って何進に言葉を向けた。

「いえ、私には皇帝拜謁以上に嬉しきことはありません。後はこの王城の地にて美酒美食を味わい、更には配下の女たちを抱けると考えるだけで満足しております」

「そうであろうそうであろう。しかし、欲が薄いのも考え物だぞ、なあ土方？」

どう答えるか、いつそのこと言ってみるか、と歳三は考えた。

「ここで欲を見せなさ過ぎるのも、ある意味危険であると勘が告げるからだ。

「ならば私は青州を治めてみとうございまする」

「青州か、ふむ……」

何進は考え込むような仕草をした。

一体何を考えているのか、歳三には知る由もないが、この手合いは碌ろくでもないことを考えていることが多い。と、いうことを歳三は経験則で良く知っている

事実、何進が浮かべた笑みは実に嗜虐的な楽しみに満ちていた。

「良いぞ。丁度孔融も東萊城にて立派に討ち死にしたと聞く。土方よ、お前を孔融の後続として認めよう。東萊城の到着を以って、土方歳三を青州刺史と任じよう。誰か筆を取れ」

遂に、この一言で一州の主となつた歳三であつたが、内心は違っていた。

(青州に入った途端に殺そうという魂胆か。見えるんだよ、そのくれえ)

歳三は内心で吐き捨てた。

まず、刺史就任の時期の指定がされていないのが可笑しな話である。

任命するならば今ここですればいいのに、わざわざ東萊城の到着を指名しているのは妙な話だ。

言い換えれば、東萊城に到着できなければ刺史ではない、と言っているともいえる。

それに、これが一番の肝であるが、何進のあの態度が信用ならない、と歳三は思っている。

裏切る人間は裏切るように最初からできている、というのは歳三の持論でもあるが、何進は間違いなく、己の楽しみの為に他者を破滅させることを喜ぶ人種であると直感していた。

◇

結局、土地という大きなものを貰えたのは歳三のみであり、劉備などは金きんなどを下賜されたが、それでも十分すぎるほどの報酬とも言えた。

無論、この金にも漢帝国と結びつけるための何進の意図があるようだが、劉備は無邪気に喜んでおり裏に気が付いていないのが救いとも言えた。

(能天気つてのはこういう時楽だよな)

と、思いながら南宮を辞そうとした時、何進が声を掛けてきた。

振り返る歳三。

「そういえば土方よ」

「何でしようか、何進殿」

「董卓がなにやら、そちのことをえらく気に掛けておつた。青州刺史の就任も、董卓の後押しがあつてこそ、しかと励めよ」

「仰せのままに」

歳三は頭を下げ、両手を組み、如何にも言葉の通り受け取りましたという姿を見せる。

が、胸中そうではない。

(こいつは本当に、酷薄な女狐だぜ)

と、毒を吐き続けていた。

何進の笑みが、先の嗜虐的な笑みに残酷さが加わつていたのである。

恐らく、董卓の良かれと思つてやったことが、歳三の死に繋ることを楽しみにしている。

あれはそういう笑みだと歳三は看破していた。

(覚えてやがれ。いつか月は必ず取り返してやるからな)

と、元々歳三のものでもないというのに、歳三はそんなことを思つていた。

◇

歳三たちにあてがわれた宿舎は、きんし金市にほど近い場所にあった。

金市、というのは洛陽西部に位置する商業地区で、主に富裕層向けの贅沢品を取り扱っている。

この辺りまで来ると、首都らしい活気を見ることができるのであるが、それもそうである。

黄巾党の乱を避けて洛陽に入った流民などの流入を、一切禁止している地区なのだ。

避難民を下層民に押し付けて、富裕層は今まで通りの暮らしをする。

歳三などはある意味で上手い手だと思ったが、劉備などは洛陽の実情に心を痛めていた。

「で、だ」

と、歳三は宿舎の椅子に座りながら気になっていることを述べた。

「私はこれから荒淫に励むつもりだが、なんで劉備までここにいるんだ」

何故か、劉備までもが同じ宿舎に居たのである。

当の本人は歳三の問い掛けの意味なんて言わんばかりに、にこにこしている。

「あの後、何進さんに頼んだんです！ 私、土方さんから学びたいことがあるから一緒に宿舎にしてくださいって！」

歳三は頭を抱えた。

あの何進女狐の厭いやらしい笑みが見えてくるようである。

恐らくだが、何進は徐晃と趙雲には歳三との男女の好よしみがあることを見抜き、かつ劉備とはそういうったものがないことをわかっけていて、敢えて一緒にしたのであろう

つくづく、食えない女だ、と歳三は何進の評価を一つ上げていた。

無論、油断できないという意味での評価である。

そんな歳三の気苦労を知らずか、劉備はこれからお世話になるから、と自らの真名を告げた。

「あー！ 私は真名を桃香と言います！」

「ああ、私の諱いみなは義豊だ」

「？ 諱いみなってなんですか？」

歳三はまた頭を抱えた。

いつそのこと諱いみなと言うのを止めて真名にでもするか、と考え始める歳三。いい加減にもう諱いみなのことを毎回説明するのが面倒くさくなってきたのだ。

何故、最初に諱いみなというのにこんなにもこだわったのか、歳三自身でも検討がつかない。とにかく、諱いみなについて劉備に軽く説明すると、劉備は深刻そうに受け止めていた。

「そうなんですか……気を付けないと……」

「ああ、存分に気を付けてくれ」

どこか、投げやりになってしまっていた。

(靈帝も大概だが、桃香も少し世間知らずが過ぎるんじゃないやねえか?)

と、歳三が思っていた時。

「ところで、荒淫ってなんですか?」

と、劉備からとんでもない質問をされてしまった。

歳三など、椅子から滑り落ちそうになったくらいである。

ただの女好きの馬鹿のふりをするのが、劉備がいるだけで失敗しそうな気さえしてきた。

趙雲がこっそりと、歳三に耳打ちをする。

「随分と初心うぶな様ですが、どうするんです、主?」

「それでも荒淫に励むしかなかろう。声を抑えろよ。桃香に聞かれたくなければな」

下手にそういった知識を仕込んだら、関羽に叩き斬られそうでもある。

(そんなことは勘弁願いてえやな)

歳三は洛陽での生活が、どうなるかはまるで見当がつかなかった。

◇

が、歳三が一番早く洛陽での生活に順応したというのは、最早わかりきっていたこと

でもある。

以前にも歳三の朝は早いと書いたが、誰よりも早く起き出して行動をするのがこの男であつた。

まず初めに、昨夜の荒淫の後を井戸で洗い流してから仏蘭西軍士官服を着込むと、朝食を求める為に金市を適当にぶらぶらと歩きまわる。

前にも食い物の好き嫌いも激しい男、と書いたが流石は王城の地。

歳三の舌の好みに合うものも多いのである。

けれども一所ひとところにじつとせず、次なるものを求めて歩き回るのは常であつた。

そして毎日違う食べ物的大量に、それと適当に酒を買い込むと兵舎に行く。

では何故兵舎に行くかというと。

「……おはよう」

「おはよう、恋」

呂布に会いに行くためと、自軍の兵士の見回りのためである。

大量の食べ物は主に呂布に、酒は自軍の兵士に配るために買っていくのだ。

別に金市から荷車で大量に運ばせればいい話だが、歳三はそうしなかつた。

何故かといえばちゃんと理由がある。

呂布に通常の人間には多過ぎる程の朝飯を渡すと、歳三は酒を兵士たちの間でそそ注ぎ歩

く。

「酔って軍規を乱すのはご法度だからな」

と、笑いながら一人一人に酒を注いでいくのだが、誰一人として被ったことは一度もない。

注いだ相手の顔を、ちゃんと覚えているのである。

これには兵士たちは感激し、歳三が問い掛ければ腹を割って話した。

こういう訳で兵士たちの士気は保たれ、また呂布の食べる姿に誰もが癒やされているというのを歳三は聞き、呂布は謀らずしも毎日美食を歳三から受け取っているのである。

◇

午後になれば、金市の散策を適当に切り上げて賈馱に会いに行く。

そしてこれも、最早一つの恒例行事になっているのだが。

「いつ来ても月には会えないわよ」

「知ってるよ。だが、青州刺史就任の礼を言いたいと思うのは人として当然だろう？」

と、いう遣り取りやりをしてから、歳三は部屋の隅に椅子を置いてじつと座っているのである。

腕を組み、眼を閉じていることから寝ているのか、と賈馱も最初は思っていた。

しかしどうやら、考え事をしていらっしゃるらしく寝ているのではない、というのは先のことのでわかった。

◇

こんなことがあつた。

あまりにも動かない歳三に、賈駆は戯れに聞いてみたのである。

ぽつりと、本当に小さな声であつたが。

「あんた、月に惚れてるの？」

と。

答えが来る筈もないかと、来る日も来る日も減ることのない政務に取り組もうとしたその時。

「それがわからぬのだよ。私は恋や愛とは無縁の人間だとずっと思っていた。だから、この感覚をどう言ったらいいのかわからないのだ」

と、眼だけを開いた歳三はそんなことを言った。

へえ、と興味が湧いた風に出した賈駆は、またも問い掛けてみる。

「だからここ毎日、ずっとここに通り詰めているわけ？」

「そうだ。月のことを一番詳しいのは賈駆、お前以外にないだろうからな」

「それはそうね」

「……思えば、兼定を初めて鞘に納めた時も、こんな気持ちであったかもしれない」
「前言撤回よ。そんな物騒な気持ちと恋やら愛と一緒にされちゃ困るわ」

それ以来、歳三が董卓をどう思っているのかの話は、買駆はしていない。

ただ、政務の邪魔もしないので、歳三が部屋に居ることを黙認しているだけである。

◇

そして夜になれば劉備に隠れて荒淫に励む、というのが日課である。

が、この日は少々違った。

部屋を訪れた風に向かって、歳三はいたく真面目な様子で語りかけた。

「風よ」

「なんですかお兄さん」

「私は軍制改革をしたい」

と、突然そんなことを言い出したのである。

これが徐晃や趙雲ならば、目を見開いて驚くところであるだろうが、程立は眠たげな眼でじつと歳三を見つめるばかりである。もしかしたらそう言い出すことがわかっていたのかもしれない。

「なるべく星や香風ばかりに負担のかかる戦場を、少なくしたいのだよ」

相手が程立であるからか、歳三は遠慮無く言葉を続けていく。

「正確な収支は知らないが、幽州・青州・徐州の海運業は好調なのだろう？　その金で軍制を一気に整えてしまいたいんだ」

「具体的には、どういった感じにですかー？」

「今の様に戦争の度に兵士を集めて訓練するのは効率が悪い、だから、軍を専門化させたいんだよ」

歳三の理想の根本には、新選組と歩兵操典がある。

「この二つを組み合わせた独自の軍制を持った軍隊を、歳三は創りあげたいと思つていた。」

「つまり、職業として軍を一般化させるとー」

「ああ、そうだ。そして能力に合わせて兵士たちに金が払えるような新しい構造が作りたい」

「能力に合わせて、ですかー？」

「一律に同じ金額と食糧では兵士もやる気がでないだろう？」

「この辺り歳三が昔、商家へ奉公に出ていた経験が生きていると言えた。」

人は様々な理由によつて動くが、この時代の兵士は主に食事だ。

食い詰めたものや農家の三男坊などが、兵士として集まってくる。

そんな理由で参加するものばかりでは、軍は強くならないと歳三は考えている。

「そして装備もだ。折角育てた兵士もすぐに死ぬようでは意味がない」
 ちよいちよいと、風に近づくように手招きすると。

「触ってみな」

と、胸を張る歳三。

遠慮無く、歳三の胸を触った程立であつたが、ぎよつとした。

感触がひどく硬く、冷たかつたのである。

これは程立の珍しい姿が見れた、と笑いながら歳三が上着を脱ぐと、下から現れたのはずしりと重い、腕には手甲までもが入つた鎖帷子である。

「これは、凄いですね……いつの間にこんなものを？」

「金市をぶらぶらしている時に、いい鍛冶屋を見つけてね。そこでだよ」

歳三は程立に種を明かすのが楽しいのか、くすくすと笑っている。

そして今度は懐からそこそこ何かを取り出した。

「それと、こういうのもある」

はちがね
鉢金であつた。

はらまき
鉢巻に小さく薄い鉄板を縫い付けた、いうなれば簡素な兜である。

もつともこの時代、剣は切れ味よりも重さで叩き潰すという風が強い時代に、鉢金の意味があるかと問われれば歳三自信も疑問ではあつた。

が、歳三の別の理想の実現のためにはいずれ必要になる、と思つているものでもある。「それは……随分と巨大な軍制改革ですな」

続々と出てくる歳三独自の改革案に圧倒されていた程立であつたが、すぐにいつもの調子を取り戻すと内容を咀嚼そしゃくするように考えこんだ。

だが、歳三は苦笑いを浮かべて考えこむ程立の頭を撫でた。

「だから、これは稟と風とでまた詰めておいて欲しいことでもある。今の私は青州に歩入れば恐らく殺されるだろうからな」

長い目で考えてみてくれ、と歳三は言つたのだろう。

即座に答えが必要な案件でないのなら、と程立はいつもの眠たげな眼に戻つた。

そして今度は逆に程立が。

「それなら風からも提案があるのですよ」

歳三に提案をする番になつていた。

「なんだ？」

「今、お兄さんの周りには女の子がたくさんいるのです。ですからもつと公平に接するべきではありませんか」

「ふむ、それも、風に任せるよ」

歳三、即決である。

全幅の信頼を、程立に置いていっていると云っても良い。

言い方を変えれば、丸投げであるとも言えるが。

「いいのですか？ 風だけが良い思いをするようにするかも知れませんか？」

「いいや、風なら、私情を挟まず公平にするからな」

「むう。信頼されているのは嬉しいのですが、なんだか複雑な気持ちなのです」

「まあまあ、そう言うな」

歳三は少年のような声音で、程立の真名を呼んだ。

「おいで、風」

「その前に、それは脱いで欲しいのです」

これは一本取られたな、と歳三が笑いながら鎖帷子を取った後、程立は歳三の胸に飛び込んだ。

新天地へ

そういう風にして、毎日を送っていた歳三に、ある日珍客が現れた。

いつもの様に歳三が、井戸で昨夜の交合の後を流していた時のことだった。

背後に気配を感じた歳三が、兼定を抜き放ちつつ振り向いた瞬間。

「あつ、おはようございませす。土方様」

と、気さくに声を掛けてきたので、歳三は慌てて兼定を鞘から出すのを堪えた。

包容力が存分にありそうな豊かな胸に、知的さを感じる眼鏡をかけた人物、皇甫嵩だった。

「皇甫嵩殿ではありませんか」

歳三、やや驚きながらも平生の調子をすぐに取り戻し。

「失礼、少しお時間を頂けると幸いです」

と、くるりと皇甫嵩に背中を向けた。言うまでもなく、歳三、全裸である。

裸身を晒したまま話すのは無礼、とこの男は思っているのだろう。

てきぱきと全身を手拭で拭き取ってから仏蘭西軍士官服を着る歳三。

その間、一挙手一投足をまじまじと見られているのを感じたが、敢えて無視すること

にした。

あんな大きなものを男性は持つてるの、と熱っぽく、艶っぽい声も聞こえたが、当然無視する。

そして皇甫嵩が浮かれた世界から戻ってきた頃を見計らって、振り返った。

「この度は如何なされましたか、皇甫嵩殿？」

「いえ、長社城で助けられた時のお礼を、ちゃんとできていなかったの……その……」

「なんだ、そんなことでしたか。でしたら私と金市を歩き回りませんか？」

「えっ、私が土方様と!？」

「ええ。皇甫嵩殿の様な見目麗しい方と共に過ごせるとあれば、男冥利に尽きますよ」

と、はにかみながら言うのであるのだから、皇甫嵩は茹でた蛸の様に真っ赤である。

いつも不愛想な男が一体どこに、こんな笑顔を隠しているのかは永遠の謎であろう。

それはともかくとして、皇甫嵩も立派な將軍の一人である。

どうしても緩んでしまう頬を両手で叩いて気合を入れると。

「いえ、私個人としては土方様と過ごしたいという気持ちはもちろんあるのですけど、何進大將軍が土方様の出発はまだか、と仰られておりました」

と、皇甫嵩が本来ここに来た理由について話し始めた。

大方、いつ使者を飛ばしても留守、という返事しか寄越さないのが頭に来たのだろう。

皇甫嵩であれば無碍むげに扱あつかうことはなからう、という考えが透けて見えるようだった。最も、歳三は朝早くから夜になるまで本当にいない、とは流石に思わなかつたのだから。

とはいえ歳三、皇甫嵩によってようやく捕まったとはいえ、歳三は歳三である。何進と交わした話について、よく覚えている。

「はて、何進大將軍から青州行きへの日時についての指定は特になかつたはずですが」と、大仰おおきようにすつとぼけてみせてから。

「私はもう少し、王城の美酒を楽しんでいたいのですが」
皇甫嵩の頬に手を当てて。

「特に、貴女の様な美麗な方と」

口説き落とす始末である。

これには皇甫嵩も顔を真っ赤にして、あわあわと声にもならない声を出し。「か、何進大將軍には私から伝えておきますから！」

と、叫びながら逃げる様に去って行ってしまった。

一人ぼつりと、結果的に残されることになってしまった歳三は。

「ふむ。逃げられたか」

と、残念そうに呟くのであつた。

◇

思えば皇甫嵩殿が来たことで全ての予定が狂ったか、と歳三は思った。

大きな手の中で音を立てて時を刻む懐中時計が、その事実を否応にも確認させる。

「聞いてますか！ 土方さん！」

「聞いているとも、桃香」

歳三は懐に懐中時計を戻すと、どうしてこうなったのかをしんみりと思い出していた。

◇

歳三が朝早くに出かけてしまうのには、もう一つ理由があった。

それは劉備の存在である。

歳三から学びたいことがある、と言って強引に同じ宿舎に泊まっている劉備だが、歳三はそんな劉備の相手をするのが面倒くさくて、朝も早いうちから金市きんしに繰り出してしまふのだ。

この辺りは流石、元新選組副長というべきか。

人混みの中に一度紛れてしまえば、例え趙雲であっても追跡は不可能であるくらいだ。

だから、劉備が歳三が出かける段になって宿舎を飛び出しても、もう遅い。

あれだけ目立つ仏蘭西軍士官服がどんな手品か人々の中に溶け込んでしまうのである。

そうして地団駄を踏んだ後に程立に捕まって、皇帝たるものは、人の上に立つ者は何かと散々に勉強させられるのが洛陽に来てからの劉備の毎日であった。

が、今日ばかりは違った。

今度こそはと意気込んで早起きをした劉備と、皇甫嵩と話していたことによつて出発が遅れた歳三が、ついにかちあつたのだ。

これはまずいと走り出そうとする歳三の服の裾を、劉備がどこにあつたのかと思うくらいの力でぎゅっと握つて、遂に逃走を阻止したのである。

なお、その光景を趙雲に見られ大爆笑されたのは、歳三の一つの恥として刻まれたのだつた。

◇

(今日はどうにも調子が狂う)

と歳三は思う。

流民が集まる方へと行きたがる劉備を押し止め、金市で歩き回るものの、劉備の顔は晴れない。

根が優し過ぎる娘なのだ、と歳三は思っている。

民の為に、誰もが笑える世の為に、と劉備はどこまでも利他的だ。

逆に歳三は漢帝国がどうなろうと人民がどうなろうと、正直なところ知ったことではない。しかし、それでは戦うことが出来ないから、国を守り人民を守り、結果として多くの民を救っている。

利己的でありながら目的の為に利他的になる、情けは人の為ならずといったところか。

しかし劉備には、どうしてもこの感覚が理解できないらしい。

だから、金市を歩き回っている間も、劉備は私だけが楽しんでいいのだろうか、という自責の念にかられているのである。歳三はそんな劉備がよくわからない。

(知らなければ、いや、それでも彼女は人の為に立ち上がるのだろうか)

傀儡と化していた霊帝の姿を思い出す。

宮廷の奥で美食を貪り外界を知ろうともしない、あの姿は、劉備には似合わない。

それは、歳三にもよくわかっていた。

劉備にはもう少しだけ、自分に我儘になるべきだ、と歳三は思う。

「桃香よ」

「なんですか、土方さん？」

「桃香はもう少し、自分の為に何かを楽しむべきではないのか？」

「……でも、私がこうしている間にも、多くの人が苦しんでいるんですよ？ それなのに何もできない自分が悔しくって……」

と、また顔を曇らせる劉備に、歳三はどうしたものかと頭を抱えた。

何かないかと辺りを見渡してから、ある物を見つけた歳三は劉備に断りを入れてからその店に立ち寄った。そこは女物の香水が売られている店で、目当てのものを見つけた歳三は金をぼんと気前よく店主に渡し、一つの瓶を買い取った。

そして劉備のところに戻ると、瓶の蓋を開け、軽く劉備の頭に振りかけた。

最初は歳三の行動の意味がわからなかったが、自分の頭から薫る香りに気が付いた。

「これは……桃の香り……」

「そうだ。これは君の真名と一緒だな」

歳三は瓶に蓋をして、それを劉備に手渡すと、言った。

「桃は、何の為に咲くと思う、桃香？」

「それは……実を結んで、中身の種がどこかで芽吹くように、ですか？」

「そうだ。桃は決して人の為に咲いているのではない。自分の為に咲いているのだ」

劉備は、歳三が何が言いたいのだろうかという風に、小首を傾げている。

歳三は、ただ続けた。

「それでも、その香りは人を幸せな気持ちにさせるのだ。桃香よ、お前の笑顔には力がある」

「私の笑顔に、力が？」

「そうだ。不思議なことに、お前の笑みは人を幸せにさせるのだ、桃香よ。正に真名の如くに」

劉備は、歳三の言い様がおかしくて、くすりと笑みを零してしまった。

物言いは風流かもしれないが、表現の仕方がどこまでも不器用で直接的だ。

詩に疎い劉備でさえ、もう少し上手い表現があつたらうと、思うくらいにである。

「ほら、私は今、君の笑顔で幸せになったが、それは君が私を幸せにしたいと思つたからか？」

劉備はふるふると首を振つた。

なんとなく、歳三の言いたいことがわかつてきたのである。

「まあ、だからその、なんだ。少しは自分の為にも笑つていいんだぞ、桃香よ」

「土方さん……」

歳三も、自分で何が言いたいのかわからなくなっている。

ただ、これだけは劉備に知っておいて欲しいという気持ちだけが、歳三を突き動かしていた。

「桃香の理想は立派だ。誰にも真似はできないだろう。けれども、誰もが笑う世の中に、桃香はちゃんと入っているのか？」

劉備が驚き、眼を見開いた。

ああ、やはり、と歳三は悟ったような思いになった。

（桃香はどこまでも、坂本に似ている）

坂本の死に際に、歳三が託されたものに坂本自身の名前はなかった。

誰もが笑い、幸せに暮らせる世の中を作りたかつたあの男も、自分のことなど眼中になかった。

だからこそ歳三は、嫌だ嫌だ苦手な相手だと想いながらも、劉備に向き合ってしまうのだろう。

「桃香よ」

自然と、劉備の双眸そうぼうからは涙が溢れていた。

ただ人の為にあるとした少女の心が、笑顔を取り戻そうする働きに違いなかった。「もし桃香が笑うのを忘れたのなら、私が桃香を笑わせにいつてやる」

歳三は自然と劉備を抱き、劉備もまた歳三の胸に思いつき抱きついた。

「私が、必ず探し出すからな。中山靖王の子孫としてでもなく、劉備玄德という義勇軍の長としてでもなく、桃香というたった一人の君を」

劉備は、声を押し殺して歳三の胸の中で泣いていた。

歳三はただ、優しく劉備の頭を撫で続けていた。

桃の香りが、辺りふわりと広がっては、消えていった。

◇

(さて、これはどうしたものかな)

と、歳三は考える。

必死になつていたからすっかり忘れていたが、ここは金市のだ真ん中である。

大男が少女を泣かせている様にしか、周りには見えないだろう。

兵士を呼ぶか、という声も、ぼちぼち聞こえ始めている。

(逃げるか)

と、算段を付けた時に、歳三の勘が危険を訴えた。

(狙われている?)

そう思ったのなら、歳三の行動は早い。

すつくと劉備を抱きかかえると、一目散に走り始めた。

「えっ、きゅ、きゅきゅ急にどうしたんですか!? 歳三さん!」

劉備が狼狽^{うろた}えるが、危険が迫っているのだから悠長に話している暇はない。

走りながら、歳三は簡素に答えた。

「何者かに狙われている。しつかりしがみついておけ」

劉備は言われるがまま、歳三にしかとしがみつく。

歳三は劉備がしつかりとしがみついたのを確認して、更に走る速度を上げる。

危険からは逃げています感じはする、しかし何かに追い立てられている様な気もする。

(こいつア、本格的な罠だな)

走れば走るほど、泥沼にはまっている様な気がするのである。

こうなったら、と歳三は頭の中に洛陽の絵図を思い浮かべていた。

ただ単に、散策を重ねていたわけではないのである。

この男の頭の中には、自分で歩いた地図と洛陽の絵図が、頭の中で精密に重なり合っている。

◇

暗殺者たちは、追い詰めたと思った。

とある路地の一角に、土方歳三と劉備玄德は逃げ込んだのである。

誰でなくとも、二人は窮地だと答えるに違いない。

しかし、劉備はともかく歳三の方は余裕しやくしやくと一言わんばかりに、兼定の柄に手を掛けて
いる。

劉備を守る前に立つ歳三は、あまつぎ 剩え暗殺者たちと会話をするという芸当までして

みせたのだ。

「一応、聞いておくぞ」

歳三、先ほどまでの朗らかな声と違って、臓腑も凍る様な殺気に溢れた声である。

「何者だ？」

顔を隠した暗殺者たちは、少したじろいだが、所詮は追い詰められての最後っ屁に過ぎないと高を括って、鼻で笑った。

「この私を、土方歳三と知つての狼藉か？」

言葉による答えは、終ぞなかつた。

ただ、抜刀による音だけが、答えだった。

「それが答えか」

歳三、兼定を鞘からすりと抜いた。

わつと暗殺者たちが殺到しようとするが、ここは人一人が通れるくらいの狭い路地。自然と、歳三に向かえるのは一人になる。

それでも暗殺者の刃が歳三に襲いかかろうと宙に煌めく。

より前にどん、と音がしたかと思うと暗殺者の首が吹き飛んでいた。

凄まじいまでの突きである。

そして突いたかと思えば、歳三の腕には既に構えに戻った兼定がある。

「来ないのか？」

ようやく、歳三の意図に気付いた暗殺者たちは歳三に向かうのに躊躇った。

袋小路に逃げ込んだからこそ、歳三と劉備を死地に追い込んだのだと思っていた。

だが、実際は逆であつたのだ。

三方を高い壁に囲まれている以上、挟撃は不可能であるし、弓矢による狙撃もできない。

そして歳三の見せる気迫は、こういった市街戦に慣れていることを容易に想像させた。

どうするか、そう暗殺者たちが眼を見合つた時。

「貴方たち、何をしているのかしら？」

女性の声でした。

凜とした、それでいて強い声だ。

(なんだか大物が出てきちまつたな)

と、歳三は声だけで当たりをつけた。

暗殺者たちもたじろぎ、そして。

(逃げたか)

歳三と劉備の排除は無理、と悟つたか逃げていく暗殺者たち。

しかし歳三とて逃げたいのは一緒であった。

名前はわからないが、それなりの大物が来たのは間違いない。

それで詮索された挙句に、何進なりの耳に入って処罰の口実にされてもたまったものではない。

歳三は劉備をもう一度抱きかかえると、例の女性が路地の中を覗き込もうとした時。

「御免」

と言つて飛び出して、一目散に駆けだした。

(どくろ
髑髏……?)

歳三の切れ長の眼に一瞬、陽光に光る不気味な髪飾りが見えたのが、妙に頭に残った。

◇

「少し、不味いことになったな」

「ほう、主が不味い、というにはこれは大変ですな。王城の美食も主には合いませんでしたか」

「茶化すな、星」

宿舎の面々は非常に不機嫌であった。

それもこれも歳三が劉備を抱えて帰ってきたからであろう。

しかし、歳三の次の言葉を聞いて一瞬で事の次第を悟った。

「暗殺者が現れた」

徐晃は斧を持ち、趙雲は槍を持った。

程立はいつもの眠たげ眼だが、一瞬きらりと光った様にも見える。

誰もが、歳三の言葉を待った

「腕は大したことなかつたが、これはいよいよ私か劉備が目障りになってきたか？」

と、歳三が持論を展開したところで、宿舎の扉が勢いよく開かれた。

すわ敵襲か、と全員が身構えたところで、呑気な大声が宿舎中に響いた。

「よう！ 歳三！ 元気か？」

孫堅その人であつた。

ふう、と誰もがほつと胸をなで下ろした様に息を吐いた。

「いや、そうだな、元気とは言い難い」

「……何があつた？」

先の一瞬の皆の気の抜き用で、ある程度の検討は付けたのだろう。

途端に眼を鋭くした孫堅は歳三に事の次第を話す様に眼だけで説明を促した。

「炎蓮に隠すことではないな。実はな」

◇

と、事の次第を歳三から聞いた孫堅は少し考える素振りをして、言った。

「……なあ歳三。そろそろ借りを返す気にはなつたか？」

「そろそろ何も、最初から返す気はあるよ。軍の件も含めて四つ、つていうところかな？」

「まあそんなもんだな！」

と、豪快に笑う孫堅に毒気を抜かれる歳三。

「で、何進からはどんな毒付きの褒美を貰つたんだ？」

「青州一州。ただし、時期の指定は無く、青州の城に向かえと。まあ私を殺す算段だとは思うがね」

「そりや確かに城どころか青州に一步足を踏み入れたら殺してくるつもりだろうな、それは」

なるほどなるほど、とうんうんと頷きながら孫堅はこれは良い案だと言わんばかりに。

「じゃあ歳三、少しの間俺たちと一緒に来ねえか？」

と、いうとんでもない提案をした。

驚く徐晃や趙雲らを後目に、歳三と程立は不動である。

最初から、孫堅がそういう提案をしてくるとわかつていたのかもしれない。

「ふむ」

「海賊狩りもなかなか乙なもんだぜ？」

「いいだろう、乗った」

「決まりだな！」

歳三の快諾が余程嬉しかったのか、孫堅は上機嫌である。

「じゃあこんなどころからは一刻も早く出ちまおう。幸い、いつまでに青州に行けとも言われてないんだからな。それは何も言わなかった向こうの落ち度だぜ」

「ああ」

「向こうがその気なら、こっちだつて自由にやってやろうじゃねえか。なあ！」
そう言つて、孫堅は豪快に笑つた。

立つ鳥跡を濁さず

「しかしだね」

と、歳三は言った。

「このまま炎蓮と行くのも結構だが、このままでは逃げたと思われそうで私の性に合わん」

「ほう、じゃあどうするっていうのかい？」

孫堅は面白そうににやにやと笑っている。

一方の歳三も、孫堅の笑みに対してにやりと笑って答えた。

「何、話は簡単さ。別れの挨拶を全てやり終えてから、何進大將軍のところにもお目通り願うさ」

「そいつはまた……」

孫堅は一度笑みを硬直させた。

流石に歳三の考えが孫堅の想像を超えたのだろうか。

にやにやとしていた笑みは引つ込み、今度こそ真剣な顔で。

「やるじゃねえか」

と、短くも最大の賛辞を歳三に送った。

◇

(さて、別れの挨拶とはいってもどこから回るか)

と、歳三考えてから恐らく一番長く居たであろう、賈駆の執務室を訪れていた。相も変わらず大量の書簡に埋もれている賈駆は、疲れた目で歳三の顔を見ていた。

そして歳三が洛陽を去ることを告げても、賈駆は至つて無感動な表情である。

「そう、行くのね、あんた」

「まあ、そういうことになるな」

交わした会話も決して長いものではない。

歳三も賈駆も、お互いに長々と別れを惜しむ種類の人間ではないのだ。

「でもまあ、せいせいしたわよ。いつつもこの部屋に来ては眠つてるんだか眠つてないんだかわかんないんだから。あんた」

憎まれ口を叩く賈駆に、歳三はただ微笑を浮かべるだけである。

本当に賈駆が歳三のことを迷惑に思っているのなら、とつくの昔に叩き出している。

どこか似ているところもあるから、歳三は賈駆の思考を読み取りやすい。

なんだかんだで、お互いあの無言の時間を楽しんでいたのだ。

そうして微笑んでいると、賈駆からまた憎まれ口が飛んできそうなので、歳三は話題

を変えた。

「今日も月は？」

「政務の合間に陳留王の家庭教師、つてところね」

陳留王、という聞き知らぬ言葉が出てきて歳三は首を傾げた。

中央の政情には疎い歳三である。

ただ、聞き返した。

「陳留王とは？」

「そうね……霊帝の妹、みたいなものかしら」

「つまり次代の皇帝、というわけか」

「そういうことよ」

霊帝の姿が歳三の脳裏に思い出される。

後宮に軟禁されているということにも気付かず、美食に耽溺たんできする愚かな皇帝。

その妹がどういう資質を持っているのか、会ったこともない歳三にはわからない。

わからないが。

(月が面倒を見ているのなら、きっと、良い皇帝になるのだろうか)

と、僅かな希望を漢帝国に見出せたような気がした。

また長々と賈馱の邪魔をするのも悪いかと、歳三はいつもの座っていた席から腰を上

げた。

賈馱もまた、歳三が帰ることを悟ってか、ひらひらと疲れた様に手を振っている。

部屋を出ようとして一步、歳三は伝えるべきことを思い出して振り返った。

「最後まで会えなかったが、月にこう伝えておいてくれないか？」

「何？」

賈馱はなんとなく、この後の歳三の言葉がわかるような気がしていた。

「私は必ず、何があろうとも月の味方になろう、とな」

「ねえ……本当になんであんたは、それだけ月に執着するの？」

「さあて、俺にもそれはわからん」

歳三は首を振った。

実際のところ、本当にわからないのだからわからないとしか歳三にも答えられないのだ。
だ。

その気持ちの正体がわかつているのなら、既にそれを基準にして行動しているだろう。

事実、土方歳三とはそういう男である。

だから、わからぬことはわからぬと賈馱にもはつきりと言えるのである。

「もっと言えば、私は恋にも懸想けんそうをしていると言ってもいい」

「恋にまで!？」

「ああ、そうだ。しかし、それが何なのかは月と同じくまるで見当もつかないのだよ」
歳三は自分で言つてて可笑しくなったのか、苦笑を浮かべた。

戦であるならば戦いたい、美女であるならば抱きたい。

この男の行動原理はこれくらい単純化することができる。

しかし、そういう単純なものを、董卓や呂布からは歳三は感ぜられないのだ。

それらはもつと複雑で繊細な何かなのだが、それが何なのかは歳三には理解できない。
い。

けれども、わからないからこそ歳三は思うのである。

「しかしだ、その私にもわからぬ感情を超えてでも、私は月と恋を守りたいと、そう思っている」

「守りたい、ねえ……月は私が居るし、恋はあんたが居なくても平気よ、強いから」

「そういうことじゃなくてだな」

「じゃあ、どういうことよ?」

歳三は少し上を向いてから、賈駆に向き直ると。

「とにかく、理屈じゃないのだよ」

と、言つて賈駆の執務室を後にした。



賈馱の執務室を後にしたところで、見知った顔に歳三は出会った。

誰であろう皇甫嵩將軍である。

長く豊かな髪先を右手でくるくると弄りながら、こちらの方を伺うようにちらちら伺っている。

(ああ、そういうことか)

と、女性経験は異様に豊富なこの男はすぐに皇甫嵩の元へと向かった。

するとどうしたことから、皇甫嵩はびくりと身体をすくませて走り出そうとしてしまふ。

それを歳三、慣れた手つきで優しく皇甫嵩の手を掴まえると。

「逃がしませんよ」

と、一言。

急に、腕を掴まれたたらを踏んで転びそうになる皇甫嵩。

それをくるりと回して自分の胸の中に収めた。

歳三の厚い胸板に押し付けられる格好になった皇甫嵩は、耳を真っ赤に染め上げている。

「これは失礼しました」

と、ぱっと皇甫嵩を解放した歳三。

皇甫嵩は離れるか、離れまいかと少し逡巡して、ゆっくりと歳三から離れていった。顔は、依然として下を向いたままである。

が、それは見ないのが男の嗜みだろうと、歳三は皇甫嵩が落ち着くまでゆっくりと待っていた。

◇

皇甫嵩が落ち着いた頃を見計らって、歳三は話題を切り出した。

「皇甫嵩將軍、頼みがあるのですが」

「えっ、あ、はははい！ な、なんでしょうか……？」

見た目は普通でも、未だ先ほどの衝撃は残っているらしい。

あわあわと混乱している皇甫嵩には悪いが、冷や水を浴びせるような言葉を歳三は続けた。

「私は中央の政治に疎い。よろしければ私が行く先でも政情を伝えてくれたら、と」

「え、あ……はい。わかりました。それくらいならお安い御用です」

自分が望んでいた言葉とは違ったか、すっかり意気消沈してしまう皇甫嵩。

可愛い人だと歳三は思いながら、次の言葉を続けた。

「代わりと言っては何ですが……」

「はい?」

「今度こそ、共に金市を回りましょう。貴女にぴったり、良い店を見つけたのです」
女であるならば誰もがとろけそうな笑みを浮かべながら、歳三は言う。

「私の諱は義豊と言います。貴女はなんと言うのですか?」

「わ、わたしは、楼杏ロウアンと言います!」

「そうですか。その真名、しっかりと受け取りました」

と、言いながら、歳三は膝を付いて皇甫嵩の手を取った。

丁度、欧州ヨーロッパの騎士が、自身が仕える女王に敬愛キスの接吻を手にするよう。

歳三の唇が、皇甫嵩の手の甲に触れた。

薄く黒い手袋の布越しに、熱い命の奔流が、歳三には感じられた。

「さらば、麗しき人、楼杏よ。私の身の回りが落ち着いたら、必ず迎えに行きましょう」
そう言つて、歳三は固まったままの皇甫嵩を後にして立ち去つて行つた。

◇

それから歳三は、金市をぶらりと歩き回つていた。

お世話になつた店の店主たちに、今までの礼を述べる為である。

多くの店主が歳三が去ることに悲しみを述べたが、ほとんどが虚しいものだ。歳三は思つた。

上客が居なくなることに、形式的な悲しみを浮かべている者がほとんどだからだ。しかし、それは仕方ないことだと歳三は思う。

それが商人と言う生き物ということは、身を以つてよく知っている。

が、中には本当に歳三が去ることを残念がる者も居た。

そういう人たちは、ずっと覚えておこうと歳三は思いながら、また金市を歩いていた。

何進と会うまでにはまだ少し時間がある。

それまで暇を潰そうと歩いていたら、知った顔を見つけた。

「楽進じゃないか」

絶対に忘れることのない、傷だらけの乙女の姿を、歳三は見つけることが出来た。

「あれからどうだった、元氣だったか？」

「はい、土方様もお元氣そうで」

楽進の話を知るところによると、歳三が長社城へと向かっている間、楽進たちは曲陽にある黄巾党の本隊を叩く為には、とある官軍の一部隊として編成されたらしい。

その官軍を率いていた將軍と言うのが。

「はい。曲陽の戦いにて曹操様に見出していただき、この度、警備隊長を務めることになりました」

「曹操殿か。名前しか知らぬが随分と良い人物に拾われたな」

曹操孟徳。歳三、名前しか知らぬがその雷名は良く知っている。

頭脳がずば抜けているのはもちろん、武芸にも秀でた文武両道の体現者。

政略にも戦略にも優れた、漢帝国の将軍と言うならば曹操か袁紹か、と言うほどの人物である。

歳三は素直に、楽進の出世を祝った。

曹操の元であるならば、彼女の真つ直ぐな気質も存分に生かされるだろうと思ったからである。

歳三も、楽進を麾下きかに加えられるならば警備隊長が適任だと思っていたのだ。

「おめでとう。楽進」

「あ、ありがとうございます……」

されども、楽進の顔はどこか暗く見える。

これを迷いと見抜いた歳三は、迂遠な言葉を使わずに単刀直入に指摘した。

「どうした、迷いが見えるぞ。楽進」

「……曹操様にも、同じことを言われました」

「私の元に、来たいのか？」

楽進の眼が、見開かれた。

それが答えだった。

歳三と楽進の間に、気まずい沈黙の帳とぼりが訪れる。

何か言おうと、楽進がごくりと唾を飲み込んだとき、歳三は手を上げて楽進の言葉を制止した。

「いや、答えなくても良い。答えればそこで、私は君の忠義を汚してしまうことになる」
「……土方様」

「伊達に私も人を見てきた訳ではない。そのくらい、わかるさ」

歳三は優しく微笑んだ。

楽進も思わず、目尻に涙を貯めたくらいだ。

「私はそれを、悪いとは思わない。先に楽進を引き込めなかった私の、落ち度だ」

そして急に険しい顔になると、怖い声で言った。

楽進の涙も、引っ込んだ。

「ただ、迷いを抱いたまま戦うのなら、死ぬぞ」

どきり、と楽進は心を読まれているかのような感覚に陥った。

曹操にも、同じことを言われていたのである。

このまま迷いを抱いているようでは、前線には出せない、という旨を。

楽進は戸惑っている。

歳三は楽進をこの戸惑いから解放してやるのが、自分にできる楽進への手向けであ

ると決めた。

すうつと息を吸って、歳三は喋り始めた。

「楽進よ、これからきつとこの国は乱れる、ということとは曹操殿から聞いているな？」

「はい。だからこそ、私たちを見込んで引き入れたのだと」

私たちか、と歳三は一瞬の内に思考した。

楽進には離れがたい友が、曹操の元にいるのだろう。

それもまた、楽進の迷いの源であると歳三は見切った上で、言った。

「これから先、私と曹操殿で道を違えることがあるかもしれない」

「土方様、それは……！」

「だがそれを、危難だと思ふな、楽進よ。機会であると思えばいい」

制止も聞かずに言い切った歳三の言葉に、楽進は首を傾げた。

歳三はくすくすと面白そうに笑うと。

「なに、要は私に勝って自らの部下にすればいいということさ」

「あ……」

「もちろん私も、君を手に入れられる時がくれば、全力を尽くす。どうだ、面白いだろう？」

「？」

悪戯が成功した子供の様に歳三が笑うと、楽進も釣られて笑い出す。

(ああ、良い笑顔だ)

楽進の顔に先ほどまでの迷いはない。

初めて会った時、歳三が仲間になりたいと思つた楽進の真つ直ぐさが、戻つていた。

これで、良い。

「それでは楽進」

歳三が別れを告げようとした時、楽進に呼び止められた。

「いえ、お待ちください、土方様」

「何かね？」

「私の真名をお受け取り下さい。私の真名は凧と言います」

そうか、と歳三は答えると、諱いみなのことを軽く説明した上で。

「私の諱は義豊だ」

と、言つて、そうして二人、固い握手を交わした。

「次に会う時は戦場だな、凧」

「はい、歳三様」

「では、さらばだ」

どちらが先と言うわけでもなく、するりと両手が離されて。

歳三と楽進、正反対の道を歩み始めるのであつた。



結局、何進は歳三に会うようなことはしなかった。

約束の時間に南宮に赴いた歳三を待っていたのは、兵士による南宮の閉門であった。何進は体調不良、そう聞かされて歳三はそれならばと、とつとと宿舎に帰っていた。

(どうせ体調不良なんざ、嘘だぜ)

これから死に逝く人間と話しても無駄と思つたのか。

それとも足を運ばせるだけ無駄にさせたかったのかはわからないが、歳三はどうでもいい。

謁見がないならしないで、やることは幾らでもあるのだから。

宿舎の広間に皆を集めて、これからの方針を話し合うことにした。

「ではまず、桃香は幽州の白蓮のところに身を寄せるのがいいだろう」

「白蓮ちゃんのとこに、ですか？」

「そうだ。いい加減兵士たちも幽州が恋しい頃だろう。戻してやるべきだ」

「そうですね。兵士の皆さんも、家族に会いたいのとは違ひないですもんね」

「でしたら、青州から出ている船で戻るのが一番かとー」

歳三と劉備の会話に、間延びした程立の声割りが割り込んできた。

しかし、程立の言う言葉は正しい。

今のところ幽州・青州・徐州で繋がっている海運の船に乗せて兵を運ぶのが、一番早
いだろう。

歳三は手を打って喜び、その案を採用した。

「それと、青州の情勢について出来ることならば稟と梨晏を呼び寄せたい」

これは歳三の願望であつたし、程立の提案でもあつた。

程立の後宮ハレム構想には、もちろん郭嘉と太史慈の名前も入っている。

いい加減、これだけ手を出しているのならさつさと抱け、という程立個人の想いもあるだろう。

もちろん、そういったこととは関係なく純粹に、青州の状況を知る為という意味はある。

「でしたら風も、青州に戻りましょうか。稟ちゃんと美花ちゃんと、お仕事を変わつてあげましょうかねー」

「では私も、風と共に青州に向かうこととしましょうか」

程立の言葉に、趙雲が続いた。

「二応、青州では反土方派の一人としてまだ見られているでしょうから。戻るのは主より容易いはずぞ」

「ふむ、それを聞くと頭が痛くなるな」

「その割には、なんとも思つてなさそうですね」

「わかるか？」

「ええ、もちろんですとも」

趙雲がにやりと笑う、歳三もにやりと笑つて答えた。

そして残るは徐晃、一体どんな役目を課されるのか、眠たげな眼で歳三をじつと見ている。

歳三も、いつものむつつり顔で見返ししながら、言つた。

「香風は私の護衛だ」

「? ……護衛?」

「そうだ。兵は全部星に預けて一旦青州に戻して解散させる。だから私は、無防備になるな」

面白そうに笑う歳三だが、徐晃にはこの男が危機に陥つて混乱する方が想像できない。

むしろ危難を面白がつて如何に脱出するかを楽しむような、そんな気さえする。

そういう男が、自分を頼っている。

それだけで、力が内から漲ってくるようだった。

「……頑張る」

「任せたぞ、香風。では他に何かないか？」

歳三の一言に、誰も異論を挟むものは居なかつた。

◇

外の空気を吸おうと、歳三が宿舎の外に出ると、孫堅が立っていた。

まるで待ち構えていましたと言わんばかりの、立ち姿である。

(何をして絵になる人だな。英雄とはこういう人を言うのだろう)

と、歳三はぼんやりと思つた。

「よう歳三。話合いは終わったのかい？」

「炎蓮か。ああ、無事に終わったよ。そちらには私と徐晃が世話になる」

「徐晃つて、あのちっこいのがか？ 言いたかねえが歳三よ、そういう趣味でもあるのか

？」

「いや、命の恩人でもあるからな、徐晃……香風は」

「ふうん。その話もなかなか面白そうだな。今度聞かせろよな！」

にかり、と笑みを浮かべる孫堅に歳三は苦笑を浮かべながら。

「また今度、にしてくれ」

と、答えた。



そのすぐ後、馬上の人となった歳三は徐晃と並びながら孫堅軍の中にいた。

孫堅軍は威風堂々と洛陽を行進しながら、東へと向かっている。

文句があるならかかってきやがれとも言わん勢いで、大勢の見物客が道に溢れていた。

一方、趙雲率いる歳三の軍は、既に洛陽を発つている。

歳三と趙雲が洛陽で喧嘩別れしたように見せかける、程立の発案でもあった。

(また、俺一人になっちまったか)

と、感傷に耽りそうになりすぐに思い直した。

(俺には、香風がいる。香風だけじゃない、みんなが、居る)

孫候の言葉が、胸に思い出された時、ふと気付いた。

街道に犄めく集団の中で、一際輝くように見える二人が、居た。

(月、恋……)

どうして、何故、孫堅軍に歳三が紛れているとわかったのかは、わからない。

わからないが、歳三はただ、二人に向けて小さく手を振った。

(私は必ず、必ず帰って来るからな)

伝わったかはわからないが、董卓の顔が笑っていたので、歳三は伝わったことにした。

運命の再会

洛陽を後にした歳三たちは、荊州へと向かうために南へと歩を進めていた。

孫堅は現在、長沙太守であり、その勢力圏へと向かう為である。

そのことについて話していた時、孫堅はこんなことを言っていた。

「でもな歳三。俺たちは長沙で留まっている様な器じゃねえ。だから俺の、俺たちの生まれ故郷である呉なんかとつくに俺の庭みたいなもんになつてゐるんだぜ？」

「ほう。呉をですか」

「まあ、今でこそ敵白虎を首領にした山越賊が幅を利かせているが、いつかは必ず俺のものにしてみせるさ」

と、決まつて孫堅はにっかりとした笑みを歳三に浮かべるのであった。

孫堅はこのように嘯うそぶいたが、恐らく真実であろうと歳三は思っている。

こんなつまらない嘘をつくような人物ではないと、骨に染みてわかっているからだ。

（呉であるならば、徐州も近く青州も近い。海運事業に一つ、加わってもらいたいくらいだ）

歳三は頭の中に詳細な地図を持っているから、呉は海運に適していることがわかる。

こうしてまた一つ、歳三の中で腹案が生まれたわけであるが、単なる利害だけではない。

歳三が孫堅という人物を好いている、というのもある。

豪放磊落で血の気が多いが、どこかこざっぱりしているところが、歳三は好きなのだ。
(それに三つも借りも残しているからな)

と、少し強引ではあったものの、歳三が孫堅に恩義を感じているのも確かだ。

出来ることならば孫家とは長いこと付き合っていきたいと、歳三は思っているが、これは歳三の胸中での話。

歳三はそれとは別に、懸念することがあった。

孫堅の軍勢が、荊州の北部地域を支配している劉表の領地を通ることについてである。

歳三ほどのものでなくても、危ないな、とは思うだろう。

「しかし、この軍勢で劉表殿の領地を通るのは、危なくないですか？」

「なあに、劉表とは知った仲よ。黄忠さえ取らなければ心配ねえや」

「黄忠……誰ですか、それは？」

「ああ。これから通る南陽を守っている武将でな。生きていてえいいうのに面白い伝説を持っている女なんだ、これが」

「伝説、とは？」

歳三が持つ、この男独特の勘が働いた。

生きていながら伝説を持つ女とはどういう人物か、興味以上に何か歳三を動かした。

歳三自身もわからないが、己の勘を神仏よりも信じているのが歳三という男だった。「龍と一晚交まぐわつて子供を産んだつていうんだが、娘を持つてからでも美貌は衰えるどころか魔性を放つくらいになってやがる。俺が男なら手に入れたいくらいだね」

歳三はふむ、と頷いた。

孫堅がそれほど言うのであれば、言葉通りの妖艶な美女なのであろう。

しかし、女好きとしての性さがが疼うずくと同時、何か嫌な予感を覚えるのも事実であった。
(なんとも妙な勘だぜ)

歳三としても、表現に困る勘の働き方であった。

が、それを孫堅に気取られるわけにもいかず、歳三はなんでもないふりをした。

「龍と交まぐわるとは、これはまた奇怪な話ですな」

「奇怪だと思おもううだろう？ だから伝説なんだよ。なんでも、森の泉で沐浴もくよくしていた時に龍と出会あわつて、それで子供ができたつていうんだ」

ふむ、と歳三は唸うった。

聞けば聞くほど、紫苑しおんとのほのかな想い出を思い起こせる話である。

（紫苑はここに居るのか？ ならば私は、紫苑とその子供に呼ばれたのか？）

と、そこまで考えて胸中で首を振った。

（いや、あれは夢なのだ。そしてこれも、淡い夢の様なものなのだ）

だからこそ、歳三は止まることなく戦い続けている。

恋も愛も知らずに、戦うことだけ知っているから腰を落ち着けることができない。

この男は、例え地獄に落ちても戦うことを止めはしないだろう。

そんな男だからこそ、あれは夢であつたと思ふことしかできないのだ。

「そんな女に、劉表は恋慕してゐるっていう話だよ。つまりまあ、黄忠を取らなければ俺た

ちはまず無事に抜かれる筈さ。だから歳三」

釘を差す様に、孫堅は歳三の顔を見た。

歳三も、孫堅の言いたいことをすぐに理解した。

「間違つても黄忠殿に手を出すな、と言いたいのでしょう？」

「おう。わかつているじゃねえか」

「しかし、向こうから来た場合は私にはどうしようもない」

そう、肩を竦めておどけて言う歳三であつたが、半ば本気でもある。

そんなに歳三に孫堅は大笑して。

「はっ、大きく出たじゃねえか色男」

と、孫堅は言う。

「ま、やるんだつたらしつかり奪えよ。そのくらいの危険は承知の上でお前を連れてきたんだ」

「流石に、孫堅殿に迷惑を掛けるようなことはしたくないんだがね」

「いいんだよ。そんなときやそんな時、貸しにしてやるだけさ」

「これではいつまでたつても、貸しを返しきるのは難しそうだなあ」

「早くしないと利息を付けちまうぜえ、歳三よ」

と、二人して笑っている。歳三の頬にほつりと、雨粒が一滴当たった。

雨か、と歳三が空を見上げて見ると、天にはいつの間にか分厚い黒雲がかかっている。

風もどこか、湿気ていて重たい。

「これは一雨来そうですな」

「くそ、龍の話をしてたもんだから雨を呼んじまったか？」

雨粒は弱まるどころか量を増し、勢いを増し、いよいよ本降りとなり始めている。

地面もぬかるみ始めている。

「こりゃこれ以上の進軍は無茶だな」

と、孫堅はぼやいた。

雨は、兵士の士気と体力を確実に奪う、自然災害の第一等である。体力の低下による風邪の蔓延なども、行軍では怖いことの一つだ。

「仕方ねえ。ここから一番近いのも黄忠の城だ。一晩、屋根を借りるとするか」
 「樽をすればなんとやら、ですな」

「まったくだよ。おい、策！ 権！ 穩！」

孫堅が三人の名前を呼んでいる間に、歳三は徐晃を呼び寄せていた。

「……何？ お兄ちゃん？」

「その恰好では寒いだろう。これを着ておけ」

と、羽織コウトを脱ぐとあつという間に徐晃の肩にかけた。

実に手慣れた手付きである。

しかし徐晃はそんなことを気にすることもなく、顔を赤くしてもじもじとしている。

「……ありがとう、お兄ちゃん」

「なに、構わんよ」

孫堅の邪魔にならぬよう、歳三と徐晃は暖め合う様に二人寄り添っていた。

が、歳三は本当にそれだけだったか。

歳三の切れ長の眼は、とある下士官を捉えていた。

◇

南陽の城へと向かう途中、歳三がぼつりと呟いたのを孫堅は聞き逃さなかった。実に耳聴いが、総大将というのはこのくらいでなければ務まらないのだろう。

そういうえば、旧幕府軍の総督の榎本武揚も耳聴かつたなあと思い出しながら、歳三は言った。

「あの下士官は見どころがある、と言ったのだよ」

「ん？ どいつのことだ？」

「あの、眼鏡を掛けた眼つきが鋭いやつだよ」

と、歳三は顎でしゃくつて見せた。

その先には、眼鏡を掛け大きくだぼついた袖の服を着た少女がいる。

孫堅はそれを見て、微妙な表情を浮かべた。

「ああ、呂蒙のことか？ あれは穩……陸遜の配下だな……」

「炎蓮にしてはいやに齒切れが悪いな、何か問題でも？」

どうしたもんかね、と言いたげに頭を掻く孫堅は珍しいな、と歳三は思った。

「問題っていうか、確かに才はあると思うんだが、どうにも武一辺倒過ぎてな……それに歳三に似て眼つきが悪いし不愛想だ」

「なるほど。となると、本嫌いでもあるのか」

「おつ、なんだ歳三。そんなこともわかるのか？」

くすり、と歳三は笑った。

武一辺倒で眼つきが鋭く不愛想、ここまで自分に当てはまる人間もそうはいないだろう。

となれば本嫌いであることも、なんとなく察することができたのである。

まるで昔の自分を見ているようだ、とまでは言わないが、似た人間が居ることが、面白い。

「わかるとも。私だって本嫌いだったからね」

「ほおう？　で、その本嫌いの歳三が魅了された本つてのはどんな本なんだい？」

「流石に炎蓮が相手でも、教えられないな、これは」

歳三の愛読書である歩兵操典は、今でも歳三の懐に暖められている逸品でもある。

これが近藤であるならば三国志が出てきたであろうし、沖田ならば甘味が出たであろうか。

とにかく、歳三が興味を持つ本、というところに孫堅は大きく反応した。

少し、考える素振りをするると良い案を思いついたというように、人差し指で歳三を差した。

「ではこうしよう。歳三が呂蒙を本好きにしてみせたなら、借りを一つちやらにしよう」

「ふむ。では呂蒙が本嫌いが治せなかったら、私はどうすればいいのかね？」

「まず歳三秘蔵の書は陸遜に進呈だね」

歳三は苦笑を浮かべた。

まるで強盗のような言い様である。

だが、そんな孫堅が皆好きなのだ、歳三は思っているし、歳三も好きなのだ。

こればかりは孫堅自身の人徳と言えるだろう。

「まず、ということとは他にも何かあるのかね？」

よくぞ聞いてくれましたと言わんばかりに、孫堅は獲物を狙う獰猛な笑みを見せて。

「俺と一戦、交えてもらおう」

と、言った。

常人ならば気絶するような覇気を伴っていた笑みだというのに、歳三は柳に風と言った風で。

「それは戦でかね、ねや 闘でかね？」

と、しゃあしやあと言つてのけたのである。

これには孫堅も笑うしかない、雨が口に入るのも気にせず大笑してから、言った。

「じゃあ、歳三はどっちだと思おう？」

「どちらであろうとも、私はやる気だ、と言つておこう」

「それでこそ歳三だ！」

と、歳三の背中をばしばしと叩く。

叩かれる度に歳三は馬から落ちまいと、手綱を引つ張り踏ん張るのだが、孫堅は氣にしない。

「おい穩！」

「はいくなんでしよう、大殿様〜」

「呂蒙をしばらく土方の近くに置かせてみようと思うんだが、どうだ？」

陸遜が歳三の方をちらと見た。

これはまた、美女であると歳三は思い、軽く会釈をした。

孫堅とは違い白磁の様な肌と、豊かに実った胸、小さな丸眼鏡と穏やかな喋り。

激しい炎の様な孫堅とは真逆の、穏やかな流水の様な女性である。

こういう真逆の性質の人間は、だいたい相反するものだが、孫堅と陸遜の間にそれはない。

やはり孫堅は英雄なのだなあ、と歳三はぼんやり思っていたが、陸遜の話で我に返った。

「それは構いませんけどお、呂蒙ちゃんが土方様のところに行ったらどうするんですかあ〜？」

ちらちらと、陸遜はこちらを伺いながら孫堅にそんなことを言っている。

呂蒙が歳三に引き抜かれるのを、危惧しているらしい。

なるほど、孫堅が眼を掛けていてだけのことはある。

秘めたる実力は陸遜も惜しむほどのものらしい。

(流石に孫堅でも、ここまで言われちゃ承知はしないか?)

が、孫堅は歳三を遥かに上回る器の持ち主であったようだ。

「そんな時はそんな時よ。俺に呂蒙を惹きつけるだけの魅力ちからがなかっただけのことさ」

「大殿様はそれでいいかもしれませんけどお」

「なに、駄目だった時は歳三が秘蔵の書をくれるんだとよ」

陸遜の眼が、一瞬だけだが歳三が寒気を覚えるほどに鋭くなった。

「あらあくそれは……わかりましたあく、呂蒙ちゃんにはそう伝えておきますねあく」

そう言ってほんわかと歩いていく陸遜の後ろ姿に、先程の面影はない。

歳三は孫堅に言った。

「どうやら陸遜殿は、筋金入りの読書好きのようですね」

「どうしてわかる?」

「陸遜殿の書へのあの態度。私ですら恐ろしいと感じる」

「確かに。少々行き過ぎなところもあるかもな、陸遜の読書好きは」

まあ、陸遜のことは良い、と歳三は思っている。

それよりも、先程から痛いほどの視線を、歳三は背中に感じているのだ。

「それと、先程から私と話したいのがいるでしょう」

「ああ、策のことだろう？」

恐らく、太史慈のことと歳三は検討をつけていた。

それでなければ、他になんだというのだろうか。

「よし、じゃあ俺は黄忠と会うのに先行するから、歳三は策と存分に話ながらついてきてくれ」

意地の悪い笑みを浮かべながら、孫堅は手勢を引き連れて先へと行ってしまった。

丁度、孫堅の馬と入れ替わる様に、別の馬の足音が後ろから来ているのを、歳三は聞いた。

（孫策伯符、か）

一体どのような人物なのか。

あの孫堅の娘なのだから、孫堅に比肩しうる人物なのか。

そう思えば思うほど、後ろから迫りくる孫策が楽しみな歳三であった。

◇

南陽の城、その城下を歩きながら、歳三は。

「どうにも、ここにきてから見られてばかりの気がするな」

と、ぼやいた。

歳三は何とも言えない視線を、南陽に来てからずっと感じている。

田畑を耕す農民が、道行く町人が、店先の商人が、皆が皆、同じような視線を向けてくる。

奇妙ではあるが、敵対心が無い為に、歳三としてもどうするべきか迷うものであった。「そんなことより、歳三。どうやって梨晏を自分のものにしたの？」

が、そんなことは孫策相手には関係ないらしい。

太史慈との一件について、のらりくらりと躲かわしてきた歳三に苛イライラ々々してきている。

飛び出す言葉も、機嫌に比例してか物騒なものになっていた。

「事と次第によつては、私の母のお気に入りでも容赦しないわ」

「なるほど。炎蓮とよく似ている。享樂的な凶暴さを持つているな」

「話を逸らす気？」

「いいや、そんな気はもうないよ」

と、歳三は言うのと。

「梨晏ついては、殺しただけだ」

と、言った。

これに妙な顔をしたのは孫策である。

太史慈が生きているのは、孫策たちの情報網にも掛かっている。

第一時々太史慈本人から手紙も来ているというのに、死んだとはどういうことか。

「殺した？　梨晏からはちよくちよく手紙が来てるっていうのに、殺したっていうのはどういうことよ？」

あの手紙はそういう、と納得する歳三。

太史慈が誰にも知られぬようにこっそりと手紙を出していたことを、この男は知っている。

知った上で太史慈、孫策兩名の前で素知らぬ顔をしているのだから、質たちが悪い。

やはりいつものむっつり顔で、歳三は孫策に答えた。

「ふむ。孫策、君と周瑜の断金の交わりは梨晏からよく聞いている」

「そうね。私と冥琳の友情は金ですら断つわ。もちろん梨晏ともね」

「ならばその交わりを断てるものは一つ。死しかない」

「あのね、そういう謎掛けみたいな物言いはやめてくれない？」

孫策は腰の剣に手を掛けそうな勢いである。

歳三は渋い顔をした。

いつも単刀直入な男が、こどもまわりくどいのも、珍しい。

多分、孫策らの友情に入り込んだことに、多少なりとも遠慮のようなものがあるのだらう。

「失礼した。決闘したのだよ。己の死と、梨晏のこれまでの全てを懸けて」

歳三がそう言うのと、孫策はちよつと考え込んで。

「そういうことね……納得がいった。それなら梨晏も、貴方から離れられないでしょうね」

と、言った。

歳三は少しだけ眼を見開いて、孫策に問い直した。

「良いのか？」

「良いも悪いも、決めたのは梨晏自身よ。貴方が弱みを握ってどうこうっていうのなら、ここで叩き斬ってたけど、そうじゃないなら梨晏の自由よ。それに」

「それに？」

「例え違う道を選んでも、私たちの友情に変わりはないわ」

そう言つて孫策は歳三に微笑んだ。

（嗚呼、やはり母娘なのだ）

と、歳三は思うと同時に。

（私も子を持つても、炎蓮の様に変わらずにいられるだろうか）

と、ぼんやりと思うのであった。

◇ 孫堅は今頃、南陽の主である黄忠と話をしている頃だろうと、歳三は思った。

あてがわれた部屋で雨を眺めていた歳三は、ふと呂蒙のことを思い出す。

歳三は黄忠に会うことを半ば禁止されてはいたが、呂蒙に会うことは禁じられていない。

それならば善は急げと言わんばかりに、歳三は呂蒙の部屋へと向かうのであった。

「呂蒙、居るか？」

「こんこん、と軽く扉を叩く歳三。」

「は、はい！ いますー！」

と、中からは何かが崩れるような音やら、何やらでてんやわんやのようである。

不味い時に尋ねたかな、と歳三は壁に背もたれながら、呂蒙が出てくるのを待った。外では相変わらず雨が降り続けている。

(嫌な雲だ)

◇ 分厚い黒雲を眺めながら、歳三は待った。

◇ 歳三の懐中時計の長針が、およそ三つ動いたくらいだろうか。

呂蒙がおずおずと、扉を開いて顔を出した。

「申し訳ありません、土方様。お待たせしてしまつて」

「いや、こちらもいきなり部屋を訪れるとは不躰だつた。許してほしい」

「い、いえ！ 土方様が謝られる様なことではないです！」

真面目な性格なのだ、と歳三は呂蒙のことを思った。

さらに前に、自分と呂蒙は似ているところがある、としたが間違いだとも思った。

呂蒙はこうして真面目であるが、歳三は元々石田村の悪党バラガキである。

似ても似つかないのに、どうして似てると思つたんだか、と歳三は小さく笑つた。

「土方様？」

「いや、なんでもない。ちよつと自分がおかしかっただけだ」

「？」

頭に疑問符を浮かべる呂蒙。

しかし、このまま外に歳三を立たせるのもよくない為、呂蒙は部屋に歳三を招き入れた。

「ほう、読書嫌いという割には、勉強家のようだ」

まず、歳三が眼を付けたのは机の上に山と積まれた竹簡の類であつた。

中身はわからないが、恐らく軍師に関することだろうと当たりをつけたが、果たして。

「土方様は、透視のお力でも持っていますのですか？」

当たり前だったらしい、呂蒙は驚きの表情を浮かべているのが、歳三はまた面白かった。これであれが艶事のいろはだったなら、呂蒙の評価を大幅に変えねばならぬ。

だが、と歳三は思う。

本当に勉強家であるならば、先程の惨状の様な音は何だったのだろうか。

歳三は少し考えて、ある結論に辿り着いた。

「寝ていたのか、呂蒙」

「あうう……」

どうやら凶星のようである。

顔を真っ赤にし、だぼだぼの袖で顔を隠す様にする呂蒙。

「そうなんです。寝てはいけなとはわかっているんですが、やはり身体を動かしているほうが性にあっていて……」

と、自ら白状しだす始末である。

けれども、歳三はそれでいいと思っている。

歳三の持っている歩兵操典と、歳三なりの独創を、この呂蒙に叩き込んでみたくなっていた。

それならば下手に知識があるよりも、真っ新な頭の方がやりやすい。

「まあ、いいさ。陸遜殿から聞いていると思うが、これから私が講師となる」
「え？ そ、そんな！ 土方様の手を煩わせるようなことは！」

「何を言っている呂蒙。一応形の上では私の元に居るのだぞ。それに、私の様な男が隣に居ては、居眠りなども碌ろくにできまい」

そう言つて歳三がにやりと笑うと、呂蒙はまた顔を赤くして顔を隠した。

面白いやつだ、と歳三は思いながら、この男特有の勘が働いた。

(扉の向こうに、誰か、居る)

その旨を小さな声で呂蒙に伝えると、呂蒙はすぐさま気持ちを切り替え臨戦態勢に入った。

なるほど、武一辺倒であつたというのは嘘ではないらしい。

隙のない呂蒙の構えに感心しながら、歳三は勢いよく扉を開け放つた。

「子供？」

扉の向こうに立っていたのは、子供であつた。

背丈は歳三の腰辺り、頭の両横で髪の毛を可愛らしい飾り布で結んでいる。

城に住む誰かの子供だろうか、と歳三は思うが、強烈な何かを子供から感じていた。

(なんだ、この感覚は?)

歳三自身も初めての感覚に狼狽うろたえていた。

目の前の子供に何かしてあげなければならぬという、本能の様なものがある。だが、歳三に子供との面識はない。

それが余計に、歳三を混乱させた。

一方で、子供の方は目に一杯の涙を貯めて、しかし嬉しそうに笑みを浮かべている。

「お…………お…………」

「お？」

呂蒙がそう問い返した時。

「お父さーんー！」

と、子供は歳三に甘えるように思いつき抱きついた。

歳三はなんのことだかわからない。

だが、わからないままにただ、心地良い。

「土方様は妻子持ち…………でしたか？」

「いや、生きてきて一度たりとも伴侶を持ったことはない。しかし」

と、歳三は子供の頭を優しく撫でた。

「何故だろうな。こうしなければいけないような気がする」

「こら璃々！ 勝手に人の部屋に入っては…………駄目…………と…………」

次から次へと来客か、と歳三が目線を次の珍客に向けた。

瞬間、時が止まったような気がした。

忘れるはずがない、紫色の長い髪、豊満では現しきれない形の良い乳房。

そして、歳三と全く同じ黒色の羽織コウジ。

(ああ、彼女はまさしく)

きつと、相手もそうなのだろう。

開いた口が塞がらないと言うように眼を大きく見開き、目に涙を貯め始めている。

だから歳三は、いつかの時と同じように、少年の様な笑みを浮かべて。

「やあ、紫苑。羽織を取りに来ましたよ」

と、言った。

襄陽の戦い

孫堅は目の前の光景に頭痛がする思いだった。

異様、と一言で現してしまえばそうだとと言えるだろう。

呂蒙も、冷や汗が止まらないという表情で、それでも机に向かっているのは男のせい
か。

「で、どういうことか説明して欲しいんだがな、歳三」

「どうということもない。見ての通りだ」

と、嘯うそく歳三は椅子に腰掛けて居る。

そこまでは、良い。

歳三の膝の上には幼子が行儀よく乗っており、それを南陽の主・黄忠が見守っている。
優しく柔和な微笑みを浮かべながら、である。

それも揃いの黒い羽織コートを着ているのだから、傍目には夫婦にしか見えない。

「俺の見間違いじゃなけりや、歳三と黄忠殿は深い仲だとか見えないんだが？」

「その通り。私にとってはつい先日だが、紫苑とは契りを交わした仲だ」

「そうですわ。私にとっては何年もの前の話ですが、この人は偽名を使ってまでも私た

「ちを守ろうとしたのですよ?」

「ああ、同時に喋るのはやめてくれ。頭がいよいよ痛くなってきた」

孫堅は頭を抱えながら、この状況の発端を知っているだろう呂蒙に声を掛けようとした。

が、気の毒なほどに顔を青くしてまで何かの書物に向かっているの、やめた。

多分、呂蒙自身も許容しきれない程のことがあったのだろう。

そうでなければ、孫堅自身が、陸遜までもが才を認めた呂蒙が、ああなる筈がない。

はあ、と溜息を一つ吐くと、孫堅は単刀直入に聞くことにした。

「わかった、俺の負けだ。最初から全部話してくれないか、歳三」

「それは構わないが、少し長くなるぞ」

「いいさ。どうせこの雨じや劉表も簡単に動けはしないさ」

「やはり、劉表殿のところには早馬は出ているのか」

「ああ。明命……周泰の報告で襄陽に早馬が五つは出てる。で、話す気はあるのか、歳三?」

「わかったよ。さて、どこから話したものか」

歳三は膝の上の幼子、即ち璃々の頭を撫でながらゆったりと話し始めた。

◇

一から喋るのは久々だな、と歳三が喉の渴きを覚えた時、湯飲みがすつと眼の前に出された。

湯飲みに絡みつく白くほつそりとした指は、無論、黄忠のものである。

二人の間に会話はなく、ただ眼と眼が一瞬あっただけであつたが。

歳三は湯飲みを難なくするりと受け取ると、一気に飲み干した。

湯加減も、歳三が飲みたいと思つていた通りの温度である。

「うまい」

「お粗末様ですわ」

「待て、夫婦仲がいいのは結構だが、とにかく待て」

「そんな、夫婦だなんて」

と、頬に手を当ていやんいやんと腰を振る黄忠のその仕草、女でも見惚れる妖艶さがあつた。

なるほど、劉表が男として黄忠に執着するのもよくわかる、と孫堅は思つた。
だからこそ、どうにも腑に落ちない。

何故こつとも歳三は落ち着いているのか、である。

「なあ歳三」

「なんだね、炎蓮」

「お前は どうして そう、落ち着いて いられる んだ？」

「驚いたな。落ち着いているのが 不服 とは。いつ そのこと 取り乱し 狂って いた方が 良かったか？」

「違う。お前は 黄忠 に 関して 何とも 思っ て いない のか、という こと だ」

ふむ、と 璃々 の 髪を 梳き ながら 歳三 は 言っ た。

「話の 最中 にも 言っ た と 思う が、私 は 紫苑 と の 逢瀬 を 夢の 様 な もの と し か 思っ て いな かつ た」

と、 続 け て。

「だが もし、紫苑 が 本 当 に 居 た の で あ れ ば、き っ と 私 を 待 つ だ ろ う と 思っ て も い た」

「何 故 だ？」

「私 が 抱 く と 決 め た 女 だ か ら だ」

氣 後 れ も 躊躇 ためら い も な く、歳 三 は そ う 言 い 切 っ た。

孫 堅、こ れ に は し ば し 唾 然 と し た。

自 信 か ら 来 て い る、さ り と て 傲 慢 と は ま た 違 う、あ る 種 の 信 頼 の 様 な も の と で も 言 え ば 良 い か。

と に か く、孫 堅 に は そ れ を 表 す 言 葉 が 見 つ か ら な かつ た の は 確 か だ。

「ま っ た く、大 し た た ま だ よ。お 前 は」

「私としては、炎蓮が私の話を全て受け入れている方が、驚きなのだがね」
そんな口振りの癖してべらぼうに落ち着いているのだから、本当に食えない男である。

今も、璃々を優しく撫でながら不愛想な面おもてのまま、という器用なことをやっている。「はっ、ただの狂人が青州刺史にまで上り詰められるものかよ。過去なんてどうでもいいさ、要は結果だ。そして歳三は大事な結果を出している。これ以上に歳三を歳三として認めることができる要素なんてないさ」

孫堅の言葉に、歳三は静かな笑みを浮かべた。

歳三は孫堅が己が言うことを一切合切否定しないと、わかっていたかのようにもあらる。

が、孫堅はともかくその娘や配下については違う様である。

特に、長女である孫策などは歳三の言ったことについては不満顔だ。

「結局さ、歳三は何がしたいの？」

全て、そこに尽きると言った顔である。

陸遜や孫権も、同じような顔をしていた。

目的が不明瞭すぎるのである。

黄忠との再会を目指していたわけでもなく、流れに任せあるいは逆らい、戦ってきた。

確固たる意志を持たない、戦好き、そういった印象が拭えないのである。それを歳三、くすりと笑った。

「なんだ、随分わかりやすいと自分では思っていたんだがね」

孫策の眉がぴくりと動いた。

馬鹿にされた、と思ったのだろう。

恐らく炎蓮に似て気が早い方だ、と孫策のことを睨んでいた歳三。

孫策の腰間の剣が抜かれるよりも早く、口を開いていた。

「喧嘩がしたい。ただそれだけだよ」

「喧嘩？」

「そう。この漢という帝国は広い。それに私におあつらえ向きな程に乱世の時代が近づいてきている。楽しいとは思わないか？」

「……自分の利の為に、世を乱したい。そう言うの？」

孫策の眼だけでなく、孫権の目までもが密かに鋭くなった。

(ああ、どこまでも二人は炎蓮の娘らしい)

戦に巻き込まれる無力な無辜の民の平和を、彼女たちは案じている。

それを乱すならばこの場で斬ることも辞さない、そういう気概がある。

だからこそ、歳三は言い訳などせず、自分のやりたいことを言った。

「別に私とて王城の、京都の守護を任されていた身。いたずらに世を乱したいとは思っていない」

「じゃあ喧嘩したいっていうのはどういうこと？」

「例えこのまま世が平和になっても、北には未だ異民族がいる。その異民族を撃滅したとしても、ならず者は必ずと言っていいほどどこにでも現れる」

つまり、と歳三は孫策の眼を見た。

孫策はどきり、と胸の鼓動が早まった。

恋慕の情でなつたのか、と問われれば違うと孫策は答え、こう答えるだろう。

歳三の瞳の奥にある、どこまでも仄暗く燃える炎に見入つたのだと。

「私はどこまでも駆けずり回つてさういつた戦場を探すだけ。ただ、それだけよ」

孫策は再び歳三の眼を見たが、そこには先程までの炎はない。

歳三は今、璃々を見ている。

慈しみのものでありながらどこか無感情が入つた、どうにも言い難い瞳であつた。

それがどういう意味なのかは、孫策にはわかりたくなかつた。

「蓮華……？」

孫策が二の句を継げずに戸惑つて居る時、押しよける様にして孫権が前に出た。

普段大人しい子なのにこんなことをするなんて珍しい、と皆が思った。

歳三ですら、何も言わないだろうと踏んでいたのか、少し眼を細めているくらいだ。「黄忠殿は、どうするんですか」

孫権の言葉は、力強かった。

それに誰もが思う、疑問でもあり、聞けなかった質問でもあった。

歳三は妻も子もいると、この南陽で漸く^{ようやく}わかった。

ならば、劉表を如何^{どう}にかして、どこかで腰を落ち着けるのが男の筋ではないか。

孫権の言葉には言外にそう含まれていた。

歳三は、孫権に対して決して馬鹿にしたわけではなく、ただ静かに笑った。

「なに、紫苑ならわかつてくれるさ。私がどこで生きようとも死のうともわかつてくれる」

と、そこまで言ってから歳三は少し考えて。

「うまく言葉にはできないが、私と紫苑とはそういうものなのだよ」

と、言った。

歳三も、これを如何言い表すべきかよくわからないらしい。

さりとて黄忠の顔を見れば、それで良いという顔をしているのだから始末に負えない。

それでも、孫権は食い下がった。

「愛は……黄忠殿に愛はないんですか？」

「さあ？ 私は今まで恋とか愛とかを感じたことのない男でね。それを求めて、戦っているのもあるのかもしれない」

ふと、歳三の脳裏に董卓と呂布の姿が思い起こされた。

あの二人は、歳三の心を熱くする何かを持っている。

それを理解するためにも、歳三はまた洛陽へと戻らなければならない。

つまり、南陽に腰を落ち着けるなどという選択肢は、端から無い

「しかし、だからこそ、紫苑はそれら全てをわかつて私を受け入れた。そして私はそれに答えた。それだけだよ」

孫権は紫苑を見た。

紫苑は孫権に、ただ微笑んで見せた。

「つ……………」

孫権は踵かかとを返すと部屋から出て行ってしまった。

歳三は璃々をあやししながら、それを止めることもせず、ただ一言。

「まだ、若いのだな」

と、言ったのであった。

◇

雨は、依然として強く降り続いている。

これで軍を進めては、疲労するばかりで何も益はないだろう。

つまり、孫堅の南陽での滞在がもうしばらく延びると言うことでもある。

歳三は璃々を膝から降ろして黄忠の元に行かせると、席を立てて言った。

「それよりも、襄陽で待ち構えている劉表について話した方がいいのかね？」

「歳三の言う通りだな。劉表との一戦は最早避けられん。しかし黄忠、お前は良いのか？」

「孫堅殿、私の心は最初から隼人様……歳三様のものですわ。それに」

「それに、なんだ？」

「劉表様は私に貢ごうとするあまり税を強盗の様に取り立てていると聞いています。荊州の平和の為に、それは正さねばなりません」

黄忠の語るところによると、荊州は今、妙な金銭の巡りができているのだという。

劉表は取り立てた税を、金銀財宝に変え黄忠へと贈る。

黄忠はそれを貯めることも使うこともせず、糧食に変え金に変え万民へと返還する。

そして民は黄忠を慕い、本来の主である劉表を憎悪するのである。

巷^{ちまた}では、劉表が失脚して黄忠が荊州を治めればいい、なんて童歌までできているそう

だ。

孫堅はそれらを聞くと、憐れみを込めて呟いた。

「こうしてみると、劉表も哀れなもんだ。人の恋路を邪魔するばかりに馬に蹴られるどころか龍の夫婦に狙われることになるとはな」

「国を傾かせるだけの価値が紫苑にはある、それだけのことだよ」

「……案外と惚^{のろけ}気るやつなんだな、歳三は」

「褒め言葉として受け取っておこう。紫苑、襄陽あたりまでの地図はあるか？」

「はい、すぐ持ってきますわ」

黄忠が部屋を後にしたところで、孫堅は呂蒙が歳三の隣に付いているのに気付いた。

その顔は最初見た時から変わらず青ざめているが、何故呂蒙をここに置いているのか。

孫堅はそれが気になった。

「おい歳三、なんで呂蒙がここにいるんだ？」

「ふむ？ 孫堅は私に一軍、預けてくれるのだろうか？」

「そりゃあな。歳三を遊ばせておくなんてもつたないこと、誰がするもんか」

「それを聞けて安心したよ。私は今回、前衛に出る」

「ん？ 一番槍が欲しいのか？」

「いいや、私と私の部隊は全て、呂蒙に任せる」

ぼん、と呂蒙の肩に軽く手を置いた歳三。

対する呂蒙は飛び上がるんじゃないかと思うぐらい震えていた。

気の毒な位青ざめていた理由はそういうことか、と孫堅は理解した。

今まで陸遜配下の下士官だったのが、いきなり將軍格に大抜擢である。

しかも歳三の口振りからして、呂蒙の指揮に全て従うつもりだろう。

一軍と、百戦錬磨の土方歳三と徐晃公明を殺すのは自分次第、考え難い重圧である筈だ。

孫堅はにやりと、意地の悪い笑みを浮かべて、あえて聞いてみた。

「それで、駄目だったらどうする？」

「決まっている。私が腹を掻っ捌いた後に首を刎ねてくれ」

歳三は平然とそんなことを言う。

どうやら本気であるらしい、眼が、笑っていない。

「責任は全て私取る。それが死を以つてでしか償えないというのなら、喜んで腹を斬るさ」

ああ、と孫堅は納得した。

自分が部屋を訪れても、ひたすらに机に向かっていたのは、この為であったのか。

呂蒙は書物に向かうと眠ってしまうという悪癖があると、陸遜から聞いていた。それを歳三は、呂蒙に大き過ぎる仕事と責任を与えることで克服させたのだ。

しかし、それで勝算はあるのか、と孫堅はふと思つたが、歳三が笑うの見て杞憂だと思つた。

「呂蒙に必要なのは、後は実戦だけだ。そして私は、呂蒙は勝つと信じている」
歳三はそういうと、にこやかに呂蒙に笑いかけた。

そこには邪念は一切なく、好青年が言葉の通りに信じていると思わせる笑みである。けれども呂蒙は、まだ顔を青くして震えている。

「呂蒙はそうは思つてないみたいだぞ？」

「初めては誰だつてそうだよ」

歳三はくすりと笑うと、いつもの不愛想な顔に戻つた。

丁度その時、黄忠が紙束を抱えて部屋に戻つてきたのである。

以心伝心じゃないか、と孫堅はこつそり思つたのであつた。

巨星、墮つ

歳三は脛を斬る、身を低くして蚊の様に這いながら脛を斬る。

この脛切りは本来、天然理心流にはない技である。

元は幕末における剣術の大隆盛時に流行った流派の一つ、柳剛流の得意技である。

それを歳三は改良を加えて、動きながら脛を斬るなどという器用なことをやっている。

人間が多く持つ弱点の中でも、脛は弁慶の泣き所と言われるほどの場所である。斬られた方は堪ったものではない、立つことが出来ずに即座に崩れ落ちる。

(弱いな、劉表の軍は)

また一人の脛を斬って足を掬い転がしながら、歳三は静かにそう思った。

歳三の周りには劉表軍が殺到しているが、まるで歯牙に掛けていない。

第一に気組みからして、劉表軍は歳三たった一人に負けているのだ。

(香風より与し易いと思ってるんだらうが、それこそんだ見当違えさ)

この男は別方面で猛威を振るう、徐晃の様な派手さは一切ない。

ひたすらに地面を凄まじい速度で這っては脛を斬る、それだけである。

だがそこには、歴戦で培われた技術がある。

技術で以て歳三は劉表軍を翻弄していると、それがわかる指揮官がいればこうはいかない。

更に歳三に言わせれば、殺意の質からして、劉表の軍は質が悪い。

たかが優男が一人という、[「]たかが[」]という心の油断が歳三には見えている。

こんなところに近藤がいれば、大喝一つで軍勢を縮み上がらせることができるだろう。

(でも俺ア近藤さんじゃないからね、別の方法で度肝を抜くさ)

ふっ、と歳三が涼やかな笑みを浮かべた。

それを油断、と見たのか一人の兵士が地面に突き刺す様に槍を突き出してきた。

(遅いな。が、星の槍なら、私は死んでいるか)

と、串刺しになった自分の姿をこの男特有の想像力で思い浮かべながら、鏢元で槍の切っ先を受けた。手応えからやった、と兵が嗤ったのが見える。

周りの兵たちも続けと言わんばかりに剣や槍を構えて続こうとする。

(嗤ったら、駄目さ)

嗤いとは、勝利とは程遠い油断からしか生まれぬことを、歳三はよく知っている。

がっつ、鏢元で受けた槍へと沿う様に兼定の刃を擦り上げて、斬りつけた。

丁度、蛟が雲を得て龍へと変わるように、その速さは誰の目にも止まらない。だが致命傷ではない、男はたたらを踏んだ。

よりも速く、返す刀で歳三は男の身体を真つ二つに袈裟斬りに斬り下げた。

龍尾劍、近藤の得意技とも永倉の得意技とも言われる、電光石火の荒業である。

男の上半身は吹き飛び、下半身は血を噴き出しながら二歩、三歩たたらを踏むとどうと倒れた。

「さあ。次は誰だ？」

と、歳三が言い終わるよりも早く、歳三自身が手近な兵士を斬り殺していた。

兵士たち皆が、歳三の鋭い眼光と斬撃の前に浮足立った。

一瞬でも、いけると思った自分たちが間違いだつたのではないか、そう思わせる迫力が、ある。

黒衣を鮮血で染めるその姿に、兵士たちは誰もが聞いたとある噂を思い出していた。南陽の黄忠を孕ませたのは人ではなく、龍であると。

そして、目の前にいるのは青州では黒龍と呼ばれる土方歳三その人である。

自然、この二つの言説が、兵士たちの中で組み合わさるのは当然とも言えた。

完全に劉表軍の兵士たちは、歳三の気組みに吞まれていた、そこへである。

呂蒙の指揮する、孫堅軍の一隊が突撃した。



雨上がり黄忠の軍を背に負って進軍する孫堅軍は、待ち構える劉表軍と数瞬のみ、相対した。

次の瞬間には孫堅の巨大な号令によって、兵たちが一丸となって突撃していく。

孫堅軍は正に、破竹の勢いで劉表軍を撃破していった。

当たるところたちまちに軍勢を突き破り、撃滅する姿はただしく暴虎であった。

その中でも呂蒙の軍は遊軍となつて劉表軍の柔らかいところに入り込み、敵を浮足立たせてから各個撃破していく。現代戦の思想が呂蒙の中にも根付いていると、歳三は嬉しくなった。

「人を動かすというのは楽しいだろう、呂蒙？」

全身に返り血を塗れさせながら、歳三が呂蒙に話しかける。

この男、どういう不思議があるのか肩で息の一つもしていないのだから、可愛げがない。

一方の呂蒙は手も足も全身を震えさせながら、歳三に短く答えた。

「はい」

と。だが歳三にはこれで十分だった。

呂蒙の眼には爛々と、指揮官としての眼が輝き始めている。

歳三は、そう見ている。

だからこそ、こうして自分と徐晃を使って各個撃破ができているのだ、とも思っている。

「だが、実戦がこれだけでは駄目だな」

と、歳三は面白そうに言った。

今の呂蒙ならば、間違いないく喰らいついてくるだろうという確信がある。

事実、呂蒙は喰らいついてきた。

見る人が見れば呂蒙もまた、歳三に毒されていると言うだろうが、もう遅いだろう。

呂蒙が先を促す様に、眼を輝かせて歳三を見ている。

「これよりもっと楽しく、経験になることがあるんだがね」

「なんですか？ それは？」

歳三にそこまで言わしめることがあるのなら、どれほどのものなのだろう。

呂蒙は眼を輝かせて、歳三の次の言葉を待った。

そして、歳三は十分に溜めてから、言う。

「負け戦の中で勝つことだよ。あれほど楽しい物はないぞ」

が、この言葉は呂蒙が歳三の正気を疑うだけに終わったのは、言うまでもない。

負け戦の中で勝つことなど、まず無理だからである。

だがこの男は、それこそが戦の醍醐味だと言わんばかりに、ただあつけらかんと笑っていた。

◇

孫堅の軍は暴虎であると、先に述べた。

それは黄忠の軍の直接的な手助けを一切受けずに、進撃を続けたということもある。

いとも容易く全軍で樊城を抜き、漢水を一気に渡河した孫堅軍は襄陽城の攻城戦に入った。

この間、黄忠の軍は樊城に入り、即座に樊城の住民と兵士を鎮撫したのも大きいだろう。

樊城陥落の報と黄忠、劉表に叛逆するの一報は襄陽城を大きく動揺させたのは言うまでもない。

元々、最近の暴政によつて劉表に対する臣民たちの評価は、地に落ちている。

ここで劉表に味方するよりは、孫堅や黄忠に恭順を示す方が良いだろうと考える者たちが出るのも、時間の問題であると言えた。

「土方様」

「なんだね、呂蒙」

「土方様はまだ何か、起こると思っておられるのですか？」

その一方で、襄陽城を囲む一軍に加わろうとする呂蒙を止めたのは、歳三だった。

既に陽は落ち夜戦の様相を呈し始めている最中、どこにでも行ける様にと、城を囲む孫堅軍から遠巻きに呂蒙たちは布陣している。

今にも襄陽城に駆け出したい兵たちを押し留めているのは、この眼光鋭い男がいるからだだった。

歳三は風を全身に受けながら、呂蒙の言葉に答えた。

「これは私の勘だが、何かうまく行き過ぎていて気がするのだよ」

「勘、ですか……それで私に全権を任せるといふ約定を破ったと？」

呂蒙の眼が、すつと細められた。

この短時間の間で、呂蒙は將軍としての風格が備わり始めていると歳三は感じている。

やはり戦は人を成長させる、と思いながらも、急な成長に追いついていない部分も、またある。

(まあ、そこは追々どうにかすればいいさ)

今は、襄陽城へ突撃の命令を下したくてたまらない呂蒙を引き留めるのが、第一である。

「終わって何もなかったら、鞭打ちでも斬首でもなんにでもすればいい。だから、待て」

歳三の言葉に本気を感じ取った呂蒙は、それ以上歳三を糾弾するのを止めた。

呂蒙もまた、歳三が見ているもの見てみようと歳三の横に並んでみる。

ただ強い風だけが、呂蒙の顔を叩いた。

呂蒙にはまだ、歳三が見ているものがなんなのかわからなかった。

◇

「孫堅様より伝令！」

呂蒙の陣に突然の伝令が駆け込んできたのは、それからすぐのことである。

伝令に自ら水を飲ませると、呂蒙はこれが歳三の言っていたことかもしれないと直感した。

事実、伝令が伝えてきたことは戦の趨勢すうせいを決めかねないことであつたからである。

「孫堅様は御自ら襄陽城より逃亡した劉表を追撃しに行くとのこと！」

伝令の叫びに、歳三はいち早く反応した。

「待て、ここで逃亡だど？」

神仏よりも己の勘を信じる男である。

歳三は先程から嫌な予感がしていたが、何か不味いという不安ばかりが募っていく。

この不安は数多の修羅場を潜り抜けてきた、いわば経験則からくる不安であるとも言えよう。

「呂蒙、敵が逃げる場合はどんな時だと思う？」

歳三の言い方は呂蒙に、ではなく自分に言い聞かせる様な響きがある。

呂蒙も歳三の物言いに怪訝に思いながらも、戦の前に覚えたことを必死になつて思い出す。

「えつとですね、一つは軍を立て直す時、一つは後方の仲間と合流する時」

「違う、この場合に当てはまるものは」

半ば、呂蒙の言葉を遮るようしてから駆けだした歳三。

一拍遅れながらも、軍に指示を飛ばしながら、呂蒙は歳三に必死に着いていく。

「当てはまるものつてなんですか!？」

「大物を釣り上げる時だ!」

歳三は勘付いていた、これは孫堅を釣るための罠であると。

孫堅軍の強さの一つには、圧倒的といえる孫堅自身の求心力の高さがある。

ここで孫堅が倒れば、襄陽の敵が盛り返し孫堅軍が瓦解しかねない。

(逸^{はや}るなよ、炎^は蓮^は!)

歳三は孫堅の無事を祈りながら、劉表が逃亡したという岷山の道を急いだ。

◇

暗闇の山中をひた走る孫堅と、その先に見える陰りながらも威容のある男が見えた。

徐晃と呂蒙と、その他兵を引き離す勢いで歳三は走り、孫堅に追いつこうとした。先に行つては駄目だ、ただそれだけを言う為に、炎蓮と、叫ぼうとした。

無情にも、歳三が叫ぶよりも早く孫堅は走つていき、そして止まり、崩れ落ちた。

歳三には見えた、孫堅の腰に深々と矢が突き刺さつていくその瞬間を。

周囲から歳三を狙う殺気が立ち上つているのを感じるが、そんなものはどうでもいい。

歳三は素早く孫堅の元に滑り込むと、崩れ落ちた孫堅を抱きかかえた。

「炎蓮！」

「よう……歳三じゃねえか」

「あまり喋るな、傷に障るぞ」

「いいや、俺はいいんだ。逃げろよ、歳三。これは罠だぞ」

「わかつている。わかつているさ。だが私が、友を簡単に見捨てられる男だと思つてい
るのか、炎蓮」

「はっ、それは違いねえな」

孫堅が自嘲気味に言葉を零す。

背中を抱く歳三の手に、命の熱い奔流が纏わりついてくる。

だが、このくらいならばまだまだ死なないと、歳三は知っている。

「香風！」

「うん、任せて」

歳三が声を出すと、すぐさま徐晃が前へと飛び出した。

そして歳三と孫堅を囲うように、呂蒙が布陣を展開させる。

今ここには、四面全てに敵が居ると思つて良いだろう。

殺気があちらこちらから、立ち昇っている。

「お前が土方歳三か」

遠く暗闇の向こうから、声が出た。

自分が勝者と確信して隠さない、居丈高な男の嫌な声である。

歳三は嫌悪感を隠すことなく、その声に応えた。

「だとしたら、どうする」

「ここで殺すに決まっているだろう」

嘲笑するような響きが、声の中にある。

歳三は逸る心を抑え、慎重に夜目を闇に慣らしていく。

今、歳三に必要なのは時間である。

嫌いな相手であるが、あの男の弱いところを、歳三はよくわかっている。

わかっているからこそ、言葉で時間を稼ぐことが出来る。

「劉表、お前の姿を先程ちらりと見たが、見た目は威風堂々として立派だな」

「当たり前だろう。私は景帝の第四子である魯恭王劉余の子孫であるぞ」

「私と違つてさぞ、立派な産まれのようなようだ。しかし、心は醜いな。なるほど、それでは紫苑から嫌われるわけだ」

容赦なく、歳三は劉表の劣等感を抉り出す。

夜の深い闇の中で、何者かが一人強く震えているのが見えた。

あれが劉表か、と当たりを付けながら、歳三は心からの侮蔑を込めて、言った。

「失敬、劉表殿は黄忠の真名を知らなかったのだな」

「その口が矢を受けても開いていられるか見ものだよ、射手！」

歳三、劉表の立ち位置を完全に看破した。

そして劉表の射手が弓を放つより早く、次の言葉を継いだ。

「私が何故、黒龍と呼ばれているのか知らないのか？ 劉表？」

拳銃ホルスター裏から、拳銃を抜いた。

歳三の前で大斧を構える徐晃が、真つ先に反応して伏せた。

この場で歳三の拳銃を知る者は、徐晃しかいない。

孫堅も、呂蒙も、劉表も、皆が奇妙な物を腰間から取り出した、くらいの認識しかない。

その中で歳三は、一人自分への怒りで打ち震えている。

(この世界に銃がないとかどうか、知ったことじゃねえ)

半ば不可抗力とはいえ戦いを呼び込み、あまつさ剩え友を負傷させた。

こんなこと、戦時でなければ自ら腹を搔つ切るぐらいの失態である。

だがそれは今するべきことではない。

(炎蓮は俺のために命ア張つたんだ、俺が弾丸の一つを撃てなくて、当てられなくてどうする)

歳三にはできることがある、やるべきことがある。

それが全て済んでから、腹なんていくらでも裂いてやろうではないか。

だからまずは、殺そう。

劉表を。

「劉表!」

叫んだ、歳三はただ叫んだ。

暗い山中のことである、歳三の、己にも向けられた怒気の籠つた声は、大きく響いたであろう。

先から当たりを付けていた影が、大きくおの慄いた。

「すまぬ、炎蓮」

「謝るなよ、お前らしくもない」

引鉄が引かれ、撃鉄が降りる。

銃声が鳴り響いた。

「ああ、まるで龍の咆哮だな」

孫堅はそう、小さく呟いた。

◇

歳三は引鉄ひきがねを引き続け、影に銃弾を叩き込んだ。

弾倉が空になるまで撃ち、最後の銃声が遠く闇の中へと消えていった時。

どうと倒れたのは本当に劉表であったのか。

歳三にはわからない。

わからないが、劉表軍が俄にわかに慌てだしたのを見て、弾は確かに当たったのだと確信した。

「逃げるぞ、炎蓮」

「逃げるとは、やっぱり今日はお前らしくないな、歳三。久しぶりの女と娘に出会って、気が落ち着いているんじゃないのか？」

「ああ、それだけ喋れるなら大丈夫だろうよ。呂蒙」

「はい！ 皆さんは楔形陣を築いて退却してください！ 殿しんがりは」

呂蒙が言うよりも早く、徐晃がそのままの位置に仁王立ちしている。

「シヤンに、任せて」

「殿は徐晃さんが務めます！ 皆さん、孫堅様を守りながら退却を！」

歳三が孫堅を横抱きにして、韋駄天の如く走り出す。

そして歳三らを守るように兵士たちもまた、走り出す。

劉表の軍は幸運にも、追つて来る気配はなかった。

かの軍もまた、急に頭を失うということがあつて統率が取れていないのかもしれない。

「これなら襄陽は問題なく落とせるな」

「ああ、策と権ならうまくやってくれる」

歳三の呟きに、孫堅はどこか遠い異国のことを喋る様に言う。

「何を言っているんだ、まだまだこれからだろう、炎蓮」

「いいや、俺はもう駄目だよ。腰から下の感覚が、さつきからない」

ああ、と歳三は哀しくなった。

戦好きには二種類の人間がいるものである。

自分で戦うのが好きな者と、頭だけになっても戦えるのであれば戦う人種である。

孫堅は間違いなく、前者だ。

「炎蓮」

「そんな悲痛な声を出すなよ歳三。それに丁度良かったんだ」

孫堅は力なく呟く。

それでも、孫堅はこれからの展望を見切っているようであった。

「これで荊州の力関係は変わる。これからは劉表に代わって黄忠が荊州北部を治める」

歳三はただ、聞く。

恐らく孫堅とは長い別れになるであろうことを思うと、言葉を挟む気にはなれなかったのだ。

「俺はその端っこの長沙に腰を下ろして、子供たちを追い出すのさ」

その姿は一軍を率いる虎の様な猛将ではなく、母の顔であった。

「俺が居ちやあ策も権も、このままだと俺の影に隠れちまって芽が出ない。だから、丁度いいのさ」

歳三これには沈黙した。

孫堅という偉大な母の前に、孫策も孫権も埋もれがちだったのは事実である。

突飛な形ではあるが、劉表に討たれるということも、子供たちの母離れの一環だったのか。

「ふふ、黄忠への橋渡しと俺の自慢の子供たちを更に育て上げる役は任せませ、歳三」

「任せろ。返しきれない程の借りが、私にはあるからな」

「それを聞いて安心したよ。俺は、少し眠る」

程なくして、歳三の腕の中から静かな寝息が聞こえてくる。

腰の矢の激痛も凄まじいはずであるのに、孫堅とは真実、剛毅そのものの猛将であった。

あつた、というのはもう、その覇気が煙の様に消え去っているからである。

歳三の腕の中にいるのは、安らかに寝息を立てるただの人の親であつた。

（巨星が一つ、墮ちたか）

と、歳三は悔いずにはいられないのではあつたが、しかし。

（孫策と孫権、二人を炎蓮以上にしてみせる）

と、新選組を創り上げた男は、別の炎を燃やし始めていた。

大河

襄陽城に劉表討死と、孫堅負傷の報が入ったのはほぼ同時であった。

この報がせめて、劉表負傷、孫堅討死と逆であつたならばと襄陽城の軍師たちは頭を垂れた。

孫堅の負傷により主に勝利をと逆に氣勢を上げる孫堅軍を前に、劉表軍は脆かつた。既に守るべき主君の居ない、劉表軍である。

襄陽城は呆気無く、孫堅軍の前に門を開く事となつた。

◇

襄陽の戦いで歳三たちが得た物は、単に土地だけの意味を持つものではなかつた。

荊州襄陽郡の樊城と襄陽城の間を流れる漢水とは、長江最大の支流に当たる。

つまり、漢帝国においても最重要と言える内陸河川港を勝ち取つた訳である。

更には漢水の先は長江へと繋がり、最後には揚州呉郡へと辿り着くことが出来る。

この揚州呉郡こそ、孫家生誕の地であり、この地を治めるのは孫家の悲願でもあつたそれを。

「長沙は俺が治めるから、お前たちで呉を分捕つてこい」

と、豪放磊落な英雄らしい孫堅は娘たちにこの言葉のまま伝えたのである。無論、反対意見はあつた。

特に軍師・文官代表である周瑜や陸遜、張昭や程普といったものたちによるものである。

が、孫堅は聞く耳を持つどころか逆に一喝した。

「いつまでもこの俺、孫文台が居ると思うな！俺が居なくても回る国を作つて見せねえか！」

と、至極真つ当な理由で吠えたのであるから、皆押し黙る他ない。

歳三は孫堅軍のことであるからと、ただ静かにことの成り行きを見守つている。

もつとも、歳三など孫堅の言葉など痛くも痒くもないのだろうな、と徐晃は思つている。

隣で腕を組み、壁にもたれかかっているこの男は、自分が死んだ後どうなるかなど、欠片も考えていないに違いないと、徐晃は長い付き合いからなんとなく察していた。

「というわけで、策！ 権！ 川を下つて俺たちの呉に居座つている敵なんかをさつさとぶつ飛ばして来い！ 将としての俺の、最後の命令だ！」

孫堅が叫び、皆が姿勢を正して返礼をする。

これだけで命令になるんだから、凄い話だよな、と歳三は笑いを堪こえている。

が、この男の複雑なところは笑みを堪える面つらの下で、寂寞せきばくを感じているところである。
 (これで炎蓮の時代も終わったわけか)

孫堅の傷は、膿うむようなこともなく無事に治療を完了している。

しかし、孫堅の腰に深く抉えぐり込んだ矢は、骨の髄を運悪く傷つけた。

結果、日常生活はともかく戦働せんどうきは土台無理である、というのが医者いしやの結論であった。

いの一い番に治療の結果を聞いた歳三さいさんなど、無言のままに医者いしやの首を締め上げながら身体ていごと持ち上げたほどである。

それでも、孫堅の傷の具合は変わることにはなかつたし、孫堅の態度も変わらなかつた。

——歳三よ。いいのさ、これで。俺から娘たちに軍を任せる丁度いい機会さ。

——だから歳三、そこまで気に病むことはない。

——代わりに、娘たちの呉郡解放まで見守ってやってくれ。

ふと気付けば、慌ただしく出立の準備を始める呉勢の中で、孫堅がこちらをじつと見ていた。

その瞳から何を見出したのかは、歳三にしかわからない。

歳三は黙って、力強く頷くと、徐晃を伴って出立の準備を始めることにした。

◇

歳三たちを乗せた船が、漢水を行く。

その姿を、樊城の一番高い楼から孫堅が飽きることなく見ていた。

米粒の様に小さくなっても、眼を細めてずっと眺めていた。

漸く、水平線の彼方に船が消えた頃、孫堅は口を開いた。

「俺が聞くのも野暮だとは思うんだが」

椅子に座った孫堅が、傍らの人物にそう語り掛けた。

「歳三を行かせて、良かったのか？ 紫苑？」

孫堅の傍らに立っていたのは、今や荊州では黒龍の婦人と呼ばれる黄忠その人である。

黄忠はにこにここと、人の良い笑みを浮かべながら孫堅の言葉に答えた。

「約束しましたから」

「約束？」

「ええ。この羽織、すっかりいろんなところがほつれているでしょう？ だから、歳三様に返すには忍びなくて……」

「直しておくからまた取りに来てくれ、ってか？」

「そういうことです」

歳三と揃いの羽織か、と孫堅は黄忠の羽織を見るが、ほつれているところなどまるで見えない。

黄忠が丹念に手入れをしてきたのが、容易に想像できる。

多少黒が色褪せては見えるものの、とても渡せない物ではない、と孫堅は見た。

結局、理由はどうであれまた帰ってきてもらうだけの口実としたかったのだろう。

その気持ちかわからぬほど、孫堅も女を捨ててはいない。

それに、黄忠と変わらない未練を持っているのは自分も同じかと、孫堅は自嘲した。

「? なんでお母様は笑ってるの?」

と、孫堅と黄忠と同じように、楼から船を眺めていた人影が動いた。

背は小さく、子供らしい意匠の服と、これまた幼く感じる飾りで髪を留めている少女。

孫堅の三人娘最後の一人、孫尚香である。

子供らしく、喜怒哀楽が激しく好奇心の塊の様な彼女。

孫堅の笑みを見て思い出したのか突然、大きな声を上げた。

「あーそうだ! ねえ、お母様はなんでシャオを歳三に会わせてくれなかったの!」

「そうだなあ、理由を説明するなら……」

「私がまだ子供だから!」

「そういうことになるな」

孫堅は一切否定することなく、言い切った。

その言葉に孫尚香は可愛らしく、ぶくうと頬を膨らませて抗議した。

「ひっどーい！　じゃあどうして璃々ちゃんはいいの!?」

「どうしてってそりゃあ、璃々は歳三の子供だからな。娘が父に会うのに理由は要らんだろ」

全く、孫堅の言う通りである。

何かしら会わせるのに問題があるのならばともかく、娘が父と会うのに理由は要らない。

それでも孫尚香は納得がいかないという風に頬を膨らませている。

孫堅は黄忠と共に苦笑しながら、ぽつりぽつりと理由を話し始めた。

「歳三の、あいつの生き方には魔性がある。それを受け止めるには、シャオにはまだ早過ぎる」

「むー、シャオだってもう軍議も指揮もわかるのに！　歳三に惑わされたりしないよ！」

「いや、絶対に惑わされるね。策なんかがいい例だ」

と、孫堅は三人娘の長女である孫策を例に挙げた。

孫策は既に、歳三の影響を受け始めていると、孫堅は言う。

「それに、俺から始まる孫一族は絶対に歳三の影響を受けるからな。シャオが歳三に会ったら船に隠れてでも着いていくと聞かなくなるのはわかっていたから、会わせなかつたのさ」

「歳三様のこと、よく知っておられるのですね」

「ふふ……そりやそうさ、これまで一緒に戦ってきたからな……。それに、夫にも歳三のことは散々聞かされてきた」

黄忠と孫尚香の二人の頭の上に、疑問符が浮かぶ。

孫堅の夫、となると黄忠は姿を見たことがなく、その名前を風の噂でしか知らない。

「炎蓮、貴方の夫の名は確か……鉄心、と聞いていますか？」

「ああ、そりや偽名だ。夫の頼みでもあった。曰く『副長に寄り道をしているのを叱られたくない』から……と言っていた」

一方で孫尚香は疑問と好奇心を隠し切れない、といった風に孫堅を見ていた。

孫尚香は父親はまだ幼い時に旅に出た、と聞かされて育ってきたのである。

そして周泰の持つ武器『魂切』こそが父の武器を模したものだとも、聞いている。

「歳三には伝えるべきだったのだからかねえ、私の夫の名を」

「では、代わりに私が聞いて胸に秘めておきましょう。会えるのなら、また会える筈ですから。私と歳三様の様に」

「それもそうか」

と、孫堅は納得した様に頷いて、急に笑い出した。

「しかし、男というのは歳三といい俺の夫といい、自分勝手に動くようにできているのか

ねえ」

「貴女も大概自分勝手じゃないですか」

「馬鹿を言うな、これでも孫家の江東獲得の為に最大限に動いてきたつもりだ」

事実、漢帝国の沿岸部の大半を掌握しているとも言える歳三が、盟友なのである。

その歳三が嚴白虎討伐に本気を出せば、孫家の江東獲得などすぐであろう。

しかし、親心と孫策・孫権たちの孫家としての自尊心を尊重して、呉郡解放まで、なのである。

後は歳三を頼るなり自分たちの手で勝ち取るなりしてみせろ、と言う言外の想いもある。

夢破れて長沙に戻ってくるのも、娘たちの勝手だと孫堅は思っている。

「さて、娘たちのことは大丈夫か。シャオも、秘密にできるな。この俺の、最大の秘密だ」
「そこまで子ども扱いしないでよー」

孫尚香は頬を膨らませてふんぷんと怒っているが、その行動こそが子供っぽさを加速させていると本人は気付いていない。

そんな孫尚香に優しい笑みを浮かべながら、孫堅は言った。

「私の夫の名前はな——」

遠く、雄大な大河を眺めながら、孫堅はあの後ろ姿に想いを馳せているようだった。

黄忠も、孫堅の気持ちがわかるが故に、愛しい男の消えた大河を眺め。孫尚香はただただ何もわからずに孫堅の見る先を見ようとしていた。

◇

歳三は船の先頭に立ってぼつりと言った。

「壮大だな」

「漢水を前にしてそれだけしか感想がないのかしら、歳三？」

孫策がからかいながら、歳三の横に並んだ。

歳三は例の不愛想な面で、一見面白くなさそうに流れていく景色を眺めている。

「私では、それくらいしか言葉が思いつかんよ」

その実、心の中ではむくむくと詩を書きたい思いがもたげているのだから複雑な男である。

「国破れて山河在り、とはよく聞いたものだが、この川の流れを見ていると切にそう思う」

「意外と、詩的な男なのね。知らなかったわ」

「失敬な。今のは借りものの言葉とはいえ、こう見えても詩を嗜む男だぞ、私は」

「へえ？」

と、にやりと笑みを見せた孫策の姿に歳三は孫堅と同じ獰猛さを見た。

迂闊な事を言ってしまった、と思つてももう遅い。

「じゃあその腕前、見せてもらつてもいいかしら？」

「それは」

「それは困る、つていうのは無しよ。言葉は剣と同じで言つたら引つ込むものじゃないわ。まさか天下の土方歳三が、詩を嗜むと言つておきながら人に見せられない、なんてこと言わないわよね？」

孫策がにやにやと笑みを浮かべながら、歳三の出方を伺っている。

歳三は渋い顔をして、どうにか句帳を見せずに切り抜けられないかと天を仰ぎ。

ふと、妙案を思いついた。

「周泰、という者が居たな」

「明命のこと？ それがどうかしたのかしら？」

「あの者の武器の源流を、知りたくはないか？」

露骨に話を逸らされた、と思うが確かにそう言われると、孫策も気になる。

周泰の武器は歳三の持つ、和泉守兼定と堀川国広の二振りの二本刀とよく似ている。

元々二人は初対面であるし、周泰の武器は母である孫堅が用意したと聞いている。

考えてみれば考えて見るほど、偶然と言うには出来過ぎな類似点がある。

「なるほど、それをねたに詩作の腕に関してはまだ今度、というわけね」

「今度、ではなく永遠にないよ」

「ふうん、そうくるのね……。まあいいわ、明命！」

「はい！　なんでしようか！」

孫策に呼ばれた瞬間、音も影もなく現れたのは周泰である。

小柄な身体に長州か土佐の者を思わせる長刀を背負った、褐色の少女は貴重な隠密だと歳三は見た。歳三でさえ、孫策と孫権を守るために潜む周泰の気に勘付くには、時間が掛かった。

（隠密に向いている。が、胸は貧相でも肉付きは悪くない）

と、女好きのこの男は周泰についてひっそりとそう思った。

「明命、頼みがあるんだけど、私たちに明命の武器を見せてくれないかしら？」

「あうあう、雪蓮様にそこまで言われなくてももちろん見せますよ！」

と、独特の焦った声を上げながら、周泰がすらりと長刀を抜いた。

そして孫策が周泰から受け取った長刀を、今度は歳三が孫策から受け取る。

柄から唾にかけて刀には一言ある歳三でも、見事と評するしかない細工の出来である。

歳三はぎらりと太陽に刃をかざすが、いつぺんの曇りもない刃は、正しく名工の作であろう。

「すまぬが、握ってみても良いか？」

「土方様まで、そんな、もちろんですとも！」

素直で真面目な子だな、と無愛想な面の下でそう思いながら、歳三は長刀を握った。

瞬間、どこか懐かしさが、歳三の中を駆け抜けた。

握りが、かつて所持していた刀と似ているのである。

(似ている、どころではない。私はこの刀を知っている)

と、思うと歳三の顔が綻ほころんだ。

同時に、あいつめ、こんなところに寄り道していたのかと、あの顔を褒めてやりたくなる。

「何かわかったって顔してるわね、歳三」

「そうとも。私はこの兄弟に当たる刀を、今腰に帯びている」

「なんですって？」

「ああ、これは間違いない。私の持っていた何本かの兼定の内の一つだ」

「あ、あの、それは『魂切』っていう名前がありまして……」

「魂を切る刀、か。いい銘を貰ったじゃないか」

まるで自分の子供をあやすように、嬉しそうに『魂切』を眺める歳三。

が、歳三はそれでいいかもしれないが、話に置いてけぼりの孫策は不満顔である。

船の縁をとんと叩きながら、歳三に話の続きを促している。

それを、周泰はどうしたら良いのか、困惑顔でしどろもどろとしていた。

「すまぬな、孫策。懐かしくてつい嬉しかった」

「そういう歳三を見るのも珍しくて嫌いじゃないけど、いい加減話してくれない？　こ

の刀は一体なんなの？」

「これはな、前に話した私が蝦夷で死ぬ前に部下の男に託した刀だよ」

「そういえばそんなことを言っていたわね、それがどうしてここに？」

「巡り合わせと言うしかあるまい。それでだ、炎蓮の夫の名前を、孫策は聞いているか

？」

孫策は周泰と顔を見合わせた。

刀の話が、いつの間にか自分の母親の、あるいは主君の夫の話へと飛躍している。

けれども孫策も周泰も、母であり主君であった孫堅の夫の名前も姿も知らないのである。

俄然、二人共興味が湧いた。

「そうだな……確か名は鉄心と言ったかしら。管輅かんろという占い師の言葉を聞いて、旅を

続けたそうだけだ」

そこまで言ううと、孫策は吹き出した。

「今にして思うと変ね。お母様なら無理矢理にでもついてこいつて離しそうにないのに」

「まったくだ」

周泰に『魂切』を返しながら、歳三は言った。

「鉄の心か。賢く、勝ち気な坊やだったあいつに相応しい偽名だよ」

歳三は船の縁に腕を置いて、風を前面に受けながらその名前を言った。

「市村鉄之助。それが孫策、君の父親の名前さ」

◇

呉郡は、あまりにもあつさりと孫策たちの手に陥ちた。

呉郡を牛耳っていた嚴白虎が、部下も何もかもを見捨てて逃走したのである。

その行方は誰も知らないが、何故逃げたのかだけは容易にわかった。

「歳三様が来る、ということをお聴しながらここまで来た甲斐がありました」

徐州から兵を率いて来ていた、郭嘉の仕業であった。

郭嘉は歳三が長江という大河を使うだろうということを事前に予測し、全ての用意を終えて徐州から南下してきていたのである。そこへ、土方歳三到着の噂である。

並の者なら肝を潰して当然であるし、真つ向から勝負をしても勝ち目がないのは明白である。

孫策などはつまらなさそうな顔をしていたが、周瑜に勝ちを勝ちなのだからと窘められていた。

それは、歳三は良い。

だが洛陽で皆と別れた時に、会いたいと思っていた人物の顔が見当たらないのである。

「稟、梨晏はどうした？」

「そのことについてですが……」

と、郭嘉は声を潜めて。

「青州の豪族たちが、梨晏を筆頭にして歳三様を追い落とそうとしています」

「なんだ、私の予想は間違っていないかったか」

あの時、何進の言う通りに青州に向かっていたら、今頃歳三は骸になって転がっていただろう。

そして歳三の顔には、仄暗いものが浮かび上がっていた。

「徐州と同じように肅清が必要だな。私が青州入りするのに策はあるか、稟？」

「もちろんです、歳三様」

それを聞いて満足したか、歳三はいつもの無愛想に戻って孫策に声を掛けた。

「孫策よ。私は青州に戻る。後は徐州から援助を出すか、他に必要なものはあるかね？」

「今のところはないわ。できたら戦がしたかったけどね！」

「違うない」

と、歳三は明るい笑みを浮かべた上で、郭嘉に小さく語りかけた。

「今回の肅清は我々に被害があつてはならない。できるな、郭嘉？」

「お望みのままに、歳三様」

青州にまた、血の雨が降ろうとしていた。

嵐の前の静けさ

青州に肅清の嵐が吹き荒れる前、歳三は郭嘉と共に一先ず徐州へと潜伏していた。名は定かではないが、徐州の沿岸部にほど近い、城でのことである。

その徐州の某城で郭嘉と共に歳三が機を待っていた時に、こんな話がある。

◇

徐州には陳珪と陳登という極めて優秀な母娘おやこがいる。

と、いうのを郭嘉との寝物語で歳三が知ったのは、徐州に入って間もない頃である。

しかし優秀な人材とは得てして奇特な人間が多いというのは、ある種の共通項なのであろうか。

歳三が脚で調べた二人の評価は、決して良いと言えるものではなかった。

陳珪は常に笑みを浮かべている胡散臭い女うさん、陳登など人より土が好きだと言われる程であった。

なるほど、面白いほどに変人であると歳三は思い、興味を持った。

(なんだ、随分と面白れえヤツみてえじゃねえか)

さて、どちらに会ってみようかと歳三が考えていた時、意外にも陳珪の方から接触が

あつた。

「うふふ、こんにちは。土方様」

「む？ ああ、良い日和だな、ご婦人」

歳三は知っていて、敢えてすつとぼけた。

陳珪漢瑜、年齢不詳という言葉がこれ程似合う女もそうはいないだろう。

陳登いう立派に元服を迎えた娘が居るにも関わらず、豊満な胸を惜しげもなく晒し、また、過剰とも言える色香を放つ格好をしている。具合に至っては孫策たちよりも過激、と言えるだろう。

が、今更色香に惑わされる様な歳三でもない。

これも一種の演技、と思つてしまえば自然、胡散臭いという評価も妥当と思えた。「ところで、私はご婦人とどこかでお会いしましたかな？ 最近は私に話しかけてくる人間も少なくて、そんな人間は皆覚えていてる筈ですが」

これは本当のことである。
歳三の雷名が天下に轟くに連れて、同時に容赦のなさを伝える悪名までも広まっている。

現状、触らぬ神に祟りなし、と言わんばかりに人々から避けられているのが歳三の今である。

若い兵士たちの間では、歳三に話し掛けられるかの度胸試しが賭けとして流行っているらしいというのも、耳の早いこの男は良く知っている。知っているからこの目聡さとい男は、先程から廊下の片隅から歳三を伺う若い兵士の姿を切れ長の眼で見つけている。

「いいえ、こうして話すのは初めてですわ、土方様。私は陳珪ちんけい、陳珪漢瑜と申します」
 「ふむ、陳珪殿ですか。いやあ、貴女のような美しい人に話し掛けられるとは、私もまだまだ捨てたものではありませんな」

と、歳三は心にもないことを平気で言う。

もう、陳珪の心積もりをなんとなしに看破しているのである。

(こいつは人を利用するが、自分の理想を持って動いている人種だ)

そう思えば、今になって歳三に接近してきた理由もわかる。

見る者が見れば、徐州すらも歳三が治めていると言つても過言ではない今。

徐州の政界に手っ取り早く深入りするなら、歳三という絡め手を使うのが一番である。

(が、こいつが何をしてえのかはよくわからねえ)

為人はわかれども、人心を読み切るには情報が足りないのも事実である。

伊東甲子太郎の様に才気走っている訳でもなく、今という時期を選んだのもよくわからない。

(しかし、優秀な人材ってんなら、使わない手はないわな)

そう考えた歳三は、悪戯心がふつふつと湧いてきた。

こういつた手合いには、最初に度肝を抜くのが肝心であると歳三は知っている。

だから、二の句を告げようとする陳珪の言葉の先を取って、言った。

「さて、廊下のそこで覗き見している君は、稟の調練を終わらせてここにいるのだろうか？」

急に歳三に声を掛けられた兵士は、飛び上がらんばかりに驚いた。

声だけでなくぎよろりとした眼にまで睨まれたのだから、その心情は察するに余る。

ぶるぶると可哀想なまでに震える兵士を横目に、歳三は笑いながら陳珪に言った。

「それでは陳珪殿、私はあの兵士を絞り上げないといけないので、これにて御免」

問答無用で陳珪との会話を切り上げると、歳三は兵士を引き連れて廊下の先へと消えた。

「……逃げられたのかしら？」

と、呟いている陳珪を他所よそに、歳三は兵士の肩を組んで顔を近づけていた。

この男が持つ独特の覇気は、芯から人を萎えさせる何かがある。

もう殺されるのではないかと流す汗もなくなった兵士に、歳三は問いかけた。

「陳登がいつもどこにいるか知っているかね？　そうすれば賭けについても不問にする

が？」

◇

歳三の逸話の一つに薬売りの行商の格好をして各地で剣術修行をした、というものがある。

郭嘉に手配した上で、城に出入りする御用商人の使いっ走りの格好をすればもう、誰も彼を土方歳三として見ない。それくらい、歳三の行商人姿は堂に入っていた。

例のふてぶてしい面構えのどこから愛想が出てくるのかは、永遠の謎だろう。

すれ違う兵士や従者に人の良い笑顔を向けては、腰を下げている。

(星には見せらんねえやな)

と、歳三は腹の中でそんなことを考えながら食堂へと向かっていた。

兵士から聞き出した陳登の話に、食通というものがある。

これは美食家というよりは、農を通して得た恵みをきちんとした料理に昇華させることに喜びを見出しているという、文字通り食に通じている、と言った方が良くかもしれない。

これには歳三、内心で嬉しく思っている。

前にも何度か書いたが、歳三は食の好みにはうるさい方だ。そういった人物が農政に着いてくれれば、味気ない戦場料理も少しは良くなるというものである。

そして歳三は、陳登が兵士の言う様な食通かどうか確かめるために、こうして己を隠している。

(あいつが陳登か)

食堂の片隅に、例の姿を歳三は捉えた。

肌は母である陳珪よりも日に焼けているのは、土いじりを好むという人間性によるものだろう。

服装も実用性一点張りで露出は少なく、比例してか胸も控えめである。

陸遜に比べれば神経質そうな瞳が、眼鏡の奥で輝いていた。

(こいつア、逸材かもしれないねえな)

と、歳三は思いながら陳登の隣の席に腰を下ろした。

所作全てが、どこまでも農民臭い。

陳登は少し訝しんだようだが、農民上がりにしか見えない男に気を揉むのはすぐにやめた。

ちらりと格好を見て、ようやく城を出入りしている使いつ走りの一人と思ひ声を掛けた。

「ん？ 農家の人、じゃなくて城の御用商人の使いがボクに何か用？」

「へえ、あつしは元は農民だったのをこうして使っていたらいいや。いや、用つ

てほどのことはねえんですがね、最近城中の食事が美味しいのは陳登様のお陰と聞きやして、お礼を申し上げたく思いましたね」

それにしてもよく回る舌を持つ男である。

愛想の良い笑みを浮かべながら、歳三は如何にも元農民ですと言った風に喋る。

歳三、元々は豪農の出であるから参考に出来る言葉遣いなど幾らでも身近に居た。

流石の陳登でもこれが歳三とは見抜けなかつたか、自慢げに胸を張って答えた。

「そうだよ。ボクが時々城の料理人を手伝っているんだ」

それに、自分の功績を褒められては誰も悪い気はしない。

特に自分が一番重要だと思つているところを褒められては、余計にである。

新選組副長になつてからは、おべつか遣いと多く接してきた男である故、その辺りもよく心得ている。人がどうすれば自分が思うように喋ってくれるかを、よく知つているのだ。

◇

話が盛り上がれば、自然と人の口は軽くなるものである。

普段無口で不愛想に思われがちな歳三が、話し上手だとは誰も思わないから、これはよく効いた。歳三は陳登を褒めながら、それでいてそれとなく、話の向きが土方歳三に向かうように仕向けていた。この辺り本当に巧みであると言わざるを得ないだろう。

陳登もいつの間にか、話の向きを土方歳三へと向けていた。

「その土方歳三だけど、農家の重要さを土方はちゃんとわかってないとボクは思うね」
「へえ、そんなことを言う人は初めて聞きやした」

凄い肝を持つているなあ、と思わず感嘆しそうになるのを、歳三はぐつと堪えた。
影で悪く言うだけなら、歳三も陳登を評価したりはしない。

陳登は土方歳三よ、聞いているならここに来てみるという強い論調なのである。

歳三は如何にも土方歳三を怖がっています、という風に陳登に聞き返した。

「しかし陳登様は土方様が怖くないんですけえ？」

「皆、土方が怖くて何も言えないだけだよ。程立や郭嘉辺りなら違うと思えるけど、他は土方の顔色を伺ってばかりの怖がりばかりだよ」

「なるほど、陳登様はあつしの知らないことをよく知っていらつしやるようで」

「でもボクは土方のことを少しはいいところもあるとは認めている」

これも、歳三の陳登に対する評価を高める一因となった。

ただ批判するだけでなく、認めるべきところは認める、という点である。

これはなかなか、出来る人間は多くはない。

(視点が土に根付いているから、ある意味で公平に人を見られるのだ)

と、歳三は陳登のことをそう評した。

そう評価したのなら、歳三は陳登のこの快刀乱麻を断つ言い方が好きになつていた。物怖じしないところなど、特に気に入っている。

「が、そんなところを一片たりとも見せないのが、歳三の変装術が真などころである。へえ、例えばはどういう？」

「徐州の豪族たちを一斉に処分して、土地を全て直轄地にしたところとかね」

孫候の姿が、歳三の脳裏に浮かんだが、即座に頭から掻き消した。

陳登にとつて豪族に良いも悪いもない。

あるのは農という土に根付いた考え方、それだけである。

「そもそも豪族が間に入つて農家から租税を取つて、更に上に収める為の租税を搾り取る二重構造が無駄だったんだ。それを解消した、というところは良い点だと思うよ」

「ですがそうおっしゃるつてことは、悪い点は他にもあると陳登様はおっしゃりたいんですけえ？」

「そうだね、ボクが考えるにはだけど」

と、陳登が語る農政案はそちらの方面に疎い歳三でも、正に画期的であると思えた。

眼から鱗が落ちる、なんてことなどこの男にとつては歩兵操典を読んで以来かもしれない。

(こんな人材がいるなんてなあ、まだまだこの国は広いぜ)

と、歳三は陳登の語りを頭に叩き込みながら、そう思うのであった。

◇

郭嘉は陳珪を高く評価し、歳三は陳登を高く評価した。

歳三は郭嘉のことを信頼しているし、郭嘉もまた歳三のことを信頼している。

二人を登用することに、互いに異存は全くなかった。

そして徐州における全ての用意を整えた上で、歳三は執務室に陳珪を呼び付けた。

相変わらず、あの胡散臭い笑みを絶やさずにやってきた陳珪に、歳三は開口一番

「やあ陳珪。君の娘に会ってみたが、なかなか手厳しいな」

と、言った。

笑みを浮かべるだけだった陳珪の顔が、さあつと青褪^さめていく。

母娘であるが故に、自分の娘の土方歳三に対する評価も、良く知っているのだろう。

これで我が子への不満を一つでも漏らせば、郭嘉は最初から陳珪を捨て置いたに違いない。

陳珪はそれでも、臆することなくただ頭を下げ、我が子の非礼を詫びたのである。

「我が子のこと、母である私がよく知っております。罰を与えるのであれば、どうか私を

罰^よしていただいていけませんか、土方様」

「漸^よく、その笑みの仮面の下を見せてくれたな、陳珪」

歳三の言葉にどういふことだろうと、疑問符を浮かべながら頭を上げる陳珪。

「なに、すまなかつた。私が貴女という宝石を測りかねたから、こんな悪戯をしてしまった。許してもらうのは私の方だ」

と、歳三の方が頭を下げる始末である。

これには陳珪の方が驚いて眼を見開いた。

傲岸不遜天下に己のみと噂される程の不愛想が、頭を下げていたのである。

陳珪は俄かに慌てた。

「そんな、土方様が頭を下げるようなことは一つも！」

「そうか。陳珪がそういうのなら上げておこう」

完全に遊ばれている、と陳珪が思ったのはこの時であろう。

目の前の男を測るつもりが、測られていたのは自分の方だと、聡い陳珪は気付いた。

こうなるとその娘にしてこの母あり、文句の一つでもずばりと言えるのが陳珪である。

が、それよりも早く歳三は言葉を紡ぐことで防いだ。

「良いだろう、そう政界の波を渡りたいのであるならば、母娘揃って渡ることを許す。

稟」

「はい、歳三様」

「私の代わりに一筆頼む。陳珪陳登母娘の徐州政務入りを認める旨を、書き上げておいてくれ」

「わかりました。部署などはいかがが致しましょう?」

「とりあえずは陳珪が陳登の補助ができるころがいいだろう。陳登が農政関連が希望のようだから、役職としてはそのあたりになるな」

凄まじい早さで、陳珪は自分たちの去就が決まっていくなを感じていた。

そして、次の歳三の言葉で完全に言葉を失うのであった。

「というわけで、君たち母娘を徐州における農政関連の最高責任者に命ずる。故に、その働きを存分に見せてくれ」

そう言うのと陳珪の肩を一つ、ぽんと叩いた歳三は郭嘉と共に執務室を後にした。

一口に農政、と言っても徐州の農政は豪族の一斉処罰により直轄地が非常に多い。

その為、政治手腕如何によっては簡単に農民叛乱、引いては黄巾党の乱に似た事態が起きると言っても過言ではない。そんな重要な役職を、陳珪と陳登は任されたのである。

陳珪は歳三と郭嘉が去った後に、漸く事態を飲み込めたのか、悔しそうに一言。

「こんなこと、夫の一刀斎以来です……!」

と、呟いたのであった。



全ての用意を整えた、と先に書いたが、それは船の用意も一つにあった。

歳三は馬上ではなく船上の人となつて、青州への航路を望んでいた。

郭嘉とここには居ないが程立らによる細工も万全、後は出港するのみ、というそんな時である。

珍客が一人あつた。

歳三、訝しみながら船から身を乗り出してその姿を見ては、大いに驚いた。

「呂蒙じゃないか。着いて来たのか」

呂蒙である。

青州の政情不安の為に、歳三らが急ぎ徐州へ行つた為に呂蒙は置いて行かれていたのである。

もつと正しく言えば、呂蒙に関しては有耶無耶になつていた言う方が正しい。

孫策と呂蒙とを交えて、話を付ける暇いとまもなかつたのである。

呂蒙を船上へと迎え入れた歳三は、取りあえず呂蒙の怒りの言葉を頂戴することにした。

「酷いじゃないですか土方様！ 私を置いて行くなんて！」

郭嘉からの冷たい視線が歳三に突き刺さる。

批難半分嫉妬半分、といった具合であろうか。

しかしこの男にとつてはそんな視線は慣れたもの、柳に風である。

何でもないように、歳三は呂蒙に話し掛けていた。

「私はあのまま、周瑜や陸遜の元で経験を積んでいくものだと思っていたが」

「確かに周瑜様や陸遜様の元でも私は成長できるでしょう。いえ、それが正しい道なのかもしれない」

そう言つて視線を伏せた呂蒙であるが、次の瞬間には歳三の眼を見て、半ば叫んでいた。

「しかし、私は土方様の元で学びたいという気持ちの本心なのです！　どうか、どうか

……！」

ふむ、と歳三は少しだけ考えて、言った。

「孫策とは、話を付けてきたのかね？」

「はい。貴女の好きなようにしなさい、と言われて来ました」

「ああ、実に孫策らしいな」

そう言う孫策の姿が、歳三の脳裏にまぎまぎと浮かぶようである。

けれども、呂蒙に懐疑の視線を送る者が一人居た。

郭嘉である。

歳三に対する信の厚さは垣間見ることが出来たが、果たして実力の程は、と言いたいのだろう。

先程と同じく、批難と嫉妬が緋ない交まぜになった眼で、歳三に問い掛けた。

「歳三様は、孫堅殿の……いえ、孫策殿のところでもまた誑たがかしてきたのですか？」

「誑たがかしたとは酷い言い草だなあ。呂蒙は私が丹精込めて軍師に仕立てあげようとした娘だよ」

「直伝の軍師、ということですか。それで腕前の程は？」

「襄陽にて私の望む軍の動きをしてみせた、と言えば良いか？」

そう言われてしまつては、郭嘉も言うことはない。

「そうですか。それならば、これから存分に働いてもらうことになりますね」

「そうだろうな」

そうして二人して笑い合つてから、郭嘉は呂蒙へと向いた。

「はじめまして呂蒙。私は郭嘉奉孝。真名を稟と言います」

「は、はい！ 私は呂蒙、呂蒙子明！ 真名をあしえ亜莎と言います！」

「亜莎、ですか。良い名前ですね」

「ありがとうございます！ 稟様！」

あまりに素直な呂蒙の態度に、郭嘉は若干面食らっているようである。

歳三の様な捻くれ者の近くに居続ければ、確かにこの素直さは新鮮であるだろう。歳三は海風を受けながら、二人の軍師の会話を静かに聞いていた。

肅清の嵐

嵐とは得てして、海からやってくるものである。

もちろん、この場合の嵐とは土方歳三についてを指す。

船の真つ先の縁で両腕を組みながら、歳三は青州を睨んでいた。

「城が、見えてきたな」

「はい」

隣に控える郭嘉が、答えた。

見える城とは東萊城、何進に指定された例の城である。

（あの城ではいろんなことがあった）

歳三はぼんやりと、孔融のことを思い出す。

（どうやらあの城は、鮮血とは切っても切れない縁があるらしい）

血生臭いのは歳三の方だろうに、と聞けば誰もが思うことを歳三は眠たげな眼で考えていた。

郭嘉は、歳三の横に控えたまま何も言わない。

一方で郭嘉の反対側に控えている呂蒙は、不思議そうに歳三に問い掛けた。

「それにしても、歳三様はどうしてそんなに大変装が巧みなのですか？」

そう、今の歳三はいつもの仏蘭西軍士官服フランスではない。

他の兵士たちと同じように粗末な服を身に纏い、頭に頭巾を巻いている。

けれども、この男の服の下には手甲のみならず脛当てまでもが入った鎖帷子をずつしりと着込んでいることを、郭嘉と呂蒙のみならず船中の兵士たちは皆が知っている。

そもそも、船の兵士たちも同じように、服の下に歳三と同じ鎖帷子を着込んでいるのだが。

「ふふ、ここのうのにはこつがあるんだよ、亜莎」

歳三は面白そうに笑いながら、呂蒙の問いに答えた。

「服だって地位だってなんだって、自分には似合わないとか分不相応だとか、そもそも役不足だなんて考えをさっさと捨てることだ。さもないければ自分か着る何かが浮いてしまっただけになる」

それが歳三流変装術のこつのようなのだ。

もつとも、歳三の言い分からすれば変装のみならず、普段の格好に關しても通じるものらしい。

「そうすれば自然に、格好の方が自分に合わせてくれるようになる」

「……そういうものなのですか、稟様？」

「歳三様がそういうのなら、そういうものなのでしょう」

呂蒙の疑問に、郭嘉はあつさりとその答えた。

投げやりにも聞こえるが、呂蒙はそれで納得したのかそういうものと呟きながら頷いている。

少し、静かな時間が訪れる。

風の音だけが妙に耳を打つ時間の後に、歳三は堪えきれなくなつた様にぶ、と嘖き出した。

「しかしこう、二人に歳三様歳三様と言われてたらなんだね、どうにもむず痒いな」

「何を今更、どういう意味ですか？」

「稟、言葉通りの意味だよ。今の私は土方歳三ではなく、徐州の兵の某だ。それが、様を付けられて呼ばれてるんじゃない、どうにも座りが悪い」

「つまり歳三様の変装術のこつには具合が悪い状態だと？」

「まあ、そういうことになるね」

ただの一兵士が、郭嘉と呂蒙から様付けで呼ばれていたら、確かに浮くだろう。

郭嘉は顎に手を当てて少し考えてから、言った。

「ではどうされたいのですか、歳三様は？」

「そうだなあ、この船団の兵士長は亜莎になって貰って、私はその副長の義奉とでも名乗

ろうかね」

歳三は自分の大きな掌に、義奉の字を指で書いた。

その指の動きを読み取った郭嘉は、偽名の由来に気付く。

「読み方違いの一字違いですね」

「そうなるな」

歳三の諱である義豊から、取ったのであろう。

わかるものには非常にわかりやすい偽名である。

わかりやすいから、郭嘉にも呂蒙にも呼びやすい偽名であることは間違いない。

けれども、呂蒙は不安そうに声を上げた。

「私が兵士長、ですか？」

「何、別に戦をするわけじゃないんだから、気は楽だろう？」

「そうですか……」

「それに亜莎はまだ面が向こうに割れていない。稟は風と対立した体でこちらに来たそうだからな」

だから、形の上では歳三と郭嘉は徐州に潜伏していた、ということになる。

となれば、歳三も郭嘉も、青州では姿を偽らなければならぬお尋ね者となる以上、呂蒙以上の適役は他にはいないだろう。それに呂蒙は短い間ながらも、郭嘉の指導を受け

ている。

「これほど信頼できる人材も居ないな、と歳三は思っているが、呂蒙は尚不安そうである。」

「なるほど……でも私はつい、歳三様と呼んでしまいそうで少し不安です」

「ならば副兵士長を略して副長、とも呼んでくれ、亜莎。正直、そっちの方が私は嬉しい」

「一番ではなく二番の副長が嬉しい、ですか。本当に変わっていますね、副長は」

郭嘉の言葉に歳三はくすりと笑って。

「なに、そういう性分だよ」

と、答えた。

船が、青州の港へと接舷しようとしている。

「では、梨晏を助けに行くとするかね。兵士長」

「はい、副長」

船は港へと接舷した。

嵐が遂に、青州の地へと降り立った瞬間である。

◇

港の検査は、酷く杜撰ずさんであつた。

呂蒙が郭嘉が用意していた書簡を見せるな否や、そのまま一軍を通すという具合である。

流石に、歳三もこれには閉口した。

攻略する側として楽なのは確かだが、こうまで杜撰であると後のことが心配である。背中に兼定と国広を入れた菰こもを背負い直した歳三は、郭嘉の方をちらりと見た。

郭嘉もまた、歳三と同じように兵士の服を纏つて変装をしている。

「これは風との策です」

歳三の視線の意味を即座に解した郭嘉は、そつと歳三に耳打ちした。

傍目からは、副長が部下からの報告を受けている様にしか見えない見事な演技である。

「ならば、仕方ない」

歳三は郭嘉も程立も信頼している。

その二人が策というのなら、事後策も万全であろう。

呂蒙率いる一軍は何の労苦もなく、東萊城下へと入り込んだ。

門内、酷く慌ただしい。

兵士たちが街路を縦横無尽に駆け回り、何か災害でもあったのかという具合である。

呂蒙が、兵士の一人を捉つかまえて、様子を探った。

「孫乾様の命により、徐州より応援に参った軍である。一度孫乾殿にお目通り願いたい」
「これはありがたい！ 現在、三方向より土方軍が襲来していると情報がある。一刻も早く、我らと合流していただけると、徐州に対する恩、絶対に忘れませぬぞ！」

「三方向から土方軍が襲来ですか……？」

「はい。ここだけの話になります」

と、兵士は小さな声で話の続きを言った。

「程立殿の情報によりますと、土方は攪乱を目的に三つに軍を分けているとのこと。土方本人が紛れ込んでいる軍も特定済みらしいのですが、青州の勢力は水面下で三つに分かれている始末なのです」

「だから、私たちに早く合流して欲しい、と？」

「はい。今のところ、太史慈様を主とする青龍派、中立を示す黄龍派、表には出ていないものの、土方を支持している黒龍派に分かれておりまして……」

「孫乾様はいずれに？」

「静観派です。ですから貴女方が青龍派として加わっていただけたら、我ら青龍派は……」

「事情はわかりました。ですがまずは私たちとしても孫乾様に会わぬことには道理が立ちません。この話は孫乾様に伝えておきますので、また」

「わかりました。孫乾様は執務室にて太史慈様を補佐しておられます」

そう言い終わると、兵士は出征の準備をする為か慌ただしく去っていった。

呂蒙はちらりと歳三の方を見た。

とどのつまり、程立による偽計であると歳三は判断し、歳三は呂蒙に領き返した。城内の兵力が程立の偽情報によって城を空けている今が、青州奪還の好機である。

「行きますか、副長」

「はい、兵士長」

速やかに、呂蒙率いる軍勢は東萊城内へと入り込んでいった。

◇

東萊城執務室前に辿り着く。

何進の弁によれば、東萊城到着こそが歳三の青州刺史就任の条件であった。

が、歳三はそれだけで終わらせるつもりは全くない。

ここで歳三に叛乱しようとする意志を、根こそぎ刈り取るつもりで赴おもむいている。

「では兵士長、城内に關しては」

「はい、副長。わかつています」

一言交わすだけで呂蒙は歳三の、ひいては郭嘉の意図を読み取っていた。

連れてきた徐州の兵は、ほぼ空き城となっている東萊城制圧の為のものである。

そして歳三がするべきことはただ一つ、執務室内の制圧である。

「では、後はお任せします。副長」

「心得ました。兵士長」

呂蒙が、兵士たちを率いて行つた。

歳三は郭嘉一人を控えさせ、執務室の扉を開け放つた。

皆が、揃っている。

趙雲が、程立が、孫乾が、執務室に入ってきた歳三の姿を見た。

ただ、太史慈だけは、自身の息子らしき男を引き連れた豪族たちに囲まれている。

「太史慈様、ここは一つ私の息子と婚姻を！」

「いやいや、私の方が出来がよろしいかと」

「お前の息子などより我が家系の方が為になりますぞ！」

「いや、私はそういうのには今、興味がないかなあ、つて」

太史慈は困つた様に笑いながら、明確な拒否を浮かべている。

青州で別れてから、ずっとあのような心労を重ねていたかと思うと、怒りが湧いてくる。

無論、不甲斐無い己自身に、である。

「む、なんだ貴様！ とま」

れ、と言う前に兵士の顔面を裏拳で叩き潰した歳三。

ずるりと床に崩れ落ちる兵士の音で、漸く太史慈と豪族たちが、歳三に気付いた。

ただし、姿が姿であるので太史慈以外はこの男が土方歳三であると気付いていない。

「無礼であるぞ、貴様！」

と、ふんぞり返りながら歳三に詰め寄った豪族を前に、歳三は冷ややかな視線を向けていた。

体軀、太り気味で脂ぎっている、豚の様な男である。

こんなのが太史慈の手を煩わせ、自身の子供と婚姻を結ばせようとしていたと思うと。

「吐き気がするぜ」

「貴様、今何と言った？」

「吐き気がすると言ったんだ、豚め」

「貴様！ 徐州の者の様だがこの青州豪族である」

「そんなの」

男の言葉を遮って、歳三は嘲笑った。

「知ったことかよ」

しゅるりと、菰の結びを解いて、中から兼定を取り出すと刀の鯉口を切った。

「そ、その劍は?!」

男の良く脂で実った首を、兼定の刃が斬り抜けていった。

驚いた顔のまま、ぼん、と飛んだ男の首は執務室の隅の方へと転がっていった。

豪族たち皆が驚き騒めいた瞬間、ある者の首には槍が突き付けられていた。

「さて、主の帰還の様ですな」

「趙雲! 貴様! 土方とは喧嘩別れしたと!」

「はて、なんのことでしょうなあ? 私は主に忠誠を尽くすこと、忘れた覚えはありませんが」

歳三は頭に巻いていた頭巾を取り、乱暴に髪をかき上げた。

それだけで、往年の色男の完成なのだから、この男はずるい。

槍一つで趙雲が豪族たちの動きを止めている間、太史慈は眼に涙を貯めて歳三の姿を見た。

そして。

「と、歳三ー!」

抱きついてきた太史慈を、歳三は思いつ切り受け止めた。

「やあ、すまなかつたな。梨晏」

「本当だよお、皆大変だったんだからね!」

歳三の厚い胸板に頭を擦り付ける太史慈を、優しく撫でつける。

それを豪族たちは嫉妬と怒りを含めた眼で見ていたが、はっと気づいた様に声を上げた。

「た、太史慈様こそ土方歳三排除の旗印！ それをお前は許すと言うのか！ それでは我らが裏切り者という道理が通らんではないか！」

起死回生の一言だと言わんばかりに、豪族たちはうんうんと頷いている。

が、心底呆れた様に、憐れむような眼で歳三は豪族たちを見ている。

「何を言っている？ 梨晏は元から私のものだ。裏切るも何も無い。そもそも裏切り者は貴様らの方だろうか？」

こうなれば、と周りを引きずり込もうと思ったか、豪族たちは次々に声を上げていく。

「て、程立殿！ 話が違うではないか！ 土方は青州には相応しくないと！」

「はいー。今の腐った豪族がいる青州には、お兄さんが居るに相応しくないと風は思いましたー」

「そ、孫乾殿は！ 孫乾殿はどうなのですか！」

「私は心も身体も全て歳三様のもの。裏切るつもりなどありませんわ」

最初から味方などなく、土方歳三を排除するつもりはなかった。

むしろ排除されるのは自分たちの方、と漸く豪族たちは気付き、へなへなと床へ座り

込んだ。

それと同時に、執務室の扉が呂蒙によって開け放たれた。

「副長、いえ、歳三様。城内の制圧、完了しました」

「ご苦労垂莎。それからあいつらを捕らえろ。抵抗するなら斬り捨てても構わん」

「わかりました」

呂蒙が指示によって豪族たちが手際よく捕縛される中。

太史慈は顔を真つ赤にして歳三に尋ねた。

「あのさ、それで歳三……私は、その……」

「なんだ、梨晏は私にとつての大切な人だと言いたかったのだが、先程の言葉では不足かね？」

歳三は柔らかに微笑み、太史慈は赤い顔を隠す様に歳三の胸板に顔を押し付けた。

◇

服をいつもの仏蘭西軍士官服に着替え、椅子に腰を下ろした歳三は来客を待った。

郭嘉も既に、いつもの服装である。

どのくらい時間が経つただろうか、執務室の外が慌ただしくなつたかと思うと乱暴に扉が開け放たれ、何人もの縛られた男たちが放り込まれてくる。最後に現れたのは徐晃であった。

徐晃が静かに扉を閉めると、歳三は品定めするように男たちの顔を眺めた。

一応は、歳三を討とうと前線に出ていた者たちだから、どいつもこいつもくせのある顔である。

「ありがとう、香風」

「……ううん。お兄ちゃんの為だから」

「嬉しいことを言ってくれるな。おいで、香風」

「……ん」

徐晃は徐州から兵を率いながら、歳三たちと別行動をとっていた。

それこそが、郭嘉と程立の仕掛けた最後の罠であった。

偽情報に騙された豪族たちを背後から奇襲し殲滅するという、正に仕上げの役である。

歳三が徐晃の頭を優しく撫でていると、縛られた男たちの内一人が、大声を上げた。

「土方！ 貴様！」

「貴様とはなんだ。私は大將軍何進殿より青州刺史就任の叙勲を正式に受けている。何か問題でもあるのか」

「それはお前がこの城に足を踏み入れられたらの話だ！」

「お前の目は盲目か？ 私はこうして、この城どころかこの部屋に足を踏み入れている

が」

これ見よがしに両足を男に見せつけた歳三は、にやりと笑った。

「私が幽霊とでも言うか？ 脚はこうして二つあるぞ？」

「土方あああ！」

怨嗟の声も、歳三には届かない。

最早どう叫ぼうともすべての勝敗は決し、残すのは肅清の裁断のみである。

「さて、此度の一件。豪族による反乱に相違あるまい。風、この者たちはどうするのが妥当か？」

「そうですねー、叛乱を企てた以上、一族郎党滅ぼしてしまうのが妥当かとー」

「所謂、いわゆる族滅かね」

「ですねー。こうなったら一気に埋めてしまおうのが良いでしょうー」

「それは良くないな」

歳三はやんわりと、程立の提言を拒否した。

もしかしたら許されるかもしれない、そんな希望の光が一瞬でも見えたのだろう。

豪族たちの顔に光が差し込んだようであった。

けれどもそんな温情を、鬼と呼ばれた男に求める方が愚かと言えよう。

次の歳三の言葉に、豪族たちは顔を青褪めさせた。

「万一這い出てこられても、困る。全員斬首がよからう」

◇

豪族たちの肅清には、丸三日程掛かった。

主要な者たちは市中にて斬首刑に処され、それ以外の者たちは郊外にて肅清された。皆、揃って穴に埋められ、青州による叛乱の芽は完全に排除されたと思つて良い。

漸く、終わったかと歳三が一息ついた時、郭嘉からす、と一通の書簡を差し出された。「それでですね、歳三様。こんなものが袁紹殿から届きました」

「火急の用か？」

「はい。急ぎ確認していただきたいと思ひます」

「ふむ、なんだこれは書き出しからして檄文か？」

歳三が眼だけを動かして檄文を読んでいる間、趙雲らなどは静かに談笑していた。が、それもすぐ静かになった。

歳三が、怒りを堪こらえているのがわかったからである。

態度にこそ示してはいないが、眼には明らかな憤怒が浮かんでいる。

「月が朝廷に対する叛逆者だと？」

歳三は小さくそう言ううと。

「ふざけているのか、これは？」

確認するかの様に、郭嘉に問い掛けた。

「いえ、事実です。風と共に調べたところ、北は公孫贊殿から南は孫策殿まで、幅広く檄文が飛ばされている形跡がありました」

歳三は郭嘉の言葉を聞いて、静かに袁紹からの檄文を机に置いた。

「それで、この謀略の首謀者は誰だ？」

「洛陽にいる皇甫嵩將軍からの情報によると、何進と十常侍、そして袁紹の三組が謀つたようですねー」

程立が進み出て歳三の疑問に答えた。

歳三は顎に手を当てて考える、謀るからには何か理由がある筈である。

あるはずであるが、歳三が考えたところで今回の謀略は手に余る。

どうにも、規模が大きすぎるのだ。

歳三は素直に、程立に意見を求めることにした。

「何故かは、わかるか？」

「陳留王による霊帝への直訴が発端かと思われませう」

程立は、賢い。

今更始まったことではないが、物事を説明するにしても人の性に合わせて変えることが出来る。

だから程立は賢い。

歳三は、一から説明されるよりも少しづつ己の力で答えを導く方が好きなのを、見抜いている。

見抜いているから、逐一全てを説明するような答え方はしない。

「確か月、董卓が個人的に家庭教師をしていた、霊帝の妹が陳留王だったな。つまり陳留王は董卓の教育を受けて今の朝廷の現状を嘆いた、ということか」

「はい、それが理由で姉である霊帝に直訴を行ったと、風は推察します」

「つまり、何進自身の権力維持の邪魔になったというわけか」

「そういうことか」と

「それで何故、袁紹なのだ？」

「お兄さんは本当に中央政界に疎いんですね」

「仕方なからう」

歳三は苦笑を浮かべた。

「本当に知らないんだから」

歳三はくすくすとして笑っているが、眼は笑っていない。

完全に、据わってしまっている。

底冷えするような眼が、爛々と光っているのだから、恐ろしいことこの上ない。

が、今更こんなことで胆きもを冷やす様な連中もこの場にはいない。

居たとしても日が浅い呂蒙くらいだが、呂蒙ですらごくりと息を飲む程度である。

「まあ、いい。それについては道々聞くとして、我々も合流しようじゃないか」

「何にですかー?」

「決まっている、この反董卓連合に、だよ」

歳三は面白そうに笑っているが、やはり眼だけは笑っていないかった。

待ち望まれた男

虎牢関と汜水関とは、洛陽の東に位置する交通の要所に置かれた要塞のことである。この地方一体は非常に険しく、虎牢関と汜水関を無視して洛陽に至ることはまずできない。

つまり、大軍を動かすにはどうしてもこの二つの大要塞を抜く必要があった。

それは袁紹が檄文を飛ばした反董卓連合についても同じである。

巨大な汜水関を前にして、威風堂々たる軍勢が平野に満ち溢れていた。

「あれが、反董卓連合の陣地か」

と、歳三が静かに呟いた。

見れば袁の字が書かれた旗や懐かしき公と孫の文字、あるいは劉や曹と言った字が見て取れる。

郭嘉を疑っていた訳ではないが、袁紹は漢のありとあらゆる諸侯に檄文を送っていたようだ。

そして、それに同調する他の諸侯の多さに、歳三は眼を細めて見つめていた。

「いやあ、それにしても壯観、の一言に尽きますなあ。主」

「ふむ。あの諸侯の旗の数々に、我々の旗は負けてはいないだろうか？ 星？」

「我らの旗が、ですか？ いやいや、この様な美しい柄の旗を、そうそう超えられるものなどそうはありますまい」

「そうかね」

歳三は存外そつけない。

趙雲の言葉に、歳三は自軍の頭上ではためいている誠の旗印をちらりと見た。

今回の諸侯連合に合流するに当たって、自軍の存在を知らしめる為に必要と程立に説かれ、歳三が意匠を担当したのがこの赤心の旗であった。即ち、赤地に金刺繍の誠一字と、白の染め抜きのだんだら模様。かつての新選組隊旗である。

（またこいつを使えることになるとはなア）

歳三の感動は、やや薄く見える。

こんな時でなければもう少し、この男なりに喜んでいたのであるが、事情が事情である。

不愛想という厚い面おもての皮の下で、この男の激情が渦巻いている中。

それを、袁紹に気取られぬ様にと散々、郭嘉、程立、呂蒙という軍師たちに釘を刺さ
れている。

（とにかく、袁紹とかいうやつやつの面を拝んでやらねえとな）

と、軍勢を反董卓連合の陣地へと進める途中、どこかの兵士たちが立ち塞がった。合戦には不向きとしか思えない、絢爛豪華な鎧に身を包んだ、兵士である。

歳三は眠たげな眼で、立ち塞がった兵士たちを品定めする様にぎよろりと睨んだ。

一瞬、兵士たちは歳三の迫力に押された様だが、すぐに立ち直った。

「我らは袁紹様の兵士である。貴殿らはどこから参られた」

後ろに居るのがこの連合の親玉だから、己が相手にも強気で出られる、と歳三は読んだ。

事実、彼ら兵士の顔には侮蔑の表情が見て取れる。

どこかの田舎者とも思われているのだろう、歳三はそれでも、眠たげな眼だった。

「青州の土方歳三」

「並びに徐州の孫乾公祐です」

「それではお二人とも、袁紹様の檄文を見てここに参られた、と?」

「その通りだ。で、連合軍の本陣はどこにあるのかね?」

「それよりも先に、輜重しちゆうを置いて行ってもらいまじょうか」

「なんだと?」

輜重とは、軍において前線に輸送する補給品の総称である。

加えて言うなら、輜重を荷車などに乗せて運搬する者たちを、輜重兵と呼ぶ。

その輜重を置いていけということとは即ち、兵糧や被服、武器といった荷駄を置いていけ。

ということと同義である。

歳三の眼が、すつと細くなった。

「ほう、袁紹殿は黄巾党の残党か、はたまた野盗か何かなのかね？」

「貴様！ 袁紹様を愚弄するか！」

「人の軍の輜重を奪おう、という輩が盗人ぬすびとでないなら、なんと云えばいいのだ？」

歳三、袁紹の兵士たち相手に完全に喧嘩腰である。

腰間の兼定にも、半ば手を掛けている。

それを止めようと徐晃と太史慈が歳三の腕を掴んだのと同時である。

「貴方たち、何をしているのかしら？」

袁紹の兵士たちの後方から、凜としていながらも、力強い声が掛けられた。

(この声、洛陽で桃香と逃げた時に聞いた覚えがある)

歳三は眉を少しだけ顰ひそめ、やはり只者ではなかったか、と心中で呟いた。

袁紹の兵士たちが、狼狽うろたえている。

一体何者なのか、歳三も興味が湧き始めていた。

「これは曹操様！ それがこの土方なるもの、輜重は袁術様の下で管理するという連合

での決め事に反抗し、更には袁紹様まで愚弄するようなことを言いだし始めたところでした」

「そうなの。ところであの檄文のだけれど、輜重の類を袁術が管理するなんて一言も書いてなかったわ。もしかして貴方たち、その程度の説明もなしに輜重を取り上げようとしたんじゃないでしょうね？」

「いえ、その、ですが！」

「そうしようとしたのね？」

袁紹の兵士たちが、曹操の静かなれど芯のある力強い言葉の前に、たじろいでいる。その姿は、兵士たちが壁となつて見えないことが、歳三にはもどかしかった。

曹操と言えば、曹操孟徳その人しかありえない。

三国志の知識に疎い歳三でさえも、曹操については近藤からよく聞かされている。が、そこに恐怖は微塵もない。

あるのは純粹な興味と好奇心である。

(治世の能臣、乱世の奸雄……面白れえじゃねえかよ)

関羽ひいき鼻肩の近藤が聞けば怒られそうなことを、歳三は平気で考えている。

今この瞬間だけは、全てを忘れて曹操孟徳という人間を見てみたい。

歳三はそう思った。

思ったからには、この男の行動はやはり早い。

「ほう、連合軍は輜重を一括で管理する取り決めがあつたのですか。それを聞いて安心しました。ならば早急に、我らの輜重をお渡ししましょう」

「あ、ああ。そうしてくれるとありがたいが……う？」

急な歳三の変わり身に、袁紹の兵士は戸惑い気味である。

無論、何も企みもなしに歳三がこうも変心することは、まずない。

実際、物資の大半は兵士たちが背負っている程立考案のリユツフザツクに入っているから、輜重を手放すことになつたところで歳三の軍は全く痛くないのである。

むしろ過剰な物資を守る必要がなくなる分、攻撃力が増したと言つてもいい。

が、そんなこととは露知らず、袁紹の兵士たちは首を傾げながら輜重を持つていく。

「まったく、麗羽の兵にも困つたものね」

「いえ、知らなくとも罪は罪。危ういところを助けていただきました」

「そうね、貴方を助けるのはこれで二回目かしら」

歳三は遂に曹操の姿を見た。

背は低くとも内に秘めた覇気は十全であり、高貴さを感じさせる紫を主とした衣服は違和感を覚えさせない程にその身によく似合っている。そして髑髏どくろを模したかのような髪飾りが、あの時と同じように巻いた金の髪の毛の根元で不気味に輝いている。

(これが、曹操孟徳か)

知らず、歳三は背中に汗をかいていた。

英雄と呼ぶに相応しい者たちとは何人も会ってきたが、曹操の前では数段劣るかもしれない。

いや、劣ると言うのは相応しくない。

曹操が段違いに、高い位置にいと表現した方が良いだろう。

それくらいの重圧を、歳三は曹操から感じていた。

「そうでしょ、土方歳三？」

「覚えていましたか」

「ええ。貴方程の人物を忘れるほど、私は愚かではないわ。私としてはもう少し貴方と話していたいのだけれど……」

と、曹操が視線を後ろへと逸らした。

歳三も同じように視線を向けると、二人の美女が立っている。

一人は黒髪で長髪、血気盛んといった言葉がよく似合う闊達そうな美女だ。

もう一人は片目を隠す様な髪型に、どこか冷たさを感じる、これまた対照的な美女である。

その内、片目を隠している方が口を開いた。

「華琳様、袁紹が軍議だとお呼びです」

「ありがとう秋蘭。まったく、盟主しか決まらない軍議つて軍議つて言えるのかしら、ねえ土方？」

「さあ、私はこれから赴くので何とも言えませんな。それに」

「それに？」

「私はどうにも、そのの將軍に酷く嫌われていると思われるので、早く軍議に顔を出した
いものです」

歳三、先程から曹操と話す度に、黒髪の方に酷く睨まれるのである。

それほど曹操に心酔しているという証なのだろうが、一々睨まれるのも面倒くさい。

曹操ともう片方の女性が、呆れた様に声を上げた。

「春蘭、もう少し我慢できないの？」

「ですが華琳様、この男は危険です。早目に始末するのが得策だと！」

「姉者、提言するにしても本人を目の前にして言うのはどうかと思うぞ」

歳三、たまらず大笑した。

危険だと思われることが、愉快であったのもある。

それに、これは動物的な勘で歳三の心胆を半ば見抜いていると言つてもいい。

そうでなければ早急に始末すべし、等という忠言は出てこない。

(こいつア、面白いことになりそうだ)

そう心の中で思いながら、歳三はいつもの例の面に戻って笑うのをやめた。

「方々から恨みを買っている自信はあるが、まさかここまでとは」

「私の春蘭が本当にごめんなさい、土方」

「いやいや。曹操殿の配下に危険な男と思われているのは、光栄の極みです」

「ありがとう、土方。とりあえず、麗羽……袁紹と他の諸侯も待っているでしょうから、行きましようか」

「先導をお願いします、曹操殿」

軍勢を星に任せた歳三は、徐晃と呂蒙とを連れ たつて、曹操の後に着いていくことにした。

◇

曹操に連れられて、反董卓連合本陣の天幕を潜くぐった歳三は、とりあえず感心した。

兵士の持つ武器や鎧、幕一つとつても、質が良い。

手に引つかかることなくするりと抜けるような、滑らかな生地である。

袁紹の破格の経済力の一端が、そのまま映し出されているようであった。

「確か袁紹殿は三公を四世に渡って輩出した名門中の名門、だったか」

「おーほっほっほ！ ええ！ その通りですわ！」

歳三が呟いたのと同時に、天幕の中で高笑いがこだました。

(こいつが袁紹か)

曹操以上に髪を巻き、先程の兵士たちと同じく豪華絢爛一点張りの鎧。人を見下したような高笑いに加えて、それを隠さない迂闊さ。

自身の出自を隠すことなく誇示するその態度、とにかく全てが、歳三の気に障った。

(出自で戦が勝てるなら、徳川將軍家と旗本八万騎が負ける理由にやならねえ) もつとも、この男の嫌いは先の戊辰戦争に於いての経験による部分も多い。

出自の高い味方連中に苦汁を舐めさせられ続けたことも、袁紹と言う人間を嫌う一因なのだろう。

ただ、歳三はその経済力と見た目だけは本物である、とも評価した。

(冷静になれ、歳三)

ここで袁紹を殺すのは容易いが、大義名分を持つているのはあくまで袁紹である。

袁紹を殺せばそのまま、逆臣として諸侯連合に滅ぼされるのは眼に見えている。

歳三はむつつり顔で、袁紹に世辞の言葉を吐いた。

「いや、流石袁紹殿の人徳ですな。これほどまでに軍勢を集められるとは」

「当然ですわ!」

袁紹は胸を張って答えるが、諸侯連合が必ずしも士気が高いとは言えない、と歳三は

思った。

まず公孫贊とその後ろに控える劉備と関羽、それと大きな飾りのついた帽子を被る少女。

全員の顔が暗い。

檄文に脅されて仕方なくやってきました、という空気がありありと見て取れる。

公孫贊も疲れた様に、歳三に笑いかけていた。

孫策も、同様である。周瑜と陸遜を率いて軍議に参加しているが、どうにも身が入らないと言った雰囲気を感じそうともしていない。袁紹はそれすら気付いていないのだろうか。

(気付いていないのだろうか)

と、歳三は断じた。

他に士気が高そうに見えるのは、おべつか遣いが上手そうな連中ばかりで見たくもなかった。

それ以外に居るとすれば、袁紹の隣に座っている、小さい少女位である。

(あれが袁術なのだろうか)

背は低い、袁紹と同じ髪質を持ち、長い髪の毛の先をこれまた同じように巻いている。

服装もとにかく豪華絢爛、と言った感じで趣味の悪い、粹とは言えないものである。ふと、袁術の後ろに控えている女と眼があつた。

につこりと笑いかけられたが、歳三は軽く頭を下げるだけで眼を逸らした。

(あれは、性質たちの悪い、厄介な悪人だぜ)

勘で、なんとなくそう思ったのである。

そう勘が告げたのなら、歳三の中ではそれが絶対である。

それくらい、歳三は自身の勘を信じている。

(とにかく、一癖も二癖もあろうかという連中ばかりだな)

と、歳三は思いながら自分の席に腰を下ろした。

「では、最後の侯が揃ったところで……あら、孫乾はどこにいるんですの?」

「徐州陶謙代行の孫乾なら私に全てを任せる、と言っています。委任状もありますが」

「でしたら構いませんわ。これより、軍議を始めると致しましょう」

嫌なやつだぜ、という言葉をも、歳三は済んでのところで飲み込んだ。

とりあえずは静観するかと、腕を組んで両眼を閉じ、流れに身を任せることにした。

◇

歳三がそれから眼を覚ましたのは、徐晃と呂蒙に揺すられていることに気付いた時で

ある。

「ちよつと貴方！ 今までの話は聞いていたんですの!？」

袁紹など、大層ご立腹の様子であるが、孫策など必死に笑いを堪こらえている。

公孫賛と劉備も、流石に眠っていたのは良くないだろうと言う風な顔をして、歳三を見ている。

しかし曹操だけは、品定めをするかの様に見てくるのだけが、気になった。

が、そんなこと歳三にはどうでもいい。

天下には喧嘩師の己のみと言わんばかりに、歳三は口火を切った。

「汜水関を誰が最初に攻めるか、の軍議をしていたと私は思っていたんだがね」

「ええ、その通りですわ」

「軍議というものは勝つ為にやるものだと思っていたが、軍議の名を借りた、ただの先陣の押し付け合いではないか。そんなものを聞いていても仕方ないだろう。だから、寝ていた」

「……では、今がどんな話かわからない、とでも?」

「どうせここにいる全員が先陣を拒否し、たらい回しになって、私の元にお鉢が回って来たのだらう。違うか?」

「……聞いていたようですわね」

袁紹が怒りの矛先を下ろしかねている中で、隣の袁術はにやにやと笑っている。

(姉妹仲は、どうやら良くなさそうだな)

と、歳三は袁術を觀察した上で、もう少し袁紹を突いてみることにした。

「ところで、董卓が皇帝に叛逆し洛陽に立て籠もった、とのことだが、これは信用できるのか？」

「わたくしのこと信用できませんの？」

「違う。袁紹殿が受け取ったと言う、董卓討伐の勅令が偽物だった場合、逆臣の汚名を被るのは我々ではないか。私は、その勅令そのものが偽造されたのではないか、と疑っている」

「あ、ありえませんか！ そんなこと！ 皆さんに確認していただいても構いませんわ！」

僅かに、袁紹から動揺が見て取れた。

(なるほど、勅令は何進が偽造させたな)

皇帝を、傀儡としていたあの女狐なら討伐の詔みことりの一つや二つ、簡単であろう。

勅令自体は本物だが、作り出された経緯からすると偽物である、と断じているのは歳三だけだ。

歳三はもう、袁紹のことを本物の逆臣としか見ていない。

(やつの人柄そのものが、証拠みたいなもんさ)

今まで多くの人間を、規律の名の下に肅清してきた男である。

そういった裏で何かと繋がっている人間に対する嗅覚は、人一倍鋭い。

が、所詮は歳三の勘が根拠の論である。

そんなものが、本物の証拠を持つ袁紹を論破できる可能性はない。

だから歳三は。

「そうか、本物であるなら、私も安心だ」

大人しく引き下がった。

「ならよろしいのですが。それで、そこまで疑う以上、先陣を引き受けてもいいのではな
くて?」

「すまんが、情報が無さ過ぎる。汜水関にどれだけの兵力がいるのかもわからないのか
ね?」

袁紹は口を噤んだ。

恐らく袁紹は、先陣に汜水関の兵力の誘き出しという囿の役割を担わせる魂胆だと、
歳三は読んでいる。先陣が汜水関の兵力を誘き出し、瓦解してくれたなら尚更良し。

問答無用で大兵力でもって汜水関の兵力ごと叩き潰しにくる。

歳三はそう、読んでいる。

これでは、何も進まない、というそんな空気が辺りを支配し始めた中。

袁術の後ろに控えていた女が、思い出した様に声を上げた。

「実はですね！ 袁術様の偵察隊がこの様な投げ文を持ち帰ったんですけれど……」

◇

袁術の軍師、張勳が持ち帰ったという文は開かれた上で軍議の机上に置かれた。

全員が見れるようにという配慮なのだろうが、一度開かれた形跡があるのに歳三は氣付いた。

何故この時分で、と歳三は訝しんだが、文に書かれていた文字に戦慄することになる。

「華雄と義豊を……なんでしょう、双方向の矢印が一つ？ 入れ替える、と言う風に読めますわ」

「華雄は汜水関を守備している董卓側の將軍のことね」

「ところで、このギホウ、とは誰のことですか？」

謀られたか、と歳三は張勳をちらりと見たが、件の人物は人の良さそうな笑みである。恐らくこのまま知らぬ存ぜぬを通そうにも、いつか張勳からの追及が来る。

これは人から暴露されるよりも、自分から暴露する方が良い。

「ああ、それは恐らく、私のことだな。ぎほうではなくよしとよ、と読む」

歳三の言葉に、袁紹が素早く反応した。

「貴方……確か董卓の軍師である賈馱の部屋に入り浸るくらい親しかった、と何進大将

軍から聞いていますけど、本当ですか？」

「本当だよ。しかし困ったな、私は彼女に真名を教えた筈はないのだが」

「真名を交換していなかったんですか？」

「ああ。どうにも私は賈馱には嫌われていたようだね。もしかすると、董卓が皇帝に叛逆するのを暴かれるのを恐れてのことかもしれない」

大半は、嘘である辺り、べらべらと良く回る舌を歳三は持っている。

そして、この文が誰が出したものであるかは、歳三はなんとなくわかっていた。

賈馱ではない。

賈馱は歳三の真名どころか、義豊が諱いみなであることも知らない筈だ。

限られてくるのは義豊の名を知っておりかつ、それが諱いみなという意味であること知らない者。

それはたった二人であり、董卓あるいは呂布である。

更に前線にまで出て来た上で、この様な投げ文をさせることができるのは呂布の方だ。

(呂布からの、策ということか)

歳三は呂蒙に本当に一瞬、視線を送った。

義豊が諱という特殊なものである、ということを取られては困る。

呂蒙はそれに気付いたか、歳三の意に沿って発言した。

「どこからか義豊様の真名を聞きつけて、連合を動揺させる為にこの様な投げ文をしたのではないのでしょうか？」

「あり得る話ではあるわね」

呂蒙の言葉に曹操が乗っかってくれた。

これでなんとか、義豊が諱であるというのも知られずに済みそうである。

公孫賛と劉備が、何か言いたげなのを歳三は眼で抑える。

「神聖な真名をこんな謀略に使うなんて、やはり董卓は悪逆非道を尽しているに違いありませんわ」

「ですが麗羽様。本当にこの投げ文が動揺を誘うだけのもの、でしょうか？」

「どういうことですか、真直^{マアチ}？」

袁紹の後ろに控えていた、眼鏡を掛けた神経質そうな女性が前に出てくる。

その恰好、一言でいうなら破廉恥、と歳三は思った。

徐晃も大概だが、その女性の衣装も下腹部の薄い布地をほとんど晒す意匠である。

（だが、見た目で判断するな、歳三）

名を田豊と言うらしいが、恐らく袁紹陣営で一番の切れ者であるのは間違いない。

次の田豊の言葉に、歳三は呂布の仕掛けた文の意図を察することができたのである。

「もしかしたら本当に、華雄との入れ替えを画策してのものではありませんか？」
華雄と歳三を入れ替える、つまり、汜水関が華雄ではなく歳三が守護する。

それがどれほど恐ろしいものであると気付いたか、公孫賛など顔を真つ青にしている。

孫策なども、興味深そうに議論の行き先を見守っている。

(これは、乗ってやるしかねえ)

歳三も、田豊は上手いことを言ってくれた、と思うしかなかった。

この話の流れでは袁紹は間違いなく、歳三の思う通りの命令を下してくれるだろう。

「貴様、私を愚弄するか」

底冷えするような声と眼で、歳三は田豊を睨む。

ひつ、と田豊は小さく悲鳴を上げたが、袁紹が視線を遮るように立った。

そしてばん、と大きく手を叩く。

「良いことを思いつきましたわ!」

来た、と思ったが歳三は態度には表さない。

「そんなに真直の言うことを否定するのなら、土方歳三。貴方が華雄を叩き潰してくればいいではありませんか!」

「それで、私の身の潔白は証明されるのか?」

「ええ。もちろんですわ!」

「いいだろう。私も男だ。これから言うこと全て、一度言ったことを覆すつもりはない」と、歳三は立ち上がり言い放つ。

「三日だ。三日で虎牢関までもを私のものにしてやろう」

「土方、貴方……本当にできるの?」

「できるさ。私ならな」

曹操の言葉に、歳三は力強く答えた。

流石に英雄である曹操であろうとも、歳三の考えていることまで読むことは不可能である。

歳三の力強い言葉に、裏があつたことに気付いたのは、全てが終わってからである。

◇
そして、戦史上類を見ない戦力の入れ替わりが起きるのは、直後のことである。

◇
虎牢関にて、賈駆は焦っていた。

汜水関の陥落と、華雄が破れ敵の手に落ちたという情報を、張遼が持ち帰ってきたのである。

そうなつては、洛陽までの道にあるのはこの虎牢関のみである。

そして虎牢関の守りを万全に期する為には、呂布が虎牢関に居てくれなければならぬ。
い。

だが、肝心の呂布は今、洛陽にて董卓の身を守ることを固辞し、動こうとしない。そうこうしている間に、敵の第一陣が虎牢関へと迫つて来ていた。

赤に誠の一文字が金刺繡された、見たこともない旗だ。

「誰の軍なの……」

賈馱は静かに旗を見据えた。

そしてその旗が、虎牢関の門に容易く入つていくのを見た。

「霞、まさか……！」

裏切つたの、と張遼に問いたかつた。

賈馱は門へ向かつて全速力で走る。

張遼が門を開いて引き入れたのが誰なのかはわからない。

わからないが、董卓を討たせるわけにはいかない。

例えこの身を董卓として偽つてでも、賈馱は親友である董卓の身を守ろうと決意して
いた。

そこへ、張遼の、あまりにも呑気な大声が響いてきた。

「いやー、まさか恋の言う通り本当にこつちに着いてくれるとはな。賢い賢いとは思

てたけど、案外無謀なところもあるんやなあ」

「なに、私は元から勝つつもりだよ」

聞き覚えのある声だ。

いつもいつも、自分の執務室で寝ているかのようにたむろしていく、不愛想な男の声だ。

「この私が居る限り、天下に連合の兵が満ちようとも虎牢関だけは落とせぬよ」

「あつはつは！ 吹くにしてもよう言うたで」

「私は本気なのだがね」

ばんばんと、張遼に背中を叩かれながらも、男は決して嘘を吐いていないと賈馱は思った。

確かにあの男が居れば、虎牢関は龍すら捕らえる檻になるだろう。

漸く男は賈馱よつやに気付いたか、につ、と笑って。

「待たせたな」

と、言った。

賈馱は呆れた様に微笑んで。

「遅いわよ、馬鹿」

と、答えた。

暗雲

反董卓連合の陣地は静まり返っていた。難所である汜水関を損害無く攻略し、董卓陣営の猛将である華雄すらも大きな被害なく捕虜にしたにも関わらず、である。

たった一つの予想外の要素が、この巨大な連合の士気を挫いたのだ。

——土方歳三、離反。

青州の主であり、徐州の影の支配者でもある男による全軍での董卓側への寝返り。

ただ、軍の構成人数にしてみれば一万前後の土方歳三の軍勢に対し、連合軍は未だ十倍以上の戦力を抱えている。圧倒的多数が寡兵を前に意気消沈するというのも妙な話ではあるが、やはりいくつか理由があった。

第一に、土方歳三という存在が諸将に与えていた影響が想像以上のものであったこと。

幽州を治める公孫瓚は土方歳三が名を轟かせる前からの援助者であり、今では名実共に盟友と思われている。現在公孫瓚の部将を務めている劉備陣営にしても、そうだった。劉備などは土方歳三から直接薫陶を受けており、離反の報を確実とされても信じられないという態度を崩せなかった。

呉郡の勇将である孫策にしてもそうである。元々土方歳三は孫策の母である孫堅と強い繋がりを持ち、また孫策による呉郡掌握の際にも力を貸している。

目下、反董卓連合で有力とされている將軍は袁紹、袁術、曹操、孫策、公孫賛、劉備らだ。その内半分の将が土方歳三と強い縁があつては、これでは強い結束を望める筈もない。

第二に、損害なく攻略した汜水関がほとんど無用の長物と化していたこと。

華雄と戦うことなく、汜水関へと入り込んだ土方歳三は関を即座に閉門した。ここまですでが外から見える全てであつた。華雄を降し汜水関を迫つた連合軍が関からの攻撃に身構えた時、抵抗の弓矢がない理由について勘の良い者たちは半ば悟つていた。

土方歳三は汜水関を放棄していた。だけではない、門を壊し積まれた石を崩し関に蓄えられた物資は持てるだけ手に入れて、後は全て火を放つ。こうなつてしまえば名立たる汜水関も通るに邪魔な石の山でしかない。

結局、巨大な軍勢を通す為の作業に幾日もかかり、土方歳三には董卓軍への合流と防備を整える時間をむぎむぎと与える結果になつた。

第三に、補給の問題が一番大きかつた。

確かに数の多さは強みであるが、その分必要とする兵糧は多い。先の汜水関の作業中にも兵糧は消費されていくのだ。そうなると、配る兵糧を制限することになる。ここま

では、良い。

問題は、連合軍は後方に居る袁術によって輜重を管理されているが、肝心の袁術軍が肥えているのに最前線の孫策らの将兵は飢えている、という現象が起きていることだった。

孫策は軍議の席で今にも袁術を叩き斬らんばかりに怒り狂い、総大将である袁紹に諫められなんとか矛を取めたものの、連合軍の軋轢は更に深まったと言える。

かつて土方歳三が無益と断じた軍議の席で、曹操は気付かれぬ様に溜め息を吐いた。虎牢関を前にして、連合軍は瓦解の危機にある。

「では虎牢関攻略について。先鋒は——」

「私は嫌」

袁紹の軍師である田豊の言葉に、孫策は即断で返した。

「どこかの誰かさんが兵糧を送ってくれないお蔭で私の軍は疲弊している。これで私に前に出なさいって言うのなら、軍師としての質を疑うわ」

完全に当て付けであるが、当の袁術はにやにやと意地の悪い笑みを浮かべている。袁紹は何か言いたそうであるが、ただでさえ軍の士気が崩壊する寸前である。孫策にこれ以上拗ねられても困るから、何も言えない。

頭を抱える田豊は場を見渡すが、袁家の腰巾着たちはまず頼りにならない。だからと

いって他の將はといえよ。

「すまないが私と桃香も無理だ。相手が義豊では、私の兵は腰砕けになる」

公孫賛は劉備と共に無理である、と告げた。公孫賛の兵は間近で土方歳三の戦いを見ているから、当たれば負けるという公孫賛の分析も間違いないだろう。

それに、と曹操は公孫賛が積極的には戦わないだろうと思っている。土方歳三が離反した際の公孫賛の第一声は歳三がか、であった。その後すぐに義豊が離反か、と言い直したことを曹操は知っている。つまり、あの軍議の席で義豊が真名ではなく別の何かであると指摘できた筈なのだ。

それをしなかったということは、離反の企みについては知らなかったにしても心情的には土方歳三の側にあると見て良いだろう。劉備についてもそうだ。

そこまで考えた曹操は田豊の視線が向く前に、虎牢関攻略についての持論を述べた。

「私も虎牢関の攻略はできないわ。公孫賛も見て来たから知っているとと思うけど、今の虎牢関は万全の防備がされている。ちよつとやそつとの数で攻めても返り討ちに会うのは目に見えているわ。そうね……それこそ全軍で力押しでもすれば少しはやれるんじゃないかしら？」

「ちよつと華琳さん、それはあまりにも短絡的過ぎるのではなくて？」

「なによ麗羽。もっと貴女の被害が少ない手がいいの？」

曹操の言葉に、袁紹は押し黙った。曹操には袁紹の魂胆が見えている。袁紹はなるべく自軍の被害なしに洛陽へと入りたいのである。そして皇帝を真つ先に保護し、何進と共に漢を傀儡にしようというのだらう。異を唱える者がいれば温存した兵力で圧殺すればいい。

なんとも、長い間名家として君臨してきた者らしい戦い方である。

「そうなる、土方の暗殺が最善手かしら」

曹操は提案しながら目まぐるしく頭を働かせる。袁紹の野心が予想通りなら、曹操は袁紹よりも早く洛陽に入り皇帝を保護することが第一になる。この際、皇帝は袁紹以外の勢力が保護してくれても構わないと曹操は思っている。

漢帝国の衰退を知らしめたのは黄巾党の乱であり、それ以前に皇帝の権威は既に風前の灯であることは周知の事実である。それこそ袁紹や袁術の様な大勢力でなければ、皇帝を利用しきることは難しいだらう。もちろん、利用しきる自信が曹操にはある。

「土方の暗殺ねえ……それはまた難しいと思うわよ?」

曹操の暗殺案に対し、意外なところから横槍が入った。先程から面白くなさそうに軍議を聞いていた、孫策である。

「私が土方と一緒に居たことがあるのは知ってると思うけど、土方は隙だらけに見せて恐ろしく慎重で、なのに大胆で狡猾よ。戦の時どころか平時でさえそれは変わらない

わ。実は曹操も既に試してるんじゃない？」

「そうよ。土方の暗殺については、一度私が試している」

「……本当に試したのか、曹操？」

「ええ、公孫賛。貴女と劉備が土方の説得に向かった際、土方は姿を現したと言ったでしょう？ だから私が土方の説得の時に、秋蘭に矢を射させたの」

公孫賛と劉備が非難の視線を向けてくるが、曹操は気にした素振りはない。

実は既に二回、連合軍は土方歳三との接触を計っている。一回目は公孫賛と劉備が使者として、二回目は曹操が使者となつてである。

曹操は先立つて土方歳三が姿を見せたことを公孫賛から聞いていた為、弓の名手である夏侯淵を潜ませて暗殺の機会を狙っていた。

「それで、義豊は？」

「私たちがまだここに居る。それが何よりの結果よ」

諸将が押し黙る中、公孫賛は露骨に安心し孫策は愉快そうに笑っている。

曹操は夏侯淵を潜ませる為、絶対に側を離れたくないと言う夏侯惇の主張を退けてまで単身虎牢関へと近づいたのである。目論見通り土方歳三は姿を現し、夏侯淵は矢を放った。

寸分の狂いもなかった、と夏侯淵の腕前を信じている曹操は命中を確信した。しか

し、必殺の矢は別に射られた矢によって土方歳三に辿り着く前に空中で四散したのである。

「秋蘭の矢を防いだの、貴女の大切な友人の太史慈じゃないかしら？　ねえ、孫策？」

「梨晏が？　当然よ。梨晏の腕は大陸一なんだから。ねえ、冥琳」

「その通りですね、雪蓮」

秋蘭の弓の腕前の方が上だ、と叫び出しそうな夏侯惇を夏侯淵と共に抑えながら、曹操は孫策を見ている。

悔しいことではあるが、太史慈の腕前は夏侯淵に並ぶ程のものであるのは間違いない。でなければ夏侯淵の矢を撃ち落とせる訳がない。更に言えばそんな稀有な人材を孫策の元から引き抜いて配下に置いている土方歳三が、羨ましくもある。

曹操特有の、優秀な人材を配下にしたがる悪い癖であったが、それはそれだ。

「先に言っておきますが、梨晏……太史慈はずっと前に雪蓮と別の道を行くことにしていますから、今現在土方に太史慈がついている責任を取れ。等という様なことは一切受け付けませんので」

周瑜の言葉に袁紹が言葉を飲み込んだ。あわよくば弱みとして突いて孫策を前線に出そうと思ったのだろう。無論、曹操も羨む軍師の一人である周瑜がそんな発言を許すはずもない。釘をさされた袁紹は馬鹿にした様に笑う袁術を見て、助けを乞う様に田豊

へと視線を彷徨わせた。

先程から頭を抱えてばかりの田豊が、苦しみながらも話を進めようとする姿はそれでも袁紹に懸命に仕えようとしていて、曹操も流石に同情した。

「……弓による射殺が不可能ならば、刺客の潜入による殺害はどうでしょうか？」

「刺客……それですわ！ 真直！ 流石我が袁家の軍師ですわ！」

袁紹が笑みを浮かべて田豊を褒め称える。

「そう、刺客！ 孫策さん、貴女とても優秀な隠密を二人も抱えているそうではありませんか！」

曹操の眉がびくりと動いた。他家の隠密について情報を得ているとは、袁家の影響力は一向に衰えていない。関心はするが、袁紹ではく袁家の歴史が元にある。と曹操は思っているから袁紹に対する評価はさほど変わっていない。

「な……！ まさか今の虎牢関に思春と明命の二人を向かわせろと！」

「その通りですわ！ それくらいわたくしの力があると私は聞いておりますわ！」

袁紹の言葉に真つ先に反応したのは孫策ではなく、その妹である孫権であった。

曹操は内心驚いていた。傍目は姉の後を付いてまわっているだけの様なのに、臣下のことを心から想っている。そういう相手は、敵に回すと強い。孫家は孫策だけが強い、という認識を曹操は一人改めていた。

「静かにしなさい、蓮華。今は軍議の途中よ」

「でも姉様……」

「蓮華の心配はもつともだわ。相手はあの土方、今の虎牢関は虎の口どころか龍の口でしょう」

孫策は一旦言葉を切ると、自信を持って言い切った。

「でも、私は二人ならやれると信じてるわ」

「ということは、土方歳三の暗殺を請け負ってくれるということですよ、よろしいですね？」
袁紹の言葉に、孫策は少し考えた。今、この軍議においての力関係であれば孫策の方に分がある。それをわからない袁紹ではないだろうが、打開の光が見えたことでつい調子に乗ってしまったているのだろう。もちろん、孫策は袁紹の提案を断る公算が大きい。

曹操は孫策の思案顔をそう考えているのだとまずは捉えた。

けれども、と曹操は思索を発展させる。孫策がそのまま飛躍するには間違いなく、土方歳三という存在は邪魔になる。呉郡解放を成し遂げた今、土方歳三と孫家の間に借りもなければ義理も無い筈だ。それは土方歳三が呉郡にて孫家と別れて行動をしたことから間違いない。

また、明確に連合軍を裏切った土方歳三が孫家に対し温情を示すかも未知数だ。これまでの経緯で言えば、まず土方歳三は敵を必ず抹殺する人間だ。それに世論は袁紹の根

回しによつて正義は連合にあると思つてゐる。果たして、孫策が土方歳三を討たない理由はあるか。

「いいわよ。但し、虎牢関への一番槍は何があろうと私たち、邪魔は絶対に許さない。それと兵糧を一杯くれるなら、の条件はあるわ。もちろん今ここで、総大将が全將軍の前で約束して頂戴。万一約束違ひがあれば、それだけで私は暗殺どころか連合から降りるわよ？」

袁紹はいよいよ落ち着かない。妹の不始末が最たる原因とはいえ、袁紹は孫策に弱みがある。それでも、自らの野望の為には孫策に一番槍を渡してしまうのは、と躊躇してゐる。

姉である袁紹が右往左往する様が楽しいのか、肝心の元凶である袁術は嘲笑つてゐただけだ。両者の溝は、深い。

田豊が何事かを袁紹に耳打ちされ、袁紹は漸く諦めたようだった。

「わかりました。袁家の名に賭けて約束いたしますわ」

「雪蓮は何も言いませんでしたが、一筆、残していただけますよね？」

口約束だから知らぬ存ぜぬは許さない、と周瑜に駄目押しされた袁紹はいよいよ小さくなつてしまつた。



これからの方針がなんとか決定し、解散となつて自陣へと戻つた曹操は深く考え込んでいた。

椅子に座つてじつと目をつぶり、身じろぎ一つしない。今、曹操は話し相手が欲しい時だと感じた夏侯惇は躊躇なく話しかけた。

「どうかされましたか、華琳様？」

「いえ、まさか土方一人でここまで戦場が荒らされるとは思つてなかつたから」

「やはり私があの時土方を斬つて捨てておけば……！」

「どこまで春蘭は猪なの!? あんな男でも一応青州を治めているのよ、大義名分もなく斬つていたら先に滅ぼされるのは華琳様になつてたのに」

「桂花けいふあの言う通りだ、姉者。姉者の勘は正しかった。だがそれを証明する手立てはなかつた以上、悔いるのは違うぞ」

「それはそうだが……」

猫耳の様なものが付いた服を着る軍師、荀彧と妹である夏侯淵たしなに窘められ夏侯惇は氣勢を収める。

けれども陣中の名立たる将は、今の状況が主君である曹操にとつて望ましいものではないということがわかつている様だった。

「だつたらどうするの? このままだと土方……? が大局を握ることになるんでしょ

？」

「それくらい華琳様もわかってるって……季衣」

曹操の親衛隊である許緒と典韋が、皆の気持ちを代弁していた。

もう一度目を閉じて、曹操は今の状況を整理する。どう考えても流れは反董卓連合にはなく、むしろ董卓側にあり、更に言えば土方歳三にある。このまま行けば、あの身元も判然としない素浪人が天に昇る龍と化すだろう。

その前に、孫策は土方歳三の首を獲るか。

「黒龍、か」

土方歳三の異名の一つを、曹操はぼつりと呟いていた。

皆が曹操の呟いた真意を汲み取ろうとするが、わからない。

曹操は先の軍議の中で出した結論に、異を唱えている自分が居ることに気が付いた。孫策が土方歳三を討つ。そこがどうにも引つ掛かる。合理的な視点で見れば、孫策は土方歳三を討つべきである。今、土方歳三が死ねば董卓軍の士気は急落し、配下の将も連携は取れなくなる。虎牢関も盤石ではなくなるとなれば、連合によって董卓は倒れ世相は更に乱れる。加えて、優秀な将兵を吸収できる可能性もある。

ただし、それは曹操の考える合理である。孫策の合理がどこにあるかは、外から見ただけでは測れない。むしろ共に居ただけ土方歳三の方が、孫策の合理を知っている

かもしれない。

「風を呼んで、桂花」

「華琳様？」

「このままで終わるとは思えない。きつと、もう一波乱あるわ」

わからなかったが、曹操の合理を疑う者はこの陣中には居ない。曹操が無駄な命令をする訳がないと確信しているから皆、即座に動き始めていた。

◇

「これは、どうにかなりそうね……」

「さあ、それはどうだろう」

賈駆の言葉に歳三はそっけなく答えた。賈駆はじつとりと歳三を睨むが、本人は涼しい顔で窓の外、要塞虎牢関の壁内を見下ろしている。

賈駆は洛陽の時と同じように裁決すべき書簡に埋もれながら、歳三は椅子を窓の近くへと置いて、ただ座っていた。

「あんたがそれを言う？」

「戦での楽観は時として死に繋がるのは、嫌というほど身に染みている」

「その楽観をあんたがしているんでしようが！」

机が軋む程に叩かれるが、それでも歳三は賈駆の方を見ようとしない。幾つかの書簡

が机から落ちて行つたが、賈馱は氣に掛けることなく続けた。

「この壁内警備兵の配置はなんなのよ！　まるで侵入してくださいと言わんばかりじゃない！」

いくら虎牢関が漢帝国屈指の大要塞であるとはいえ、隱密の類であれば侵入可能な箇所が大きいのが故にどうしても存在する。

賈馱が一番氣を付けていたことは、外部からの攻撃ではなく内部からの崩壊であつた。雨降つて地固まると言う様に、外からの連合軍の攻撃に対して一致団結することは容易い。だが、堅い外殻を持つ程中身は柔らかいと相場は決まつている。内応や反乱を誘致された時、数で遙かに勝る連合軍を抑えきれるとなると歳三たちが居ても無理だろう。

だから、賈馱には理解できなかつた。

「なんで侵入した相手に精銳を複数で当てる様な配置をするの！　それなら最初から入れなければいいじゃない！」

歳三の意図は賈馱にとって不可解でありながら、合理的だつた。

事実、歳三の指示した配置は巧妙だ。外見では警備兵はなく、簡単に侵入可能に見える。が、実際に入つてみればすぐさま兵に囲まれ、更には趙雲や徐晃といった名立たる武將が待ち構えている。賈馱でさえ、他を見渡してもここしか侵入経路はないと思考誘

導される程の巧緻な配置である。

貴重な隠密を誘殺する為の罠ならば、賈馱もここまでは言わない。問題は、誘導はできるが確殺できる配置ではない、ということである。要するに、何故か詰めが甘いのだ。「あれだけの物を壁の中に造っておいて、こっちは手抜きつて言うのは筋が通らないのよ」

幾分叫んで冷静になったのか、賈馱は落ち着いた様子でそう結論付けた。歳三が虎牢関の中に造り上げた戦術構想と、この隠密誘殺構想はどうしても噛みあわないのである。

歳三はやつと賈馱の方を見た。いつも眠たげな眼が、逆光の中きらきらと輝いている。

「なに、何も入ってくるのは我々の敵ばかりではないだろう」

「……刺客ではなく使者が来る、つてこと？」

「まあ、そういうことだ。何分、隠密に長けた者を幸運にも知っている。もしかしたら、そうやって接触をしてくるかもしれない」

「だから、確殺の陣を敷かなかった、と？」

「それ」

歳三の言葉は短い、賈馱は十二分に理解していた。

罠を敷いていきなり殺しにかかる様な相手と話し合いができるなど、隠密になる様な人間は考えない。逃げられる程度に包囲し、害意があれば殺すが話があるならば聞く用意はあるという姿勢を示せば、相手は警戒しながらも応じる可能性は十分ある。

万一、話をする振りをして攻撃を仕掛けてくる可能性を考慮しての趙雲らの配置である。包囲兵を殺された後に内部に潜伏されるという最悪の事態も避けられる。

「じゃあ、隠密が使者ではなく刺客だったら？」

「私は既に二度、連合の顔を立てている。次が三度目の正直と言うやつだ。四度目はもうないよ」

「……わかったわ。これに関してはもうボクは口に出さない」

そう言うのと賈馱は積まれた書簡に手を伸ばし、歳三はまた窓の外を眺めていた。

賈馱には歳三の言わんとしていることがよくわかる。三度目までは歳三も相手をするが、四度目から完全な敵。故に、殺す。単純な話であった。

◇

あれから数日経ち、虎牢関の外に変化が起きた。連合軍の動きを歳三から借りていた双眼鏡で観察していた趙雲は、いの一番に歳三に宛がわれた部屋へ飛び込んでいた。

歳三は抜いていた刀を鞘に納め、無愛想な顔で趙雲を迎え入れた。

「主、連合が動き出し始めましたぞ」

「そうか、攻勢に出ようという気にやっとなったのか。で、数は？」

「それがですな、前線が上がって来たのはどうやら孫策殿の軍勢のみの様です」

「なんだって？」

歳三は思わず聞き返していた。如何に勇猛揃いの孫策軍であったとしても、虎牢関に籠る軍を攻め落とすには数が足りなさ過ぎる。一般的に攻城戦は守勢の三倍の兵力が必要だと言われているくらい、難しいものだ。

定石であるならば、孫策の行動はただの無謀であり無策からくる暴走である。

「しかし、あの孫策が単なる囷となつてこちらの軍勢を誘き出す、という役をやる筈はあ
るまい」

「同意見ですな。孫策殿は何よりも良い戦を好む方、後ろに卑怯な戦場漁りが居るとい
うのに囷を引き受けるとは到底思えません」

卑怯な戦場漁り。公孫賛や劉備、あまり話すことはなかったが曹操がその類ではない
というのは歳三と趙雲で共通している。袁紹と袁術、何よりも信用ならない姉妹が、背
後に居る。

「今、例の場所を守っているのは亜莎と霞か」

「ええ。主の言い付け通り、我ら交代して見張っております」

例の場所、とは先日歳三と賈馱が言い合った件である。

歳三は、孫策がそろそろ仕掛けて来る、という奇妙な勘があつた。事実、趙雲の言葉が終わると同時に、伝令の兵が駆け込んできた。

「土方様、火急お伝えしたいことが！」

「なんだ」

「連合軍の隠密を、呂蒙様と張遼様が捕らえております！」

「わかつた」

歳三は羽織コトを翻すと、趙雲を引き連れて件の場所へと足を向けた。

◇

精兵に包囲され呂蒙と張遼に見張られても尚、隠密の一人は見事な泰然自若であつた。もう一人の方は今にも逃げ出しましょうと言わんばかりに震えている。

歳三は震えている方に面識があつた。

「周泰か」

「あうあう……土方様あ……」

「もう一人は見覚えがないな？」

眼付き鋭く、自然体でありながら隙がない。腕のある者、と歳三は見た。裾の短い中華服から伸びる脚は艶めかしいが、あれから繰り出される蹴りは人の首を簡単に折ってしまう力強さも秘めている。

どこからか鈴の音を鳴らし、女が頭を下げる。

「甘寧と申します」

「なるほど。孫策があの後傑物を見出してきたか」

「はい。孫策様に見出していただき、今は孫権様の護衛をしています」

「ふむ」

歳三は静かに唸った。

感服したのである。所作隙がないのはもちろん、余計なことは喋らない。褒めそやされても必要以上に浮かれることはなく、主君を立てることも忘れない。

（山崎君の様だな）

ふと、歳三は死ぬ最後の瞬間まで新撰組であり続けた監察の山崎丞を思い出していた。

が、今それは関係がない。こうして包围を破ろうと試みることもなく、逃走を計ろうともしていないのであれば二人は刺客ではなく密使ということになる。

「何か、孫策から預かっているのか」

「これを、持ってきました」

甘寧は懐から竹筒を取り出した。丁寧に封泥もされており、誰にも中を見られることもなく届けられたものであることがわかる。

一步、甘寧が踏み出すと同時に兵士たちが俄かに殺気立った。

密書を渡すと見せかけ、歳三の首を獲るかもしれない。周泰の方は知らされていなくても、甘寧にはそう命じられているかもしれない。精兵であるが故の、帰結だった。

「すまぬな。万が一、ということがまだ捨てきれぬ」

「武器を帯びてはいません。それでも、というなら服も脱ぎますが」

甘寧の言葉に、歳三は何が面白かったのかくすりと笑った。

「貴殿の四肢を見ればわかる。暗器がなくとも私の首などすぐに折れるだろうよ」

「では」

「そこから、それを彼に投げてくださいるだけで良い」

「わかりました」

甘寧が投げた竹筒を、歳三に指示された兵士が受け取った。念には念を入れる、それが歳三の流儀だ。毒針などの仕込みがないか、兵士が丹念に取り調べる。彼も、精兵の一人であるから心が決まっていた。

何も無い事を確認すると、兵士は恭しく歳三に渡す。歳三は受け取ると封を破り書かれた内容を即座に読み上げた。一読すると、遅れてやって来ていた程立と郭嘉に書簡を渡した。

「確かに確認した。それを孫策殿に伝えてくれるか？」

「はい。明命、孫策様のところへ。土方様は約定をしたと」

「でも思春殿……」

「私は心配いらぬ。これも役目だ」

周泰は何度か甘寧の方を振り返ってから、意を決した様に去って行った。兵士は動かず、ただ武器を甘寧に向けて構えている。歳三は、周泰を捕らえろとは一言も言っていない。

そして甘寧がここに残るということは、孫策が約定を履行する為の保険。いわば人質ということだろう。

甘寧はじつと、歳三からの裁断を待っている。

「では、兵は賈馱に指示された通りのかつての持ち場に戻れ」

兵士たちは武器を下ろして各自の持ち場へと戻っていく。それが、甘寧を困惑させた。まだ、油断させて仕掛けてくるという疑念は残っていてもおかしくない筈である。

甘寧の戸惑う姿に、歳三はいつもの鋭い眼を向けた。

「甘寧殿は賓客である、捕虜ではない。将として遇せよ。風」

「はい、全軍に通達しておきますねー」

そう言う歳三は踵を返すが、甘寧は呼び止めていた。怪訝そうに振り返る歳三に、甘寧は疑問の限りをぶつける。

「私はまだ、武器も外しておらず暗器を持っていない証拠も出しては——」

「武器を奪うなど、降った将ならいざ知らず、対等な相手にすることではない」
それに、と歳三は真面目な顔で続けて。

「女が、好いた者以外の前でむやみやたらに肌を晒すものではない」

とだけ言うと、趙雲と郭嘉を引き連れさつさとどこかへと行ってしまった。

呆然として歳三の後姿を見届けた甘寧に、張遼が肩を叩いた。

「歳三はああいうやつなんや。すぐに慣れると思うで」

甘寧はそれでも信じられないという顔で、張遼の後に付いて行つた。

逆賊討つべし

甘寧は歳三という人間を計り損ねていた。孫策に見いだされる前、錦帆族という江賊の頭領の頃から土方歳三という名前は聞いている。人の口の端に上れば必ずと言って良い程、土方歳三とはおよそ人間と縁遠い存在だと思ひ込んでいた。

が、それがどうだ。

身体を怠けさせない為の遊びをしようと当の歳三に持ちかけられ、関の内部にある練兵場で木剣を持って打ち合う事数回。甘寧には歳三の腕前が趙雲や徐晃が心酔する様な使い手とは、まるで思えなかつたのである。

さりとて将器と武人としての強さは別である。ならばそこに秘密がある筈、と主だった人物に歳三への所見を聞いてみれば。

——外道。鬼。ひとでなし。おんなたらし。放火魔。むつつり不機嫌。

と、散々なものだった。およそ人間の魅力がある様には感じられないが、悪口を言っている方にもそこまでの悪意がないのも確かであった。折角、外の人間が聞いてくれるのだから日頃の苦勞と一緒に愚痴ってしまおうという感じである。

あまりにも不思議に思い、何故自分の主君を悪く言えるのかと聞いてみたところ、

歸つて来た言葉は一律に。

『このくらいのこと、全部本人もわかっている』

概ね、こんな感じであつた。言われ慣れているでもいうのだろうか。およそ甘寧が考える理想の将とは程遠く、それでいて何故あれだけの武人と賢者を抱えられるのか、わからない。

わからないから歳三の後を付いて回つてみるが、やはりよくわからないというのが甘寧の結論だつた。身体を動かしていたり、兵を鼓舞していたり、賈馱の部屋に入り浸っていたりと、とにかく行動に一貫性がない。そのくせ誰よりも近道や裏道に詳しいから、甘寧ですらも見失つてしまうくらいに虎牢関を自在に動き回つている。

虎牢関へと潜入する前。孫策に孫権の為にも歳三のことを知っておいた方が良いと言われたが、これは確かに想像以上の難物であつた。

こうなつては甘寧も周瑜から授けられた秘策を用いて計るしかない、たまたま眼の前を通り過ぎて行こうとした歳三を引き留めたのである。

「土方様」

「甘寧か。何か不都合でもあつたかね？」

「いえ、聞きたいことがあります」

「ふむ……聞こうか」

周瑜から授けられた秘策とは、これからの展望についてである。今、歳三は虎牢関において連合と睨み合っているが、何も連合は虎牢関だけを相手にしなくても良い。つまり、歳三が治める土地である青州や徐州を攻撃して基盤を揺るがせる、という手段も取れる。

そうなつては、歳三も連合を釘付けにする為に虎牢関から出撃する必要がある。少なくとも甘寧は周瑜から聞かされた時、そう思った。孫家だつて、呉郡解放に至るまでに大層な時間と労力を割いてきたのだ。誰だつて得た物を失うことは怖い。

しかし、歳三は至極あつさりとしたもので。

「ああ。青州と徐州、その片方あるいは両方が落ちるといふ予測は、連合を離れる前に郭嘉と程立から聞かされていたよ」

「わかつていて連合を離れたのですか？」

何故、としか甘寧は思う他ない。連合を離れ董卓に付いた歳三に、青州や徐州を失う以上の利があるのだろうか。歳三が董卓と懇意にしていたから、という理由で二州を捨てる真似を許すほど家臣団も愚かではないし甘くもないだろう。

けれども歳三からすれば甘寧の問いの方が余程何故、と思うものだった様だ。甘寧以上には歳三は不思議そうな顔をしていたが、ふと理由に思い至ったか真顔で甘寧に問い掛けていた。

「甘寧は呉郡を守るか天下を手に入れるかとしたら、どっちを選ぶ?」

それは、と甘寧は言葉に詰まった。甘寧はあくまで武人であり、政治に口を出す立場にはない。甘寧とは孫権の剣であり盾であるのだ。歳三の言葉に答えるということは、己の分を越えた越権である。口ごもる他ない。

「すまない、意地悪なことを言った」

歳三は謝ると、こんな顔もできるのかと甘寧が驚くほどの笑みを浮かべて。

「二州を失うだけで天下を手に入れられるなら、安い物だろうか。」

と、続けて。

「その分、美花……孫乾に苦勞を掛けるだろうが、私を選んだのだから了承しているさ」なるほど、これは皆が言う通りの悪人であると、甘寧は納得したのであった。

◇

「……土方歳三のしているものがわかりません」

「朱里ちゃんも? 私もわからないの……」

反董卓連合の陣。公孫賛の陣中であつて半ば独立している劉備の陣營で、諸葛孔明と鳳統士元は唸っていた。二人は土方歳三の目指す勝利の形が見えていない。古今東西どこを見ても他の追随を許さない頭脳が揃いながら、土方歳三が目指すところが見えないのである。

戦とは勝つ為に行うのであり、利益があるからするものであって負けて失う為に戦争をする馬鹿はいない。董卓に与した所で死に体の漢帝国が土方歳三にどれほどの利をもたらすものか。それどころか青州か徐州という最上の領地のどちらかを失うことは確実である。

それが、彼女らを悩ませる。

わからないのは当然である、という結論が直接話したこともない二人から出て来ないことを責めるのは酷だろう。土方歳三は、目の前の喧嘩以外は特に考えていないのだから。

存在しない答えを延々と探し求める二人に、おずおずと声を掛けたのは彼女らが主と仰ぐ劉備であった。土方歳三が連合軍を離反してから唸りつぱなしの二人に、声を掛けるのは躊躇われたようだった。

「今大丈夫かな？　朱里ちゃん、雛里ちゃん？」

「あつ、桃香様……」

「ごめんなさい、私じゃちよつと曹操さんの相手は……」

「失礼するわ」

劉備の背後から現れたのは、曹操孟徳その人である。諸葛亮は曹操の突然の登場に身を固くし、鳳統は諸葛亮の影へと隠れた。未だ所領する範囲こそ狭いものの、反董卓連

合の後に訪れるだろう群雄割拠の時代に飛躍するのは間違いない英傑の一人である。

天下でも煌めく才の二人であつても、未だ経験が少ない為に曹操の覇気に気後れするのは致し方ないといえた。

もちろん、曹操はそんなことを考慮しない。

「次の軍議なのだけれど、貴女たちから青州と徐州への攻撃を袁紹に提案して欲しいの」

「はわわ……え？ 私たちが、ですか？」

「そうよ、諸葛孔明」

剣の切っ先の様に鋭い眼光が、諸葛亮を射抜く。恐ろしくてたまらないが、これに負けていては桃香の理想を叶えることはできない。恐怖心をぐつと飲み込んで、諸葛亮は曹操の提案を跳ね除けた。

「それはできません」

「どうして？ 青州も徐州も、そのまま劉備が治めてもいいのよ？ 決して悪い話ではないと思うけど」

「だつたらどうして、曹操さんがやらないのですか？」

「貴女程の軍師なら、私ができない理由がわかると思うのだけど」

諸葛亮にも鳳統にもわかる。戦後における袁紹と曹操の力関係だ。

袁紹が何よりも警戒しているのは、反董卓連合の成否よりも犬猿の仲である曹操が連

合を踏み台に強大になってしまふことだろう。曹操が今、青州と徐州という豊かな領地を手中に収めることは、袁紹にとつて面白くない筈だ。

例え皇帝を手中に収めることができても、曹操は袁紹の統治に乱世を幸いと齒向かつてくる可能性が高い。だから、有効的であるとわかつていても袁紹が曹操に攻略命令を出す訳がない。色々と難癖を付けて連合に居させようとするのは容易に想像できる。

既に悪政を敷く董卓を討つという目的は形骸化し、如何に後の乱世で有利を取るかが先を見ている者たちの共通認識だ。最も、公孫賛は幽州があればそれで良いだろうし、劉備は今でも漢帝国の復興を願っているが。

だからこそ、諸葛亮と鳳統は頭が痛くもある。

「それは、桃香様の理想と異なります」

「あら？ 何よりも貴女たちが力を付けることが漢帝国の復興に繋がると思わない？」

「ちよ、ちよつと待つてくださいい曹操さん！ それつて、私たちが土方さんの領地を泥棒するつてことですよね!! それは私……」

「卑怯なんて思うことはないわ、劉備。何よりも皇帝に反逆した董卓に土方は付いた。その土地を漢帝国に返還する為に戦うことは称賛こそされるもので、卑怯と謗られるものではないわ」

「うっ……朱里ちゃん、雛里ちゃん……」

やはり舌戦では曹操に遥かに分がある。曹操の言葉に反論できない劉備が、助けを乞う様に諸葛亮と鳳統に視線を向ける。

二人も曹操の言葉はもつともだと思ふ。青州と徐州を取れば、劉備たちは公孫賛の部将から脱却し、真に独立した勢力として認められる。未だかつてない栄光が、すぐそこにあるのだ。だからこそ、解せない。

うまい儲け話には裏がある様に、曹操がただこちらに利益がある話を持ちかけてくるだろうか。いや、ない。絶対に曹操が利となる側面があるに違いないのだ。それを見誤れば、足を掬われるのはこちらである。

考える時間が欲しい、そう告げようとした諸葛亮を制したのは曹操であった。

「そういえば、青州には劉備の恩師も居るそうね。なんと言ったかしら？」

劉備が固まった。やられた、と諸葛亮も鳳統も思つた。お人好しが極まった仁徳の人である劉備が、かつての師である盧植を見捨てることはできない。例えできたとしても、世間一般に温情厚い将と謳われている劉備がそんなことをすれば、名も無き民衆の支持すら失つてしまう恐れがある。

たつたこれだけの言葉で、曹操はこちらの行動を一気に制限してきた。同時に、劉備の弱点となりうる存在が土方歳三に確保されていることに臍はそを噛む。その時は諸葛亮と鳳統は劉備に合流する前のものであり、どうにもできないことであつたから余計に悔

しいのだ。

「……わかりました」

「朱里ちゃん……」

「大丈夫です、桃香様。私たちは逆賊の手から民を解放するのですから、後ろめたく思うことはありません！」

「そして劉備は恩師の命も救える。これで万事解決というわけね」

さらりと言つてのけた曹操を諸葛亮がきつと睨むが、平然と受け止められる。

事態は刻々と動き始めている。諸葛亮の推測する限りでは、曹操も孫策も如何に自軍の損害を少なくして反董卓連合から離脱するかに力を注いでいる筈だ。諸葛亮も鳳統も、土方歳三が守る虎牢関を抜くことはほぼ不可能であると思つている。

どこに土方歳三の利があるかはわからないが、青州と徐州の防衛を戦略に組み込んでいないのであれば、虎牢関が盤石であり続けるのは間違いない。

だったら青州か徐州、あわよくばその両方を物にすることが誰もが笑顔で過ごせる世界への第一歩になるに違いない。諸葛亮はそう切り替えて、未だ土方歳三への迷いを捨てきれない劉備の説得にかかるところにした。

◇

なんとか劉備の説得を終えた諸葛亮に待つていたのは、急変であつた。虎牢関の攻略

から撤退してきた孫策が、一同が会する席で遂に連合軍を降りると言い放ったのである。既に、孫策の軍師である周瑜などは全軍撤退の準備を始めていた。

無論、袁紹は孫策を必死に引き止めようとするが、孫策は烈火の如く怒り始めたのである。

「前に私が言ったと思うけど、補給は満足にしてくれと言ったわよね？ それがないまま虎牢関に突撃することになったのよ！ これでまだ戦わせようとかふざけないで！」

孫権配下の隠密、甘寧が虎牢関の潜入に成功したという報告を引つ提げてきたのは同じく潜入していた周泰である。曰く、土方歳三の暗殺は不可能に近い為、秘密裏に協力者を集め機会を待つということであった。

果たして、諸葛亮はその準備完了の合図の詳細を知ることができなかつたが、孫策軍が一丸となつて突如開門した虎牢関に突撃したのはよく覚えている。

結果は孫策がまだこの陣中に居る通り、失敗であつた。関に殴り込んですぐに、孫策たちは血相を変えて反転し撤退してきたのである。一体関の向こうはどうなっているのか、孫策は怒気を孕ませながら説明した。

「関を抜ければそれで終わり？ まさか、土方はそんなに甘くない。関を抜けても一直線にしか軍が進めない様に左右に盛り土やら馬防柵をして行動を制限。真つ直ぐに道

を進んでも終わりには堀があるし、堀の向こうの柵の裏には隠れた兵が槍を突きだしている。おまけに街路の横には櫓が組んであつて進む軍勢に容赦なく弓を射かけてくる。あんなのどう考えたつて無理よ」

だから、孫策は関の突破は不可能と判断して即座に反転してきたということである。が、孫策が怒りに塗れていたのは単に戦に負けたからではないようだった。

「袁紹。貴女確かに約束したわよね、十分な補給をくれるつて。それが何？ 必要最低限の物資しか送らないで、それでも皆が生み出してくれた機会を逃すまいと思つて突撃してこのざまよ。こっちは兵のみならず蓮華も穏とも離れてしまつて安否もわからない。それでも尚、戦えというのなら私は貴女を斬るわよ」

袁紹に文句を言わせない怒り心頭の孫策に、袁紹は最早これまでと観念したようだった。

「……わかりましたわ。本当に残念ですが、孫策さんはここで」
「ええ。領地に帰らせてもらうわ」

言質は取つたと踵を返して去つていく孫策に、諸葛亮も鳳統も違和感を覚えた。

確かに、門の向こうに防衛機構を備えている土方歳三の手腕は敵ながら認めざるを得ない。けれども、周瑜ならばそういった防衛策を敵がしていないと考えるだろうか。なにより、敵は悪名高い土方歳三である。諸葛亮らにわからない合図にしても、何かある

と知らせる単純な手段はあったのではないか。

「ね、ねえ朱里ちゃん……」

「雛里ちゃんも……そう思った？」

劉備や関羽の後ろで、諸葛亮と鳳統はひっそりと言葉を交わし合った。孫策の一連の行動、汜水関攻略の軍議での土方歳三とどうしても被るのである。

かつて、土方歳三は言葉通り三日で汜水関のみならず虎牢関までも手に入れた。そこに連合の物とするとは一言もなかった。孫策にしても、そうだ。戦の一番槍と潤沢な補給を袁紹に確約させておきながら、孫策は補給に関して今の今まで袁紹に訴え出ることはなかった。

約束したのは袁紹で、袁術は関係ない。そんな論理で張勳が袁術を唆し、孫策への補給を止めていたのを諸葛亮と鳳統は知っている。諸葛亮が知っているのであれば、周瑜も知っていると考えるべきだろう。にも関わらず、孫策が無謀にも見える突撃を敢行したのは何故か。

「……連合からの離脱と、土方側への橋渡し」

「朱里ちゃん！」

「はわわ」

諸葛亮は思わず呟いてしまい、慌てて口を閉ざす。下手なことを袁紹に聞かれて、

やっぱり孫策を問い質すと言われては困る。孫策の謀略を示す手段が、今の諸葛亮らにはないのだ。嘲るか、と孫策がこちらを攻撃してくるのも有り得る。

曹操だけがこちらを見透かすように見ているが、諸葛亮は気にしないように帽子を深く被り直した。

考えれば考える程おかしな話だ。孫策は妹である孫権と優秀な軍師である陸遜が、先の戦闘で離れたと言っているが、それなら何故怒り、奪還をしようとしめない。土方歳三にしてもその二人を捕らえたならば、何故連合側に示さない。

「あの、袁紹さん」

「なんででしょうか、劉備さんの……えつと?」

「諸葛亮と言います」

充分な補給がないのであれば、孫策は連合を降りると宣言した。

実際に補給の約束は履行されないとわかっていたから、約束を利用した最高の形で孫策は連合を降りた。これで孫策はどちらが勝とうが有利な立場になれる。連合が勝つても、孫策は努めを果たした上で降りた。董卓が勝つても、孫権は土方歳三と居るから孫策の悪いようにはならない。

この戦争は土方歳三が勝つ。ならば、劉備らも有利な形で連合から抜けるのが最善である。曹操の策に乗るのは癩しかぶくだが、次があればその策を上回ることまでできる。

だから。

「私たちは、青州と徐州を攻略して土方を揺るがしたいと思えます」

◇

歳三は暇そうに楼上から連合軍を眺めていた。後ろには徐晃や趙雲といった古くからの武将はもちろん、孫権と陸遜に加え甘寧までもが居る。諸葛亮の推測は当たっていたのだ。

「孫策だけでなく、白蓮と桃香も動いたか」

風を受けて揺らめく旗の字を見て、歳三は呟いた。孫策との約定は諸葛亮と鳳統が想像した通り、連合を抜ける代わりに孫権たちの面倒を見てくれ。という様なことがおおまかに書かれていた。無論、面倒を見る中で男女の仲になっても構わないとあったが、それはそれで孫家と歳三とで縁戚関係になればということだろう。

(ま、孫権が俺に惚れるかわからんがね)

と、自意識の強いこの男はそんなことを考えている。見え透いた政略結婚の類が、あまり好きではないのかもしれない。好きではない、とは言っても勢力を築く前であるなら一も二もなく飛びついていただろうが、そんなことはおくびにも出さない。

歳三とはそういう男である。

「あのおく、一つ良いですか、土方様？」

「何かな、陸遜殿？」

「このままでと青州と徐州、取られちゃうと思うんですけど……」

陸遜の心配、当然であると歳三は思っている。このまま歳三が一角の勢力であり続けられるなら、孫権に身の危険が及ぶことはまずない。しかし、歳三が寄る辺を失い破れかぶれになった時、孫権を手土産にどこかの勢力に入り込む可能性はある。

ふむ、と歳三は考える素振りをしたが、腹の中は端から決まっている。

「それは郭嘉か程立に聞いた方がいい。私では、そんな先の事はわからない」

絶句する陸遜と孫権を慮るおもんはかことなく、歳三は再び連合軍へと視線を移した。

「私は眼の前の戦を考えることしかできないからね」

事実、歳三はそれだけしか考えていないのだろうか、と孫権の後ろに控えている甘寧は思っている。甘寧は歳三が天下を狙っていることは、陸遜どころか孫権にも話していない。これは孫権の成長の機会であると先に孫策と周瑜から聞かされている。なればこそ、孫権自身で歳三が行こうとする所を見極めて欲しいと、甘寧は考えている。

なにせ、歳三は天下なんて取れるなら喧嘩のついでに取ってやるかくらいの考えではないのだ。下手に天下を狙っている、と今の孫権に教えても、重く考えてしまうのが関の山だろう。

「これで霞たちを洛陽に向かわせられるか」

歳三がぼつりと呟いた時、甘寧の背後で趙雲が静かに去っていくのを感じた。恐らく、郭嘉が程立に歳三の考えていることを伝える為だろう。

甘寧は歳三に聞こえぬよう、静かな声で孫権に話しかけていた。

「蓮華様」

「どうしたの、思春？」

「趙雲が去ったこと、お気づきになりましたか？」

歳三たちの強さはここにあるかもしれないと、甘寧は孫権の成長を願って耳打ちするのであった。

◇

虎牢関内の、賈馱の部屋。そこで部屋の主である賈馱はほつと安堵していたが、歳三はむつつりとした顔で窓際から壁内を見下ろしていた。付き合いの長い趙雲なら、折角作った玩具が使えなかった子供の様だとからかっただろうか。徐晃ならば、ちよつと拗ねているとでも言っただろう。

ともかく、歳三はそんな感じでむつつりとしていた。

「不満そうな顔ね」

「……わかるか」

「どんだけあんたがここに居ると思ってるの。いい加減、わかるわよ」

呆れたように言う賈馱に、歳三は苦笑を浮かべて思考を切り替えた。

反董卓連合は圧倒的多数の兵力を持つているが、その多くが袁紹と袁術の配下である。量はあるが質は大きく劣る。今残っている軍勢で脅威に思ふべきは、曹操の配下ぐらいだろう。

もつとも、真に驚嘆すべきはそれだけの兵力を動員可能な破格の経済力と名声を持つ袁家かもしれないが、それらを相手にすることができる虎牢関もまた凄まじいのか。

(面白くねエ)

ともかく、歳三の心中はその辺りとは何の関係もない。戦の趨勢に己の感情を挿むことはしないが、面白くないものは面白くない。このまま袁紹は虎牢関に仕掛けることもせずに、そのまますごと引き下がってしまうのだろうか。

(それはそれで、具合が良くねえな)

が、歳三はそうはさせたくないと思っている。現状、戦端を開くことなく勝利するという最上に近い状況であるが、これから続くに違いない乱世の前にどれくらいの価値があるか。

大軍の反董卓連合軍を知略だけでなく武力でも破った。この名声が、歳三は欲しい。一大勢力である袁家に勝ったという箔は、袁家のみならず大陸全土で有効になる。

(それをさせないのが、曹操だ)

曹操はそういった歳三の考えを恐らく読んでいる。孫策は公孫賛か劉備も歳三側へと送り込むことを考えたようだが、曹操の監視が厳しくできなかつたと孫権は言つていた。

つまり、曹操はこのまま歳三が何かしでかさなないようにするのが連合での役目だと思つていらしい。

妙な話だと歳三は思う。戦わずに勝利している筈なのに、戦わずに抑え込まれているところがある。頭がこんがらがつてしまひそうだ。

(解けない結び目は、斬つてしまふに限る)

その為には、乱麻を断つ為の快刀が必要なのだ。

賈馱の部屋の扉が開かれる。そこに居たのは。

「……義豊」

「え……恋？」

洛陽にて董卓を守護している筈の、呂布であつた。

「久しぶりだな、恋」

「……ん、待つてた」

賈馱が居るのを知つてか知らずか、呂布は真つ先に歳三へと抱きついた。それを当然という様に受け入れて、歳三は呂布の頭を撫でてやる。

呂布は犬の様に歳三の厚い胸板に顔を押し付けて、朗らかな笑みを浮かべている。

「恋のお蔭で助かったよ」

「……月と一緒に、考えた」

「あの華雄との入れ替え策、月と恋の発案だったの!？」

賈馱が驚愕し、呂布の後から部屋に入って来た張遼がその気持ちがよくわかるという笑みを浮かべていた。

「なにせあれだけの為に恋はいろんな書を読破して考え込んでたからなあ……恋の底がウチにはわからんわ」

もちろん月もそうやで、と張遼は言うが、賈馱は啞然としつぱなしである。

歳三は呂布の相手をしながら、張遼の方へと向いた。

「霞も恋と共に来た、ということとは……準備は整ったということか」

「せや。歳三が洛陽に援軍を出してくれたおかげで、恋もウチの兵も自由に動けるって寸法や。ウチらで直々に仕込んだ騎馬隊、見せてやるで!」

張遼の言葉にはつとしたのか、賈馱は歳三の方を向いた。歳三は賈馱の視線に頷いて答えると。

「さあ、大仕上げだ。逆賊、袁紹を討つてやろうじゃないか」

かつて錦の御旗を掲げられた男は、皮肉気に言つてのけた。

虎牢関の戦い

歳三は愛刀である兼定の目釘を確かめた。脇差である国広に關しても、抜かりはない。
い。

(随分と長い付き合いになったもんだ)

この男にしては珍しい、心の動きだった。

歳三の持つ和泉守兼定は、世間一般に之定の異称を持つ二代目^{ノサダ}和泉守兼定の作刀ではない。会津兼定と言われる、十一代目^{ノサダ}和泉守兼定のものである。同じく国広にしても、刀工であった国広が京都一条堀川に定住し堀川国広と名乗った後の作ではない。もつと若い頃の、戦場で数打ちとして無数に作られた国広の一振りである。

当然の話だ。堀川国広は大業物二十工、二代目^{ノサダ}和泉守兼定に至っては最上大業物十三工と称えられる名刀中の名刀。大名ですら持ちえないような刀を、一介の田舎侍であった歳三が持てる訳がない。

(だから、どうした)

侍気取りの田舎者が、名刀気取りの刀を持っている。そう自嘲しないのが、歳三であった。偽物であろうと斬れば良い。刀は道具であると思っている歳三は同時に、本

当の意味で半身であるとも思っている。

刀は武士の魂であると知った時、歳三は鼻で笑ったものである。名刀を金で買ったところで、持っている人間の魂まで流石と唸らせるものになるとは思っていない。

(俺が持つから、この兼定は之定になるんだ)

歳三が新選組の副長として恐れられた時、この兼定は之定に並んだと歳三は思っている。あの恐ろしい人間が持つ刀ならば、之定と堀川国広に違いないと人々は噂する。歳三が豪農の倅でなく武士となったように、兼定と国広も歳三の半身として昇華されたのだ。

近藤の虎徹にしてもそうである。出自のわからぬ怪しい刀ではあるが、よく斬れた。無論、兼定がどうか虎徹がどうかは、京都に跋扈する志士への牽制も兼ねてこっそり宣伝していたものもある。結局、己を武士たらしめ、兼定を之定たらしめたのは、ひとえに歳三の鬼と言われる働きにあったのだ。

(ただ、沖田のだけは奇縁だろうなア)

沖田の菊一文字則宗だけは、運命の巡り合わせという他あるまい。あの不思議な雰囲気若者が持つ何かが、かの菊一文字を呼び寄せたのだろう。あるいは、刀の方から沖田に使われたがったのか。

ふと考えて、歳三はくすりと笑った。

沖田は菊一文字を折りたくないと、変わらず加州清光を使い続けた。歳三なら、手元に本物の之定が来たかどうか。間違ひなく折れるまで使うに違ひない。そんな持ち主のところに行きたがるような刀もないだろうと思うと、おかしくなったのだ。

「……？」

「いや、なんでもないよ。恋」

「……そう」

小首を傾げて見上げてくる呂布に、歳三はいつものむっつり顔に戻って答えた。呂布はそれならいいと言わんばかりに視線を戻す。もつとも、歳三の後ろに居る張遼配下の兵士たちは化け物を見る様な眼で歳三を見ている。

「なんや歳三、面白い事でもあつたんか？」

が、兵士を率いる張遼は気軽に歳三に話しかけていた。

「劍が、な」

「劍がどうしたん？」

「私の所に来たがるとは思えなくてな」

張遼、歳三の言葉に大笑した。現実主義を徹底している男が、まさかそんなことを考へると思つていなかったのだろう。

歳三はむっつとした顔をして、張遼を睨んだ。

「いや、まさか歳三にもそんな面があるのかと思つてえな。悪気はないんやー！」
 「もう二度と言わねエ」

すっかり拗ねた歳三は鞘から兼定をすらりと抜き放つ。誰もがぶるりと震える様な魔性が、刀身から漂っている。なるほど、兼定が歳三の半身であるのは間違いないようだ。

「開門」

よく通る声で、歳三は指示をした。虎牢関の門がゆっくりと開かれていく。隙間から溢れ出る光が、歳三を、呂布を、張遼たちを照らす。

刀身を陽光に煌めかせ、歳三は兼定を振り下ろした。

「全軍突撃」

わつと関とぎの声が上がった。

◇

呂布が方天画戟を振るうたびに、人が吹き飛ばされていく。この様を表す言葉を見つけるのは難しい。本当に、人が宙を舞っているのだ。よくも自分の身の丈以上の武器をこんなにも自由に扱うものだ、歳三は舌を巻いた。

歳三自身も馬鹿力とよく言われたものだが、呂布には到底及ばない。改めて、呂布が敵でなくてよかつたと心底思い直す。

そんな歳三は今、呂布の影に潜む様に寄り添って戦場を駆けている。

「左から弓、右は無視」

「……ん」

眠たげな眼がぎよろりと戦場を見回して、歳三が呟いた。

呂布が歳三に言われた通り、左方から放たれた矢を方天画戟で薙ぎ払う。もちろん、呂布であるならば左右両方から一斉に弓を放たれようと問題はない。ならば何故、歳三が呂布に寄り添うように戦っているのか。

張遼の騎馬隊が、右方に展開されていた弓兵をなぎ倒していった。

呂布は強い。単身で突撃しても、たちどころに敵を圧倒し勝利する。歳三はその呂布の攻撃力に眼を付けた。いくら呂布が強いとはいえ、強いが故に生まれる無駄な時間は僅かに存在する。それを己の戦術眼で消し去ってやれば呂布は更に強く、自在に方天画戟を振るえるに違いないと歳三は思ったのである。

「半歩下がれ」

言われた通り呂布が半歩下がる。歳三も合わせて半歩下がった。呂布の眼前を、矢が風を切つて飛んで行く。その矢は、歳三の指示がなければ呂布の頭へ必中していた。必中していたからこそ、呂布は寸前で気が付いて矢を落とす為に方天画戟振るっただろう。

(その手にア乗らねえよ。曹操)

兵士の中に紛れ込んでいく夏侯淵を尻目に、呂布と歳三は更に先へと突き進む。

(霞の騎馬隊が反転する頃か)

馬の蹄の音、揺れる白刃の数、陽のかけり具合。あらゆるものが歳三に戦場を教えてくれる。加えて、歳三の頭の中には詳細な地図が入っている。そこに得た情報を落とし込んで最善の一手を呂布に指示するのだ。

「右斜め歩兵隊へ突撃」

呂布が進路を変えて剣林に突っ込む。敵の左翼が、突っ込んできた呂布をどうにかして抑えようと動くが、そこへ張遼の騎馬隊が襲い掛かり戦陣を瓦解させる。

今の状況なら自分はどうしたか、など呂布は考えていない。呂布は歳三の指示が正しいもの信じ、歳三もまた呂布を信じている。

強いが故に力任せであった呂布の力が、歳三の直接の指揮によって無駄なく全て敵に叩きつけられるようになったのである。その威力は測り知れない。

(当たれば、敵は死ぬが俺も死ぬ)

歳三は呂布の後ろに居るから全く問題ない、訳ではなかった。呂布は歳三を信じている、としたがそれには歳三が呂布の方天画戟を避けるということも含まれている。呂布は振りかぶり、あるいは振り抜いて緩急自在に方天画戟を操っている。当然、歳三に対

する考慮など微塵もないのだが、歳三も当たれば死ぬ。

(鉄砲と一緒さア)

呂布の一撃も、鉄砲も、当たれば死ぬ。呂布の影に潜むこの男はそんなことを考えながらにやにや笑っている。ひよい、と頭を下げた上を方天画戟の刃が通り過ぎて行き、髪の毛が数本舞った。

(やはり、恋はいい。身体から武器の扱いにまで邪念がない)

呂布があまりにも強いせいで未だ一人も斬れていないが、それよりも呂布と共に戦場を駆けるのが楽しくて仕方ないらしい。歳三は嬉々として次の目標へと呂布を向かわせようとした。

その時である。

「呂布！ これ以上華琳様の元へは行かせん！」

「ボクたちが！」

「相手です！」

「……邪魔」

呂布に殺到する三人の猛将たち。一人は夏侯惇であると歳三は気付いたが、他の二人には見覚えがなかった。鉄球使いと陰陽柄の円盤使い、前者が許緒といい後者が典韋という名であることは歳三の預かり知らぬところである。が、歳三はこの見知らぬ二人も

夏侯惇に並ぶ脅威と見た。事実、三人ではいへ呂布と渡り合える以上尋常の腕ではない。

（曹操が呂布の封殺に動いたか）

曹操は呂布に三人もの名のある将をぶつけてきた。ということは呂布への足止めか、それとも夏侯淵辺りに必殺の弓を射掛けさせるか。

そこまで考えて、歳三は鋭い眼を光らせた。

（それをさせねえ為に、俺がいる）

呂布の影から、幽鬼がゆらり湧き出るように歳三が地上を走った。呂布と切り結ぶ夏侯惇の腹に向かって、奇襲に等しい刺突が繰り出される。

「なっ!？」

夏侯惇が漸く歳三の存在に気付いたか、驚きの声を上げた。それくらい驚いてもらわないと困る、と歳三は仏頂面のまま思った。なにせこの時の為に、呂布の影に隠れていたのである。驚いてもらわねば、張り合いがない。

けれども夏侯惇も、並みの者ではない。歳三の刺突を、身体を捻って避けようとした。（まだだ）

歳三の兼定の切っ先が、流れた。刺突が斬撃となつて夏侯惇へと迫る。

「くっ!」

尚も夏侯惇、追撃の刃を辛うじて躲す^{かわ}。

刺突から斬撃へと流れる、必殺の平突き。しかし兼定の劍先は夏侯惇の服を僅かに斬つただけ。それでも大した落胆を見せず、歳三は劍を引いて身を屈め^{かが}、顔を傾けた。
 (斎藤君なら、外さなかつたんだろうなあ)

ぼんやりとかつての仲間の姿を思い出す歳三の顔の真横を、方天画戟の刃が貫いていった。彼女らは三人で、呂布と渡り合っていたのである。その一人が歳三の刺突で退いたのであれば結果は必然であつた。呂布を、抑えきれない。

「春蘭様！ くうっ！」

「季衣！ きゃあっ！」

呂布の方天画戟が許緒と典章を吹き飛ばす。二人が吹き飛んだだけ、呂布は更に前進する。呂布が前進すれば、それだけ兵士は振るわれる方天画戟によつて命を落としていく。

夏侯惇は齒噛みした。何よりも殺すべきは呂布ではなく、その影に潜む歳三であると理解したのである。だが歳三は呂布の影に居る。陰と陽が互いに補い並び立つようにする歳三と呂布。片方を崩そうとすれば片方に殺される。そしてこうまで接近されるは、弓矢による攻撃をするのも苦しい。

「土方だ！ 土方を討て！」

「……させない」

呂布が夏侯惇の言葉を否定したが、歳三は小さく笑みを浮かべた。

「それは違うぞ、恋」

足元の砂を掴んで飛ばし、許緒の目を潰す。更には助けに入ろうとした典韋の腹に兼定の柄頭を叩き込む。呂布は夏侯惇を弾き飛ばし、二人はまた先へと進む。

歳三の戦法、いやらしいという他ない。必殺といえる瞬間以外、手の速い攻撃で呂布の間隙を縫うように狙ってくる。これでは呂布を罫に掛けようとしても、歳三が狡猾さで食い破るに違いない。

「させないではない。できない、だ」

歳三の言葉に、呂布は方天画戟をより凄まじく振るうことで応えた。

これに誰よりも激したのは夏侯惇である。歳三にその気があったかはわからないが、先の言葉は明確な挑発であると夏侯惇は認識した。許緒も典韋も頭に来たが、夏侯惇の具合の方が数段上だった。呂布に負けじと、幅広の刀である七星餓狼で応酬を繰り広げる。

「……それで、なに?」

「ぐうう! くそっ!」

やはり呂布は強い。激して普段よりも力が出ている筈の夏侯惇であっても、変わりな

く対処している。どころか頭に血が昇っているせいか、許緒と典章との連携がうまくできていない。僅かな隙が、生まれ始めていた。

歳三、それを見逃さない。

即座に呂布の後ろへと潜んだ。夏候惇の眼が歳三の姿を追おうとするが、激しさを増す呂布の攻撃の前に気を逸らすことは死に繋がる。呂布の影に潜んだ歳三が、右から出るか左から出るか、そんなことを考える暇も呂布は許さない。

何合目かの呂布と夏候惇らとの打ち合いの末に、夏候惇が押し負けた。許緒と典章が、呂布に夏候惇を討たせまいと押し込む。歳三が、ぬるりと影から姿を現した。躍り出た兼定の刃が、夏候惇を叩き斬らんと振り下ろされる。

「——おおっ！」

夏候惇の瞳に映ったのは、兼定の白刃ではなく敬愛する主君の曹操であったか。まだ死ねない、という夏候惇の気迫が無念無想の奇跡を生んだ。我武者羅に振り上げられた七星餓狼が、兼定と打ち合う。火花が散った。

(逝ったか、兼定)

瞬時、歳三は兼定が打ち負けたことを悟った。歳三は左手に握られた兼定の先が、あらぬ方向へと飛んで行くのを見た。

歳三は足を踏み出す。そう、兼定を握っているのは左手なのだ。歳三は兼定が夏候惇

によつて防がれると勘ながら気付いていたのかもかもしれない。もしくは両手では刃先が届かず、件の馬鹿力で斬ろうとしていたか。

右手が、未だ残る国広へと伸びた。鞘走る国広が、夏候惇へと牙を剥く。

「ぐああっ！」

「春蘭様！」

僅かに、夏候惇を斬る為には僅かばかり国広の長さが足りなかった。脇差とはいえ、大刀に近い国広ではあるが兼定よりは少し短い。それに、夏候惇の姿勢が崩れていたのも歳三に災いした。

よつて、国広は夏候惇の面は割れなかったが、その左眼を斬り裂いていた。

「……義豊」

「撤退するぞ、恋」

地面に突き立っていた兼定の刀身の欠片を素早く回収すると、歳三は呂布に告げる。虎牢関の方からは撤退の合図である銅鑼が鳴らされ、張遼の騎馬隊も引き上げ始めている。遠目に見える袁の牙門旗が怯えるように震え、兵士に流される様に虎牢関から撤退していく。

一方で曹の旗は全てが威風堂々と立っており、来るのならば相手をしようと待ち構えている。

「これ以上戦う意味はない」

「……わかった。恋が、義豊の後ろを守るから」

「頼りにしている」

これ以上追つても何も益はないと断じた歳三は、左眼を押さえる夏候惇など気にせず背を向けた。呂布もまた、歳三に倣なまつて許緒と典韋を相手取るのを止めた。もつとも、二人は心配そうに夏候惇に寄り添っているのだが。

「土方！」

夏候惇の声に、歳三はちらりと振り返った。激痛に苛さいなまれているだろうに、気丈にも許緒や典韋の力を借りずに、一人立っていた。

残された右眼が射抜くように、歳三を見ている。

「逃げるのか！」

夏候惇の問いに、歳三はにやりと笑った。

「戦だからな」

「ならばいつかまた！」

夏候惇も、左眼から血を垂れ流して笑っていた。

「ああ、いつかまた」

歳三は短く答えると、今度こそ振り返らずに走った。いつかまた、の先はわからない。

わからないが、それで良かった。

◇

結論から言えば、反董卓連合は負けた。兵数で遥かに勝り、各地の諸侯を味方にしておきながら大敗したのだ。特にこの戦争の趨勢を決定づけたのは、呂布の一騎当千の活躍と張遼と麾下の騎馬隊による縦横無尽の攻撃のおかげだろう。

呂布の無双ぶりは当然であるが、張遼は呂布の突撃で浮き立つ袁紹の大軍勢を見事な指揮で分断し、大混乱を引き起こした。更には後方の袁術本陣を奇襲し大量の兵糧を焼くという大戦果まで成し遂げていたのである。

ここで強襲でなく奇襲、としたのは張遼本人の弁による所が大きい。とにかく袁術の軍勢は襲われるとは微塵も考えず、前線との連絡も満足に行っていないようなので奇襲になったということだった。

これらの報告を受けた賈馱は一先ず安堵すると同時に、呂布と帰って来るなり古くからの腹心らと部屋に引き籠もった歳三の動向が気になった。気になったが、歳三の考えもあるだろうと部屋から出てくるのを待つことにした。

◇

呂布と共に帰還した歳三を待っていたのは、徐晃からの冷たい視線であった。文官である郭嘉や孫乾などは、戦場に立つのは仕事ではないので至って平静である。

張遼は面白そうに歳三と徐晃を見守っているから、助けが入ることはないかと歳三は思つた。

「……お兄ちゃん、なんでシャンを連れて行つてくれなかつたの？」

「すまぬ」

確かに有効的だからそうしたとはいへ、徐晃の不満を可愛い嫉妬とする気には歳三にはなれない。徐晃は武人である。主君と仰ぐ歳三と共に戦場を駆けるのが何よりも喜びということ、幾度も共に戦つてきているのだから良くわかる。

故に、歳三が半死半生の素浪人時代からの付き合ひである徐晃より、新参である呂布を歳三が戦の相方を選んだのが不服なのだ。

「申し開きは、部屋でする」

よつて、歳三はこの小さな戦では分が悪い。傲岸不遜を地で行くこの男は、今もふてぶてしい面構えである。そんな歳三の羽織コトの裾を、引つ張る者が居た。

呂布である。

「……義豊」

「なんだ、恋？」

「……お腹すいた」

歳三は苦笑を浮かべ、伝令にありつただけの食事を用意するよう伝えてから徐晃らを

伴つて虎牢関の自室へと引つ込んでいった。

ここまでは、賈馱も知っている。

部屋に入った歳三はまず、郭嘉に問うた。

「稟よ、この部屋に潜む者はいないな」

「大丈夫です、歳三様。ただ扉の前に甘寧が立っておりますが、彼女も一角の武人。こちらを探る様な真似はしないでしよう」

「そうか」

既に程立や趙雲、太史慈らは孫権と陸遜と共に手勢を率いて洛陽へと先に入っている。だから、歳三の腹心たちは今この部屋に居る徐晃と郭嘉、孫乾のみである。

そんなことを思い出しながら、歳三はようやく緊張を解いた。

揺らぐことのない大樹の様な大男の身体が揺らぐ。慌てて徐晃と孫乾が駆け寄って、歳三の身体を抱きとめて支える。歳三の顔には今まで見たこともない程の汗が、浮かんでいた。

連携など考えない呂布と無理矢理連携した戦法、その分負担があることは想像に難くない。

「俺としたことが、はしやぎ過ぎたな……。すまない、香風、美花」

「ご主人様が謝る様なことはありませんわ。むしろ、嬉しいのです」

孫乾の言葉に、歳三は疑問符を浮かべる。孫乾は困惑しきりの歳三に、優しく声を掛けた。

「今までご主人様はどんな時も凛々しいお顔でした。そう、どんな時も。焦ろうと疲れようと、ひたすら私たちが望むご主人様であろうさされているのが、私だけではありません。香風様も、星様も、稟様も風様も悲しかったのです」

歳三はただ、孫乾の言葉を聞いている。言われてみれば、疲れを見せる様なことは初めてかもしれない。歳三はかつて徐州で出会った翁、孫候を思い出していた。地獄に共に落ちてくれる仲間にすら、弱った姿を見せない。それは、本当に強さと言えるのだろうか。

いつしか歳三は、鬼となり果て蝦夷の地で腹を撃たれるまで鬼の副長であり続けたが、今や歳三はそんな楔に囚われることもないのだ。

(人は、変わるものだ)

過去は、過去でしかない。

「ありがとう、美花」

「どういたしまして。香風様、ご主人様が座る椅子を用意してくれますか」

「わかった」

「美花、汗を拭くものと水を用意しておきました」

「流石ですわ、稟様」

ああ、悪くないと歳三は思いながら、皆の好意に素直に甘えることにした。

◇

一息つけた。

徐晃が用意してくれた椅子に座り、郭嘉から渡された清潔な布で顔を拭き取ってから、水の入った湯呑を呷る。それだけで、身体に溜まっていた疲労が抜けていくようである。穏やかな顔を浮かべた歳三を見て、徐晃たちは嬉しそうな笑みを浮かべた。

それも、一瞬の事ではあったが。歳三はまたいつものむつつり顔に戻ると、郭嘉に尋ねる。

「風たちから、何か連絡はあったか」

反董卓連合は撃退したが、洛陽の情勢に関しては未知数なのである。呂布や張遼からなんとかなしに聞いているが、彼らは完全に武官の間人だ。歳三が必要としている情報に関しては、少々心許ない程度しか持ち合わせていなかった。

「はい。風から現状の洛陽、及び皇帝関連の事に関しての書が届いています」

「読み上げてくれ」

「だいたい、わかった。」

洛陽は最早首都としての機能を完全に失っていると同然であった。何進と十常侍は

結託し靈帝を確保、董卓の靈帝奪還を免れるために遷都と称して西方の長安へと移った。

これだけなら、まだいい。問題は何進と十常侍らは洛陽城に溜め込まれていた財宝に飽き足らず、歴代皇帝の墳墓すらも掘り返し、更には裕福な市民からも税と称して搾り取った挙句、遷都に付いてこないのであれば殺すとまで言つてのけたそうである。

その結果、董卓の必死の反抗にも関わらず洛陽からは多くの人が去り、皇帝の威光は完全に地に落ちてしまった。

「陳留王だけは、洛陽に残ったか」

だが、その中でも希望がある。董卓が懇意にしていた靈帝の妹、陳留王だけは董卓の側に付いているのである。これならまだ、巻き返しを計れる可能性が完全に絶たれた訳ではない。

(あの女狐だけは、斬つてやりてえところだが)

靈帝を傀儡として操る、何進の姿が思い起こされる。これだけのことをやらかしておきながら、恐らく何進は自分が生き残る為ならばなんでもするだろう。だからこそ、付け入る隙はある筈だ、と歳三は睨んでいる。

それはともかくとして。

「稟」

「なんででしょうか？」

「無茶は承知だが、洛陽に腕の良い鍛冶師がまだ残っていないか探すよう風に伝えておいてくれないか？」

長らく共に戦ってきた兼定が、遂に折れたのだ。それに関しては、良い。戦の中のことである。武士の魂だとか己の半身だと飾り立てようが、刀は所詮道具である。使っていればいつか壊れるのは道理なのだ。

(夏候惇ほどの猛者が相手だったならば、兼定も冥利に尽きるさ)

それに、良い戦いであったのだから、歳三も後悔など微塵もない。

「次は洛陽か」

歳三の呟きに、徐晃たちは静かに頷いた。

栄華の残骸

洛陽の姿が歳三の視界に入った。

故意か、単なる不幸かはわからない。ただ、火事があつたことを思わせる黒煙が随所から立ち上っている。これが皇帝の座する漢帝国の都のなれの果てと考えると、なんとも無常を感じる光景だろう。

馬の背で揺られながら歳三は、切れ長の眼を細めた。

(久しいな)

かつて、歳三が洛陽を訪れた時は隣に孫堅が居て、劉備が居た。その頃の歳三はまともな官位も領地すらも持つてはいなかった。何進の機嫌一つで首が飛ぶ、単なる小勢力に過ぎなかった。

それが今では、大陸随一と言つて良い程の軍勢を率いている。投げ捨てることを惜しまれるほどの官位も領地も、手に入れていた。多少の感傷はあつても良さそうなものだが、歳三はそんなものとはとんと無縁らしい。

(月に剣でも都合してもらうかなア)

既に次の戦いに向けて意識が向いている。

何進と十常侍があらかた持ち去ったとはいえ、隆盛を極めた洛陽である。名剣とされる一品が残されているかもしれない。もつとも、名剣とされるものは宝物と同義とできる為、やはり残っている可能性は少ないだろうが。

「いつそのこと、剣にこだわるのをやめてみるか、と歳三は思った。

（霞みたいに、長物も良いか）

騎馬隊を率いている張遼に、ちらりと視線を動かした。張遼が歳三の視線に気付いたか、笑って手を振った。歳三は僅かに目尻をさげることで応える。

歳三は無愛想な表情のまま、右隣に馬を並べる呂布を見た。左隣には、徐晃が馬を並べている。二人とも、歳三を守ると言って護衛に付いたのだ。呂布は歳三の視線に気付いたか、小首を傾げながら歳三を見た。

（戟か）

呂布の顔を見ながら、歳三は考え込んでいる。戟は面白い。斬る、突く、叩くといった多彩な働きを行える武器であり、掛けるといった一風変わった使い方もできる。

戟を相手の服に引っ掛けて姿勢を崩し、国広で斬りかかる自分を想像してみても、やめた。姿勢を崩せる様な相手なら、さっさと斬るか突くかした方が早い。だからといって夏侯惇の様な猛者相手に、にわか仕込みの戟で戦えるかといったら否だ。

（原田君なら、別だろうか）

当の原田左之助は、彰義隊で自分の名前を売って路銀にすると、馬賊にでもなりますよと清へ渡つていった。そして、ここにいるのは原田左之助ではなく土方歳三である。敵陣を突き抜けたいなら、趙雲を向かわせる。堅陣を揺るがしたいなら、徐晃を当てる。猛将が居るなら、呂布をぶつける。そういう考えをする男である。

政まつりごとだけでなく、例え戦場であつても分というものはある。歳三は、己の分というものがよくわかっている。

(やはり、劍。あるいは刀)

その方が何かと小回りが利く。何より、刀という武器は歳三の性分に恐ろしい程に合つていた。

(まあ、ないならないでなんとかするさ)

考えても詮無いことだと心の中で笑い飛ばすと、歳三は自分の中で区切りを付けないものねだりをするよりは、とりあえずでも得手の武器を持つのが肝要である。

それに。

(目当てがねえから騒ぐなんて、かつこ悪いじゃねえか)

歳三は男である前に武士だ。歳三の憧れる武士は、男を下げる様なことはしない。ここでいう男とは、歳三の美意識とほぼ同義である。世間一般が意味する男とは少々異なるかもしれない。しかし、歳三とはそういう男だった。

◇

遂に、歳三は洛陽へと帰ってきた。物の焼けるにおいに紛れて人が焼けるにおいが鼻をつく、今度は腹にすえかねる腐臭はない。その源も全て、逃げたか焼けたか、あるいは死ぬかした。そう思ってしまったえば、何進の悪逆さもここまでくるといつそ清々しい。漢帝国の腐りきった部分を、まるごと持っていったからである。

(しかし、何進は俺を舐めた)

だからといって、歳三が何進を斬りたいという密かな思いは一寸たりとも変わらぬ。何進は歳三を、引いては新選組を、つまりは武士を愚弄した。先の論法で言えば男を下げられたのである。ならば、歳三は何進を斬らなければなるまい。

(ま、今はそんなことはどうでもいい)

歳三は眠たげな眼で辺りをぎよろりと見回した。

洛陽市内の荒廃は依然より増していた。しかし生きている、と歳三には見えた。それよりも息を吹き返した、という表現の方が妥当だろうか。

確かに何進と十常侍らによる暴虐は、市民の中でも特に富裕層へと襲い掛かった。まだ直接見ることはできていないが、金市の方はもつと酷い状態だろうということも立ち上る黒煙の量で窺える。だが、少ないながらも洛陽を歩き交う人々の眼には光があった。

歳三たちを見る眼にしても、かつての恨めしきを感じる薄暗さはない。

(月の統治が、よほど良いのだろう)

董卓の儂げな姿が、歳三の脳裏に甦った。

乱世を前にしながらも優しさを失わず、さりとして戦を前にして眼を背けることをしない。稀有といつて良い存在だ。董卓と出会えたことは、沖田の菊一文字と同じく一種の巡り合わせだと歳三は思っている。

女と刀を同格として考えている辺り、この辺りは歳三らしい。

(桃香は、月とはまた違うか)

優しき、といえど劉備のことも歳三は思い起こす。あれはあれで滅多に出てくるような人物ではなかった。少しばかり理想家が過ぎるくらいはあるが、人を惹きつける魅力は尋常ではない。現に、関羽や張飛といった豪傑たちが、劉備には付いている。

もつとも、坂本龍馬という希代の化け物と接したことがある歳三だからこそ、劉備のことを認めることができているという面はある。坂本と出会う前の歳三であったならば、劉備の理想をどう評価していたかは、この男にもわからない。

「歳三様」

「どうした、稟？」

「洛陽における兵たちの休息箇所の確保、並びに洛中治安維持の為の警備隊の組織編制

など、諸事を完了しました」

「流石だな、稟は」

郭嘉から報告の仔細を受けながら、歳三は短い言葉を返した。歳三の顔はいつもの無愛想に変わりはない。けれども、郭嘉は最大級の賛辞を受け取ったと思っている。むしろここで笑みの一つでも浮かべていたならば、郭嘉はそういう歳三に落胆していたかもしれない。

見る者が見ればよく染まっている、と評するだろう。が、生憎とここには染める男と染まる女しかない。

「となれば、我々は風の待つ洛陽城に行けば良い訳か」

「そうなります。そしてそこには」

「陳留王がいる」

歳三は小さく嘖き出した。

言ってみてから、自身の珍妙さにおかしくなってしまうのだ。郭嘉に向かつてわかつた風なことを言っているが、実のところ歳三は何もわかつていない。歳三は政治といったものに興味はなく、政治はもっぱら郭嘉と程立に任せてある。

更に詳しくいえば、歳三は政治のことなど考えない様になっている。歳三がその辺りを考えて立ち回る男であったなら、江戸幕府や新選組と心中していたかどうかも怪しい。

(俺アどこまでいつても、俺だ)

振り返つてみれば、歳三はまたも存亡の危機にある側へ味方している。かつては徳川幕府であり、今では漢帝国である。これもまた、一種の巡り合せといえるだろう。なるほど、これは奇縁だ。歳三が歳三であることを貫こうとすると、どうにもそうなつてしまうらしい。

歳三は馬首を洛陽城へと向けた。突如噴き出した歳三を、気味の悪いものを見る眼の兵士らと、慈しみの視線を送る郭嘉。それらを意に介さないまま、歳三にはふと思うところがあつた。

「稟よ」

「なんでしよう、歳三様」

「亡国の淵にあるとはいえ、私が会おうとする相手は相応の礼を尽くすのが道理であるよな？」

あまりに予想外だった歳三の言葉に、しばし郭嘉は呆然とした。政治に興味がないと自分で断言する割には、こういうところが変に気が回る。郭嘉からしてみればちぐはぐだという他ない。郭嘉は歳三の言葉を、偽計の算段なのかと一瞬だが疑つた。

対して歳三は郭嘉の様子をさして気にした様子はない。歳三には、めんじゆうふくはい 壺帝に対し面従腹背をやり通した前科がある。今度もそうする、と考えるのは至極真つ当な帰結

だ。

が、郭嘉には誰よりも鋭い観察眼がある。

「歳三様は……」

「うん？」

「漢帝国に臣従なされるおつもりですか？」

郭嘉の眼鏡がきらりと光る。

歳三はいつもの無愛想な顔で郭嘉の眼を見返した。ぐつぐつと燃えたぎる熱を固めて丸めた眼は、闇を湛えて郭嘉の眼を捉えて離さない。

それは確かに、郭嘉が惚れた黒龍おとこの眼であった。

「私は漢帝国の禄を食はんだ覚えはない。しかし稟をはじめとした賢者や、香風の様な英雄を生み育んだのも、また漢なのだ。それに報いる者が一人くらい居てもいいではないか」

「なるほど、それは素晴らしいお考えです」

あえて、郭嘉は言葉を区切った。

「本当にそれだけでしようか？」

この男の真意は他にある。軍師としての、あるいは女としての郭嘉が告げている。歳三はただ薄く笑って応えなかった。郭嘉も、何も言わない。

言葉にしなければ通じないものはある。けれども今の二人には言葉こそが野暮であつた。この二人には、それでいいのである。

「何があろうとも、私は歳三様についていきますから」

「ああ。私も稟に相応しい男でありたい」

それきり歳三は何も言わなかつたし、郭嘉も何も言わなかつた。兵士たちは相変わらず怪物でも見る様な眼で二人を見ていたが、遠くから眺めていた猛将たちはまた違った感想を抱いていたようだ。

「あの二人えらい仲がええなあ」

「……義豊と、羨ましい」

「……むふー」

張遼と呂布、特に呂布は郭嘉の様な阿吽の呼吸を羨ましく思っているらしい。そんな呂布たちを見て、徐晃は密かに優越感に浸っていた。

歳三と郭嘉が醸し出している空気。それこそが、幽州で歳三と息を合わせて戦つた時に感じたものと同じだつたからだ。徐晃と郭嘉。武と智という性質こそ違つていても、歳三に対する二人の想いになんら優劣はないのである。

◇ 無論、わかりにくいのが歳三からも同じであるのは言うまでもない。

歳三は至つて無感動なまま、惨状を一瞥した。

かつての莊嚴さは今の洛陽城になく、權威の落ちる先がどういふものかを雄弁に物語っている。ところどころに破壊の後が見られ、暴虐の残り香は隠されることもない。修復まで手を回すことができないのだろう。それでも、歳三たちは作法通りに馬を下りて平城門をくぐつた。

歳三は眠たげな眼だけを動かす。

やはり以前の様に、嫌悪感が湧き出てくることだけはない。洛陽は漢帝国滅亡の寸前で漸く浄化されたのだと歳三は改めて思った。だから、何進と十常侍らが逃げた長安など焼き払いたくなるだろうなど、無愛想な面の下で思っている。

「あつ、義豊様……」

城内にて、程立の隣で所在なさ気にしていた董卓が歳三の姿に気付いて笑みを浮かべた。笑みには喜色だけではなく、安堵が多分に含まれている。

ずっと味方も少なく、見えぬ敵が暗躍する宮中で戦つてきた董卓である。真に信じられる味方の登場に気が緩んだ、とするべきだろうか。

(あれは、違うな)

歳三は真つ先にそう考えた自分を恥じた。

董卓のあの笑みは待ち人の身を案じ、帰りを待ちわびていた者の笑みである。純粹な

気持ちから来る嘘偽りが無いものだ。佐藤彦五郎に嫁いだ実姉、のぶが夫の帰りを迎えた時に見たものと同じだ。

そこに、味方がどうかという打算は存在しよう筈がない。

「土方歳三、旗下並びに青州及び徐州一門。国事危急の時と聞き、参上いたしました」しかし歳三は董卓に応えることはなく、さつと臣下の礼をとった。

続けて呂布らを除いた武將たちが、歳三にならつて礼をとる。いたつて事務的なもので、賈馱からしてみれば董卓を突き放している様にも見える。

あ、と董卓は小さく声を上げて駆けだそうとする足を止めた。顔からは笑みが消えている。

久方に見る親友の笑みを消したこの男に、賈馱は内心穏やかではない。が、かといって異を唱えることもできない。董卓の軍師である賈馱から見ても、歳三の行動は正しいからだ。

地位的な面から見ても、政略的な面から見ても、ここは歳三が董卓に礼をするのが普通である。

だからこそ忌々しい。例え相手が皇帝であろうとも意に介さないような男が、こうしていることが、だ。親友の喜びをふいにされているのだ。顔にこそ出さないが、賈馱の想いも無理からぬことと言えた。

「……はい。何進と十常侍らによる偽計に惑わされることなく、漢帝国に味方したことを陳留王である劉協様は高く評価しておいでです」

「もったいなきお言葉です」

「つきましては、これからのことを劉協様と共にお話をしたいとは思いますが。しかし皆様方はお疲れのご様子。先に城中でのお部屋にご案内します」

流石は董卓である。伊達に洛陽の政局で生き抜いて来てはいない。動揺などほとんど見せなかった。

賈馱は董卓が未だに頑張り続けていることに気付かないのかと、恨みのこもった視線を歳三に向ける。けれども、当の男はむつつりとした顔のまま。主だった武将を連れて董卓に付いていくだけだったのが、余計に腹立たしかった。

◇

歳三は椅子に深く座ったまま、覇気のない声を出した。

「良い部屋だな」

「その話題、三度目」

「そうだったかな」

徐晃の指摘に、歳三は無気力なまま答えた。歳三らが城内の部屋に通されてから、結構な時間が経っている。

粗方の方針を程立と郭嘉の主導で話し合っても終わってしまうほどだった。政治から軍事はもちろん、劉協の出方によつてはどうするかなどを打ち合わせてもまだ、董卓らは戻つてこない。更に言えば、孫権たちも何かあつたのかこの部屋にはいない。

歳三は懐から取り出した懐中時計をちらりと見ると、またすぐにしまった。長針は既に、一周を越えて回つている。

「……何かあつたんでしようか？」

「お兄さんに会うのがよほど怖いのでしようー」

呂蒙の不安げな言葉に、程立が茶化したようなことを言う。しかし、割と本気で言っているらしいということはすぐにわかった。証拠に、趙雲などは既に嘖き出して大笑いしてしまつている。

歳三は少しだけ顔をしかめると、呂蒙の方を向いた。

「そんなに私は恐ろしいかね？」

「え、それは……稟様……」

「亜莎、主君である歳三様の求めにはちゃんと応えるのが臣下、そして軍師の務めですよ」

「で、では……」

郭嘉に促されて決心した呂蒙を見れば、何を言おうとしているか一目瞭然であ

る。趙雲はもう口元に手を当てて笑いを堪^{こら}えていた。

「陸遜様の元に居た頃の話ですが、歳三様はなんと恐ろしい人なのだろうとは……」
「くくく……そりやあそうでしょうなあ。あれだけ派手にやっつていけば、そうなりますな」

趙雲は笑い転げそうなのを必死に抑えながら、歳三の顔を見た。無論、歳三は苦い顔である。

「だから、早い所私の代わりに上に立つ人間が必要だと言っているのだ」

無然とした表情で、歳三は言った。この男は自分がどれだけ悪し様に言われているかなど百も承知している。故にこの身の上には然るべき人物が立つべきだ、と考えているのだ。だが、誰でもいいという訳ではない。

（次第、どうなるか）

歳三はむっつりとした顔に戻ると、国広の柄を触った。場合によって国広の刀身は、劉協の血を吸うことになるかもしれないと心の端では考えている。

そう、歳三は自分がどれほど嫌われ、憎まれているかわかっているのだ。わかっているからこそ、己が真っ先に手を汚すべきだと自認している。劉協が靈帝と何進らに過ぎた温情を与えようと言うのなら、その時は真っ先に溝^{とぶ}に手を突っ込む。

「どうかしたかね、風」

歳三は国広を触る手を止めると、じつとこちらを見ている程立に話しかけた。程立はいつもの半目で、歳三の目を見据えている。考えを見透かそうとするような、それでいてある種の熱意を感じる視線に、歳三は何故か安心感を覚えていた。

「いえ、なんでもありませんよー」

そう言うと、程立は歳三から視線を離す。歳三と程立の間に何かあったのだろうかと窺っていた周囲も、何もなかったことがわかると普段通りに戻っていかうとする。

そんな時であった。

◇

部屋の扉を、孫権が断りも無しに突然開けて入って来た。普段はおっとりとしている陸遜が、孫権に続き急ぎ足で部屋へと入ってくる。最後に甘寧が、周囲を警戒しながら扉をそつと閉めた。

これだけでただ事ではないと、歳三のみならず皆が勘付く。趙雲や徐晃は自らの武器を引き寄せ、いつでも存分に武器を振るえるように身構える。郭嘉や程立は、そんな彼女らの邪魔にならぬようにそつと立ち位置を変えた。呂蒙と孫乾は、窓際へと動いていた。

「何かあったのかね、孫権」

歳三は椅子に腰掛けたまま、孫権に尋ねた。一見すると守りを趙雲と徐晃らに任せて

いる様に見えるが、手の位置はすぐさま国広を抜けるところにある。

「これは、貴方に渡すべきものだと思う。元々私たちは居候に過ぎぬ身でもあるしな」
孫権が歳三に近付いて、ある物を手渡した。

（巾着袋か？）

歳三の掌からすればあまりにも小さい布袋であるが、ただの、と形容するには憚られる一品だった。なにせ、歳三でも見事だと唸るほどの華麗な刺繍が施されているのである。煌びやかでありながら下品さのない美しい仕上がりは、さぞ名のある職人が作り上げたものに違いない。

売れば、一財産にはなるだろうと歳三はこっそり思った。

（そんなしようなないことで、孫権がこんな風に渡すもんか）

掌には、布の手触りのみならず硬い何かの重みがある。歳三は遠慮なく、袋の口を開けて中身を取り出した。

（なんだア？）

歳三は出て来た物をまじまじと観察する。

金で出来た四角柱の形をしたもの、というのが歳三の第一印象だった。くるりと回転させてみれば、底にあたるところに文字が掘つてあることから、判子に類するものなのは間違いない。つまみにあたる所にはこれまた見事な龍の細工があるのだが、一度角が

折れた様で補修の跡がある。

これも、一つの宝物といえるだろう。漢帝国の宝物庫を国ごとひっくり返していった何進が、こんなものを洛陽に残していくとは到底思えなかった。

「これを、どうで？」

「洛陽の古井戸から揚げられたものです。おそらく、何進による洛陽混乱の最中に投げ入れられたものかと」

甘寧が、歳三の問いに静かに答えた。ふむ、と歳三は唸ってみせたものの、そう言われても、歳三にはこれが何なのかわからない。孫権はこれが何かわかつている上で、歳三に渡しているのだろうか、そうでなければ控えている陸遜や甘寧があのように深刻な顔をしている理由がない。

ちらりと趙雲らの顔を見してみる。徐晃も呂蒙も、何か価値のあるものだろう程度の印象しか持つてなさそうだ。一方で、郭嘉と孫乾は顔を青ざめさせている。程立だけはいつもと変わらない。が、あれはわかつていいる顔である、と歳三は見た。

「これが、何かわかるのかね？ 風？」

「はいー。それは皇帝であることを示す玉璽なのですよー」

「そうか」

歳三の反応は、やや薄い。さしたる興奮も見せずに、目を細めるだけだった。

(こんなちつぽけなもので)

武士という生き物は生まれで決まるものではなく、生き方である。と心の底から信じている歳三からすれば、王権の所持を示す玉璽も単なる物にしか感じられない。もつとも、錦の御旗と同じくこういつた物が極めて有用な時もあると、心得てはいる。

玉璽を袋の中へと入れ直した歳三は、孫乾を近くに呼んだ。

「美花よ、頼みがある」

「な、なんでしようか、ご主人様？」

未だ、この国における最上級の権威の現身うつしみと会ったことに衝撃が抜けないのか、孫乾は動揺しながら歳三の近くに寄る。すると、歳三は子供に駄賃を握らせるような気軽さで、玉璽の入った袋を孫乾の手に握らせた。

これには程立を除いた誰もが驚いたのだから、孫乾はもつと驚いた。腰を抜かさなばかりに目を白黒させる孫乾に、歳三は笑って言った。

「私が持つていたら、どこかになくしてしまいそうだな。その点、美花なら信頼できる」
「あ、ありがとうございます……？」

孫乾はもう、何がなんだかわからない。主君である歳三に頼りにされている嬉しさと、玉璽という物質的な意味合い以上のものを持つ存在への混乱とでもするべきか。とにかく、いろんな感情がせめぎ合って荒れている様だった。

「確かに、お兄さんがそのまま持つよりは美花ちゃんが持っている方がいいでしょうねー」

「風もそう思うか?」

歳三の問い掛けに、程立は視線を孫権へと向けた。

「もつとも、孫権さんも玉璽をお兄さんに渡すということがどういうことか、わかった上でやっているんでしょうけどねー」

追う様に、歳三も孫権らの顔を見る。流石、甘寧や陸遜は平然としているが、孫権はほんの少しだけ顔に動揺を浮かべていた。それでも、すぐに何もない様な顔をしてみせたのだから、孫権は間違いなく成長していると歳三は場違いながら思った。

(しかし、俺に玉璽を渡してどうするつもりだったのか)

程立の言う通り、孫権が玉璽を渡したのも単に歳三を利させる為ではないだろう。そも、孫権は江東を本拠とする孫策との密約で歳三の陣営に居るのだ。ならば、その行動は巡り巡って孫策たちに利となるに違いない。

このまま程立と郭嘉に孫権の、あるいは陸遜の策謀の心胆を聞きたいところであったが、そもいかならない。

部屋の扉が、ごくごく控えめに叩かれた。甘寧はさして警戒もせず扉を開けたのだから、歳三がこの一連の真意に気付いたのはこの瞬間である。

（劉協側の動きを入れた上で、我々に時間を与える暇も無い様に渡してきたのか）

一手、遅かったと悔やむ間もない。部屋に入って不思議そうに首を傾げる董卓に、真つ先に応対したのは孫権配下の陸遜であった。

「あの、劉協様が歳三様と皆様にお会いしたいと……邪魔でしたか？」

「いえいえ、丁度揃ったところでどんな話があるのだろうかとお話していたところですよ。ねえ、土方様？」

「……ああ。陸遜殿の言う通りだ」

内心、渋面を作っているがそこは歳三、何事もなかった様に陸遜に合わせて答える。今、玉璽の存在を劉協に伝えることがどんな影響を及ぼすか、少なくとも良い方向に向かうものではないことくらい歳三にも十分わかる。

（皇帝なんぞに興味はねえが、向こうがそう思うかはわからん）

玉璽とは、皇帝であることを示す象徴である。つまり、玉璽の所持を論拠に皇位の篡奪さんだつを企てていると邪推される可能性が、歳三の中で最悪の想像であった。

こんな与太話を董卓が聞いたところで何を馬鹿な話を、と思うだろう。が、劉協や袁紹を始めとした諸侯はどうか。何進の後に来たのが仁徳で名高い劉備でもなければ、元々漢の高官である曹操でもないのだ。無頼の梟雄である土方歳三だと聞けば、疑心を生じて仕方がない事だろう。なにより、歳三は全土に悪名を轟かせ過ぎている。

(だからといって、黙っているのは更に悪手だ)

歳三が言わずとも、孫権かあるいは陸遜が話の流れで劉協に伝えるのも十分に考えられる。そうなってしまうえば、劉協の心象をすこぶる悪くするのは確実だ。黙っていたのは叛意を持っていたからと、疑われてもおかしくない。

ではどう立ち回るべきかと考える暇など、どうやら与えてくれそうになかった。孫権が音頭を取って、劉協の元へ早く行こうと提案したのである。

——一刻も早く劉協様の元に馳せ参じるのが我々の役目ではありませんか、土方殿。

そう嘯く孫権に、孫策の後ろで目立たなかつたかつての姿はない。政略を仕掛けた結果、例え歳三に斬られるとしてもことを成し遂げるといふ強い想い。それが、英雄の資質として全身から溢れて出していた。

(孫策を倒すなら、孫権も同時に倒さなきゃならねえ)

歳三が孫権を孫策と同格の、もしくはそれ以上の相手と明確にみなしたのはこの時だ。

孫策は妹である孫権の成長を願って歳三の元に預けたが、まさか龍の身を食い破ろうとする程の逸材になるとは思ってもいないだろう。実際、歳三も孫権はこのまま孫策の影に埋もれるままだと少なからず思っていた。

孫権にどんな心境の変化があつたのか、知る術は歳三にはない。

(とはいえ、どうする)

孫権に促されるままに、椅子を立てて歩を進める。

考える時間がない。政治に関して歳三は下手糞もいいところだ。ある程度の組織を運用する力はあつても、国家規模の政治となつては歳三には荷が重過ぎる。郭嘉をちらりと見た。こんな時に、一番的確な助言を与えてくれるのは決まつて郭嘉と程立である。

郭嘉は静かに、歳三と眼を合わせた。その眼は、何があろうとも歳三についていくと宣言した時と変わらない、熱意を持った女の眼であつた。

歳三は程立を見る。程立はいつもの眠たげな眼のまま、静かに唇を動かした。何事かの言葉らしきものの後に、付け加えるような一文字が足される。

「——そうか」

「?」 どうかされましたか、土方様?」

「失礼、陸遜殿。劉協殿にいざ会う段になつて、私も緊張しているようです」

嘘だ、と陸遜はすぐさま思った。

歳三の顔は、他者に内面を気取られまいとする鉄の様な無表情ではなくなつて、たつた一瞬で身体中に覇気を満たしきり、眼にはぎらぎらとした闘志を燃え上がらせていた。

とても、これから高位の人間と会うことに強張る者の顔ではない。むしろ戦に行く決意を固めた戦士の、あるいは狼けものの顔である。

「……なにか？ 陸遜殿？」

「い、いえくなんでもないですよ」

歳三が口元に微かな笑みを浮かべているのが、陸遜にはひたすら不気味だった。